

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第364集

中郷恵久保遺跡

国道353号(鯉沢バイパス)補助公共道路改築(改良)事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書 第4集

2006

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

中郷恵久保遺跡

国道353号(鯉沢バイパス)補助公共道路改築(改良)事業に伴う

埋蔵文化財調査報告書 第4集

2006

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



Ⅱ-2区西端の長サク状畠跡と5号道状遺構（F P下-古墳時代後葉）



Ⅱ-2区西端の1号住居跡（ローム上-古墳時代前葉）

1号住（4c末）の埋没が完了せず、F P下（6c中）では未だ凹地となって検出された。凹地は畠として供され、さらに、畠の放棄後は馬蹄痕が覆うことから、放牧地への変遷が判断できた

序

中郷恵久保遺跡は、平成11年度から3ヶ年にわたり、(国)353号(鯉沢バイパス)道路改築事業に伴い、群馬県土木部からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査した遺跡です。

本年2月、国道353号(鯉沢バイパス)は開通・供用開始となり、永年の懸案であった鯉沢交差点交通渋滞の解消が図られることとなりました。当遺跡が所在する群馬県北群馬郡子持村は、新しく完成した道路で市町村合併を迎え新渋川市となりました。

当遺跡の北西には、古墳時代後葉に噴火した、榛名山二ツ岳降下軽石によって覆われていた、国指定史跡黒井峯遺跡があります。また、周辺にも同様の遺跡が包蔵されており、考古学のみならず、様々な分野から注目が集まっております。

今回の発掘調査では、黒井峯遺跡と同時刻に軽石に埋没した水田跡と放牧地跡をはじめ、縄文時代や古墳時代前葉の集落跡を検出することができました。特に古墳時代前葉の集落跡は、まとまった資料が出土しており、当地域では貴重な調査例といえましょう。

本報告書はこの重要な資料を所収し、本事業に伴う報告書の第4冊目として刊行されることになりました。

報告書刊行にいたるまでには、群馬県県土整備局(旧土木部)、渋川土木事務所、群馬県教育委員会、子持村教育委員会の諸機関並びに地元関係者の皆様に大変なご尽力を賜りました。心から感謝の意を表わすとともに、本書が広く活用され、郷土の歴史の解明に大いに役立つことを願い序といたします。

平成18年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

1. 本書は（国）353号線道路改築（改良）工事に伴って行われた中郷恵久保遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 遺跡所在地 群馬県渋川市中郷・吹屋（旧 北群馬郡子持村大字中郷・吹屋字恵久保）

3. 事業主体 群馬県（土木部道路建設課 渋川土木事務所）

4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間 平成11年11月1日～平成12年3月31日

平成12年4月1日～平成12年9月3日

平成13年4月1日～平成14年3月31日

6. 整理期間 平成16年4月1日～平成17年3月31日

7. 発掘調査・整理体制

事務担当

小野宇三郎、高橋勇夫、木村裕紀、赤山容造、神保侑史、津金沢吉茂、水田 稔、能登 健、中束耕志、西田建彦、矢崎俊夫、住谷 進、住谷永市、萩原利通、坂本敏夫、植原恒夫、笠原秀樹、大島信夫、国定 均、小山建夫、竹内 宏、石井 清、須田朋子、吉田有光、今泉大作、森下弘美、柳岡良宏、田中賢一、岡島伸昌、片岡徳雄、栗原幸代、高橋房雄、阿久澤玄洋、宮前結城雄、佐藤聖行、清水秀紀、原田恒弘、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、田村恭子、吉田笑子、廣津真希子、今井もと子

調査担当

（発掘）調査研究部第3課長 小山友孝

調査担当 山口逸弘、根岸 仁、内田敬久

調査研究部第2課長 中束耕志

調査担当 山口逸弘、伊平 敬、本間 昇

調査研究部第3課長 下城 正

調査担当 山口逸弘、山村英二、小保方香里

（整理）調査研究部資料整理第2課長 相京建史

整理担当 松村和男、山口逸弘

整理嘱託員 岩淵フミ子、岸トキ子、矢島三枝子、萩原妙子、勅使川原操子、
及び補助員 鹿沼敏子（嘱託）、渡部あい子、大塚とし子、小林 聖

遺物写真 佐藤元彦

保存処理 関 邦一、土橋まり子、横倉知子、小材浩一

土器実測 田中精子、酒井史恵（器械実測班）

8. 発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

9. 発掘調査及び報告書作成には以下の方々にご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表します。

石井克巳、太田国男、大塚昌彦、小川卓也、川道 亨、小林 修、小林一弘、小林 正、齋藤英敏、
佐藤信彦、櫻井秀哉、鈴木徳雄、須永薫子、田口一郎、日沖剛史、福田貫之、間庭 稔、山本千春、
横田美由紀、若狭 徹

10. 分析・委託

自然科学分析（テフラ分析・植物桂酸体分析） （株）古環境研究所 第IV章3・4に掲載

出土木器・炭化材樹種同定 株式会社パレオ・ラボ 第IV章i・iiに掲載

遺構測量・トレース・デジタルトレース 株式会社測研

出土遺物トレース 技研測量株式会社 株式会社測研 株式会社アルカ

電磁波探査 応用地質株式会社

11. 本文執筆及び編集 松村和男、山口逸弘

*尚、中郷恵久保遺跡の名称に関しては、調査区を含む当該地の大字小字を併記することによって表している。ただし、本遺跡の調査区は東西に細長く、また字名も複雑に入り組む箇所でもあり、周辺は大字「吹屋」部分も多くを占める。よって、「吹屋恵久保遺跡」という名称も妥当性があるが、発掘調査中より各種刊行物で「中郷恵久保遺跡」という名称を使用しているため、本報告書では従来の遺跡名を踏襲し「中郷恵久保遺跡」として報告する。

凡 例

1. 本書挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
2. 6図は国土地理院2万5千分の1地形図「金井」「鯉沢」「渋川」「伊香保」を使用した。
3. テフラの呼称として、榛名山二ツ岳渋川テフラ(Hr-S)→Hr-FAあるいはFA、榛名山二ツ岳伊香保テフラ(Hr-I)→Hr-FPあるいはFP、浅間B軽石→As-B、浅間C軽石→As-Cを用いた。
4. 遺構・遺物図の縮尺については、下記を基本としたが厳密に統一していない。各挿図中のスケールを参照していただきたい。
《遺構》 竪穴住居跡 1/60 炉・竈 1/30、水田跡・畠跡 1/200・1/100・1/60・1/40
《遺物》 土器類 1/2・1/3・1/4、石製品・石器類 1/1・1/2・1/3・1/4
5. 水田跡などの面積は、デジタルプランメーターで3回計測した平均値を採用した。
6. 遺物計測値は、口径・底径・高さ・長さ・幅・厚さは小数点第2位を四捨五入しcm単位で、重量は電磁式はかり等を使用し、g・kg単位で表示した。
7. 遺構計測値は基本的に竪穴住居跡は上端の長軸・短軸を計測した。水田跡は下端を計測した。
8. なお、本報告書1～2章は、国道353号線関連に伴う調査報告書「北牧大境遺跡」とほぼ内容が一致する箇所がある。同一事業での刊行であり、加除筆後再録させていただいた。
9. また、吹屋中原遺跡の一部を付篇として掲載した。

目 次

口絵・序・例言・凡例・目次

挿図・表・図版目次

I	調査経過	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の経過	1
3.	調査の方法	6
II	周辺の環境	7
1.	地理的環境	7
2.	歴史的環境	10
3.	基本土層	13
III	検出された遺構と遺物	14
1.	概要	14
2.	縄文時代の遺構と遺物	16
	・土 坑	17
	・遺構外出土遺物	20
3.	古墳時代前葉の遺構と遺物	63
	・住 居 跡	66
	・遺構外出土遺物	135
	・掘立柱建物跡	127
	・木製品	154
	・土 坑	131
	・サク状遺構	163
4.	Hr-FA下で検出された遺構	164
	・FA下水田跡	165
5.	Hr-FP下で検出された遺構	166
	・I～Ⅲ区 水田跡・畠跡・放牧地跡	166
6.	Hr-FP上で検出された遺構と遺物	212
	・Ⅲ区住居(27号住居跡)	212
	・I区土坑	215
7.	遺構計測表及び遺物観察表	216
IV	分 析	273
i.	中郷恵久保遺跡Ⅱ区竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定	273
ii.	中郷恵久保遺跡出土材の樹種	279
iii.	中郷恵久保遺跡から出土した大型植物化石	282
iv.	中郷恵久保遺跡の土層とテフラ	283
v.	中郷恵久保遺跡における植物珪酸体分析	287

V	まとめ	295
	中郷恵久保遺跡古墳時代資料から	295
	古墳時代前葉の集落について	295
	古墳時代前葉の土器について	296
	古墳時代後葉の放牧地跡と水田跡	298
付	篇	
	吹屋中原遺跡(Ⅳ区) 調査報告	301

抄 録

写真図版

奥 付

挿 図 目 次

1 図	国道353号線路線図	2	62 図	2号住居跡出土遺物	74
2 図	遺跡位置と周辺地形図	5	63 図	3号住居跡床面・床下・出土遺物	76
3 図	グリッド配置図	6	64 図	4号住居跡床面・床下	77
4 図	遺跡位置と子持村段丘分布図	8	65 図	4号住居跡出土遺物	78
5 図	FAとFPの降下範囲	9	66 図	5号住居跡床面・出土遺物	79
6 図	周辺遺跡分布図	11	67 図	6号住居跡床面・床下	80
7 図	基本土層図	13	68 図	6号住居跡出土遺物	81
8 図	J-1～3号土坑(縄文)	17	69 図	7号住居跡床面・出土遺物	83
9 図	30号土坑(縄文)	18	70 図	8号住居跡床面・出土遺物	84
10 図	I区縄文土器	20	71 図	9号住居跡床面・床下・出土遺物	85
11 図	II区縄文土器(1)	21	72 図	10号住居跡床面・出土遺物	86
12 図	II区縄文土器(2)	22	73 図	11号住居跡床面・床下・出土遺物	87
13 図	II区縄文土器(3)	23	74 図	12号住居跡床下	89
14 図	III区縄文土器(1)	23	75 図	14号住居跡床面・床下・出土遺物	89
15 図	III区縄文土器(2)	24	76 図	15号住居跡床面・床下	90
16 図	III区縄文土器(3)	25	77 図	15号住居跡出土遺物(1)	91
17 図	III区縄文土器(4)	26	78 図	15号住居跡出土遺物(2)	92
18 図	縄文時代石器(1)	27	79 図	16号住居跡床面・床下	93
19 図	縄文時代石器(2)	28	80 図	17号住居跡床面・床下	93
20 図	縄文時代石器(3)	29	81 図	18号住居跡床面・床下	94
21 図	縄文時代石器(4)	30	82 図	18号住居跡出土遺物(1)	95
22 図	縄文時代石器(5)	31	83 図	18号住居跡出土遺物(2)	96
23 図	縄文時代石器(6)	32	84 図	19号住居跡床面・出土遺物	98
24 図	縄文時代石器(7)	33	85 図	20号住居跡床面・床下	99
25 図	縄文時代石器(8)	34	86 図	20号住居跡出土遺物(1)	100
26 図	縄文時代石器(9)	35	87 図	20号住居跡出土遺物(2)	101
27 図	縄文時代石器(10)	36	88 図	20号住居跡出土遺物(3)	102
28 図	縄文時代石器(11)	37	89 図	21号住居跡床面	103
29 図	縄文時代石器(12)	38	90 図	21号住居跡床下	104
30 図	縄文時代石器(13)	39	91 図	21号住居跡出土遺物(1)	105
31 図	縄文時代石器(14)	40	92 図	21号住居跡出土遺物(2)	106
32 図	縄文時代石器(15)	41	93 図	21号住居跡出土遺物(3)	107
33 図	縄文時代石器(16)	42	94 図	22号住居跡床面・出土遺物	108
34 図	縄文時代石器(17)	43	95 図	23号住居跡床面・床下	110
35 図	縄文時代石器(18)	44	96 図	23号住居跡炉址	111
36 図	縄文時代石器(19)	45	97 図	23号住居跡出土遺物(1)	112
37 図	縄文時代石器(20)	46	98 図	23号住居跡出土遺物(2)	113
38 図	縄文時代石器(21)	47	99 図	24号住居跡床面・床下	114
39 図	縄文時代石器(22)	48	100 図	24号住居跡出土遺物	115
40 図	縄文時代石器(23)	49	101 図	25号住居跡床面・床下	115
41 図	縄文時代石器(24)	50	102 図	25号住居跡出土遺物	117
42 図	縄文時代石器(25)	51	103 図	26号住居跡床下	118
43 図	縄文時代石器(26)	52	104 図	28号住居跡床面	118
44 図	縄文時代石器(27)	53	105 図	29号住居跡床面・出土遺物	120
45 図	縄文時代石器(28)	54	106 図	30号住居跡床面	121
46 図	縄文時代石器(29)	55	107 図	31号住居跡床面	121
47 図	縄文時代石器(30)	56	108 図	31号住居跡出土遺物	122
48 図	縄文時代石器(31)	57	109 図	32号住居跡床面・床下	124
49 図	縄文時代石器(32)	58	110 図	32号住居跡出土遺物	125
50 図	縄文時代石器(33)	59	111 図	33・34号住居跡床面・床下	126
51 図	縄文時代石器(34)	60	112 図	1号掘立柱建物跡	127
52 図	縄文時代石器(35)	61	113 図	2号掘立柱建物跡	128
53 図	縄文時代石器(36)	62	114 図	3号掘立柱建物跡	129
54 図	ローム上面全体図	63・64	115 図	4号掘立柱建物跡	130
55 図	1号住居跡周辺地形図(FA下)	67	116 図	II区1～21号土坑出土遺物	132
56 図	1号住居跡床面	68	117 図	III区27～29号土坑出土遺物	133
57 図	1号住居跡遺物出土状況・床下	69	118 図	III区遺構外出土遺物(弥生)	134
58 図	1号住居跡出土遺物(1)	70	119 図	I区遺構外出土遺物	137
59 図	1号住居跡出土遺物(2)	71	120 図	II区遺構外出土遺物(1)	137
60 図	1号住居跡出土遺物(3)	72	121 図	II区遺構外出土遺物(2)	138
61 図	2号住居跡床面・床下	73	122 図	II区遺構外出土遺物(3)	139

123図	Ⅱ区遺構外出土遺物(4)……………	140
124図	Ⅱ区遺構外出土遺物(5)……………	141
125図	Ⅱ区遺構外出土遺物(6)……………	142
126図	Ⅱ区遺構外出土遺物(7)……………	143
127図	Ⅱ区遺構外出土遺物(8)……………	144
128図	Ⅱ区遺構外出土遺物(9)……………	145
129図	Ⅱ区遺構外出土遺物(10)……………	146
130図	Ⅱ区遺構外出土遺物(11)……………	147
131図	Ⅱ区遺構外出土遺物(12)……………	148
132図	Ⅱ区遺構外出土遺物(13)……………	149
133図	Ⅲ区遺構外出土遺物(1)……………	150
134図	Ⅲ区遺構外出土遺物(2)……………	151
135図	Ⅲ区遺構外出土遺物(3)……………	152
136図	Ⅲ区遺構外出土遺物(4)……………	153
137図	I区出土木製品(1)……………	154
138図	I区出土木製品(2)……………	155
139図	I区出土木製品(3)……………	156
140図	I区出土木製品(4)……………	157
141図	I区出土木製品(5)……………	158
142図	I区出土木製品(6)……………	159
143図	I区出土木製品(7)……………	160
144図	I区出土木製品(8)……………	161
145図	I区出土木製品(9)……………	162
146図	Ⅲ-2区ローム上面サク状遺構……………	163
147図	Ⅲ-2区F A下小区画水田跡……………	165
148図	F P下面全体図……………	167・168
149図	I-1区F P下面全体図……………	169
150図	I-1区道状遺構……………	170
151図	I-1区1号道状遺構……………	171
152図	I-1区2号道状遺構……………	172
153図	I-2区F P下面全体図……………	174
154図	I-2区F P下面台地部……………	175

155図	I-2区F P下短サク状畠跡……………	176
156図	I-2区F P下極小区画水田跡(1)……………	177
157図	I-2区F P下極小区画水田跡(2)……………	178
158図	I-2区F P下極小区画水田跡(3)……………	179
159図	I-2区F P下水田跡断面図……………	180
160図	Ⅱ区F P下面全体図……………	182
161図	Ⅱ-1区F P下面全体図……………	183
162図	Ⅱ-1区F P下3号道状遺構……………	184
163図	Ⅱ-2区東F P下面……………	186
164図	Ⅱ-2区西F P下面……………	187
165図	Ⅱ-2区F P下長サク状畠跡……………	188
166図	Ⅱ-2区F P下5号道状遺構(馬道)……………	190
167図	Ⅲ-1区F P下面全体図……………	192
168図	Ⅲ-1区F P下長サク状畠跡……………	193
169図	Ⅲ-1区F A上面におけるサク状遺構……………	195
170図	Ⅲ-1区F P下畠跡断面図(1)……………	196
171図	Ⅲ-1区F P下短サク状畠跡(1)……………	197
172図	Ⅲ-1区F P下短サク状畠跡(2)……………	198
173図	Ⅲ-1区F P下畠跡断面図(2)……………	199
174図	Ⅲ-1区F P下棚田状水田跡……………	201
175図	Ⅲ-1区F P下棚田状水田跡断面図……………	202
176図	Ⅲ-1区F P下棚田状水田跡足跡……………	204
177図	Ⅲ-1区F P下棚田状水田跡水路・水口……………	205
178図	Ⅲ-2区F P下極小区画水田跡……………	206
179図	Ⅲ-2区F P下極小区画水田跡(1)……………	207
180図	Ⅲ-2区F P下極小区画水田跡(2)……………	208
181図	Ⅲ-2区F P下極小区画水田跡断面図……………	209
182図	Ⅲ-2区F P下極小区画水田跡土塊詳細図……………	210
183図	Ⅲ-2区F P下極小区画水田跡水口……………	211
184図	Ⅲ区F P上27号住配置図……………	213
185図	Ⅲ区F P上27号住床面・竈・出土遺物……………	214
186図	I区25号土坑・26号土坑……………	215

写真図版

- 図版-1 中郷恵久保遺跡遠景南から
Ⅲ-1区斜面部縄文土器出土状態
Ⅲ区30号土坑(縄文)
Ⅲ-2区弥生土器出土状態
Ⅲ-1区作業風景
- 図版-2 Ⅲ-2区ローム上面遠景東から
Ⅲ-1区ローム上面遠景西から
- 図版-3 1号住炭化材出土状態東から
1号住南側周堤帯
- 図版-4 1号住炭化材出土状態
1号住炭化材出土状態
1号住炭化材出土状態
1号住炭化材出土状態
1号住炭化材出土状態
- 図版-5 1号住床面
1号住床下
2号住床面
2号住床下
3号住床面
4号住遺物出土状態
4号住床面
4号住床下
- 図版-6 5号住床下
6号住遺物出土状態
6号住床下
7号住遺物出土状態
7号住床下
8・26号住全景
9号住床面

- 10号住床面
- 図版-7 11号住床面
11号住床下
14号住床面
15号住遺物出土状態西から
15号住遺物出土状態西から
15号住床面西から
16号住床面北西から
17号住全景東から
- 図版-8 18号住遺物出土状態北から
18号住床面北から
- 図版-9 18号住床下北から
19号住床面
20号住床面
20号住床下
20号住遺物出土状態
21号住遺物出土状態
21号住遺物出土状態
21号住床面
- 図版-10 21号住床下
21号住床下
22号住遺物出土状態
22号住遺物出土状態
23号住床面
23号住遺物出土状態
23号住炉址西から
23号住床下
- 図版-11 24号住床面北から
24号住炉址北から

目 次

1 表	主な周辺遺跡一覧表	12
2 表	住居跡計測表	216
3 表	水田跡計測表	217
4 表	縄文土器観察表	219
5 表	石器計測表	224
6 表	住居跡・土坑出土遺物観察表	229
7 表	遺構外出土遺物観察表	247
8 表	I 区出土木製品計測表	271

IV 分析

樹種同定 (i ~ iii)

1 図	1号住居跡炭化材分布図	275
図版 1	1号住居跡炭化材組織の走査電子顕微鏡写真	276
図版 2	II 区住居跡出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真(1)	277
図版 3	II 区住居跡出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真(2)	278
表 1	住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧	275
表 2	住居跡別の検出樹種集計	276
図版 4	出土材・木材組織光学顕微鏡写真	281
図版 5	出土した大型植物化石	282

自然化学分析土層とテフラ (iv)

図 1	第 1 地点の土層柱状図	285
図 2	第 2 地点の土層柱状図	285
図 3	第 3 地点の土層柱状図	285
図 4	調査区西壁の土層柱状図	285
図 5	1号住居跡EWトレンチの土層柱状図	285
表 1	1号住居跡EWトレンチにおけるテフラ検出分析結果(1)	286
表 2	1号住居跡EWトレンチにおけるテフラ検出分析結果(2)	286

自然化学分析植物珪酸体分析 (v)

表 1	中郷恵久保遺跡における植物珪酸体分析結果(1)	290
図 1	第 1 地点における植物分析結果	289
図 2	第 2 地点における植物分析結果	289
図 3	第 3 地点における植物分析結果	289
図 4	1号住居跡EWトレンチにおける植物分析結果	289
図版 1	植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真	292
表 2	中郷恵久保遺跡における植物珪酸体分析結果(2)	293
図 5	プラント・オパール分析結果	294
図版 2	植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真	294

V まとめ

図 1	「斜格子目文甕形土器」	297
-----	-------------	-----

付 篇 吹屋中原遺跡(IV区)

付 1 図	吹屋中原遺跡IV区位置図	303
付 2 図	吹屋中原遺跡IV区 グリッド配置図	304
付 3 図	Hr-FP上 1号土坑	305
付 4 図	Hr-FP下 全体図(1)	307
付 5 図	Hr-FP下 全体図(2)・立木痕	308
付 6 図	Hr-FA下 1号溝	309
付 7 図	ローム上面遺構等配置図	310
付 8 図	ローム上面 風倒木、47号土坑・48号土坑	311
付図版 1	調査区より榛名山を臨む	
付図版 2	IV区空撮 IV区Hr-FP下面 遠景(南から)	
付図版 3	Hr-FP下面 馬蹄痕 Hr-FP下面 馬蹄痕 Hr-FP下面 馬蹄痕 Hr-FP下面 馬蹄痕 Hr-FP下面 立木痕(検出状況) Hr-FP下面 立木痕(半載) Hr-FP下面 立木痕(セクション) Hr-FP下面 立木痕(埋設土除去)	
付図版 4	Hr-FP下面 植物痕(スキ根株) Hr-FP下面 植物痕 Hr-FP下~FA下セクション Hr-FP下~FA下セクション Hr-FA上面 全景(北から) Hr-FA上面 南半 Hr-FA上面 北半 Hr-FA上面 焼土・炭化物	
付図版 5	Hr-FA下面 全景 Hr-FA下面 南半 Hr-FA下面 北半 Hr-FA下面 溝状遺構 ローム上面 全景 ローム上面 風倒木 ローム上面 47号土坑セクション ローム上面 48号土坑セクション	
付図版 6	IV区最南部Hr-FP下面 全景(南から) IV区最南部Hr-FP下面 植物痕・炭化物・馬蹄痕 IV区最南部Hr-FA上面 全景(南から) IV区最南部Hr-FA下面 全景(南から) 調査区より子持山を臨む	

I 調査経過

1. 調査に至る経過

国道353号線鯉沢バイパスは、渋川市内と子持村内の一般国道17号及び国道353号線の交通渋滞の緩和を図るため、国道17号の鯉沢バイパスと合わせて計画された延長2.2km・2車線の道路で、建設区間は北群馬郡子持村白井から子持村北牧に所在する。平成8年度にはその一部0.8kmが供用開始された。この部分に関しては、白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡として、平成3年～平成6年に(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行い、報告書を刊行している。

国道353号線鯉沢バイパスの残りの区間1.4kmの建設について、平成10年度に群馬県道路建設課から県教育委員会文化財保護課に対し、建設予定区域内の遺跡の存否についての事業照会があった。これを受けて文化財保護課では、工事対象地域が榛名山二ッ岳の火山性噴出物による、古墳時代文化層の良好な遺存で知られる場所であることから、用地上問題の少ない北牧地区(北牧大境遺跡)で試掘を実施したところ、二ッ岳降下軽石上から平安時代の住居跡、軽石下から古墳時代の水田跡を発見したため、本調査に向けて協議を開始した。

平成11年度前半、地元子持村教育委員会の協力を得て、当該地域における周知の遺跡の存否および範囲を詳細に検討し、道路予定区域全体に遺跡が存在することが判明したため、11年度後半に全面本調査を実施する方向で協議を進めた。路線内の調査対象遺跡に対して、村教育委員会との協議により小字毎に各遺跡を分別し、大字と小字を併記して、遺跡名を呼称する方法をとった。すなわち、東から中郷恵久保遺跡(本遺跡)・吹屋三角遺跡・中郷田尻遺跡・吹屋糶屋遺跡・北牧大境遺跡・北牧壺町ヶ坪遺跡・北牧沖田遺跡を対象遺跡とし、平成11年11月から本格的な発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団によって開始されることになった(1図)。尚、当初調査予定であった、北牧壺町ヶ坪遺跡及び北牧沖

田遺跡に関しては、平成13年1月に、事業団の協力の下、文化財保護課による試掘が行われたが、遺構・遺物を検出し得ず、二ッ岳降下軽石(Hr-FP)も二次堆積層を見ることから、本調査の対象から除外することになった。

2. 調査の経過

国道353号線鯉沢バイパスの発掘調査は、中郷恵久保遺跡Ⅱ区と吹屋三角遺跡Ⅰ区～Ⅲ区の一部から着手した。これは路線内に存在する未収地と工事工程の関連であり、平成12年度は中郷恵久保遺跡Ⅱ区・Ⅲ区、北牧大境遺跡の発掘調査を行い、平成13年度は吹屋糶屋遺跡、中郷恵久保遺跡Ⅰ区・Ⅲ区の調査を完了させた。未収地と工事行程の完形から調査未着手であった、吹屋三角遺跡Ⅲ区西と中郷田尻遺跡は平成16年度に行われた。

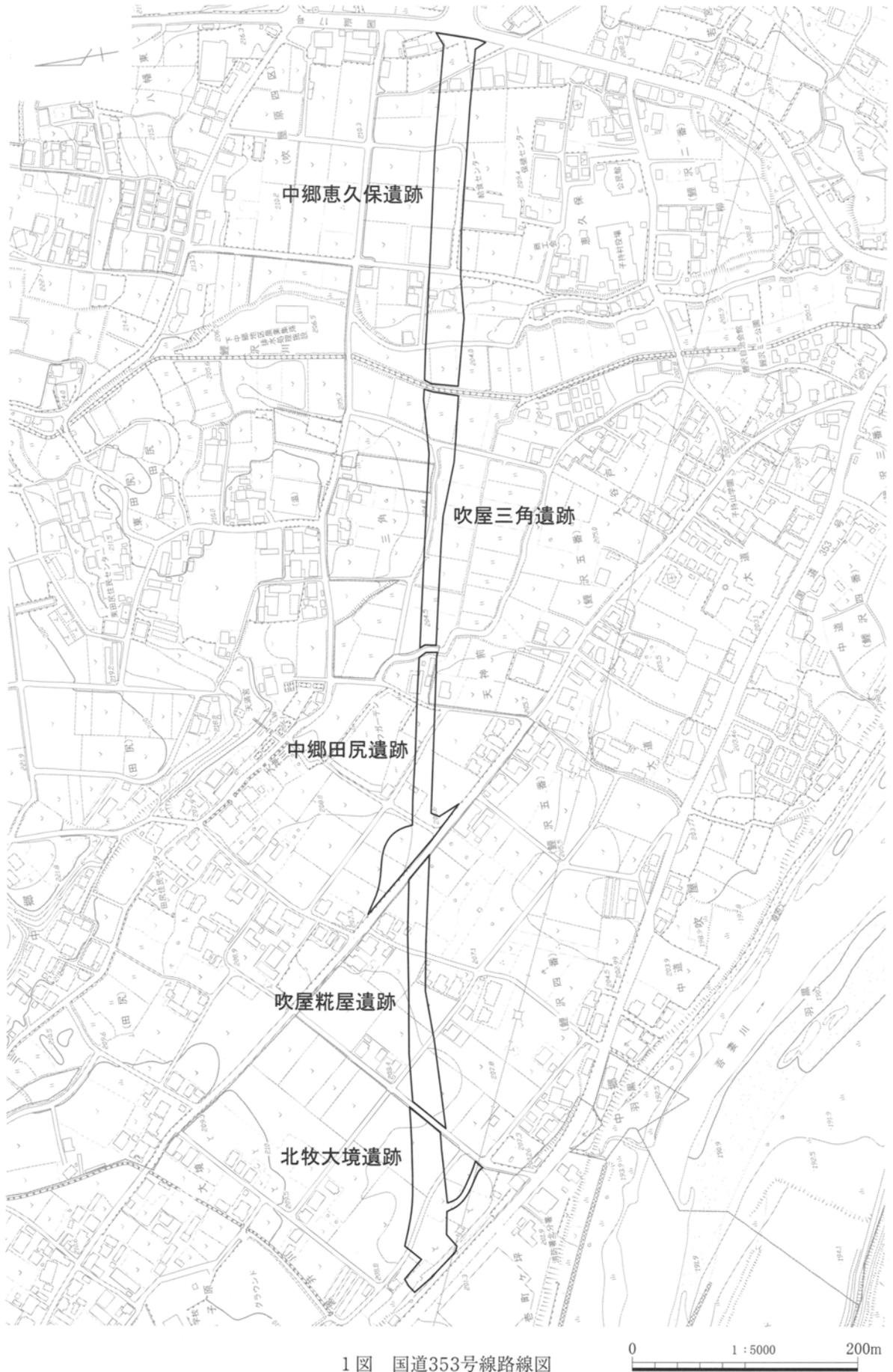
また、調査当初中郷恵久保遺跡も当初事業名称である吹屋三角遺跡に含まれていたため、本遺跡の名称が調査途中より、吹屋三角遺跡恵久保地区から中郷恵久保遺跡と変更した経緯がある。

前述のように、中郷恵久保遺跡は3年度に渡った調査である。これは未収地の解決を待ちその都度調査体制を組み直して、調査にあたったためである。そのため、遺構によっては、2年度に跨り別個に調査された住居跡などがあり、遺跡全体像の把握には極めて不都合な調査となった。反省点である。

さて、中郷恵久保遺跡がある子持村内の殆どの遺跡では、古墳時代に降下した二ッ岳降下軽石(Hr-FP)に厚く覆われており、本遺跡も1.5m以上のHr-FPの堆積が確認されている。また、このFP下にも降下火山灰(Hr-FA)が堆積しており、各々その直下が、古墳時代の地表面であり重要な文化層一調査面となる。さらに下位層では縄文時代や弥生時代の文化層が存在しており、そのため、調査はFP上・FP下・FA下・ローム上といった最低4面の調査面が存在するのである。

中郷恵久保遺跡でもこの4面の調査にあたり、調査区を南北に分断する町道を境に東からⅠ区・Ⅱ区・

I 調査経過



1 図 国道353号線路線図

Ⅲ区と分け、さらにその中を未収地解決に従い東区・西区と小区画して調査を進めた（尚、本書では、東区・西区ではなく1区・2区として報告する）。その都度、各区毎に4面の文化層を調査面として、各面の調査記録を執り行う調査方法である。以下各年度の調査経緯を記す。

平成11年度はⅡ-2区を対象とした。吹屋三角遺跡の調査との都合上、調査事務所は中郷恵久保遺跡Ⅲ-2区へ設定した。F P上の遺構は現代の土坑数基が認められたのみで、本格的な調査には至っていない。調査は即F P下の古墳時代の面に至り、馬蹄痕が見られる古墳時代の放牧地跡を中心に、畠跡・道状遺構などを調査した。F A下面も調査対象とし、同様に馬蹄痕が見られたが、放牧地跡として位置付けるには、F P下とはその様相に大きな差が見られ、積極的な馬蹄痕ではなく、性格を特定するに至らなかった。Ⅱ区で主たる遺構は、F A下の黒色土からローム層上面に至る間で、検出された古墳時代前葉の集落跡であろう。11年度の調査では、22軒の竪穴住居跡を調査した。残存状態の良好なものもあり、1号住は西半のみの検出ながら、壁外の周堤帯を見ることができた。

平成12年度は、調査事務所を移転し調査終了箇所であるⅡ-2区に設定し、調査対象をⅢ-1区西・Ⅲ-2区・Ⅱ-1区・Ⅱ-2区北端の順番で行った。特筆すべきはⅢ-1区西F P下で斜面地形に営まれた棚田状の水田と、畠が検出されたことである。Ⅲ区低地は鯉沢川が形成した沖積地で、続くⅢ-2区でもF P下極小区画水田跡が確認された。このⅢ-2区では調査途中、調査区法面の一部からの湧水が著しく、法面の崩壊が予想されたため、法面角度を緩やかにし安全対策をとった。そのため、調査対象となる、調査区底面は著しく狭小となり、全域を調査対象とできなかった経緯がある。このⅢ-2区では、F A下でも小区画水田跡が検出されている。Ⅱ-1区・Ⅱ-2区では前年度調査した古墳時代前期の集落跡が主な調査対象となった。Ⅱ-1区では、竪穴住居跡は検出されず、掘立柱建物跡1棟のみが

確認された。集落の東限であろうか。

平成13年度の中郷恵久保遺跡の調査は、吹屋糞屋遺跡と併行して行われた。調査事務所は、Ⅱ-1区に小規模なもので対応した。調査は、Ⅲ-1区東からⅠ区の順で行われた。Ⅲ-1区ではⅡ-2区西側で検出されたF P下畠跡や古墳時代集落跡の延長を調査した。また縄文時代中期の土坑も1基ではあるが調査している。Ⅰ区は東の1区から順次調査が進められた。Ⅰ-1区は西斜面であるが、F P下より放牧地と道状遺構が認められた。小規模な村道を挟みⅠ-2区では、F P下の様相は一変し、極小区画水田跡が低地部に展開した。Ⅰ-2区西側は斜面を経て、台地上に畠跡が検出されている。このⅠ区では、低地部にF A下の黒色粘質土中より、木器が少量ながら出土している。明確な共伴資料に恵まれていないが、おそらく古墳時代前期の所産と考えられた。このⅠ区調査は、Ⅲ-2区同様、常に多量の湧水に悩まされ、調査記録も不完全になってしまった。記して反省したい。

整理作業は、平成16年4月より1年間の計画で実施された。

次頁は調査日誌抄である。

I 調査経過

【調査日誌】

平成11年度

平成11年

- 11月1日 事務所開設準備・物品搬入・Ⅱ-2区表土掘削
- 11月5日 Ⅱ-2区 F P除去作業。F P直下面検出作業
凹み・畝跡・道状遺構検出
- 11月17日 Ⅱ-2区 F A上面 耕作痕調査
- 11月24日 Ⅱ-2区 F A下面調査
- 12月1日 Ⅱ-2区 F A下黒色土包含層調査。1号住調査
- 12月15日 Ⅱ-2区東半 古墳時代住居跡群調査

平成12年

- 1月6日 Ⅱ-2区 住居跡群調査
- 1月12日 Ⅱ-2区 仮設搬入路下調査
- 1月20日 このころから吹屋三角遺跡と併行調査
- 2月1日 Ⅱ-2区 住居跡群調査継続 ～11号住調査
- 2月16日 Ⅱ-2区 ～21号住調査
- 2月24日 Ⅱ-2区及び周辺を対象に空撮
- 3月6日 Ⅱ-2区 ～22号住 旧石器時代試掘
- 3月13日 Ⅱ-2区 埋め戻し作業
- 3月17日 Ⅱ-2区 埋め戻し作業終了。11年度調査終了

平成12年度

- 4月1日 事務所移転準備
- 4月10日 Ⅲ-1区東 調査着手 湧水
- 4月12日 Ⅲ-1区東 F P下棚田上水田跡検出
- 4月18日 Ⅲ-1区東 F A上調査。大畦等断ち割り
大畦下より畝サク状遺構検出
- 5月2日 Ⅲ-1区東 F A下及び黒色土遺物包含層調査
- 5月10日 Ⅲ-1区東 調査終了 埋め戻しへ
- 5月12日 Ⅲ-2区 調査着手。上位は産廃層。F P除去へ
- 5月16日 Ⅲ-2区 産廃層より出水。法面崩落の危険あり
- 5月22日 Ⅲ-2区 湧水対策工事着手
- 5月24日 Ⅲ-2区 F P下面 極小区画水田検出
- 6月5日 Ⅲ-2区 高所作業車による全景写真撮影
Ⅱ-1区 調査着手
- 6月15日 Ⅲ-2区 F A下面 小区画水田検出
Ⅱ-1区 F P下面 道状遺構・放牧地跡検出
- 6月20日 Ⅲ-2区 黒色土縄文包含層調査
Ⅱ-1区 F A上面精査
- 6月26日 Ⅲ-2区 調査終了 埋め戻し
Ⅱ-1区 黒色土包含層（古墳時代）調査
- 7月5日 Ⅱ-1区 包含層調査継続
- 7月24日 Ⅱ-1区 4号掘立柱建物跡調査
- 7月31日 Ⅱ-1区 包含層調査継続 旧石器時代試掘
Ⅱ-2区北 残地部分 調査着手
- 8月2日 Ⅱ-2区北 F P下面 道状遺構・放牧地跡検出
- 8月9日 Ⅱ-1区 調査終了 埋め戻し
Ⅱ-2区北 F A下調査～黒色土中包含層調査
- 8月17日 Ⅱ-2区北 古墳時代住居跡調査（23～26号住）
- 8月30日 Ⅱ-2区北 全景写真撮影
- 8月31日 Ⅱ-2区北 調査終了 埋め戻し
調査班は北牧大境遺跡へ
- 9月3日 埋め戻し終了

平成13年度

平成13年

- 5月10日 調査準備 吹屋靴屋遺跡と併行調査
 - 5月14日 Ⅲ-1区東 調査着手 表土除去
F P上面で27号住検出
 - 5月21日 Ⅲ-1区東 F P上面調査終了
 - 5月30日 Ⅲ-1区東 F P下面畝跡・放牧地跡検出
 - 6月5日 Ⅲ-1区東 F P下面 高所作業車で全景撮影
 - 6月12日 Ⅲ-1区東 F A上面で耕作痕調査（雨天続く）
 - 6月25日 Ⅲ-1区東 F A下 調査 遺構無し
西斜面 F A下黒色土包含層調査
 - 7月4日 Ⅲ-1区東 F A上耕作痕調査・黒色土包含層調査継続
 - 7月27日 Ⅰ-1区 調査着手準備
 - 8月6日 Ⅲ-1区東 黒色土包含層調査継続
Ⅰ-1区 表土掘削
 - 8月17日 Ⅲ-1区東 古墳時代住居跡群平面確認
Ⅰ-1区 F P上面ながら湧水
 - 8月22日 台風のため作業中止
 - 9月5日 Ⅲ-1区東 28～32号住調査
Ⅰ-1区 F P除去作業 湧水著しい
 - 9月10日 台風のため作業中止
Ⅰ-1区 湧水多量で作業中断
 - 9月26日 Ⅲ-1区東 28～32号住調査継続
 - 10月2日 Ⅲ-1区東 高所作業車による全景撮影
Ⅰ-1区 F P除去作業
 - 10月11日 Ⅲ-1区東 調査終了 埋め戻し
Ⅰ-1区 F P下面 放牧地跡・道状遺構検出
 - 10月22日 Ⅰ-1区 F A下面調査 遺構無し
 - 10月31日 Ⅰ-1区 黒色土 包含層調査 遺物少量
 - 11月9日 Ⅰ-1区 調査終了 埋め戻し
 - 11月19日 Ⅰ-2区 調査着手 表土掘削
表土厚く作業員は吹屋靴屋へ
 - 12月7日 Ⅰ-2区 F P除去作業
 - 12月12日 Ⅰ-2区 F P下面 極小区画水田検出
 - 12月18日 Ⅰ-2区 台地部F P下面で畝跡検出
 - 12月20日 Ⅰ-2区 F P下面 高所作業車による全景撮影
- 平成14年
- 1月11日 Ⅰ-2区 F A下面調査 遺構無し
 - 1月25日 Ⅰ-2区 台地部調査終了
 - 2月5日 Ⅰ-2区 低地部で木器出土
 - 2月12日 Ⅰ-2区 調査終了 埋め戻し
調査班は吹屋靴屋へ
 - 2月22日 埋め戻し終了。安全柵などの撤去を経て発掘調査を終了
 - 3月31日 基本整理終了。事務所撤去

【整理作業】

平成16年

- 4月～7月 図面整理、遺物接合・復元
- 7月 遺物写真撮影
- 8月～11月 遺物実測
- 10月～12月 遺構図面修正

平成17年

- 1月～3月 遺構図面トレース委託
遺物図面トレース委託
- 2月 遺物図面トレース
遺構図面トレース
- 3月 版下作成、原稿執筆



2 図 遺跡位置と周辺地形図

I 調査経過

3. 調査の方法

本遺跡の調査区については、便宜的に現道を境にし東よりⅠ～Ⅲ区と大別し、調査年度毎の調査行程や未収地の解決状況等を踏まえ、大別した調査区を更に細分して東区や西区といった小調査区を設定した。

グリッドは国家座標に一致させた1辺4mの方眼を設定し、南北方向に算用数字二桁を、東西方向にはアルファベット25文字を2つ組み合わせたものをあてはめた。国家座標は、国道353号線調査区を全て網羅するようにし、グリッド呼称も東端の遺跡である中郷恵久保遺跡から順次増えるようにした(3図)。

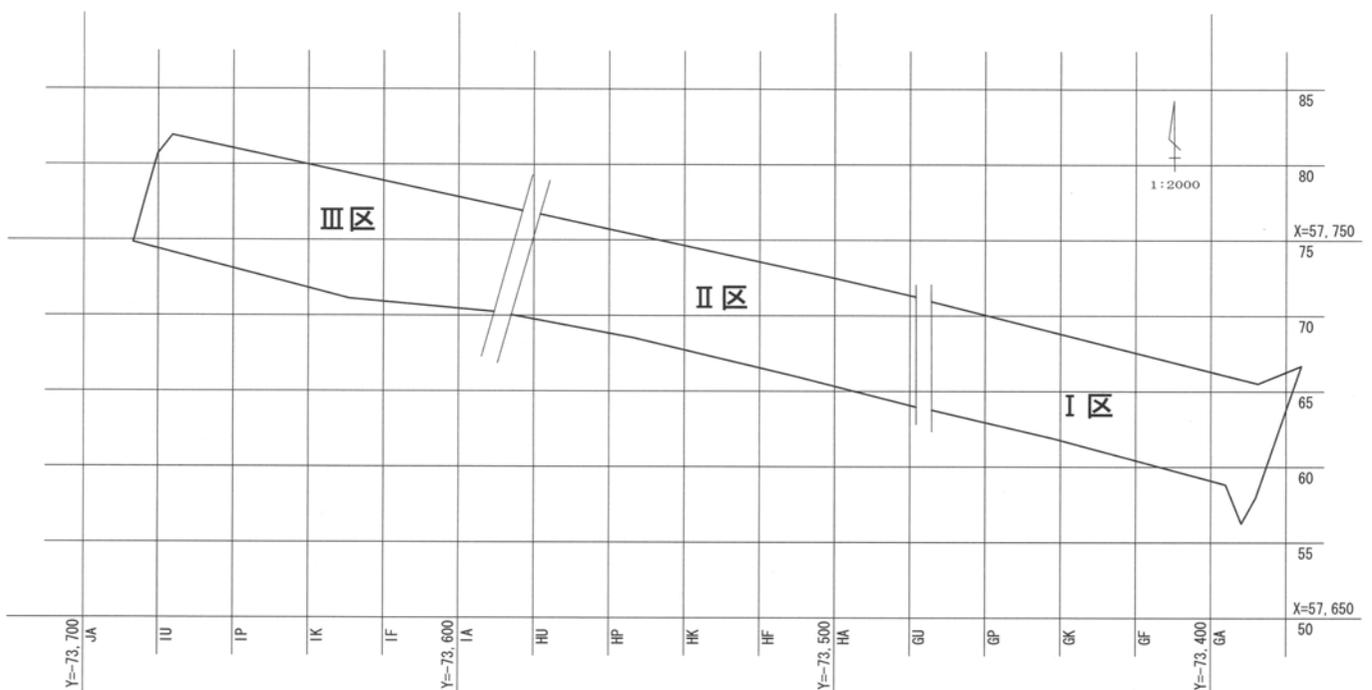
遺構の平面測量は上記グリッド杭を基準として、Hr-FP上面の平安時代～中・近世遺構群は平板測量と簡易遣り方測量を併用し、1/20・1/10縮尺を基本とした。また、Hr-FP下及びHr-FA下水田は、全て電子平板測量で1/40図を基準として業務委託した。ローム上面で確認された古墳時代の集落跡は、平板測量と簡易遣り方測量を併用し、包含層出土遺物についても、特殊な出土状態を想起させる例については、出土地点の記録化に努めた。

写真記録は、基本的に6×7・35mmの白黒フィル

ムと35mmリバーサルフィルムを使用した。また、全景写真などに際しては、高所作業車及びヘリコプターによる撮影を行っている。

掘削方法であるが、表土及びHr-FPは重機による掘削除去を行い、それ以下のFAや黒色土包含層は人力による掘削を基準とした。無論各調査面の精査や掘削は人力によるものである。特に、Hr-FP下面の調査では、従来の当地域での事業団調査では、通常移植ゴテなどのHr-FP除去作業後、馬蹄痕の検出を目的とした、より詳細な除去方法として刷毛によるFP除去作業が行われてきた。しかしながら本遺跡の場合、刷毛は使用せず、移植ゴテと竹箆などによる除去作業に止めた。これは、Hr-FP直下面の新鮮な生活面をより当時のまま記録化するという、村教育委員会の調査指針を参考にしており、実際に刷毛によるHr-FP除去作業よりも多くの情報を得ることができた。

また、調査で得られた水田跡や畠跡に関しては、栽培植物の同定及び示標テフラ層位把握のため科学分析を委託している。さらに、古墳時代前期の竪穴住居跡調査で得られた炭化材についても、樹種同定を委託している。



3図 グリッド配置図

II 周辺の環境

1. 地理的環境

中郷恵久保遺跡が所在する北群馬郡子持村は、東を利根川で、南西を吾妻川で画され、さらに北は子持山山麓斜面が控える。河岸段丘と山麓台地によって構成されている。視野を広げれば、当地域は榛名山・赤城山に挟まれ、利根川が流れ出す谷を眺め、関東平野を南に望む地点である。いわば関東平野の北西端に位置する扇の要に位置するといえよう。

子持村とその周辺地域は、古墳時代の2度にわたる榛名山による火山災害を受けた地域である。最初の噴火が6世紀初頭といわれる火砕流を伴う火山灰の降下で、2度目が6世紀中葉に起こった大規模な軽石降下による災害である。特に本遺跡や黒井峯遺跡は、この軽石降下の軸線上にあり、軽石災害により壊滅的な打撃を受けた地域内に位置すると言えよう(5図)。この2回の榛名山の噴火火山灰は、子持村一帯を覆っており、そのため古墳時代以前の地形を少なからず変化させている。ただし、この変化は巨視的な地形に即しており、利根川河岸段丘面である、浅田面・白井面等の段丘面は当時も同様な比高差と考えると良い。当時との地形差が見受けられる例としては、本遺跡のI区に見るような埋没谷や微高地であり、現地表では平坦面と見受けられる地形も、発掘調査により小規模な谷と台地の連続が展開する例も多々ある。

さて、前述の利根川と吾妻川による河岸段丘は、当時からの段丘面として捉え得るものと考えられており、各段丘面における古墳時代当時の土地利用傾向も重要な研究視点として注意されている。ここで各段丘面の地形的な様相を確認しておく(4図)。

浅田面：利根川・吾妻川の最下位段丘面である。標高180m前後であり、利根川・吾妻川との比高差は数mに過ぎない。ローム層は形成されておらず沖積地が主体を占め、平坦面を築きあげている。古墳時代の遺跡分布は、判然としないが、利根川右岸面に、浅田古墳や伊熊・有瀬古墳群などが知られてお

り、墓域あるいは水田等の生産域と考えられる。

白井面：利根川・吾妻川に沿うように形成された、第2位の段丘面である。標高は約200m前後で、吾妻川沿いには段丘崖が見られ、洪積台地状の景観を見せる。事実これまでの発掘調査では、利根川右岸の白井地区で礫層上位に未発達なローム層が確認されており、台地的な様相をしめしている。一方吾妻川左岸側の発掘調査では、本遺跡や吹屋糝屋遺跡のように、埋没谷に営まれた水田跡が検出されるなど、一部沖積地の様相を示す。これは、雙林寺面の境にある湧水点を中核とした小河川による低地形成によるものと考えられ、利根川右岸の白井地区とは対照的な様相を見せている。段丘面形状も北から南へ僅かな傾斜を見せるものの、ほぼ平坦面に近く、居住地として最適な様相であるが、古墳時代中葉に関しては、水田・畠・放牧地など生産域に供された例が主体を占める。後葉に至ってはHr-FP上に群集墳などが見られることから、墓域としての土地利用が主体のようだ。

西伊熊面：利根川右岸の西伊熊周辺のみで見られる。白井面の上位に形成された小規模な段丘面で、段丘幅も150m程度でしかない。標高は230m前後で、ボーリング調査では上部ローム層が確認されており、段丘形成は2万2千年前と見られている。

立和田面：子持村北部の立和田周辺の規模の小さい段丘である。長坂面と西伊熊面の中位にあたり、両者の延長の可能性もある。詳細は不明である。

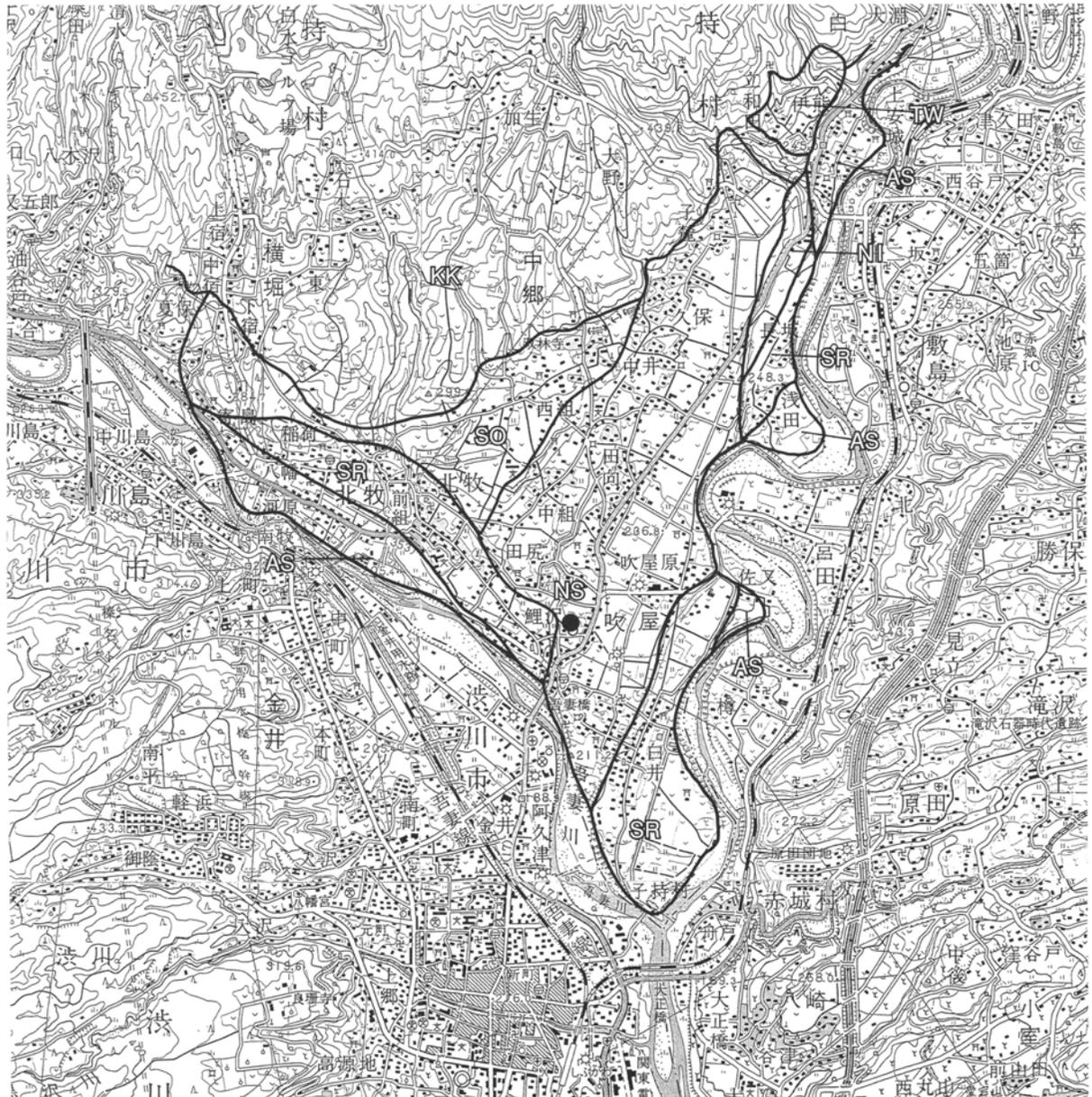
長坂面：南北に長く、また広く子持村の主要な部分を占める段丘面である。中部ローム層が確認されており、6～7万年前の形成といわれる。北から南へ緩やかな傾斜を示し、同様に段丘面の中央を鯉沢川が流れ、両岸に沖積地を形成する。また、湧水点も雙林寺面にかけて見られることから、台地と低地が群在する微地形が予想されよう。標高の高い台地遺跡、すなわち田尻遺跡や館野遺跡などでは集落跡が検出されており、標高の低い台地遺跡吹屋犬子塚・本遺跡では畠や放牧地に供されていたものと捉えられよう。また、鯉沢川が形成した低地帯では水田

II 周辺の環境

跡が確認されている。

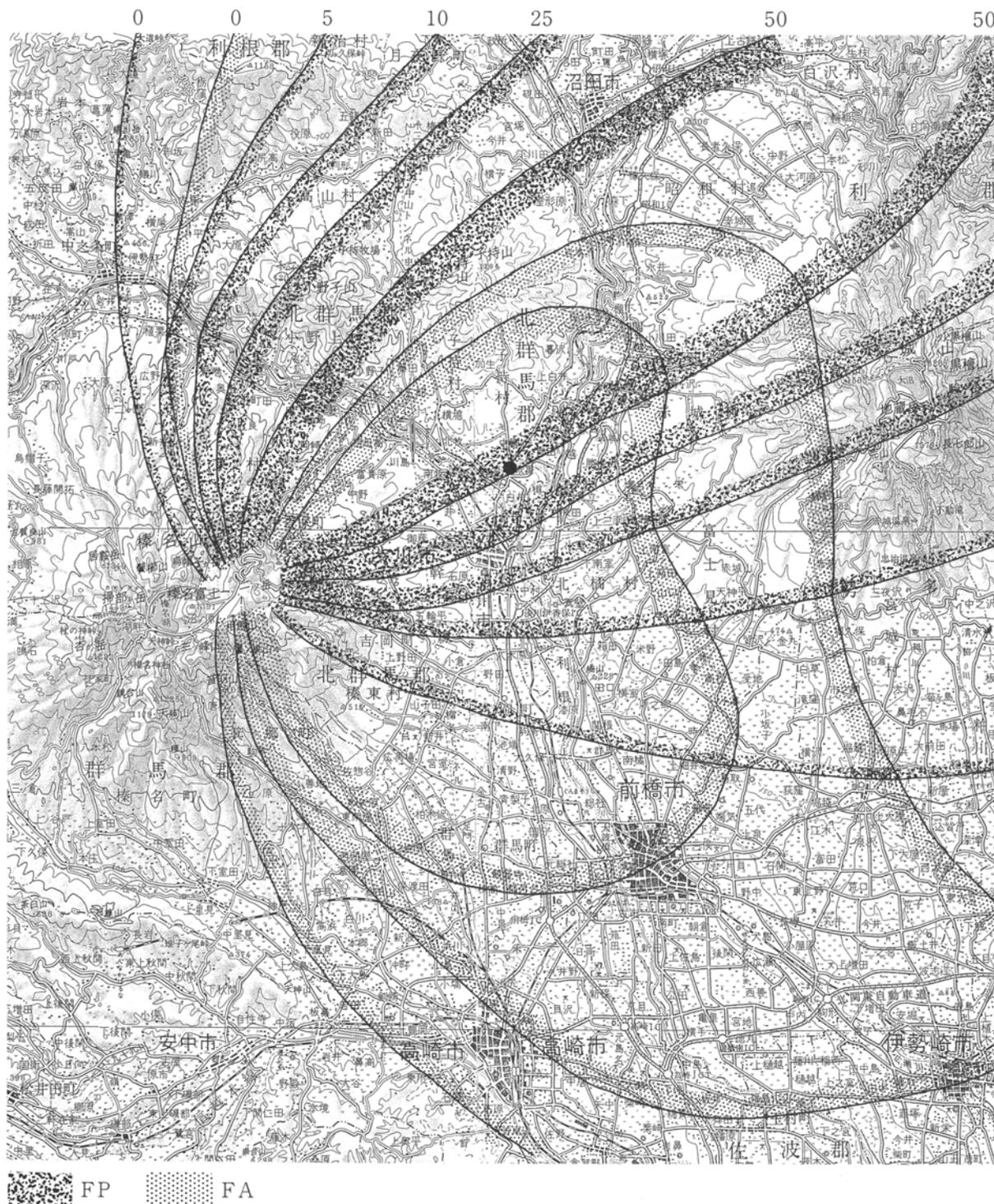
雙林寺面：子持山南麓～東南麓に形成された段丘である。標高250m以上の最上位段丘とみてよく、子持村市街地を眺望する高さにある。長坂面と同様にローム層の発達が著しい面であり、中部ローム層が確認されている。北側に広がる子持火山扇状地の裾野と一体化した地形傾斜を示すが、南端あるいは

東端に至ると、一際聳える段丘崖を形成する。換言すれば古墳時代中葉においても、眼下の生産域を望む高さであり、黒井峯遺跡や西組遺跡にみるように中核的な集落域が形成されていたものと考えられよう。無論、中ノ峯古墳や水田跡や畠跡の検出状況から、墓域・生産域としても供されていたようだ。



子持火山噴出物=KK	雙林寺面=SO	長坂方面=NS	立和田面=TW
西伊熊面=NI	白井面=SR	浅田面=AS	

4 図 遺跡位置と子持村段丘分布図 (S=1:50,000)
 (国土地理院5万分の1「中之条」「沼田」「前橋」「榛名山」使用)
 (『子持村誌上巻』1987を参照)



5 図 FAとFPの降下範囲(S = 1:200,000)

(国土地理院20万分の1地勢図「日光」「高田」「宇都宮」「長野」使用)

II 周辺の環境

2. 歴史的環境

子持村及びその周辺は、古墳時代に榛名山の2度の噴火による火山災害を受けた地域であり、そのため、遺構の遺存度が極めて良好であり、降下当時の瞬時の姿をとどめていると言って良い。特に降下軽石(FP)の堆積は厚く、降下軸線上にある調査遺跡では2mを誇る層厚を示している。このことは、FP降下後の攪乱が下層にまで及ばず、重複遺構を見ない状況で、FP直下の面-6世紀中葉の生活面を検出できる特性を持つ。またその下層に見られる降下火山灰(FA)直下面も古墳時代中葉の遺構がFA下に及ばない限り、当時-6世紀初頭の良好な生活痕跡を我々に提示する。前者-FP直下の集落跡として黒井峯遺跡、FA直下の例として渋川市中筋遺跡はあまりにも著名である。子持村とその周辺地域は、古墳時代集落・墳墓・生産跡研究に具体的なデータが包蔵されているのであり、極めて重要な地域である。ここでは、周辺地域の古墳時代遺跡の分布を概観してみよう。

集落跡

黒井峯遺跡(14)は子持村の上位段丘面である雙林寺面に位置する。FP直下の古墳時代集落遺跡として知られ、当時の集落内施設が複数単位として捉えられる集落跡である。発掘調査も数次に渡り行われ、その都度新しい視点の調査方法と新事実が提供されている。また、周辺にも同時期の集落跡が見られており、西組遺跡(12)・押出遺跡(13)・田尻遺跡(7)が知られる。集落内施設として、竪穴住居跡以外に平地式住居跡・生け垣・畠・水田・樹木跡・水場などが調査されており、総合的な集落様相の把握が可能な地域でもある。これらの集落跡は鯉沢川流域・長坂面・雙林寺面に集中して確認されており、当時の居住中心地域が想定できよう。

古墳時代前葉の集落跡としては本遺跡(5)に北接する八幡神社遺跡(6)や赤城村樽舟戸遺跡(33)等が挙げられるが、FAとFPの堆積が厚く、調査例は少ない。

生産跡

生産跡も上記の段丘面上の埋没谷に水田が営まれており、また台地上には畠が検出されている。さらに下位段丘の白井面では、北牧相野田遺跡(16)や、北牧大境遺跡(1)吹屋糶屋遺跡(2)、吹屋三角遺跡(4)、鯉沢瓜田遺跡・吹屋瓜田遺跡(21)などで水田跡が調査されている。いずれも良好な水田跡を検出しており、一地域の水田耕作様相の把握に欠かせない遺跡群であろう。さらに、これらの遺跡ではFA下水田も同時に検出されており、子持村内で数少ないFA下遺構として位置付けられている。

利根川白井面の様相

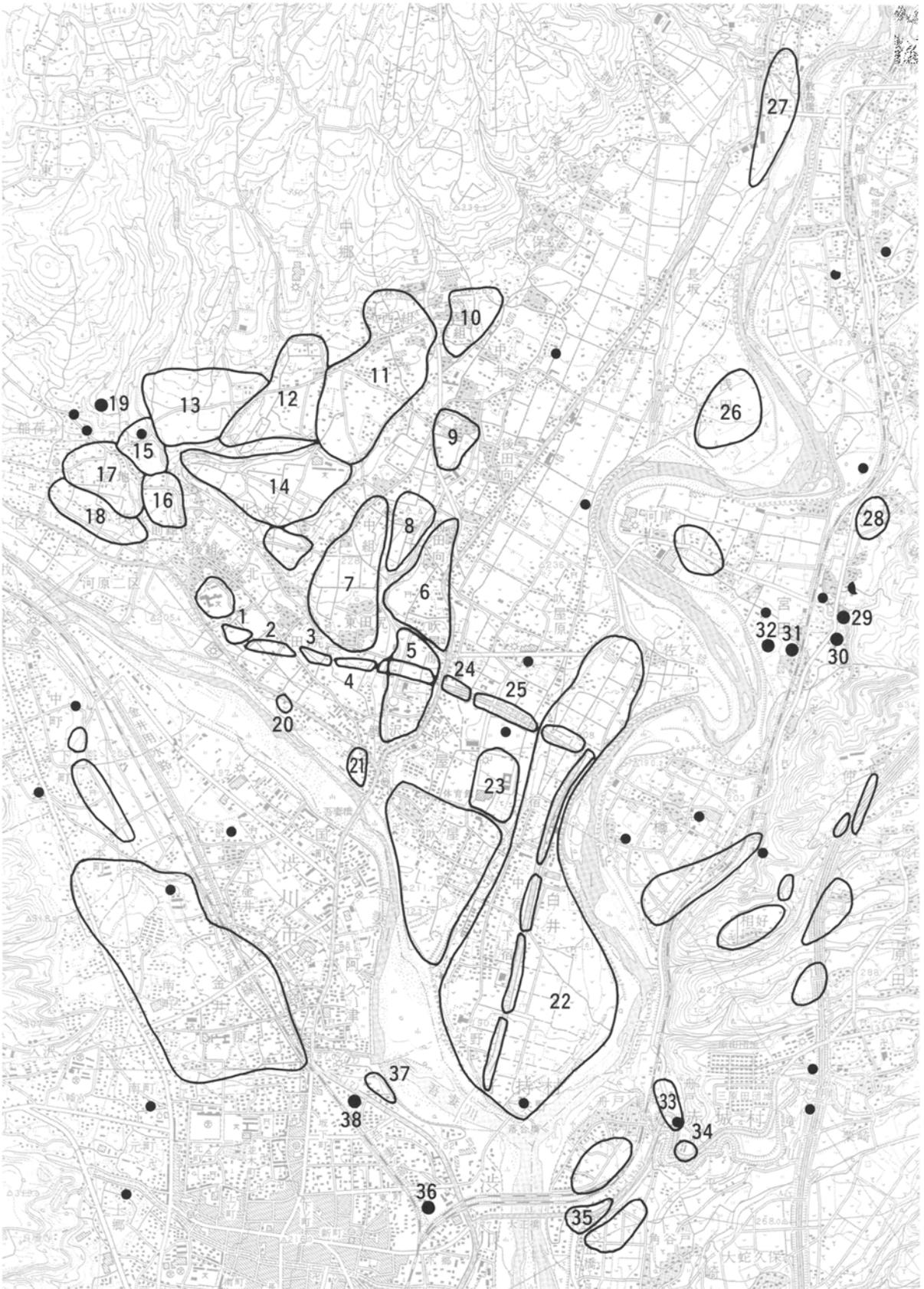
一方、利根川流域の白井面では村教委、事業団で白井遺跡群など多くの発掘調査が行われているが(22)、FP下集落跡を検出した例は無い。畠跡・放牧地跡が主体であり、水田の検出も見られない。利根川に注ぐ小河川や現状の調査範囲で広範囲の埋没谷も見られないことから、水利上の理由を一義的に、水田開発あるいは集落設営が敬遠された地域と考えられよう。しかしながら、放牧地跡としての馬蹄痕跡の存在は、当時の家畜馬の管理形態を考える上で、多くの検証を経ているが、研究課題は蓄積しており、さらに考察を重ねなければならないだろう。

墳墓

白井面の下位段丘の浅田面では、浅田古墳(26)が著名である。葺石、埴輪列を当時のまま確認できた例として、注目されている。さらに近接する有瀬古墳群(27)は積石塚を主体としており、これもFP下より当時の姿を顕存化した例で、調査を重ねる度に、新事実が明らかになる重要な遺跡である。その他では、黒井峯遺跡などに近接して中ノ峯古墳(19)が調査されている。

祭祀跡

黒井峯遺跡などFP下やFA下の集落跡では、祭祀跡が恒常的に検出されるが、利根川対岸の赤城村諏訪原I・II遺跡(28)では乳文鏡や鉄製品が豊富な土器類と白玉類と伴出しており、集落内の祭祀跡とは少なからず差が認められ、注目されよう。



6図 周辺遺跡分布図 1:25,000

II 周辺の環境

1表 主な周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡の概要	文献等
1	北牧大境遺跡	事業団調査。FA・FP下水田。平安時代集落など	33
2	吹屋庵屋遺跡	事業団調査。5c集落、FA・FP下水田・畠、平安時代集落など	42
3	中郷田尻遺跡	事業団調査。弥生時代集落。FA下集落。FA上で確認された平地住居跡や垣など	42
4	吹屋三角遺跡	事業団調査。FA・FP下水田。北接地点を村教委調査。FP下古墳・水田	42
5	中郷恵久保遺跡 (吹屋恵久保遺跡)	本遺跡。4c～5c集落、FA・FP下水田・畠跡等。南に庚申塚古墳(長尾村11号墳)がある	本報告書
6	八幡神社遺跡	村教委調査。古墳時代前期集落・土壙墓、FP下集落・畠跡など	42
7	田尻遺跡	村教委調査。弥生集落・墳墓。FP下集落・畠・道等、平安時代集落	13
8		村No75。古墳時代と縄文時代の包蔵地とされる	
9	中組遺跡	村教委調査。FP下盛土跡(境界)・耕起面、平安時代集落	13
10	池田沢東遺跡	村教委調査。FP下道・畠・境界・耕起面を検出。花塚古墳(FP下古墳)を含む	42
11	館野遺跡	1962年群大調査。FP下集落。村教委調査では畠跡	13
12	西組遺跡	村教委調査。FP下集落、黒井峯遺跡の周辺集落か? 平安時代集落	9・41
13	押出遺跡	村教委調査。弥生時代再葬墓・方形周溝墓、FP下集落、平安時代集落	11・41
14	黒井峯遺跡	村教委調査。国指定史跡。FP下集落としてあまりに著名。堅穴住居、平地建物・家畜小屋・道・水場・水田等が調査・確認されている。古墳時代後期の集落単位が把握でき、また住居の上屋構造等地上構造物を示唆する資料など情報量は多い	13・14
15	丸子山遺跡	村教委調査。弥生時代～古墳時代方形周溝墓、FP上・FP下古墳。丸子山古墳等	42
16	北牧相野田遺跡	村教委調査。FA下・FP下水田。FP下水田面は耕起中を呈す	28
17	畑中遺跡	村教委調査。FP下水田	42
18	後田遺跡	FP下水田	
19	中ノ峯古墳	1979年調査。県指定史跡。FP下古墳。袖無型横穴式石室を持つ円墳	8
20	吹屋中道遺跡	村教委調査。FP下水田・畠	42
21	鯉沢瓜田遺跡 (吹屋瓜田遺跡)	村教委調査。事業団調査。FA下・FP下水田。FP下水田は耕起中を示す	29 23
22	白井遺跡群 白井北中道・白井丸岩 白井南中道・渡屋	白井北中道等の事業団調査ではFP下放牧地、平安時代集落、中世墓壇群等を調査。村教委調査ではFP下畠、放牧地、平安時代集落を見ている。白井古墳群は金比羅塚・加藤塚等は、FP上と目される。渡屋遺跡はFA下集落の可能性はある	16～20 30・31
23	源空寺裏遺跡	村教委調査。FP下放牧地跡・境界	42
24	吹屋中原遺跡	事業団調査。FP下畠・放牧地跡	24
25	吹屋犬子塚遺跡	事業団調査。FA下水田・FP下放牧地跡村調査では畠の痕跡を検出	24
26	浅田古墳群	村教委調査。FP下の円墳6基を調査。埴輪列・葺石の保存状態も極めて良好な当地域屈指の古墳。その他に道・境界・水田跡等を調査	25
27	宇津野・有瀬古墳群	村教委調査。FP下の群集墳調査例。積石塚で保存状態も極めて良い	42
28	宮田諏訪原遺跡	赤城村教委調査。FA直下とFP直下から祭祀跡群を検出。変形乳文鏡と石製模造品・鉄製品・豊富な土器群等が伴出している	35
29	宮田愛宕遺跡	FP下祭祀跡。古墳時代集落内の樹木祭祀跡1基	2
30	宮田瘤ノ木遺跡	FP直下の堅穴住居跡1軒、祭祀跡3基、破碎土器集中遺構等を検出	22
31	宮田不動古墳	5世紀代のB種横ハケを持つ埴輪を出土する古墳	31
32	宮田畦畔遺跡	群大調査。FP下水田跡を調査している	10
33	樽舟戸遺跡	古墳時代前葉の集落跡(住居跡8軒・祭祀跡1基等)を調査している	27
34	樽遺跡	弥生時代集落。樽式土器標識遺跡	2
35	田尻遺跡	弥生時代後期集落。鉄剣出土	15
36	東町古墳	FA下古墳	4
37	坂下町古墳群	FA下古墳群。1962年群大調査	3
38	坂之下遺跡	市教委調査。FA下水田、平安時代集落、坂之下館跡	12

参考文献

- 尾崎喜左雄 1938 『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟天然記念物調査報告 第5輯 群馬県
- 杉原荘介 1939 「上野樽遺跡調査概報」『考古学』第10巻第10号
- 尾崎喜左雄 1962 「群馬縣渋川市坂下古墳群」『日本考古学協会 年報15号』日本考古学協会
- 尾崎喜左雄 1971 『北群馬・渋川の歴史』北群馬・渋川の歴史編纂委員会
- 山崎 一 1972 『群馬県古城址の研究』
- 松本浩一 1970 『群馬用水土地改良地域埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和44年調査概報 県教委
- 松本浩一 1978 『丸山古墳発掘調査報告書』渋川市教委
- 松本浩一他 1980 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子持村教委
- 石井克巳 1985 『西組遺跡発掘調査報告書』子持村教委
- 山本良知 1986 「宮田遺跡」『群馬県史資料編2 原始・古代2 弥生・土師』群馬県史編さん委員会
- 石井克巳 1987 『押手遺跡発掘調査概報』子持村教委
- 小林良光 1988 『坂之下遺跡』渋川市教委
- 石井克巳他 1989 『都市周辺の軽石堆積地における遺跡保存方法の検討』昭和62年度実施報告 文化庁

14	石井克巳	1990	『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教委
15	長谷川福次	1991	『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教委
16	麻生敏隆	1993	『白井大宮遺跡』群埋文
17	南雲芳昭	1993	『家形埴輪からみた馬蹄跡』『白井大宮遺跡』群埋文
18	黒田 晃	1993	『白井遺跡群－中世編－』群埋文
19	黒田 晃	1994	『白井遺跡群－集落編－』群埋文
20	南雲芳昭他	1994	『白井遺跡群』－古墳時代編－ 群埋文
21	小林 修	1995	『清水・新井古墳・弁天塚古墳』『赤城村内遺跡Ⅰ』概報
22	小林 修	1995	『宮田瘤ノ木遺跡』赤城村教委
23	遠藤俊爾	1996	『吹屋瓜田遺跡』群埋文
24	高井佳弘	1997	『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡 古代中近世編』群埋文
25	石井克巳	1998	『発掘された埋没古墳群－子持村・浅田遺跡－』『群馬文化』第255号 群馬県地域文化研究協議会
26	小林 修	1998	『宮田愛宕遺跡』赤城村教委
27	小林 修	1999	『樽舟戸遺跡』赤城村教委
28	石井克巳	2000	『北牧相ノ田遺跡』子持村教委
29	石井克巳	2000	『鯉沢瓜田遺跡』子持村教委
30	井野修二	2000	『白井北中道遺跡(道の駅地点)』群埋文
31	小林 修	2001	『埋没古墳出土埴輪の基礎考察 ー宮田不動出土のB種ヨコハケ埴輪ー』『群馬考古学手帳』11 群馬土器観会
32	根岸 仁他	2002	『白井大宮遺跡Ⅱ』群埋文
33	山口逸弘他	2004	『北牧大境遺跡』群埋文
34	小林 修	2004	『宮田諏訪原Ⅲ・猫持久保遺跡』赤城村教委
35	小林 修他	2005	『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村教委
36		1956	『群馬県勢多郡 横野村誌』群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会
37		1963	『群馬県の遺跡』群馬県遺跡台帳作成委員会
38		1971	『群馬県遺跡台帳Ⅰ 東毛編』県教委
39		1981	『群馬県史 資料編3』－原始古代3 古墳－ 群馬県史編さん委員会
40		1986	『群馬県史 資料編2』－原始古代2 弥生・土師－ 群馬県史編さん委員会
41		1987	『子持村誌 上巻』子持村誌編纂委員会
42		1983～2004	『付篇 県内埋蔵文化財発掘調査一覧表』年報2～23 群埋文

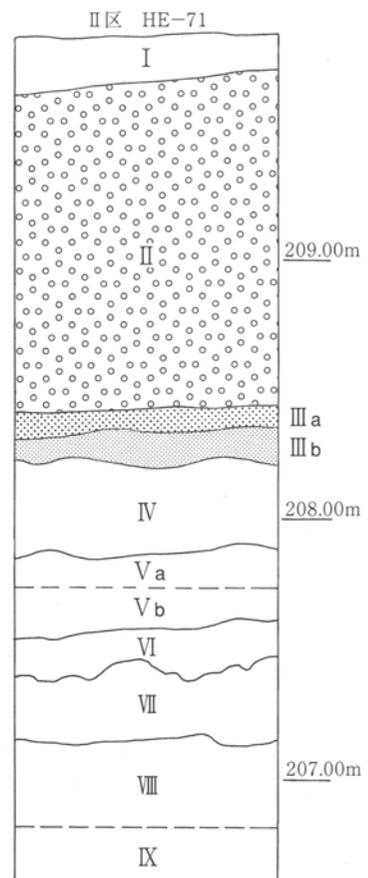
3. 基本土層

これまで述べてきたとおり、本遺跡のある子持村は古墳時代後半の2度に渡る火山災害を受けた地域の一つである。火山性噴出物－FA（火山灰）とFP（軽石）直下は、そのまま古墳時代の地表面であり、発掘調査に際しては、多くの情報を我々に提供する文化層である。また、この他にもFP上面では古代集落跡やローム上面では縄文時代や弥生時代の遺構遺物が検出されている。さらに、ローム中の旧石器時代の文化層も吹屋中原遺跡等で確実に存在する例が知られている。

本遺跡の調査では、各地区の基本柱状図は記録化してきたが、巨視的に各遺跡の基本土層を比較する必要性もあり、そのため本報告書では、台地部分である中郷恵久保遺跡Ⅱ区の土層柱状図を提示し、基本土層としたい。

基本土層

- I 表土層
- II Hr-FP (FP) 層
- III a 暗褐色～黒褐色土層 FAが土壌化した層
- III b Hr-FA (FA) 層
- IV 黒褐色～黒色土層 As-Cを少量含む
- V a 暗褐色～鈍褐色土層 淡色黒ボク土
- V b 暗褐色～黒褐色土層 下位がローム漸移層
- VI 軟質ローム層 As-YPが点在する。暗褐色を呈す
- VII 黄褐色ローム層 As-SPが点在する。小礫が混在する。
- VIII 黄褐色ローム層 硬質。As-BPが点在する。小礫の量多い
- IX 黄褐色ローム層 角礫を多く混在する。下層に前橋泥流層



7 図 基本土層図 (1:40)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

1. 概要

中郷恵久保遺跡では、4面にわたる文化層を調査した。前にも述べたように、榛名山二ツ岳を給源とする降下火山灰（FA）と軽石（FP）により、多層化した調査面が当地域の特徴である。

調査手順から、この複数文化層を概観してみよう。

当地域の発掘調査では、洪積台地とはいえ、表土下に厚くFPが堆積している。調査は、表土からFP上面まで掘削し、FP降下後の遺構の検出から始まる。奈良・平安時代の集落跡が目立つが、中世土壇や近世建物跡などもその調査対象である。本遺跡では、Ⅲ-1区で平安時代の住居跡1軒を調査した。おそらく調査区域外にも同様の住居跡など集落が広がるものと考えられるが、濃密ではないようだ。その他にI区に近代～現代に比定される土坑が見られた。その他の調査区においても近・現代の落ち込みは存在したが、記録化したのはI区のみである。また、Ⅲ-1区西斜面下で検出された井戸跡2基も近・現代の所産と考えられるが、湧水が著しく安全対策上調査を断念した。

次に、FPを除去し古墳時代後葉に比定される調査面を検出する。著名な子持村黒井峯遺跡は、FP直下面の集落跡である。また、利根川白井面では、馬蹄痕跡の集中から、放牧地跡として遺跡の性格を位置づけている。本遺跡でも、馬蹄痕の検出は多く、ほぼ全区に渡って見る事ができた。特に顕著な例がⅡ-2で、馬蹄痕が道状遺構に沿う例や凹地に集まる動態も観察され、馬が当時の生活に隣接した存在として放牧されていた様相が把握された。また、この凹地には長サク状の畠跡が営まれており、この延長がⅢ-1区に続く。尚、この凹地は調査が進むに従い、古墳時代前葉の堅穴住居跡-1号住となる。Ⅲ-1区には西斜面が連続するが、ここに短サク状畠跡が「段々畠」のように営まれていた。このⅡ区長サク状畠跡からⅢ区短サク状畠にいたる間は馬蹄痕が存在し、畠耕作放棄後に放牧地として供されて

いた例として注意しなければならない。短サク状畠跡はI-2区台地部分に1カ所のみだが確認することができた。Ⅲ区の短サク状畠跡に比して畝立てがしっかりしており、さらに馬蹄痕の存在もなく、FP降下直前には畠として供されていた状態と見ることができた。I区短サク状畠跡東の低地部分には小區画水田が展開する。南北の大畦を境に、耕起中水田区画と代掻き後水田区画と分けられ、当時の水田耕作行程の差が一望に観察することができた。水田跡はⅢ区低地部でも検出された。Ⅲ-1区西の低地部分では、斜面を切り開いた棚田状水田跡がある。大畦で画された不整長方形の水田形状は圧巻というしかない。棚田状水田の西はⅢ-2区において小區画水田跡が確認された。当方の不手際で小範囲の調査となったが、耕起中水田区画の様相が把握できた。

さて、FP直下面の調査終了後は、即FA下調査ではなく、FA上面において精査を重ね、FP下遺構群の痕跡を探す。本遺跡では畠跡の耕作痕や複数回の畝替えが観察されている。また、未報告遺跡だが、中郷田尻遺跡では、FA上面でFP降下直前ではないにしても、数年前の平地住居跡や垣跡などの生活痕跡を調査している。

FAは、ほぼ10～30cm程の層厚で堆積している。比較的軟質土であるため、人力で掘削する例が望ましい。重機の掘削に頼ると、下面を圧力で痛める結果となる。本遺跡のFA下遺構としては、Ⅲ-2区にFA下水田跡が検出されている。湧水が激しく、残存状態もあまり良くなかったが、小區画水田跡として位置付けた。その他の遺構としては、Ⅱ区でFA下の馬蹄痕が見られたが、その他の施設が見られず、本報告書では割愛した。

FA下の黒色土・黒色粘質土は遺物包含層である。30cm以上の層厚で下位に淡色黒ボク土を見る。その為、色調変化による遺構平面確認作業が難しく、ローム面以下に掘り込まないかぎり、判断材料は、遺物の分布と焼土炭化物の分布にとどまる。本遺跡では、詳細な精査を重ねて、30軒の古墳時代前葉の堅穴住居跡を中心とする集落跡を検出し得た。

子持村における古墳時代の集落としては、Hr-FP下で検出された黒井峯遺跡があまりにも著名であるが、前駆的な集落ともいえるFA下集落跡がある程度まとまって調査された例は意外に少ない。さらに遡る、古墳時代前葉の集落跡の調査は、本遺跡である中郷恵久保遺跡が北接する八幡神社遺跡と共に、稀少例に近く、周辺地域における該期集落様相を把握する上で、極めて貴重な調査といえよう。本遺跡の乗る長坂面は、子持村内を南北に広く延びる段丘面である。台地と低地が群在する複雑な微地形様相が予想されており、この起伏に富んだ台地の一端に本遺跡も占地するものと考えられる。発掘調査は、この南北に延びる台地を東西に横断する細長い形態で行われた。古墳時代前葉の集落は、主に台地中央部であるⅡ区を中心に、西側のⅢ区台地部分まで広がりを見せた。一方、東側へは、徐々に遺構密度が薄くなり、Ⅰ区では、若干の出土遺物を見る以外には、竪穴住居跡などの遺構は確認できなかった。故に、本遺跡で検出された古墳時代前葉の集落跡は、台地中央部より南・北側さらに西側への広がりが予測されよう。北側へは先に述べた八幡神社遺跡が近接しており、厳密な同一集落とは捉えきれないが、極めて有機的な関連を持った集落の分布が考えられる。

本遺跡で調査された古墳時代前葉の竪穴住居跡は30軒を数える。調査区の制約から、全貌を明らかにできた住居跡は15軒と少なく、個々の様相を詳細に把握できないが、Hr-FP及びHr-FAによって覆われていた層序条件は良好な残存状態を示していた。すなわち、1号住を始め、大型住居跡の幾つかは、壁外の盛り土施設である「周提帯」の痕跡が残存しており、さらに住居跡本体も埋没化が完了せず、FP除去段階で大きく凹む景観を示して、その存在を明らかにしていた。県内ではこのような例は、子持村と周辺地域のみに限られ、集落遺跡の調査としては破格の好資料を得ることになった。

出土遺物としては、いわゆる「S字状口縁台付甕」を伴出する住居跡が多いが、在地の土器群とも共伴

しており、その土器様相は特徴的である。住居跡の殆どが炉址を付帯する様相を見せているため、開放的な熱効率による煮沸具を示唆する台付甕であり、伝統的な調整手法である体部下半の研磨（ミガキ）を残す在地土器群と見ることができよう。さらに、小型器種としての高坏・器台等も主体的に組成に加わっており、当地域の該期土器様相を具体的に示した資料と位置付けられる。その他の遺物としては、住居跡床面より出土した、棒状の円礫にも注意を払いたい。おそらく薦編み石や敲石としての用途が想定される。さらに、特殊な例として、25号住からは鉄製鎌を見ることができた。また、Ⅰ区低地部の出土木器も特筆される。良好な共伴遺物がなく、詳細な時期特定にまで至らないが、おそらく古墳時代前葉を充てることができ、当時の建築材や農具の一側面を具体化した資料といえよう。

ローム上面である古墳時代前葉の調査面では、縄文時代の遺構遺物も検出できる。本遺跡では、Ⅲ-1区等で縄文時代中期～後期の土坑1基を調査した。大型の深鉢1個体が出土しているが、性格など詳細は不明である。また、Ⅲ区の西斜面では、多量の中期土器片と石器が出土している。おそらく本遺跡の乗る台地に中期後半の集落が存在するものと考えられる。また、Ⅱ区では後期中葉に比定される土偶脚部が出土している。同時期の土器片の出土は少ないが、これも周辺遺跡の調査に期待がかかる。

旧石器時代の文化層に関しては、本遺跡では幾つかの試掘坑を設けたが、良好な層位を得られていない。残念ながら遺物の出土も皆無であった。しかしながら、発達したローム面を誇る周辺台地の様相から、近接した地点に該期遺跡は存在するものと考えられる。

以上、中郷恵久保遺跡の概要を各調査面を順次概観したが、報告では、調査手順とは逆に時代の古い順に行いたい。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

2. 縄文時代の遺構と遺物

本節では、中郷恵久保遺跡の最終調査面で得られた縄文時代の遺構と遺物を報告する。本遺跡の縄文時代の遺物は、前期後葉から後期中葉とある程度の幅を持つ。しかし主体は中期後葉～末葉に比定される加曾利EⅢ式・EⅣ式であり、圧倒的な量を誇る。出土石器もおそらく、中期後葉～末葉の所産と捉えられ、打製石斧を中心に量的にまとまった出土状況を示した。ただ、ローム上面で縄文時代の遺構として判断できる有機的な遺構は極めて少なく、J-1号土坑と30号土坑のみが、集落域における何らかの施設と捉えられた。その他のJ-2号土坑やJ-3号土坑は時期不明の風倒木痕と捉えられ、報告書に掲載するが、当該時期の所産としては考えられない。出土遺物の殆どが、Ⅱ区及びⅢ区から出土しており、特にⅢ-1区西斜面で濃密な分布を示した。おそらく斜面にかかる廃棄場と位置付けられるが、住居跡等の居住に関わる施設を検出し得なかったため、確定的ではない。

J-1号土坑：Ⅱ-2区中央やや西寄りで見出された不整円形の土坑である。古墳時代前葉の集落跡調査中に確認面であるローム漸移層中より、縄文土器片（中期後葉）が比較的まとまって出土した箇所である。色調も僅かながらやや暗く、鈍い褐色土を主体とした遺構埋土に近似していたため、当初は縄文時代の住居跡として調査着手した経緯がある。しかしながら、実際に調査を進めるうちに、確認面上層で出土していた縄文土器は、埋土中には殆ど含まれていなかった。さらに底面に達しても、炉・柱穴といった住居跡としての必要な施設が見出できなため、浅い皿状の土坑として判断した。径3.8×4.4m程の不整円形を呈し、深さは約20cmの浅い皿状の断面形を呈す。前述のように、遺物の出土は主体的ではなく、竪穴状遺構あるいは浅い凹み状の土坑として判断できよう。

J-2号土坑：Ⅱ-2区北西端で見出した風倒木跡である。北側は調査区外のため未調査である。埋土

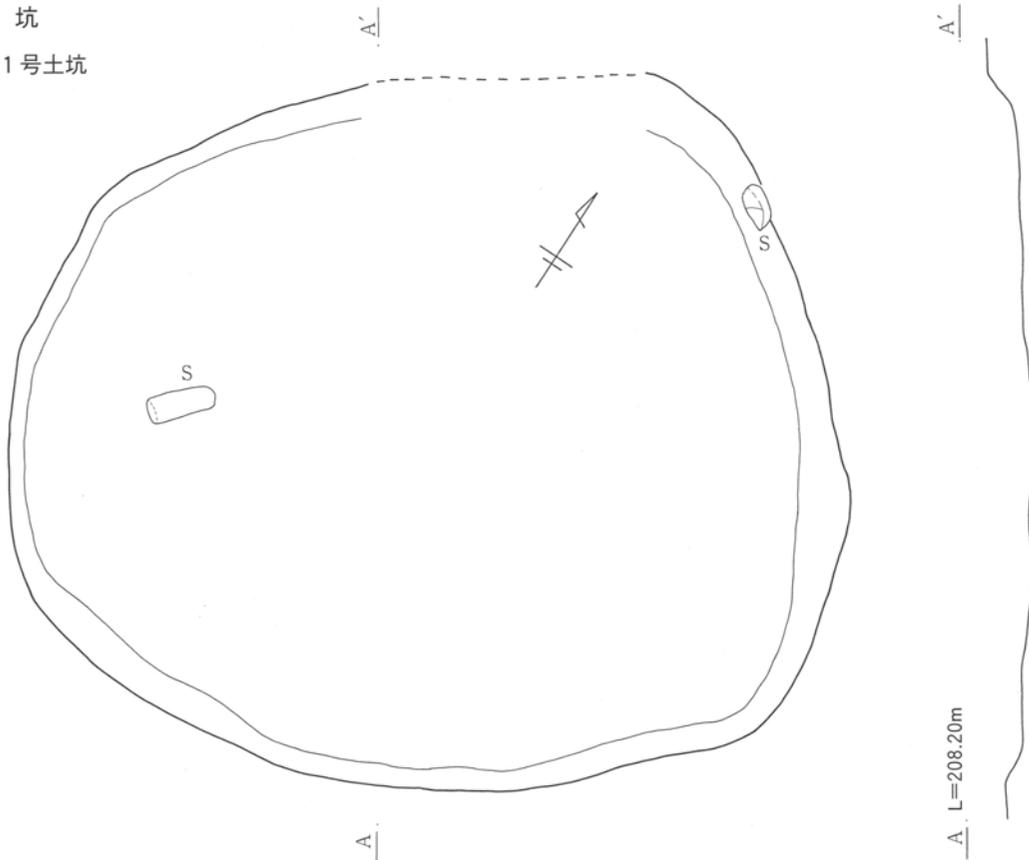
に均質な暗褐色土が確認され、縄文土器小片と自然石が出土したため、縄文時代の土坑として調査した。しかしながら、坑底面は起伏があり平面形も不整形であることから、有機的な遺構とは捉えられず、風倒木として判断した。

J-3号土坑：J-2号土坑と並びⅡ区北西端で確認した風倒木跡である。均質な暗褐色土を主体とした埋土が2号土坑と近似していたため、縄文時代の土坑として調査した。比較的深く、楕円状の形態から、墓塚などの性格も想定したが、坑底面の不安定さ等が2号土坑と類似性があり、これも風倒木跡として判断した。遺物は出土していない。

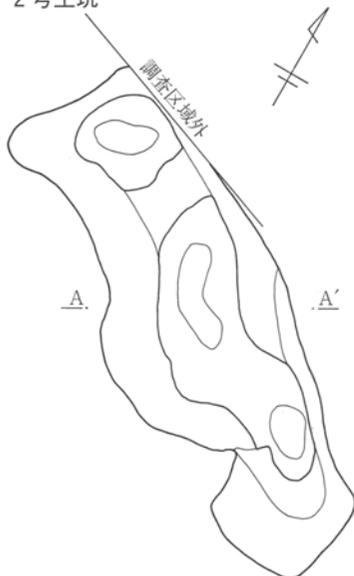
30号土坑：Ⅲ-1区北東で調査した縄文時代の土坑である。西半を大きく32号住に切られ、平面形は判然としないが、円形あるいは楕円形の形状が想定されよう。掘り込みもしっかりしており、地山のローム面を深く掘りくぼめ、坑底面も平坦で、壁もやや直立気味に立ち上がることから、人為的な性格を充てることができよう。埋土は黒褐色～暗褐色で占められ、均質な感が強かった。遺物は大形の深鉢1個体分の口縁部～体部上半が坑底面より浮いた状態で、中央やや北寄りで、まとまった状態で出土している（17図39）。その他に大形の自然石や磨石類（44図210）・打製石斧（27図81・30図98）・使用痕のある剥片石器類（41図182）が伴出している。特に磨石類（210）と打製石斧（98）が坑底面より出土しており、大形深鉢と併せて示唆的な出土状態を示す。時期は、出土土器の様相から中期後葉～後期初頭の所産と考えた。

土 坑

J-1号土坑



J-2号土坑



J-2号土坑

1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 〃

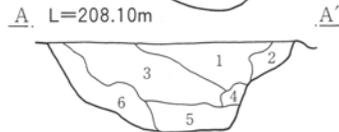
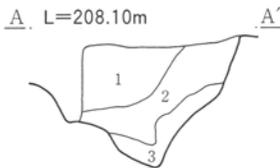
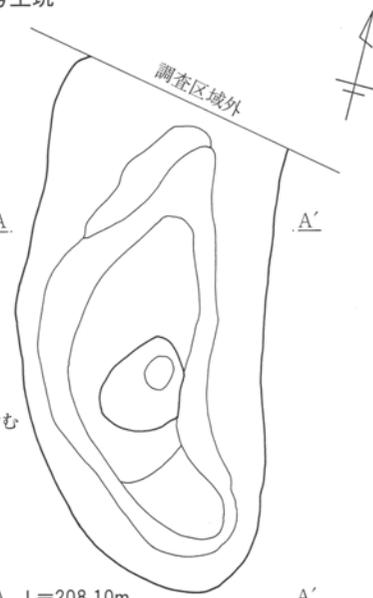
粘質土。白色粒子を均一に含む
ローム粒を少量含む
やや明るく均質

J-3号土坑

1. 褐色土
2. 黄褐色土
3. 黒褐色土
4. 黄褐色土
5. 〃
6. 鈍褐色土

均質で軟質。ローム粒を少量含む
均質。ローム塊
均質。白色粒子を均一に含む
均質。ローム塊
均質。ローム塊を主体とする
均質。黒色土塊を少量含む

J-3号土坑



8図 J-1～3号土坑(縄文)



遺構外出土遺物：前述のように、本遺跡は良好な洪積台地調査の割には、縄文時代の遺構が少ない。反面遺構量に比して、遺物量は多く、中期後葉段階の土器及び打製石斧・磨石類等は、加曽利EⅢ式段階における集落出土遺物様相と類似する遺物群である。おそらく、隣接する調査区域外に、当該期の集落が存在しているものと捉えられるが、おそらく本調査区内にも、集落遺構は存在し得ており、古墳時代前葉の集落や畠作行為によって、浅い堅穴遺構が消失した可能性もある。さらに、Ⅲ区30号坑周辺の包含層である黒褐色土は厚く30cm以上堆積しているため、漸移層まで達していない住居跡などの遺構は検出が出来なかった調査上の事情もある。ただし、包含層中からは、炉・焼土など住居跡を示唆する要素は検出されず、おそらく古墳時代前葉の開発による破壊が、本遺跡の縄文時代遺構の稀少さの要因と考える。

本遺跡の縄文時代包含層調査では、出土遺物全ての平面位置・断面位置を記録化は果たせなかった。包含層掘削の際に、遺物の集中が見られたり、特徴的な遺物の出土等に関してのみ出土地点の記録化を努めた。それ以外の土器片や石器はグリッドと層位を記録し遺物の取り上げを行っている。

I区出土土器は、I-1区東側の台地部分に集中した。石器も伴出する傾向が見られるが、I-2区では極めて微量の出土であり、図化には至らなかった。東側台地に見る遺物は、加曽利EⅢ式・EⅣ式の土器片が主体であり、その他に諸磯b式を数点見るのみである。これは、本遺跡Ⅱ区とも同様の時期的な傾向だが、東に接する吹屋中原遺跡と近似する様相を見せる。地形的には、吹屋中原遺跡と連続した西斜面にI-1区があり、同一あるいは近縁の包蔵地として位置付けられよう。

台地中央部分にあたるⅡ区では、調査区全域より満遍なく出土が見られた。特に偏った集中は見られなかったが、若干ながら西側にかけて量は多くなる傾向が見られた。出土土器の時期は、中期後葉の加曽利EⅢ式・EⅣ式を主体とするが、諸磯b式・興津式、阿玉台I b式や堀之内Ⅱ式も小破片ながら散

見することができる。本遺跡の乗る台地は比較的広く、周辺には時期的に複合した縄文時代集落の存在も予想されよう。

出土石器もⅡ区が量的に多い。短冊形打製石斧もⅢ区に比してややまとまる傾向が見られ、磨石類もⅡ区出土例に比重が偏る。石棒等の出土も見られ、出土土器の加曽利EⅢ式・EⅣ式への偏りを見た限りは、中期後葉の集落内石器組成に近く、該期集落の存在を示唆する資料群である。

また、中空状の土偶脚部が出土しているが、詳細な時期を判別できず、後期中葉と判断した。

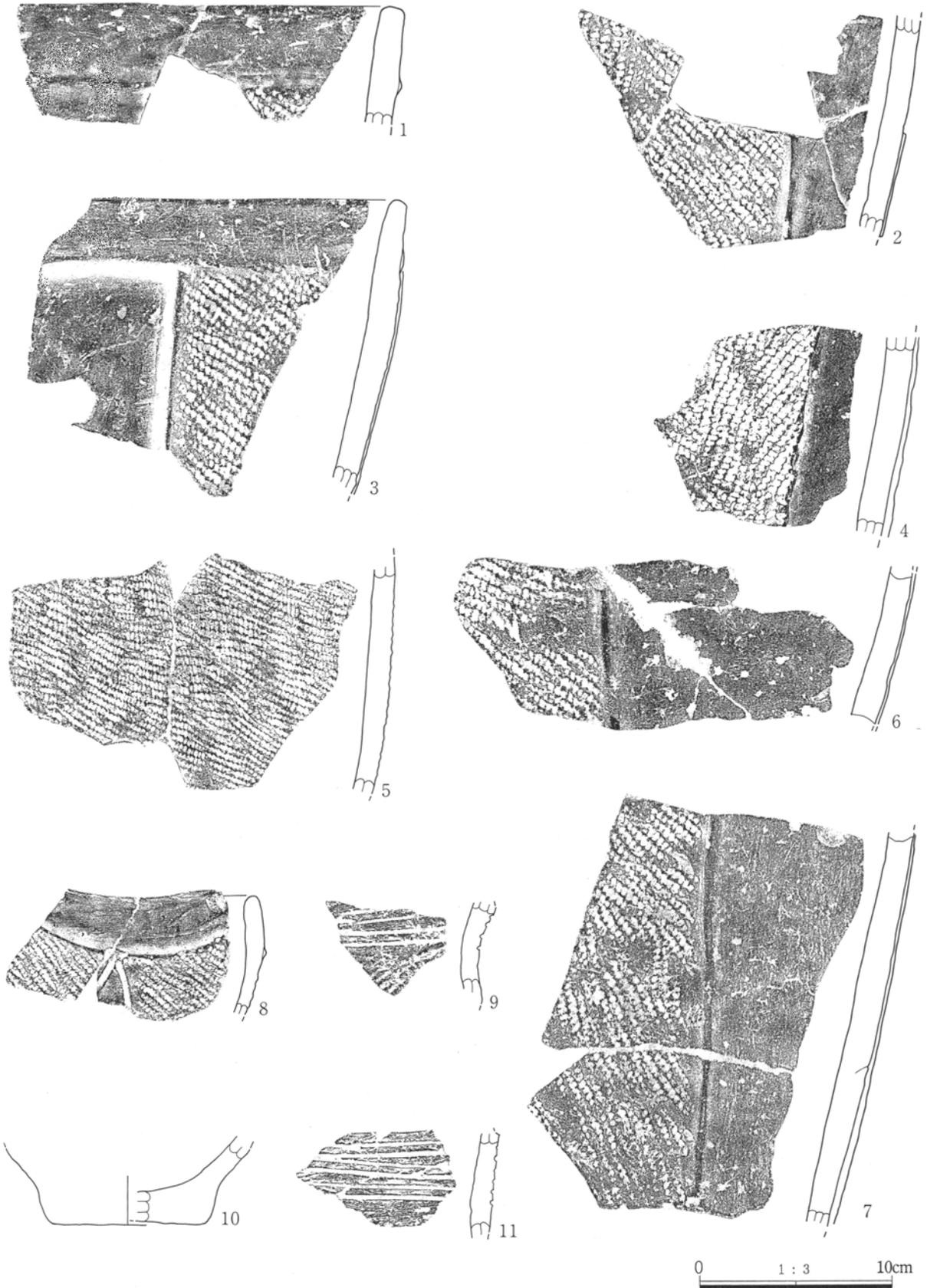
30号坑を調査したⅢ区は、Ⅱ区と継続した台地上に乗り、西側への斜面地形が連続し、鯉沢川沖積地帯へと繋がる。台地部分では、Ⅱ区と同様に中期後葉～後期の資料が散布しており、前述の30号坑が検出された。西斜面に至ると、加曽利EⅢ式・EⅣ式を主体に出土量が増え、斜面包含層の様相が明確に把握できた。その中で、14図1に見るほぼ完形の深鉢が、斜面上位で検出された。土坑・埋設土器、あるいは住居跡出入り口部施設の可能性を踏まえて、周辺及び土器埋設坑の精査・確認に努めたが、付帯する土坑や柱穴の把握に至らず、やむなく、包含層遺物として取り上げることになった。

Ⅲ区で出土した石器は、Ⅱ区とほぼ同様の様相であるが、若干ながら分銅形打製石斧や大形磨石類（多孔石等）が目立った。特にⅢ-1区は台地縁辺にあたるため、居住域に相当する可能性が極めて高く、大形の磨石類の出土は、住居跡等の集落の広がりを示唆する。また、出土土器もⅡ区に比して中期末葉～後期に比定される例が増える。分銅形打製石斧も時期的な偏差として捉えられる可能性がある。

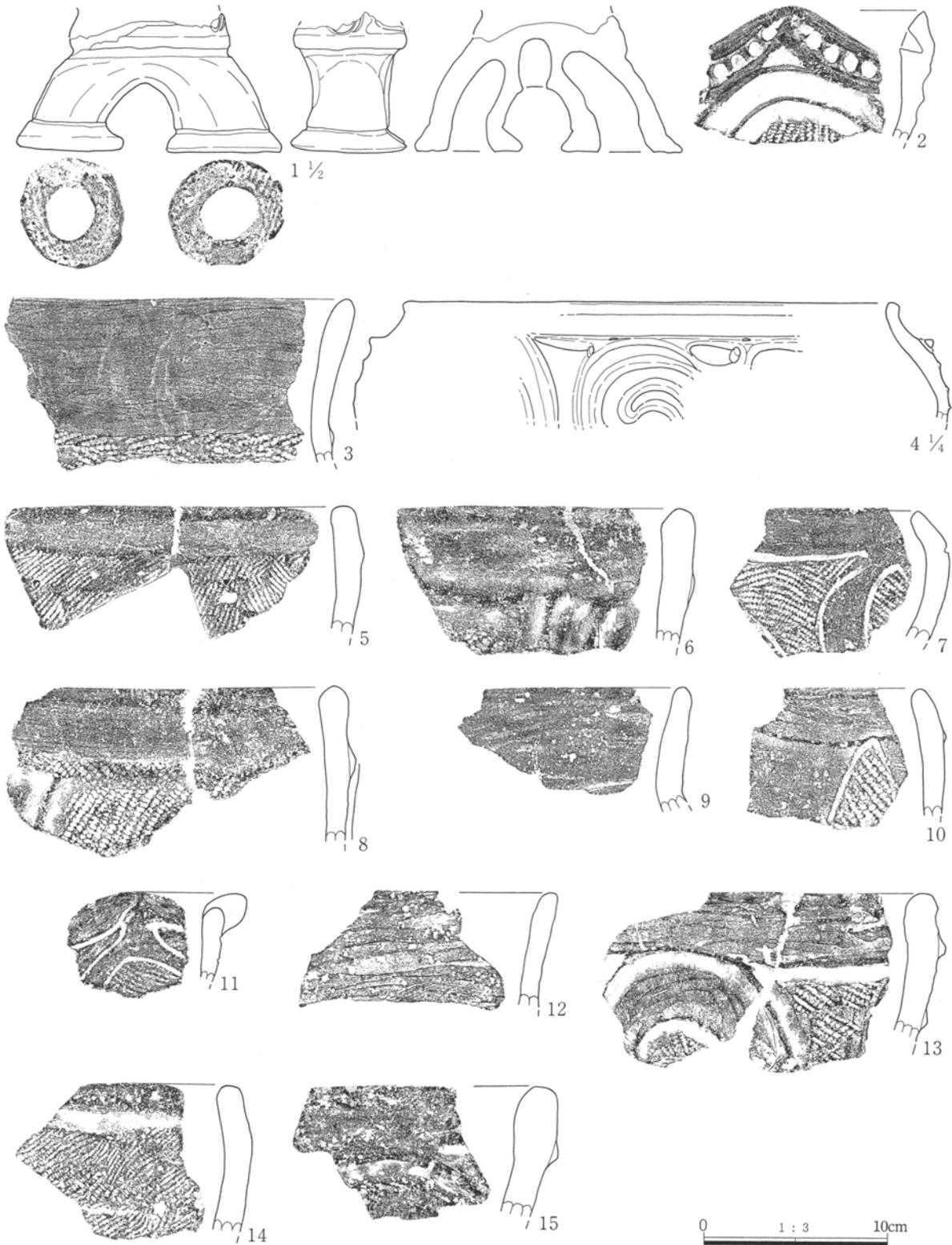
一方、沖積地であるⅢ-2区では称名寺式（15図10）がまとまった。鯉沢川を挟んで対峙する吹屋三角遺跡では称名寺式～堀之内2式の小規模な水場遺構・包含層が検出されており、縄文時代後期における低地利用の一端が窺われている。本遺跡出土例も吹屋三角遺跡などに見る、後期低地遺跡と同様の側面を見せ、鯉沢川沖積地における縄文時代遺跡の広がりが予測されよう。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

遺構外出土遺物

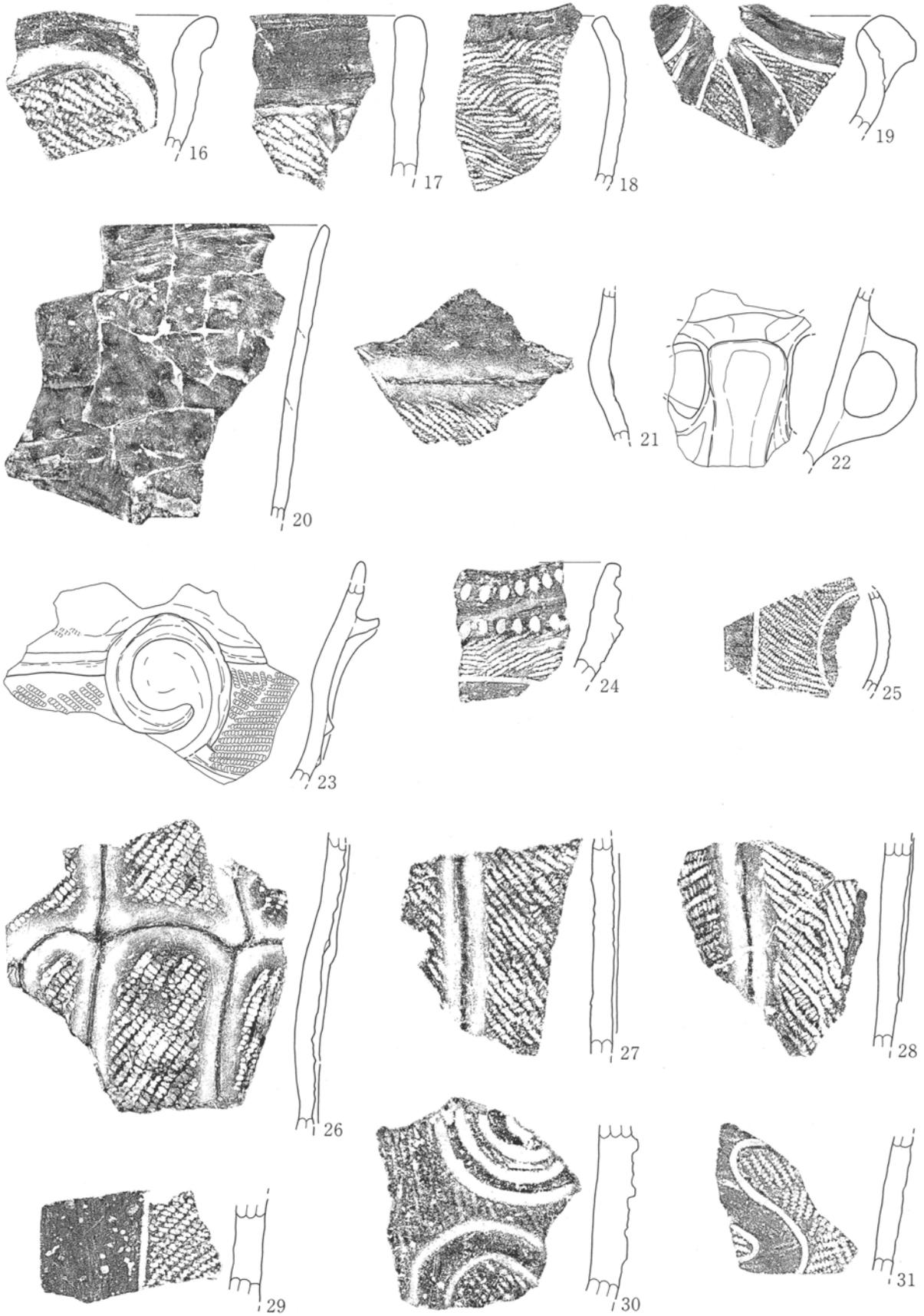


10図 I区 縄文土器



11図 II区 縄文土器(1)

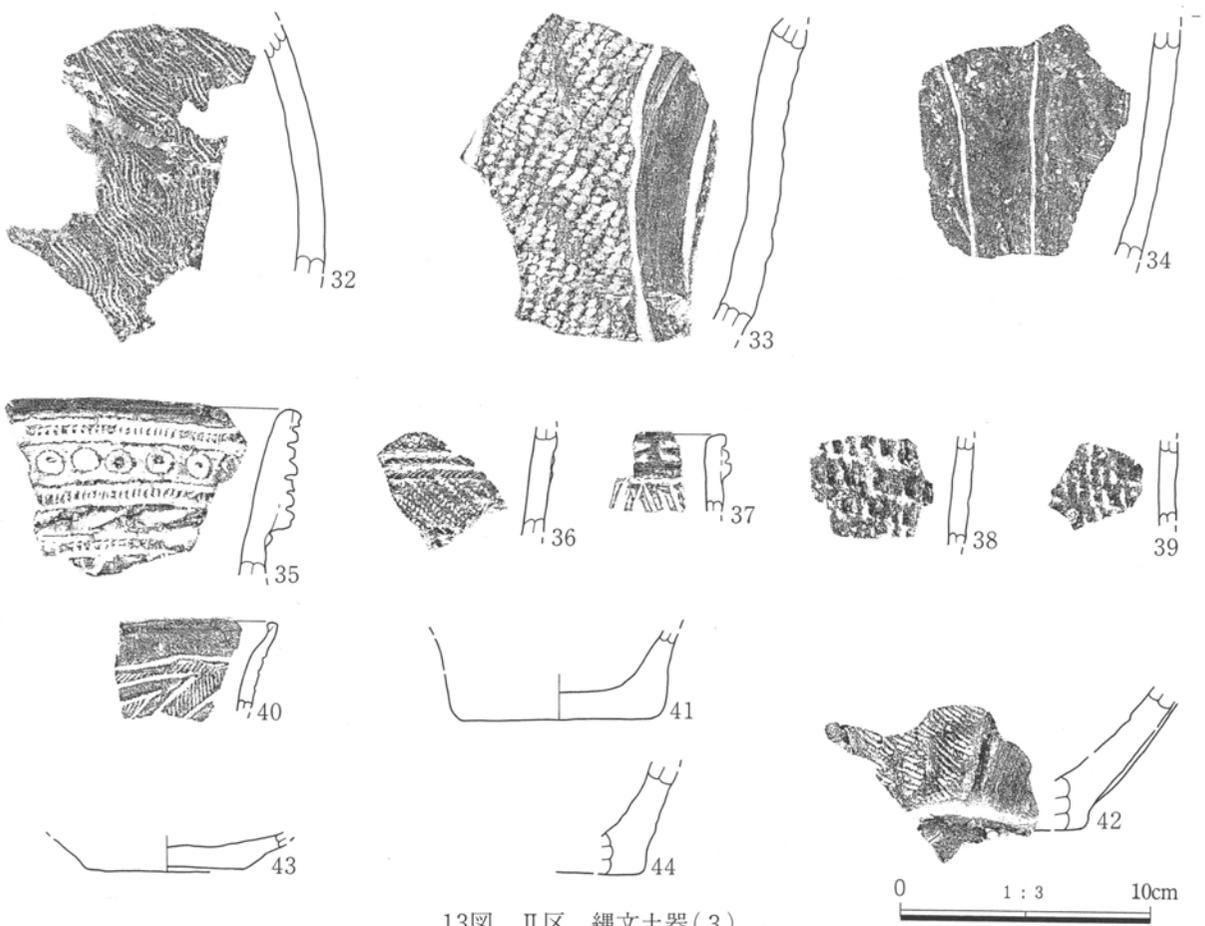
Ⅲ 検出された遺構と遺物



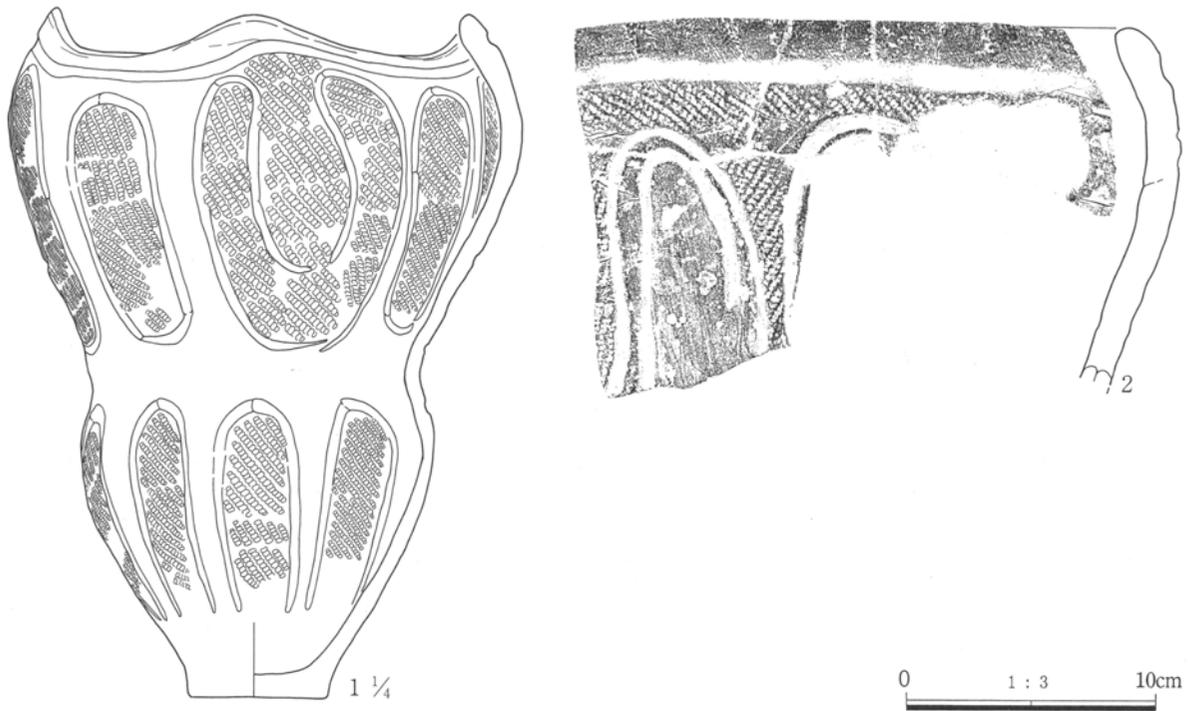
12図 Ⅱ区 縄文土器(2)

0 1:3 10cm

2. 縄文時代の遺構と遺物

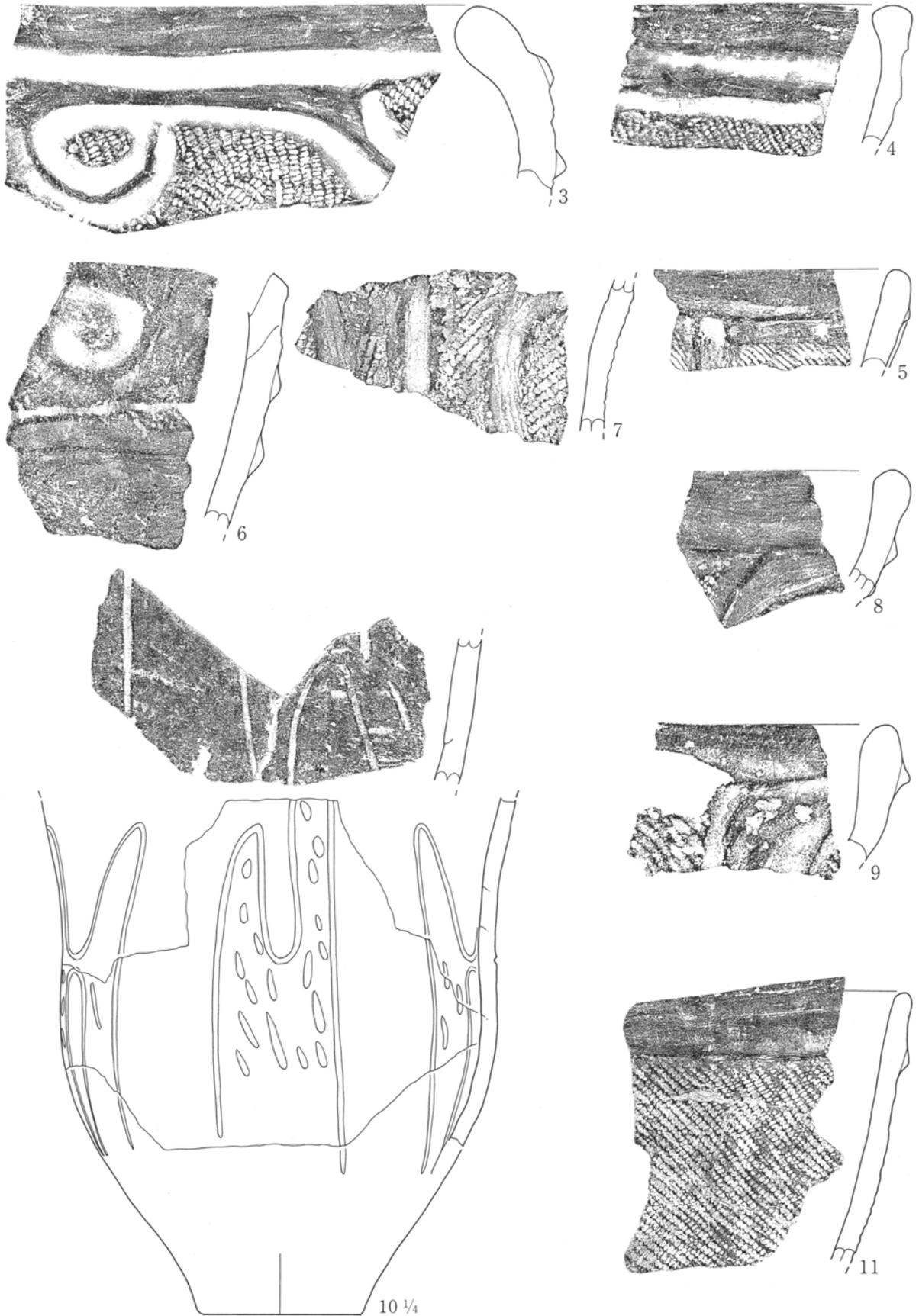


13図 II区 縄文土器(3)

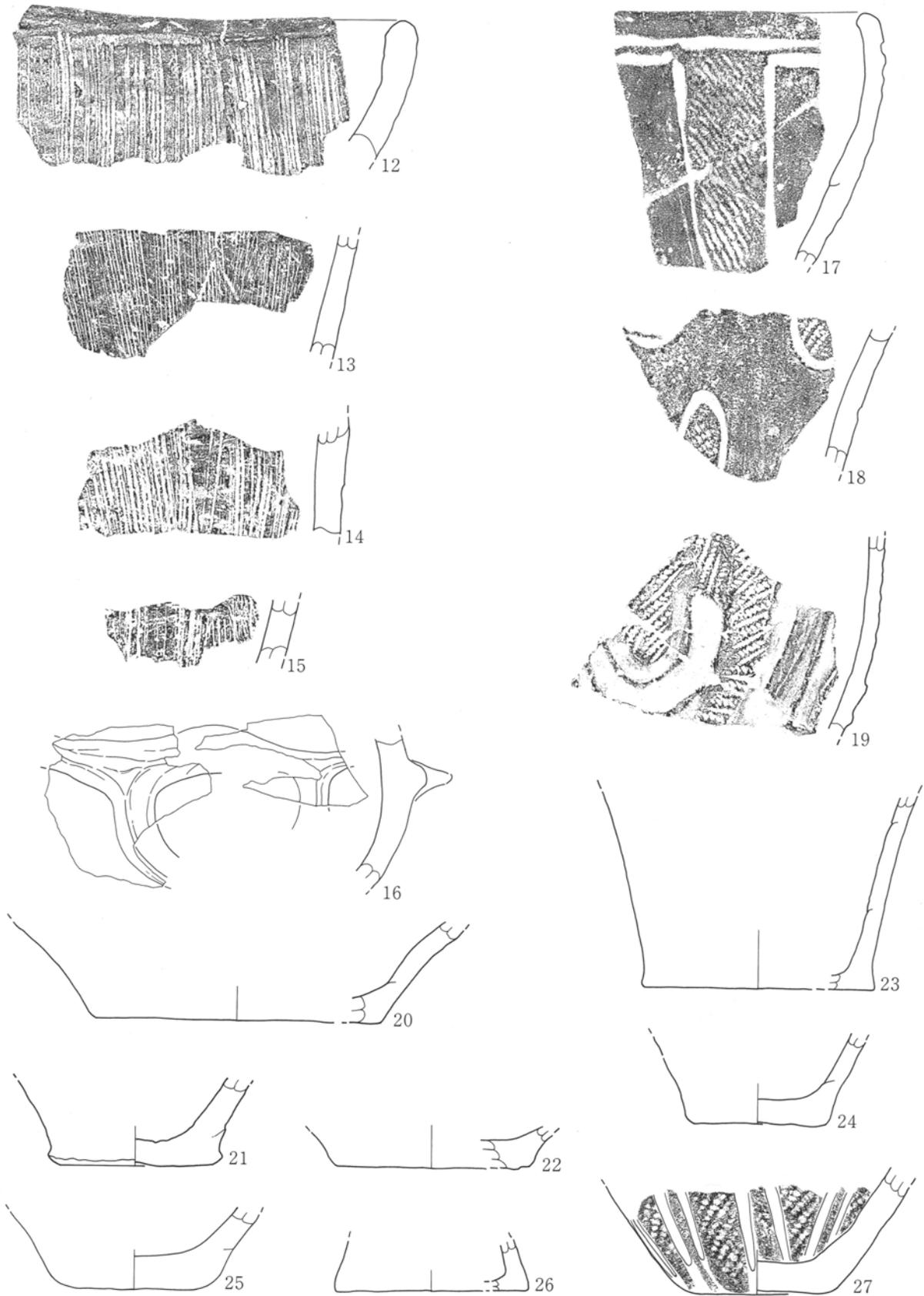


14図 III区 縄文土器(1)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

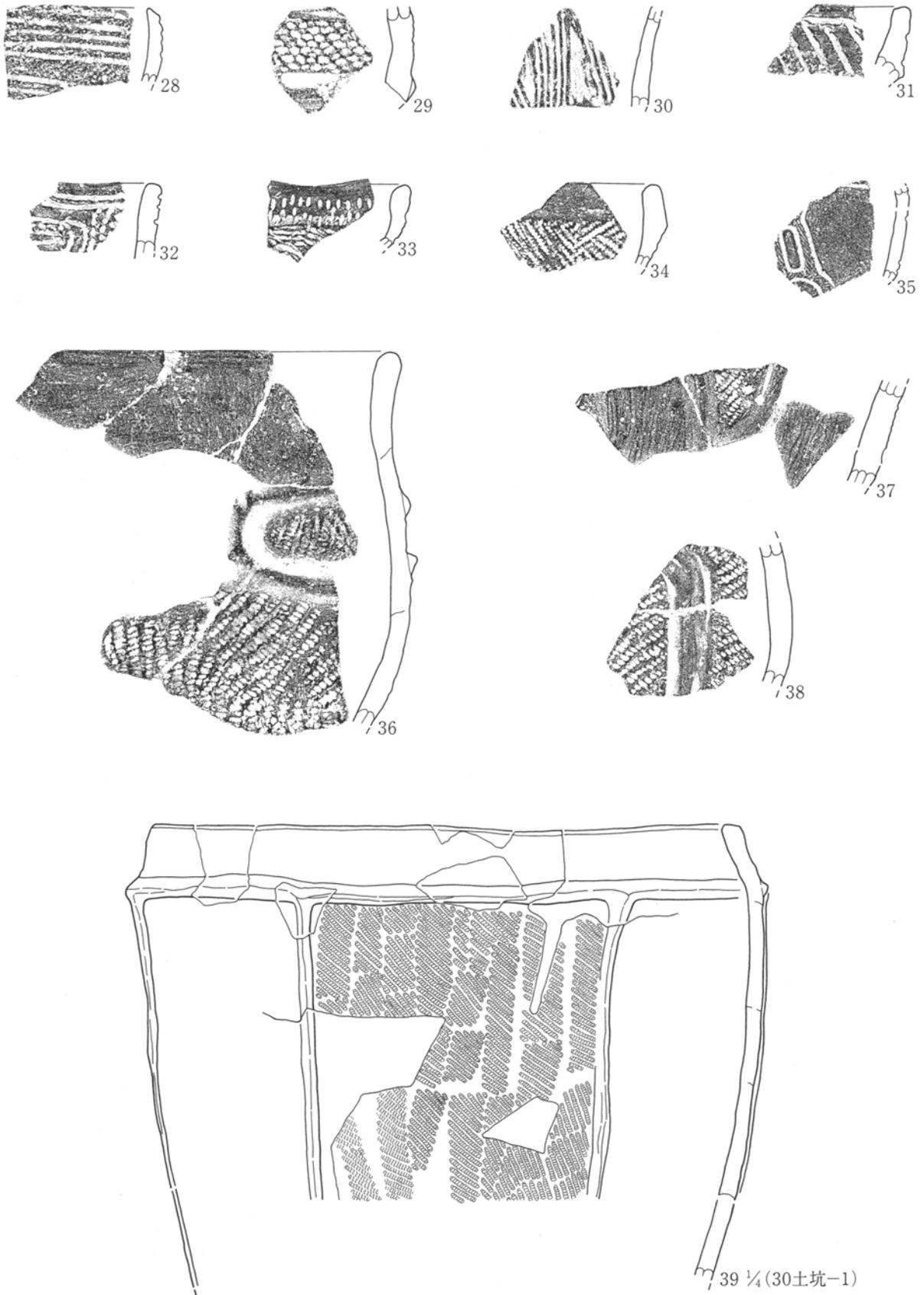


15図 Ⅲ区 縄文土器(2)



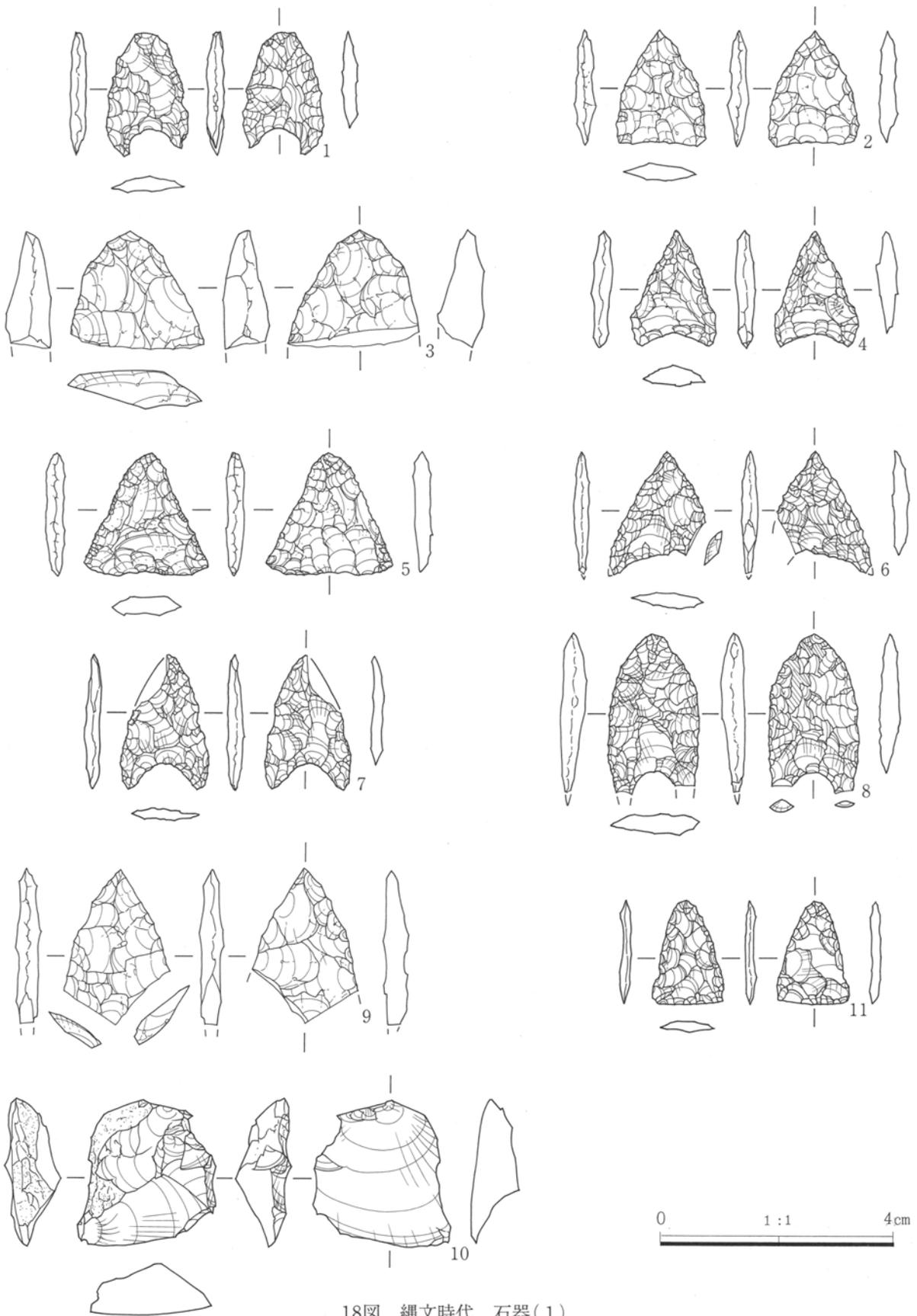
16図 Ⅲ区 縄文土器(3)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



17図 Ⅲ区 縄文土器(4)

0 1:3 10cm



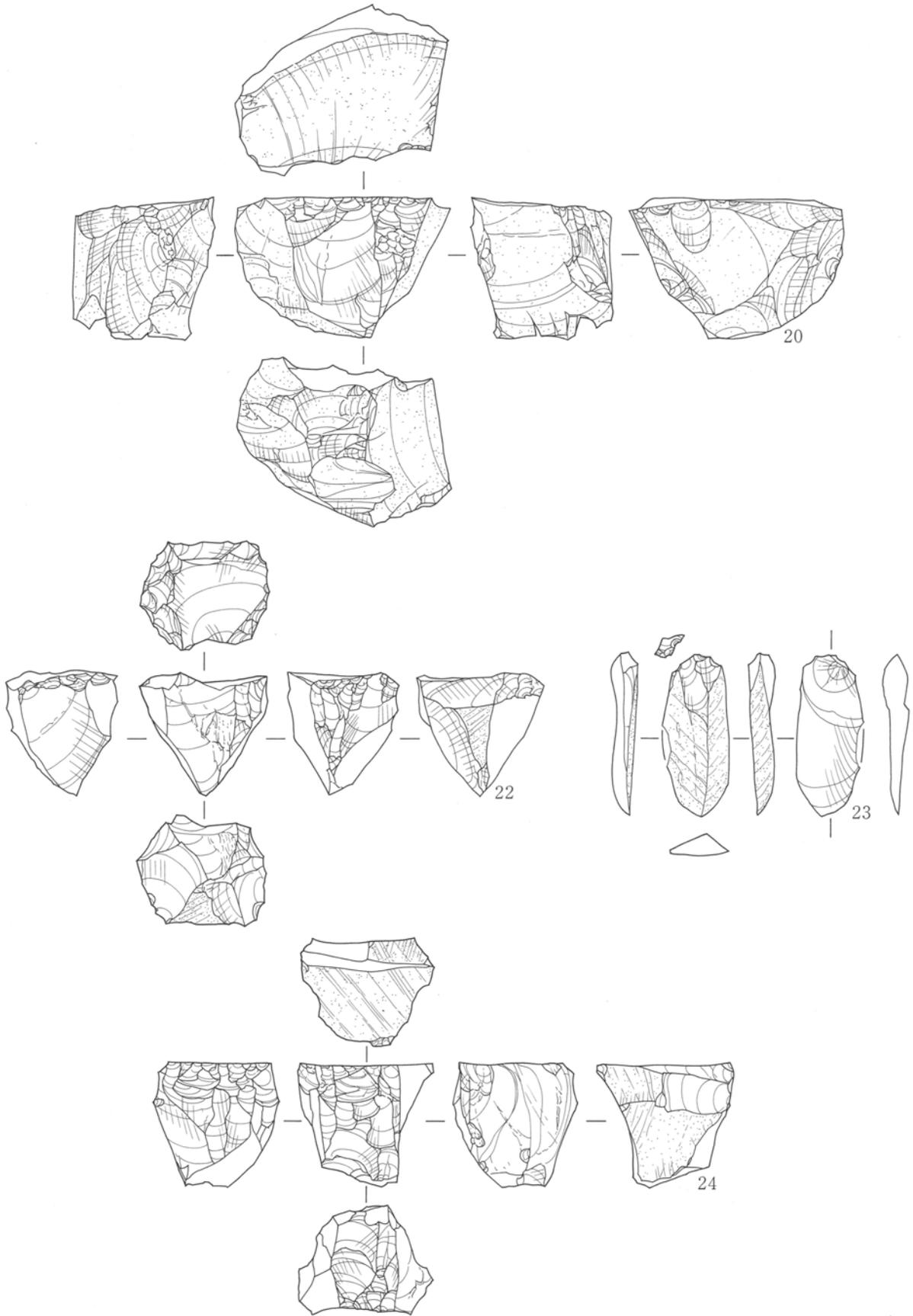
18図 縄文時代 石器(1)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



19図 縄文時代 石器(2)

0 1:1 4cm



20図 縄文時代 石器(3)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



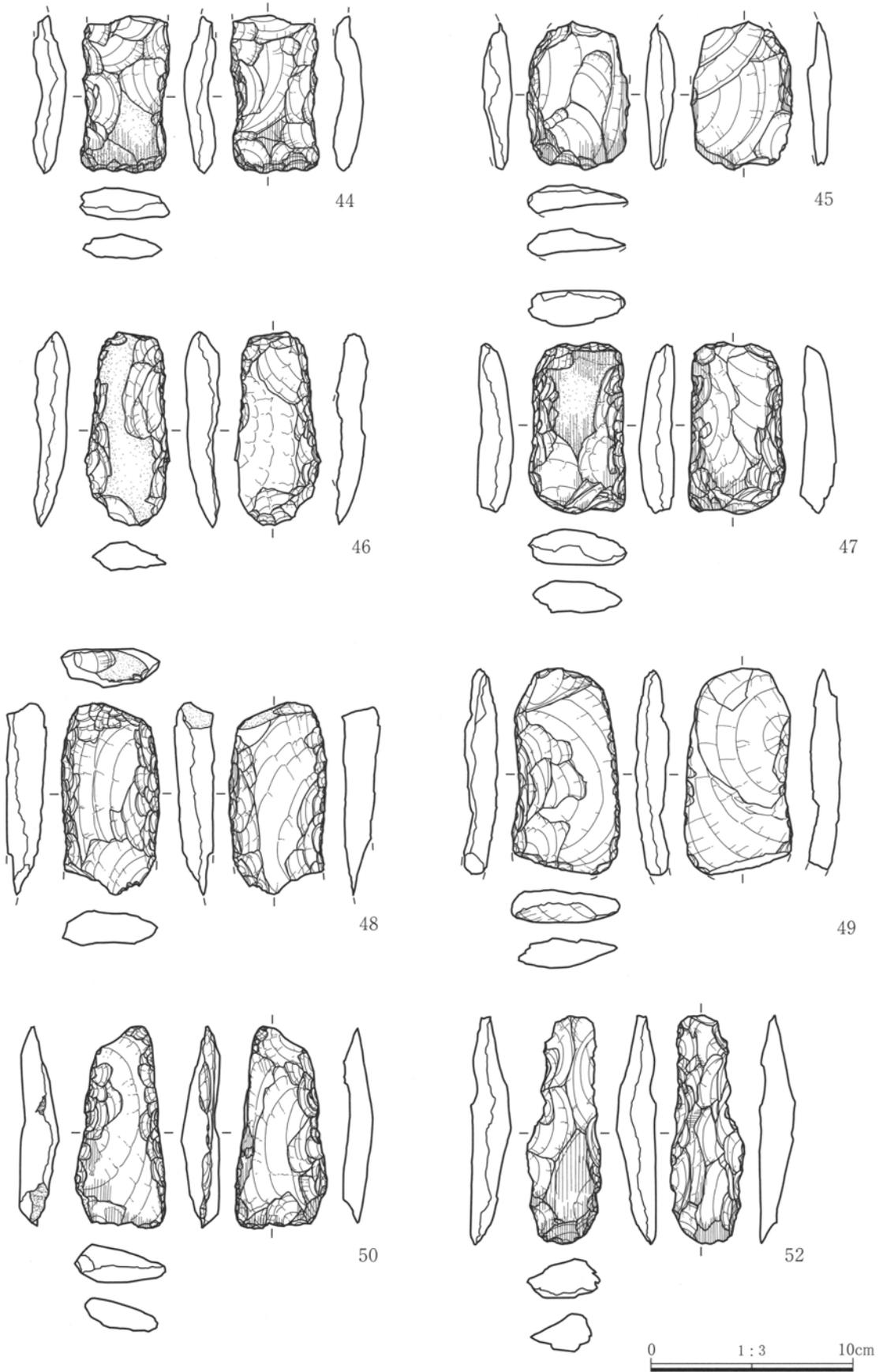
21図 縄文時代 石器(4)



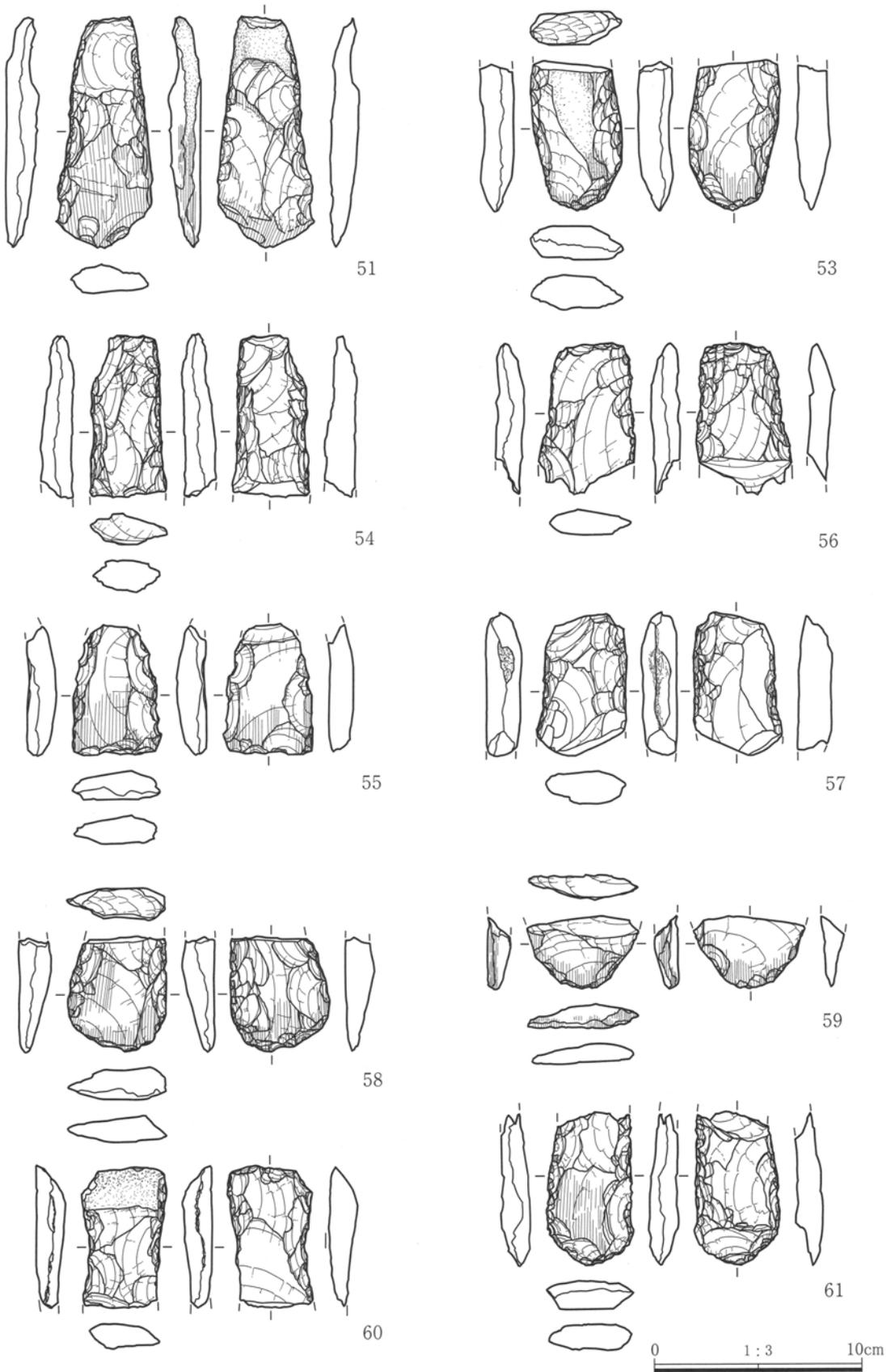
22図 縄文時代 石器(5)

0 1 : 3 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物

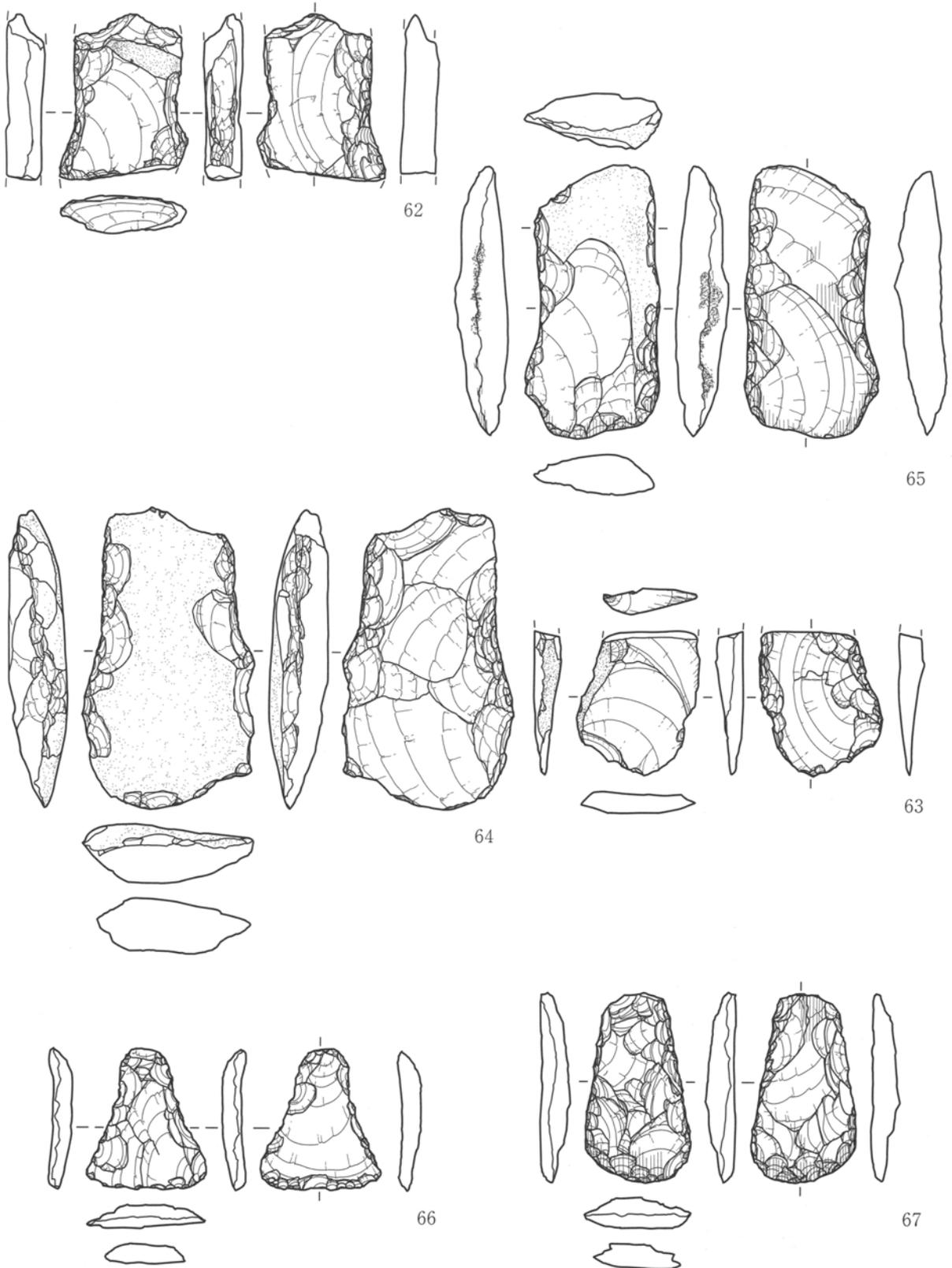


23図 縄文時代 石器(6)

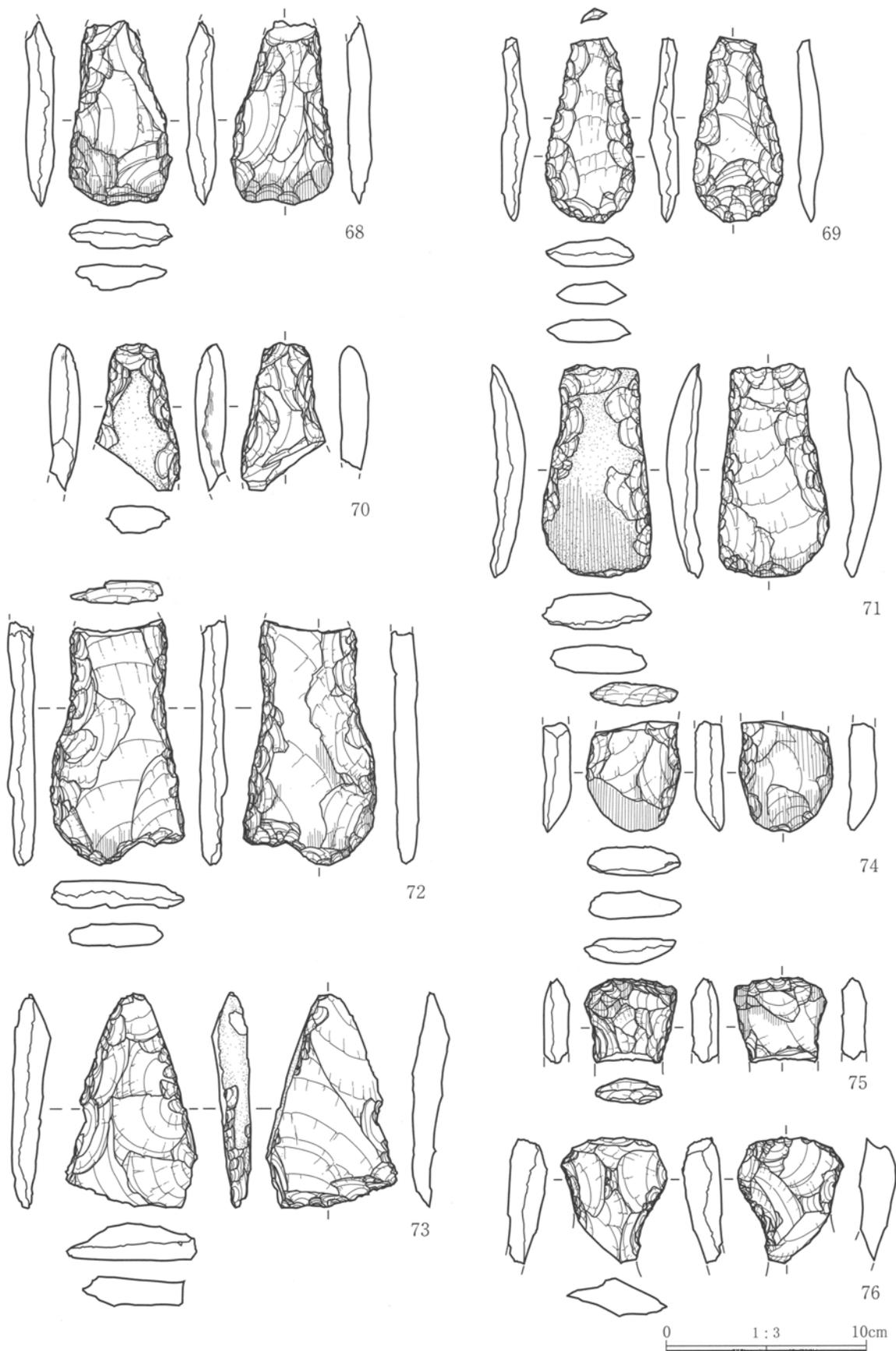


24図 縄文時代 石器(7)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

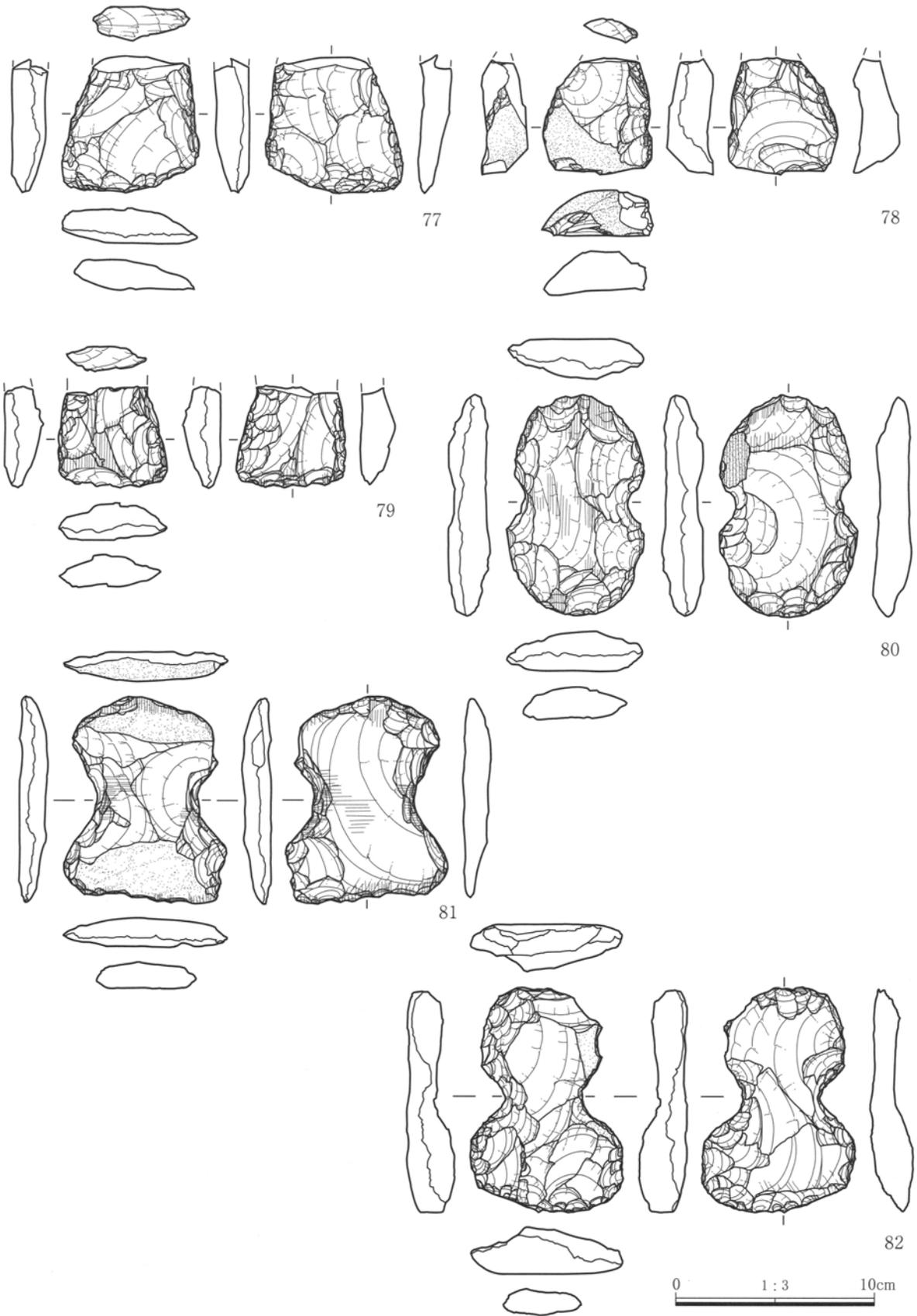


25図 縄文時代 石器(8)

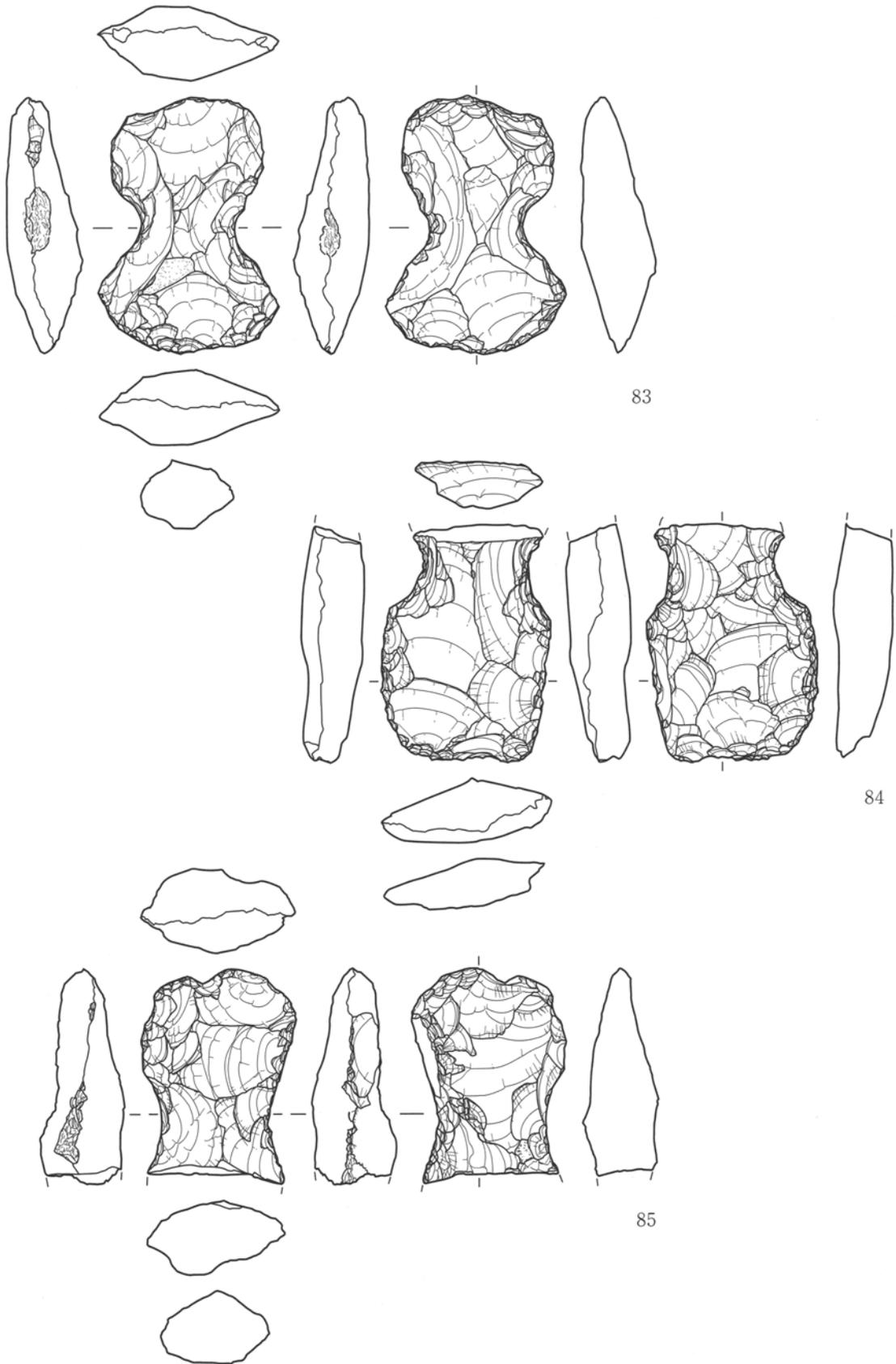


26図 縄文時代 石器(9)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

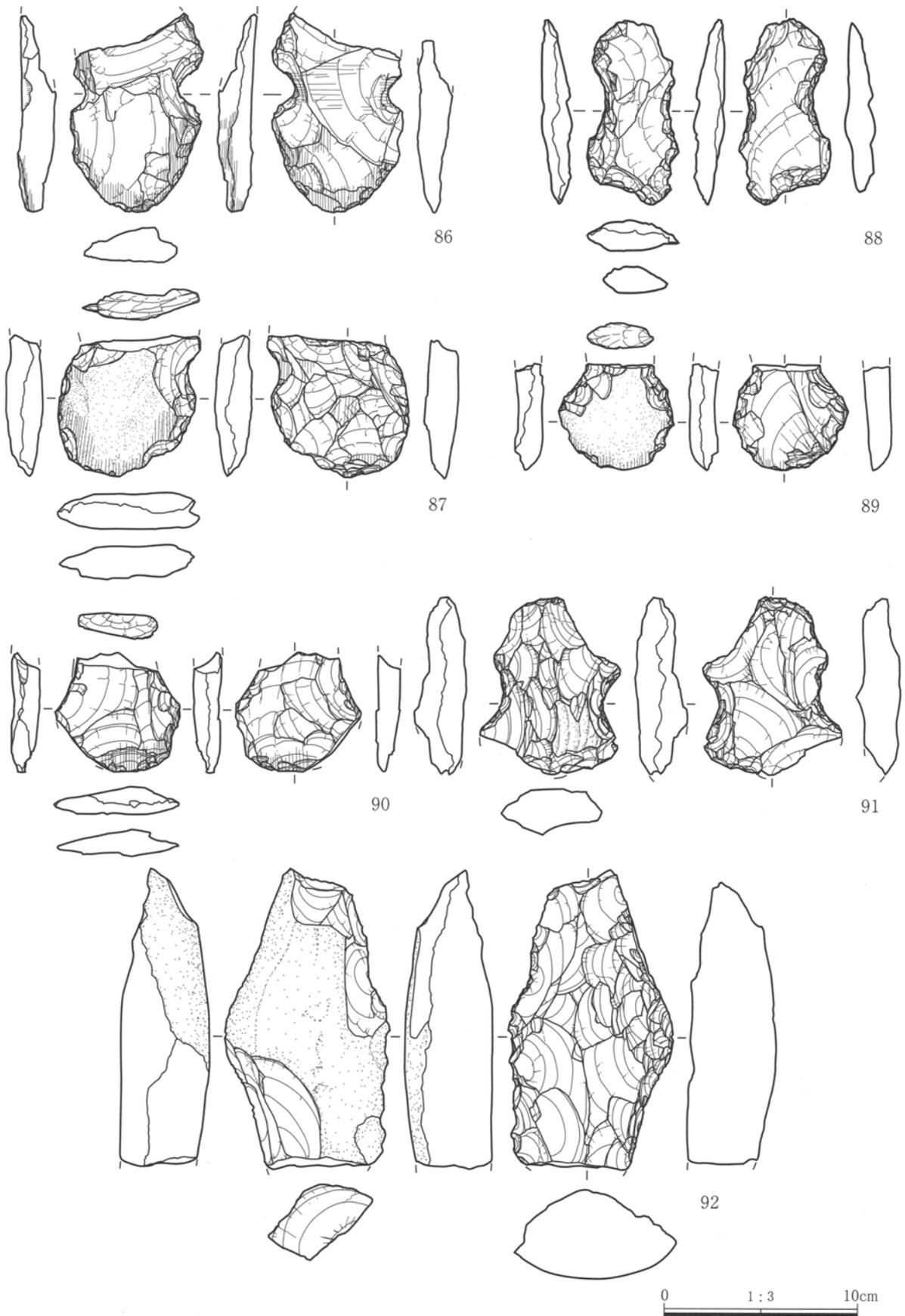


27図 縄文時代 石器(10)

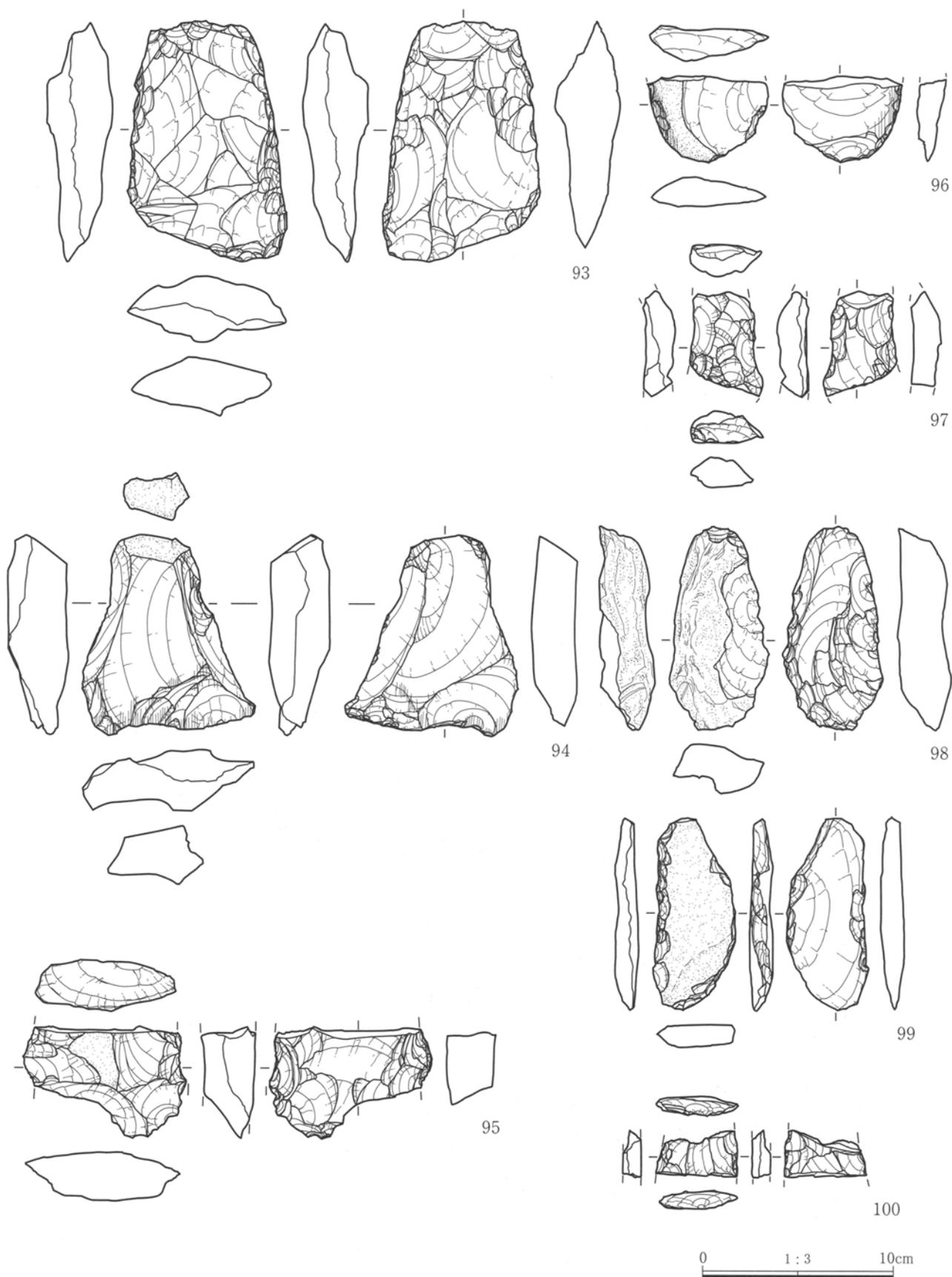


28図 縄文時代 石器(11)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

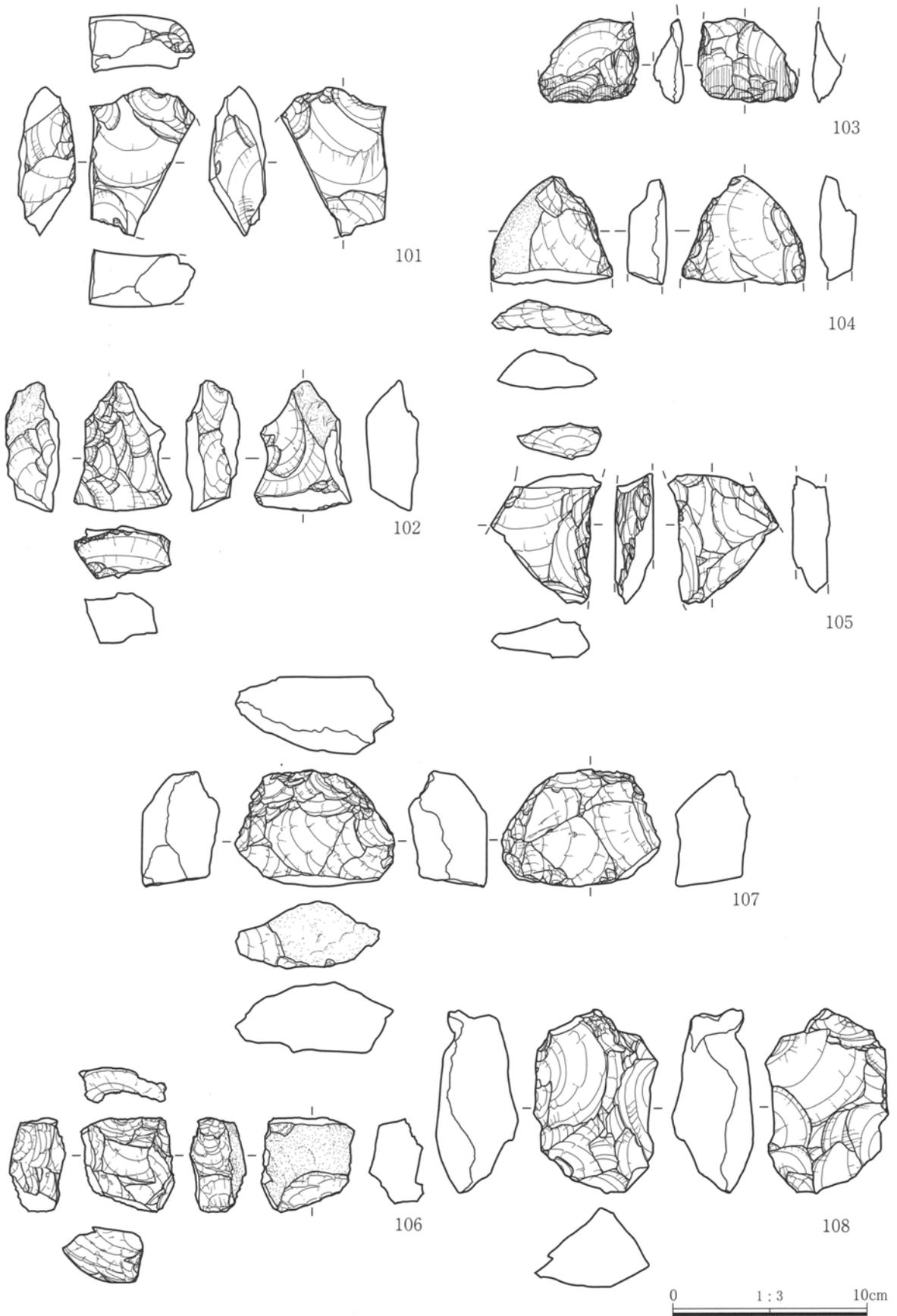


29図 縄文時代 石器(12)

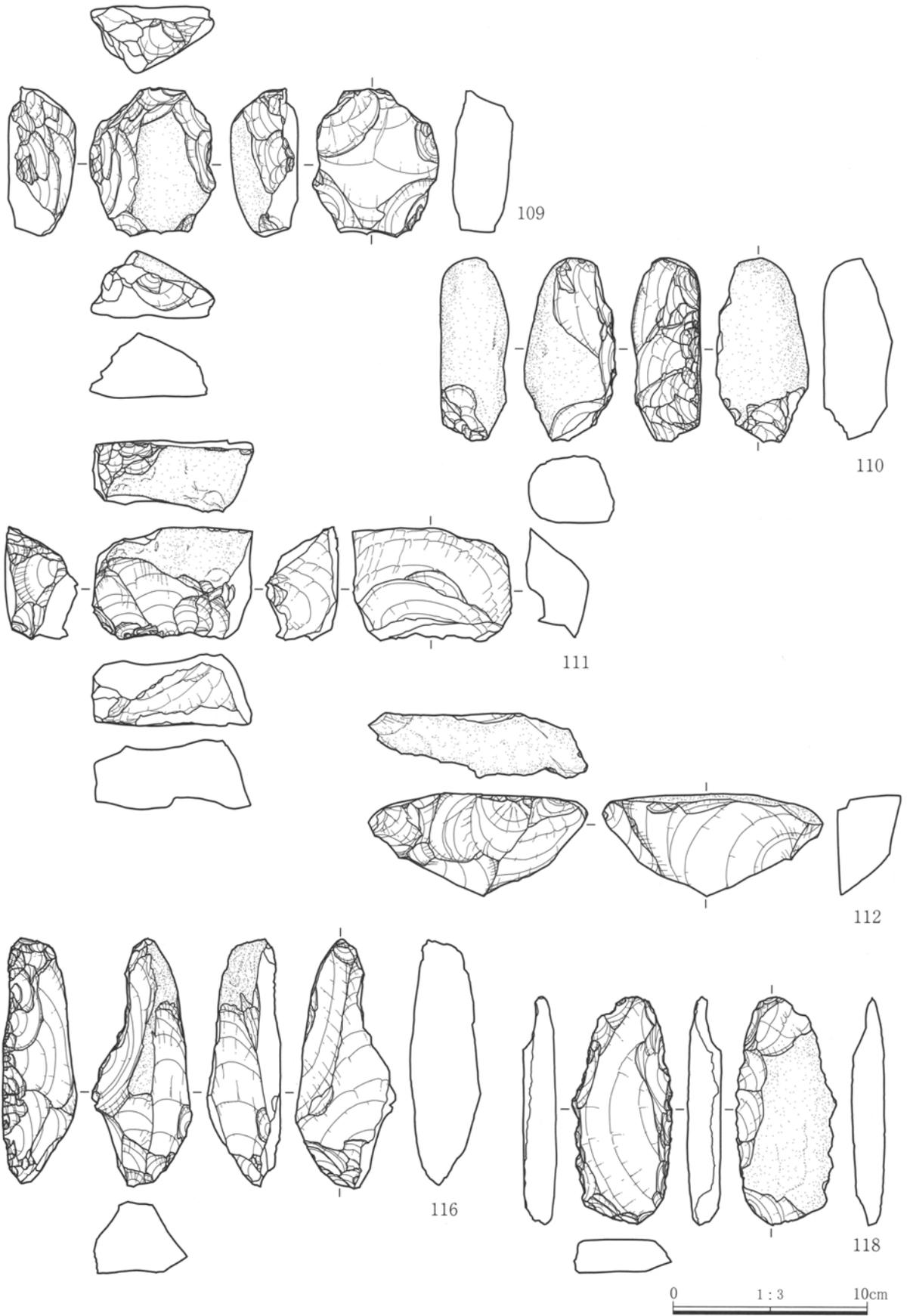


30図 縄文時代 石器(13)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

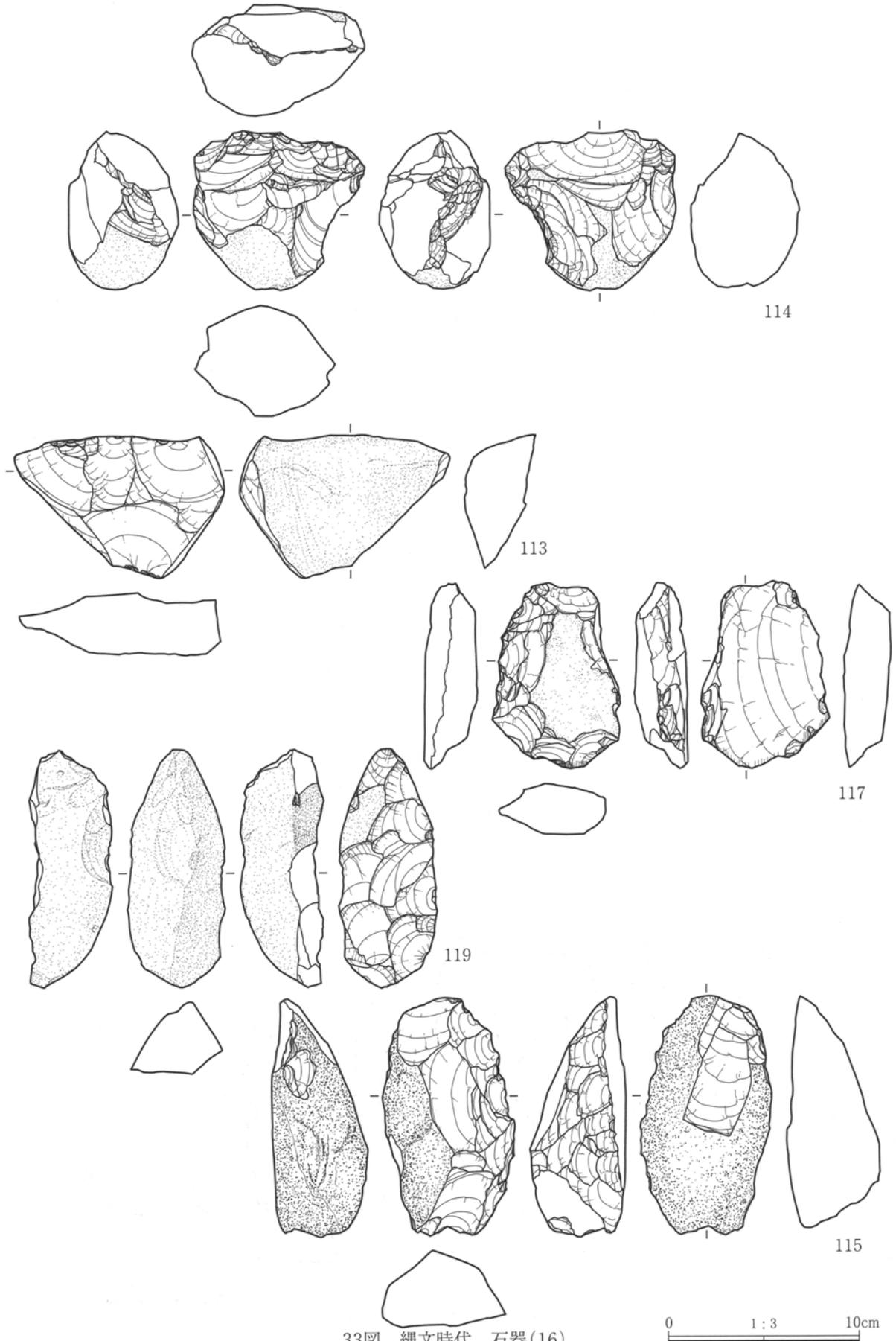


31図 縄文時代 石器(14)

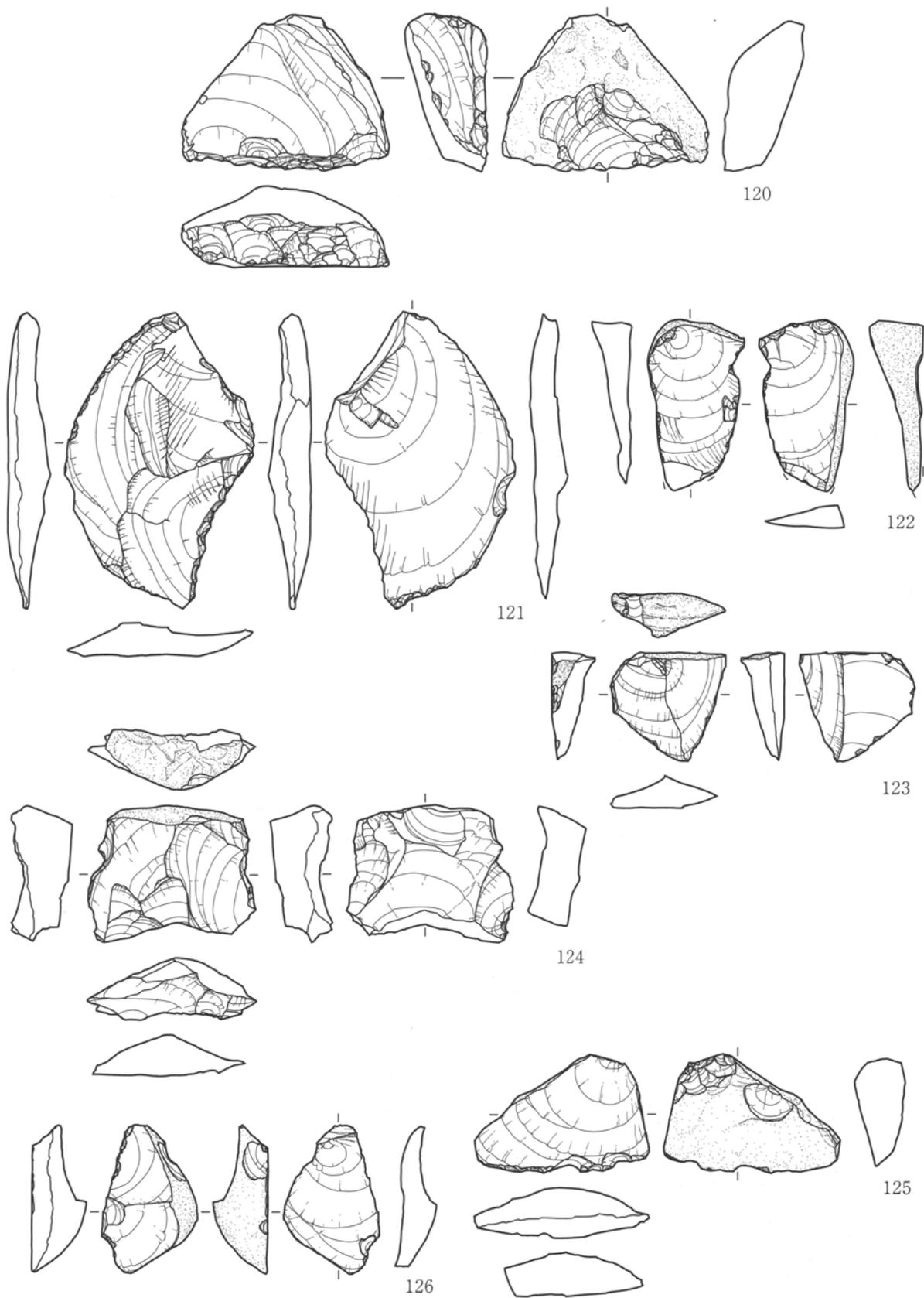


32図 縄文時代 石器(15)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

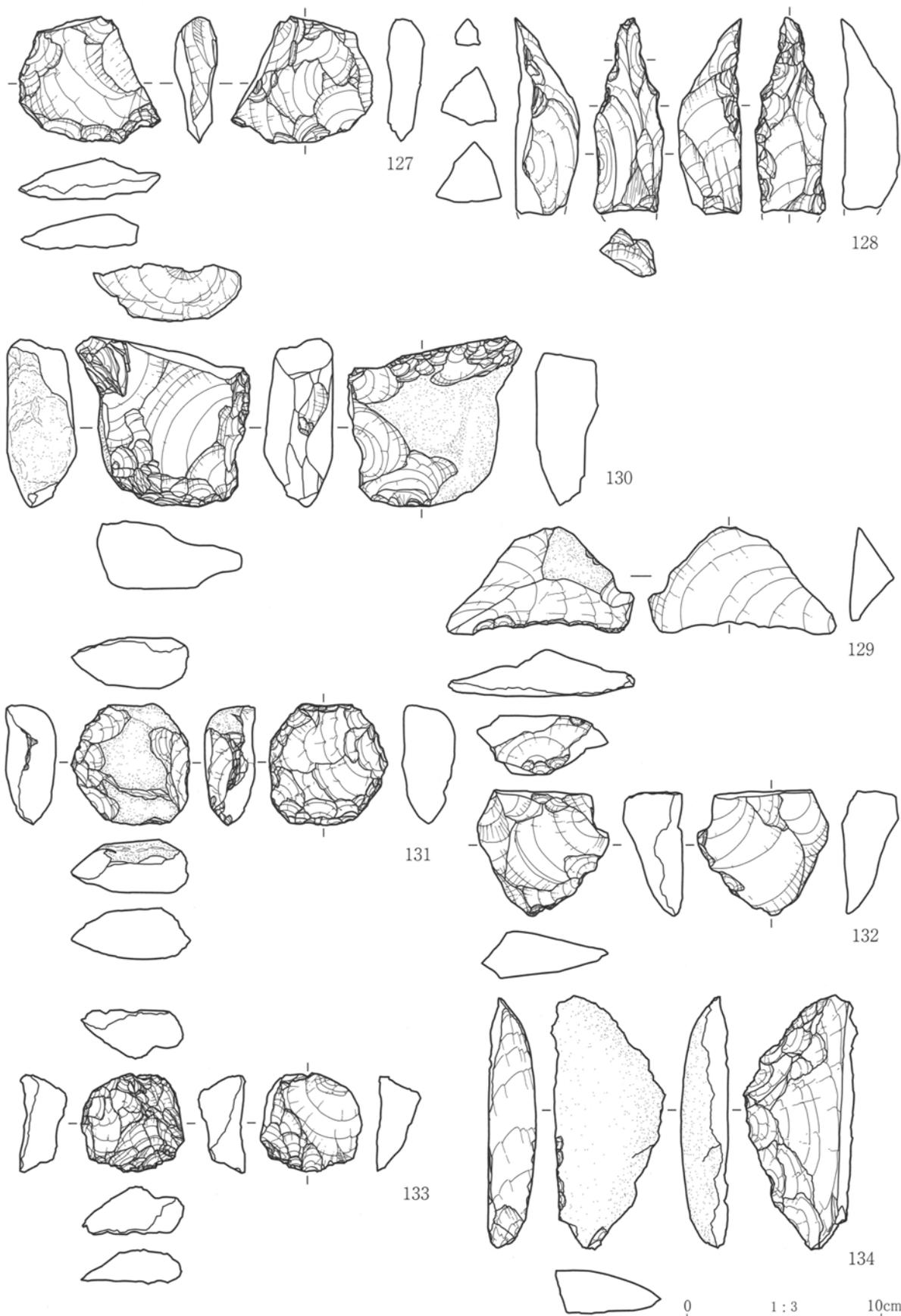


33図 縄文時代 石器(16)

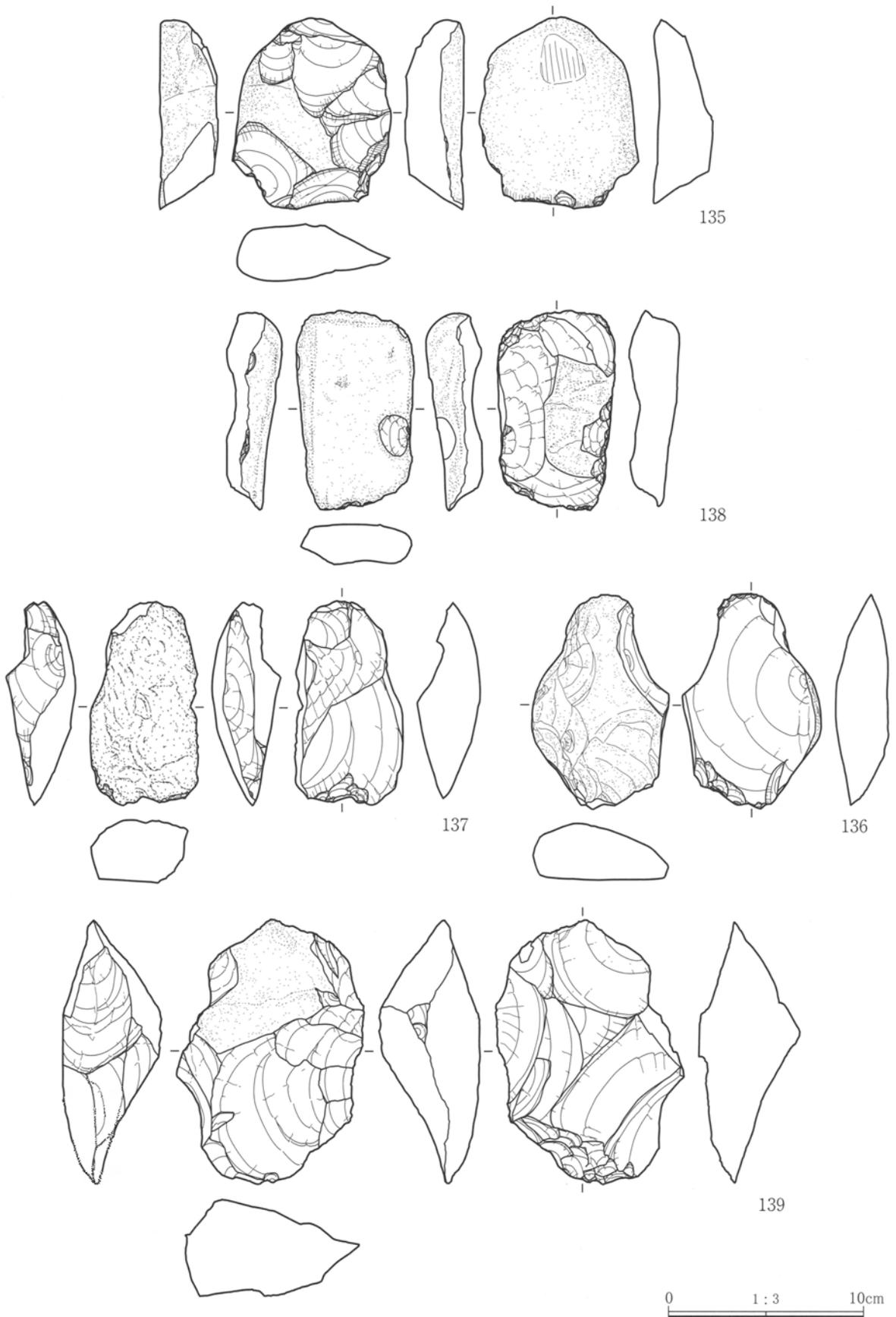


34図 縄文時代 石器(17)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

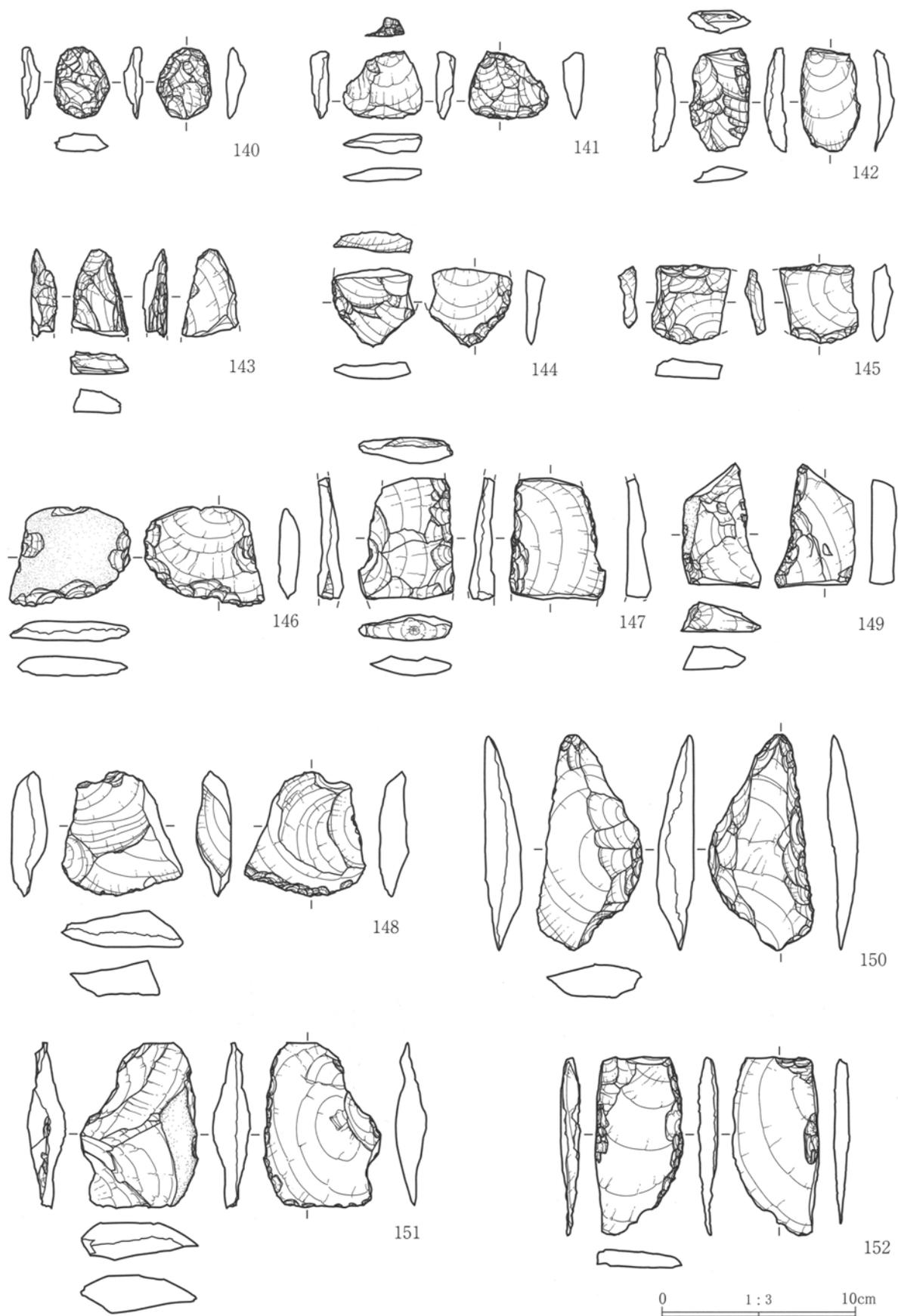


35図 縄文時代 石器(18)

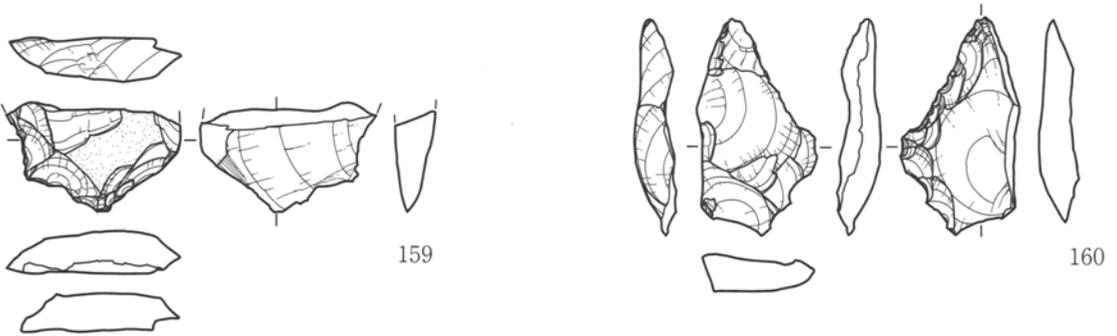
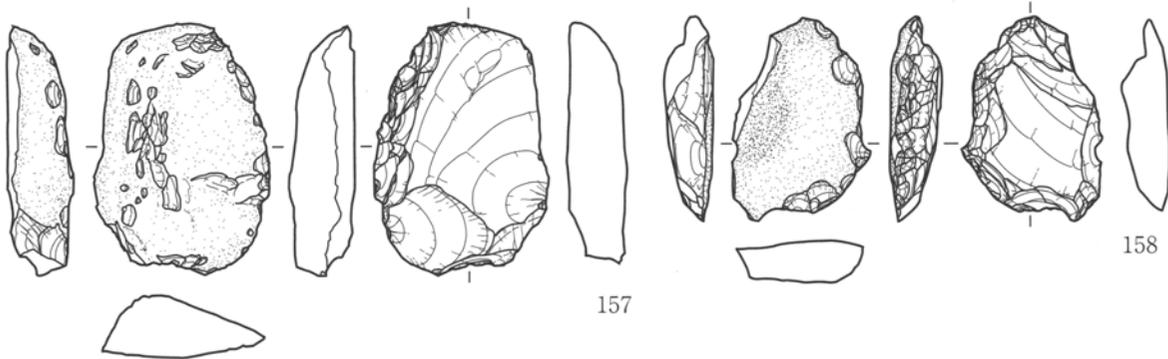
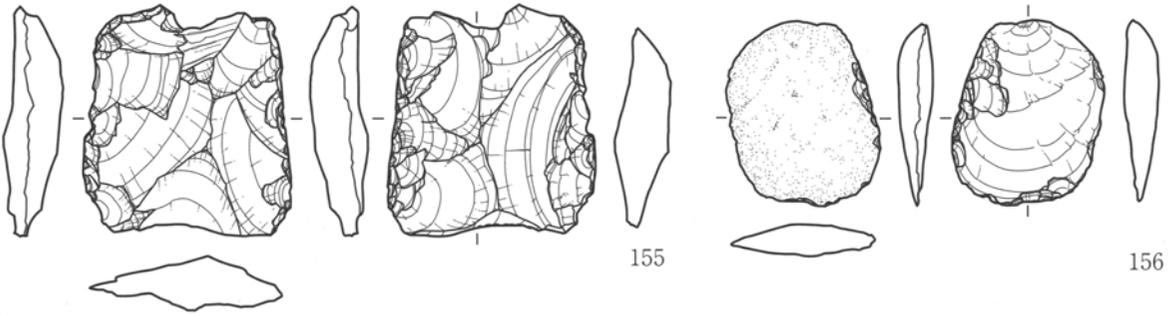
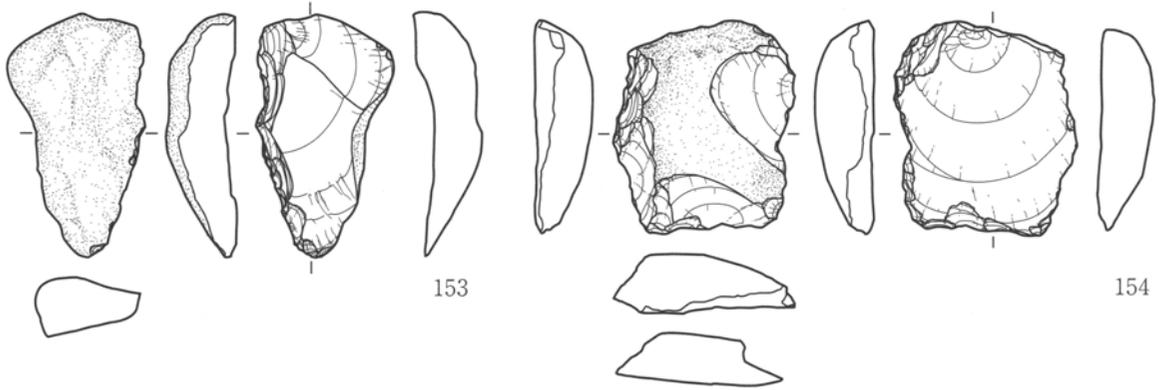


36図 縄文時代 石器(19)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



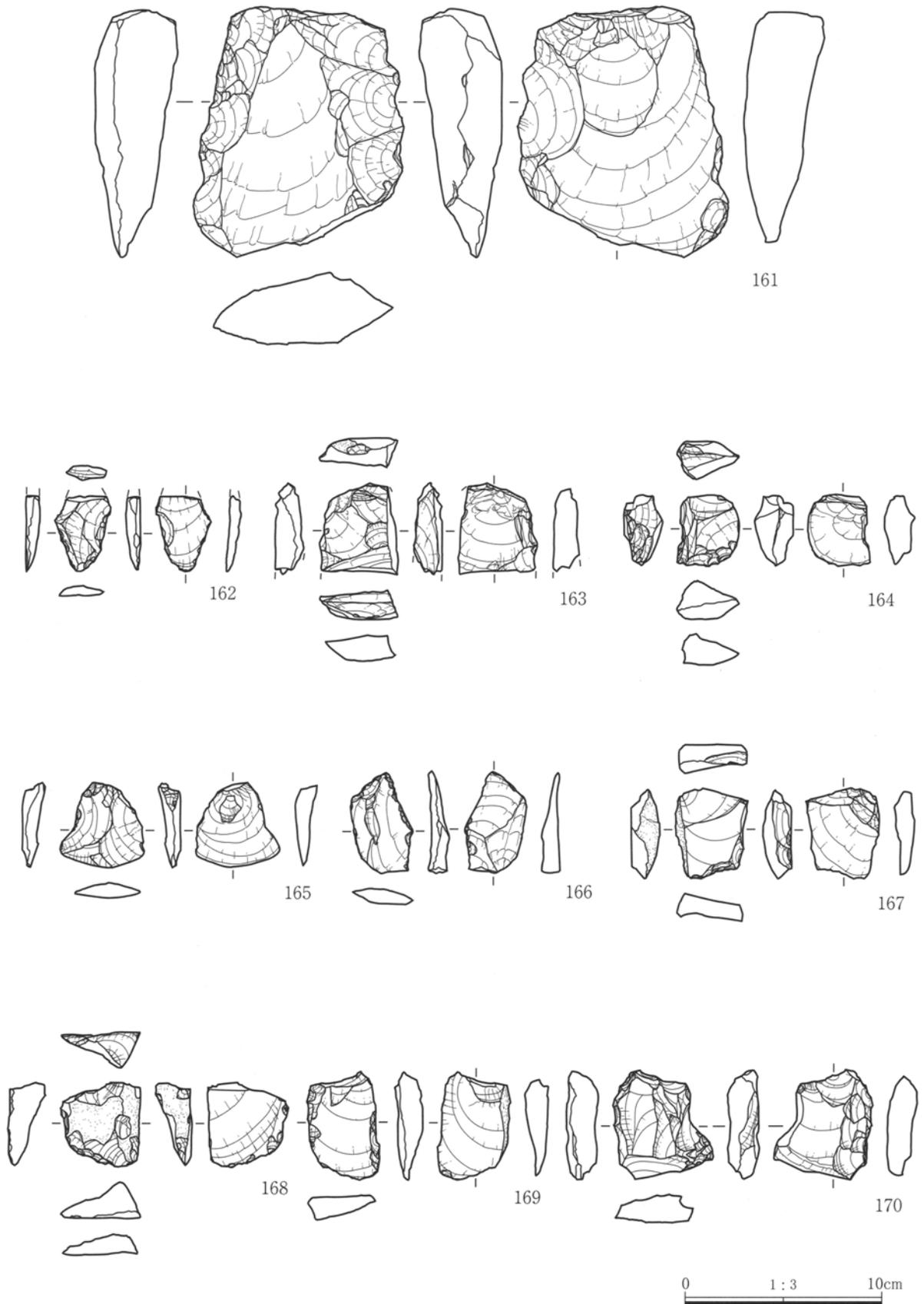
37図 縄文時代 石器(20)



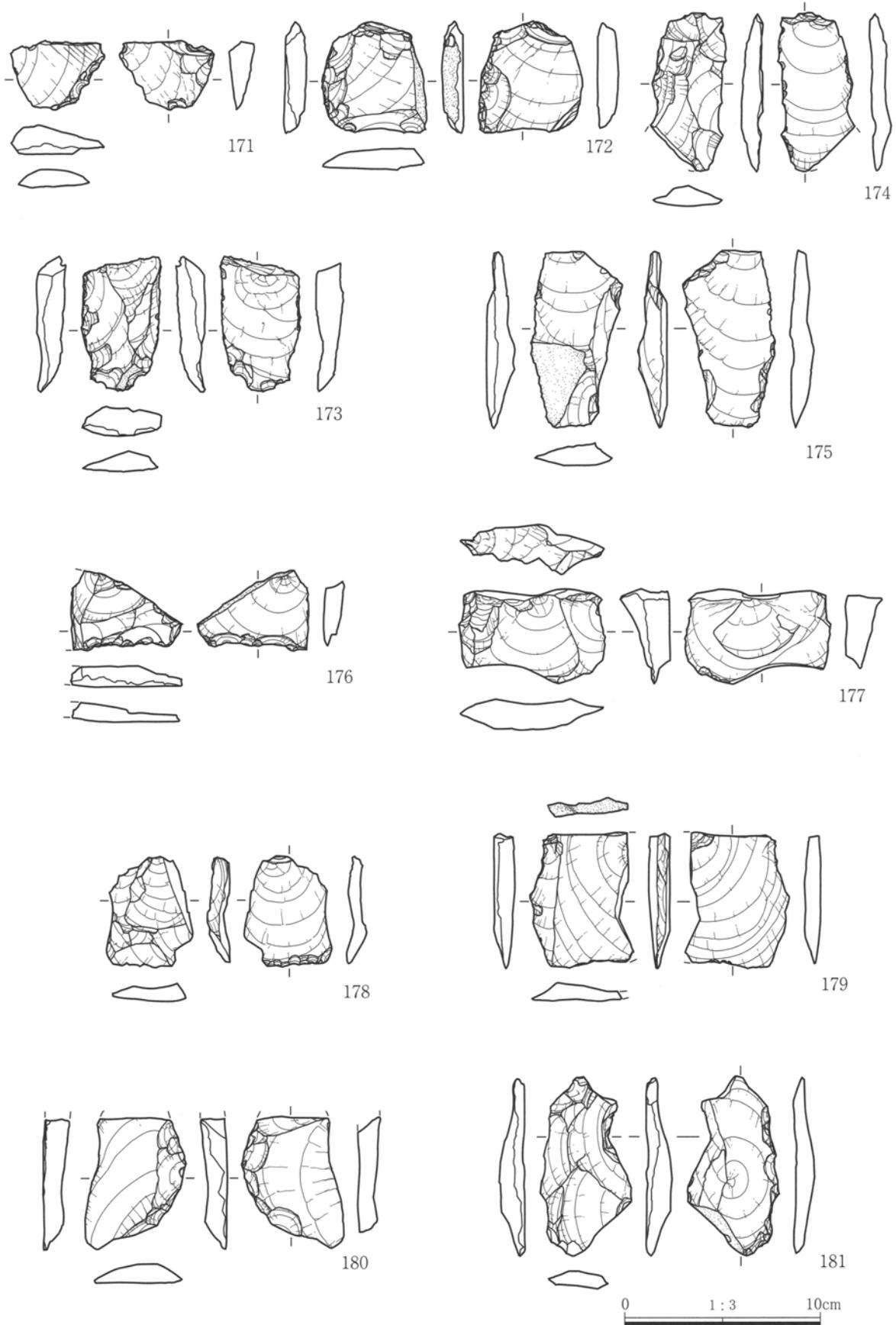
0 1:3 10cm

38図 縄文時代 石器(21)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

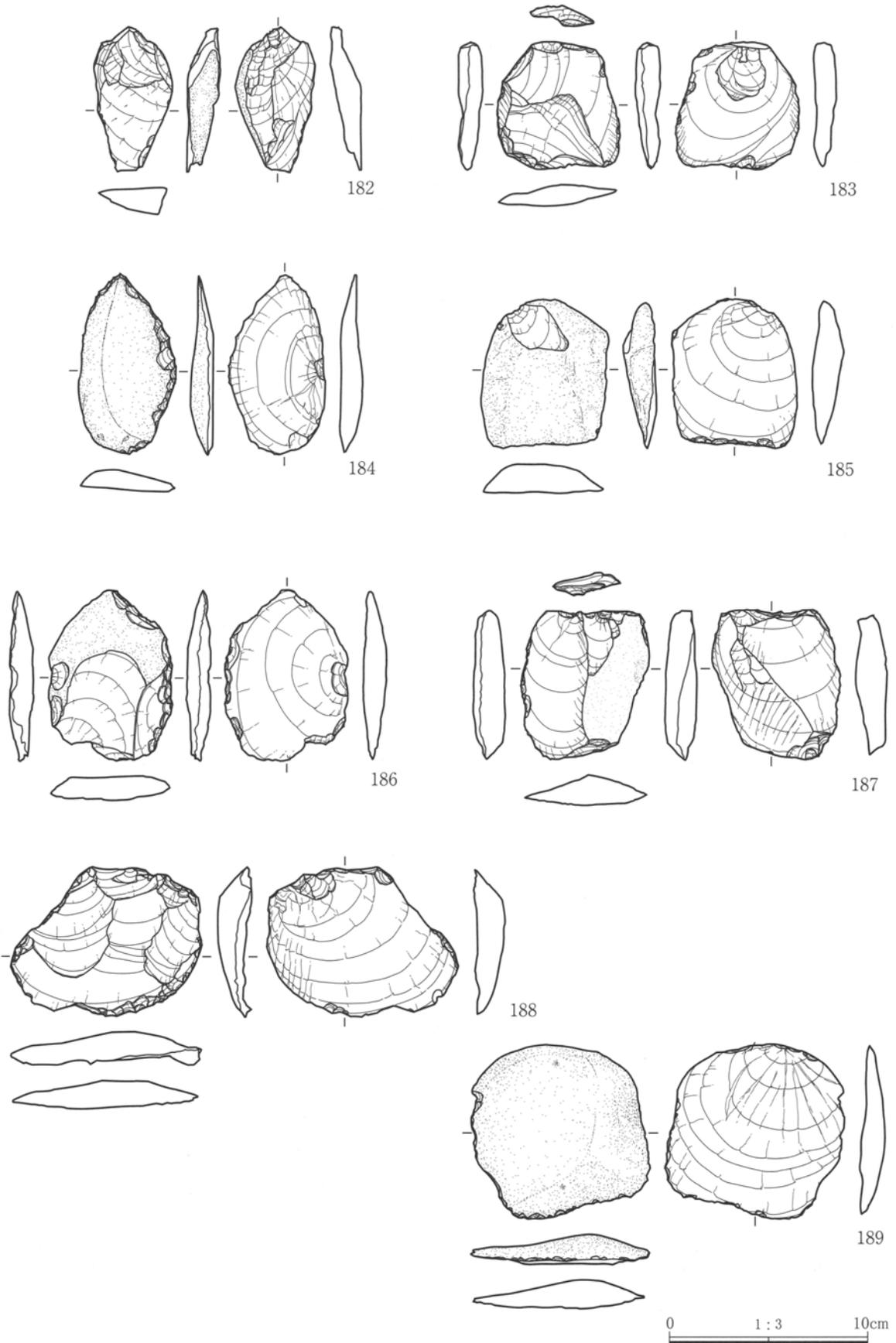


39図 縄文時代 石器(22)

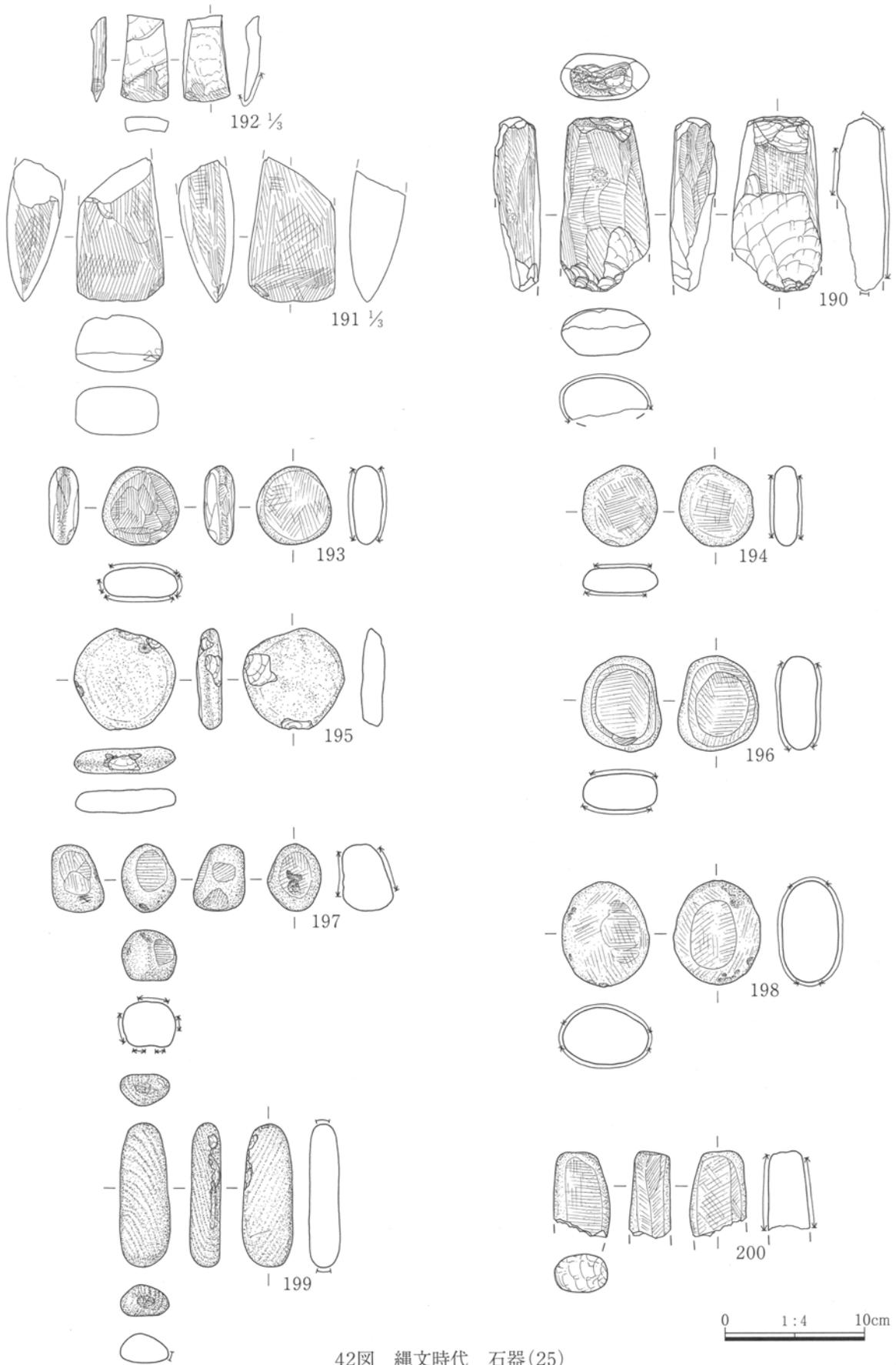


40図 縄文時代 石器(23)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

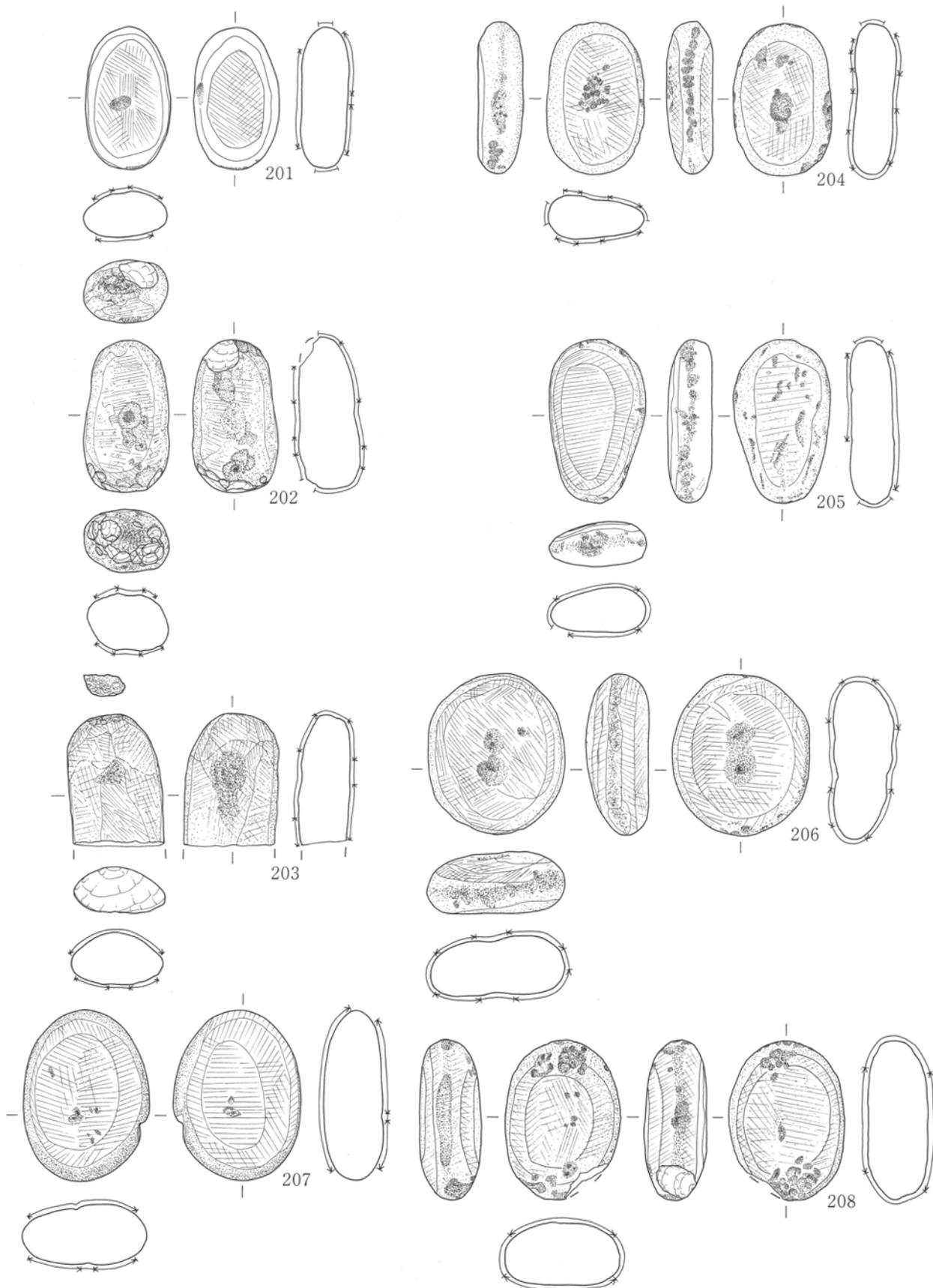


41図 縄文時代 石器(24)



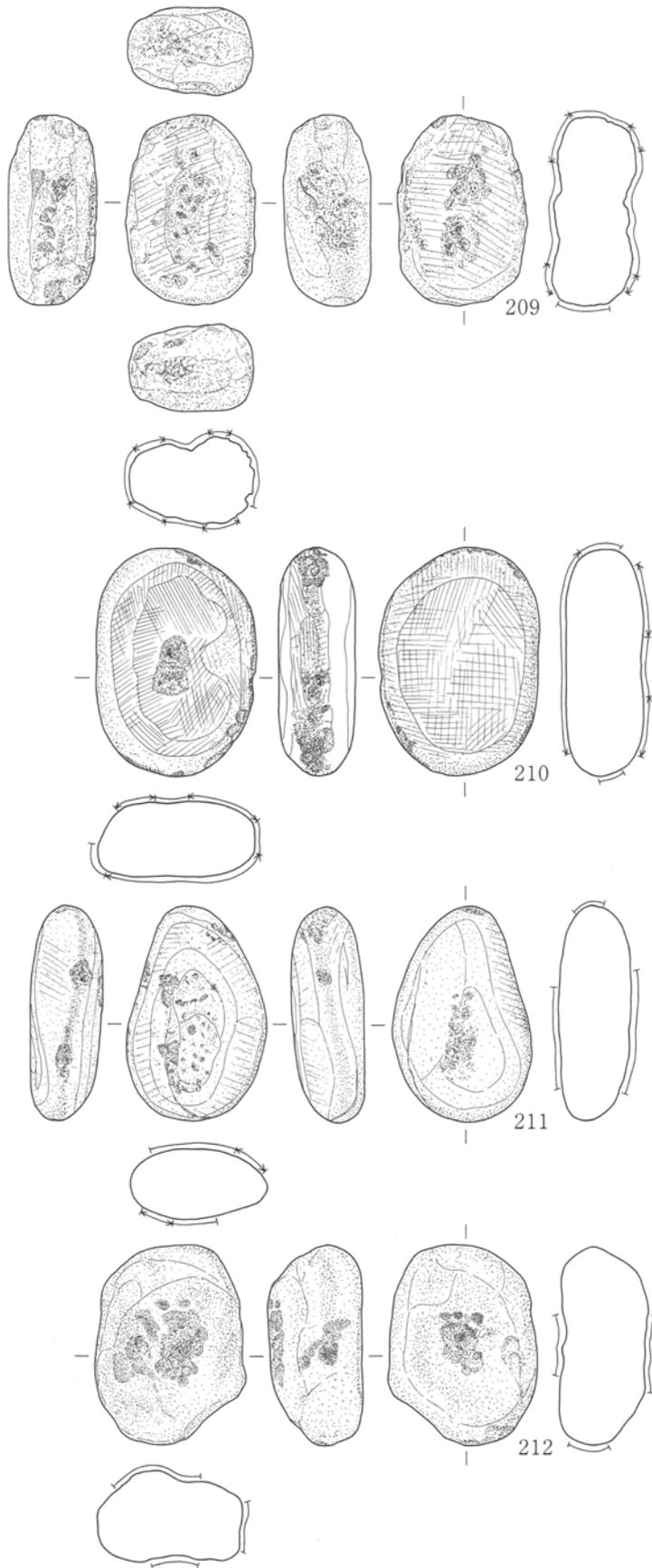
42図 縄文時代 石器(25)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



43図 縄文時代 石器(26)

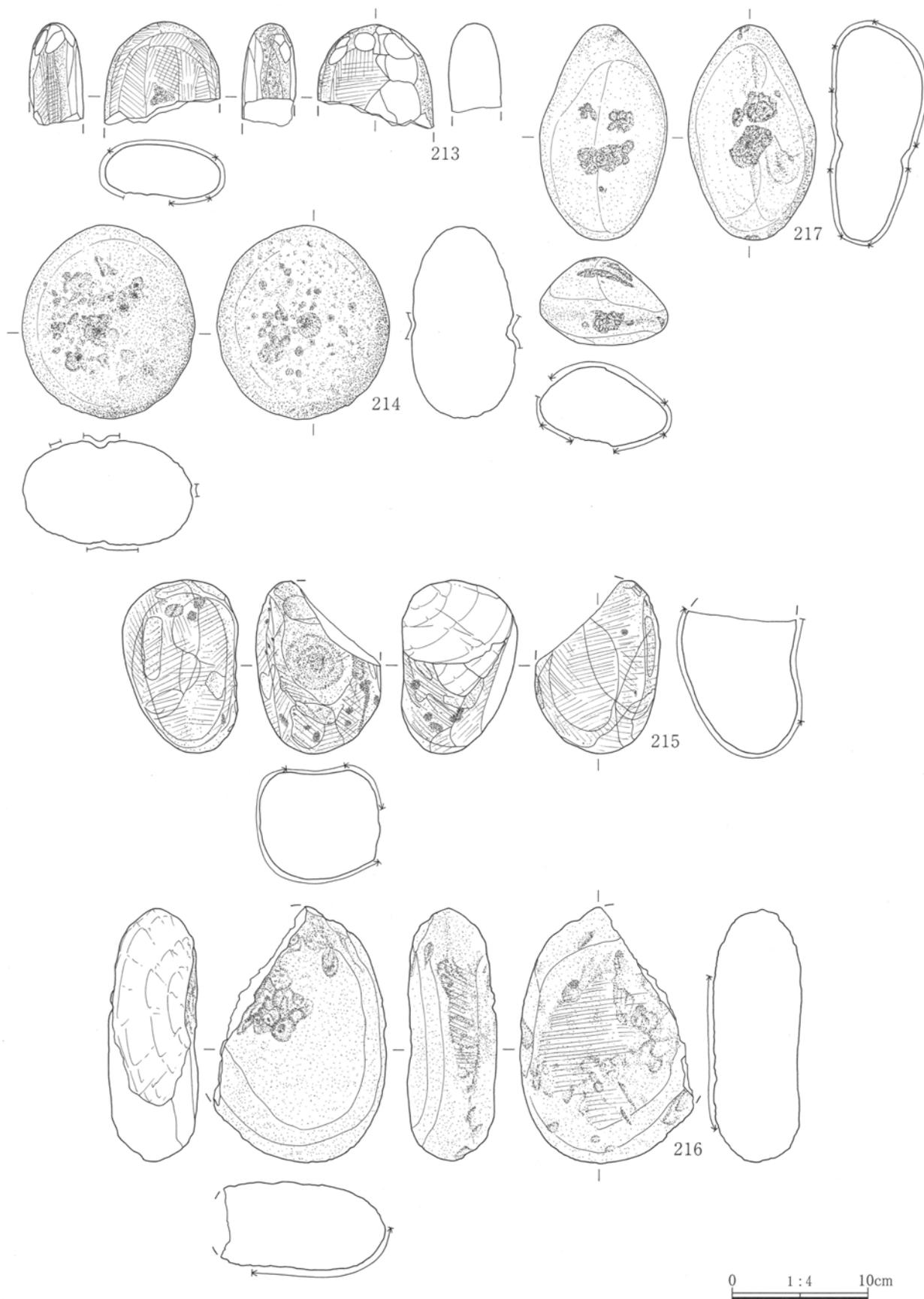
0 1:4 10cm



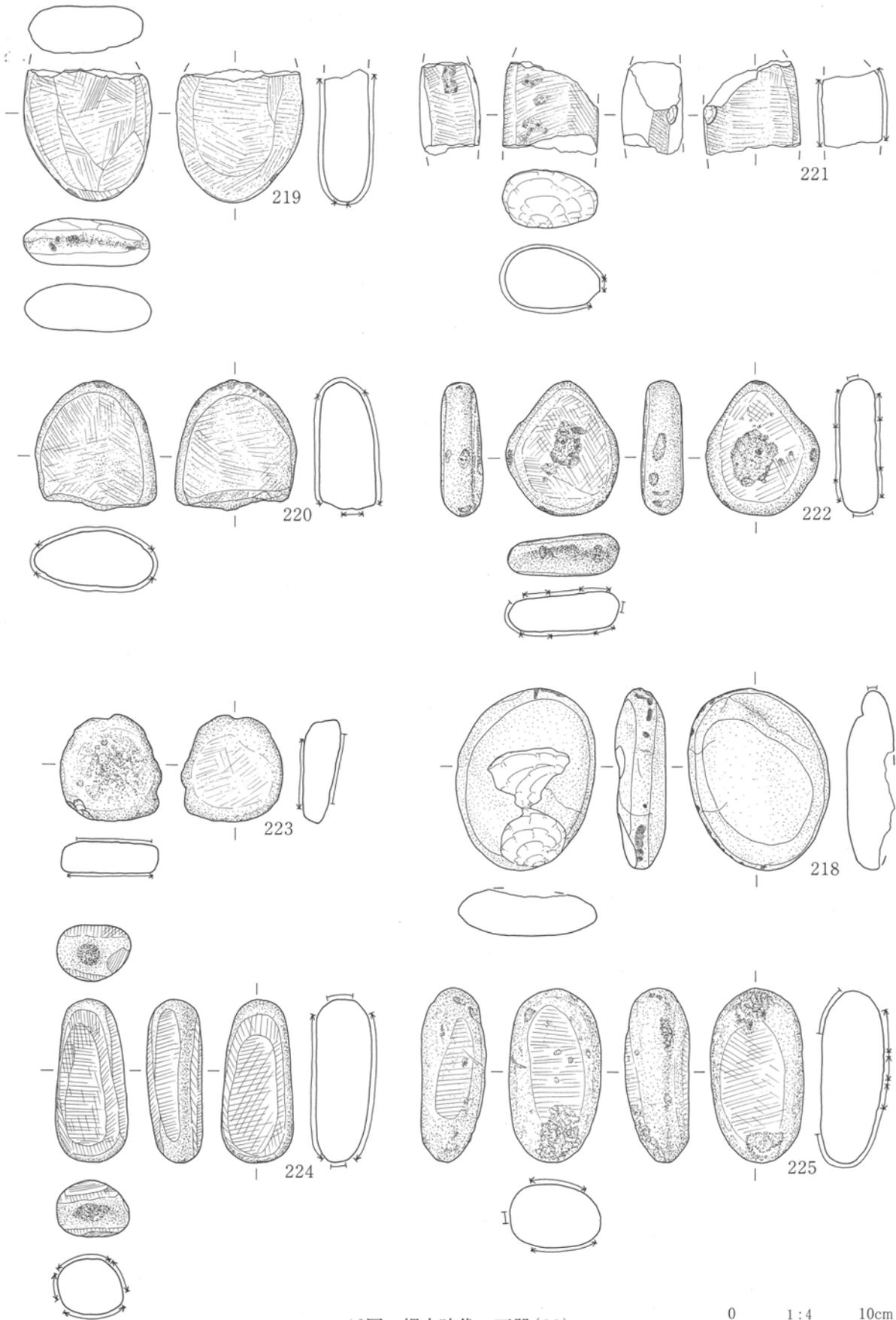
44図 縄文時代 石器(27)

0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物



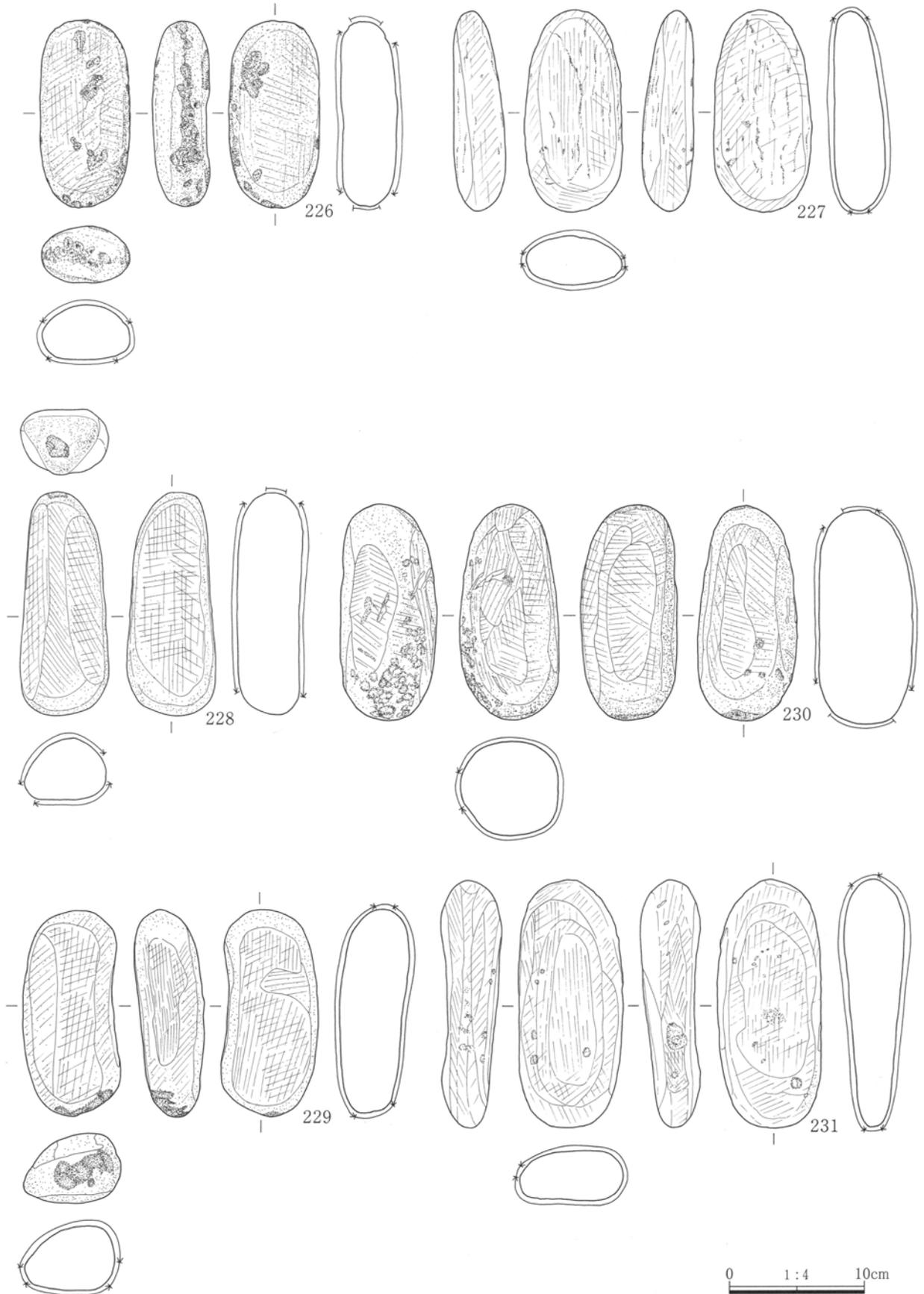
45図 縄文時代 石器(28)



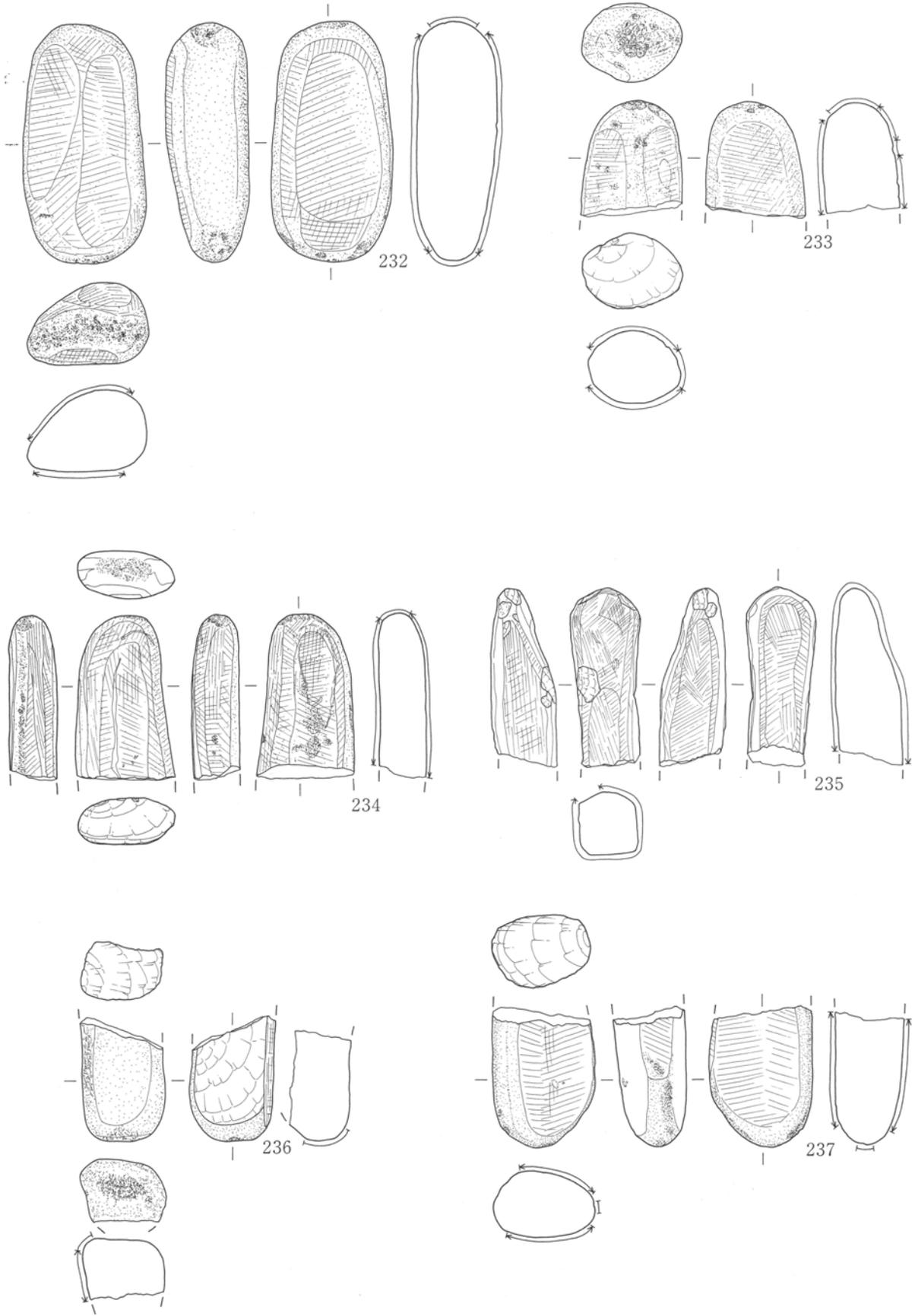
46図 縄文時代 石器(29)

0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物



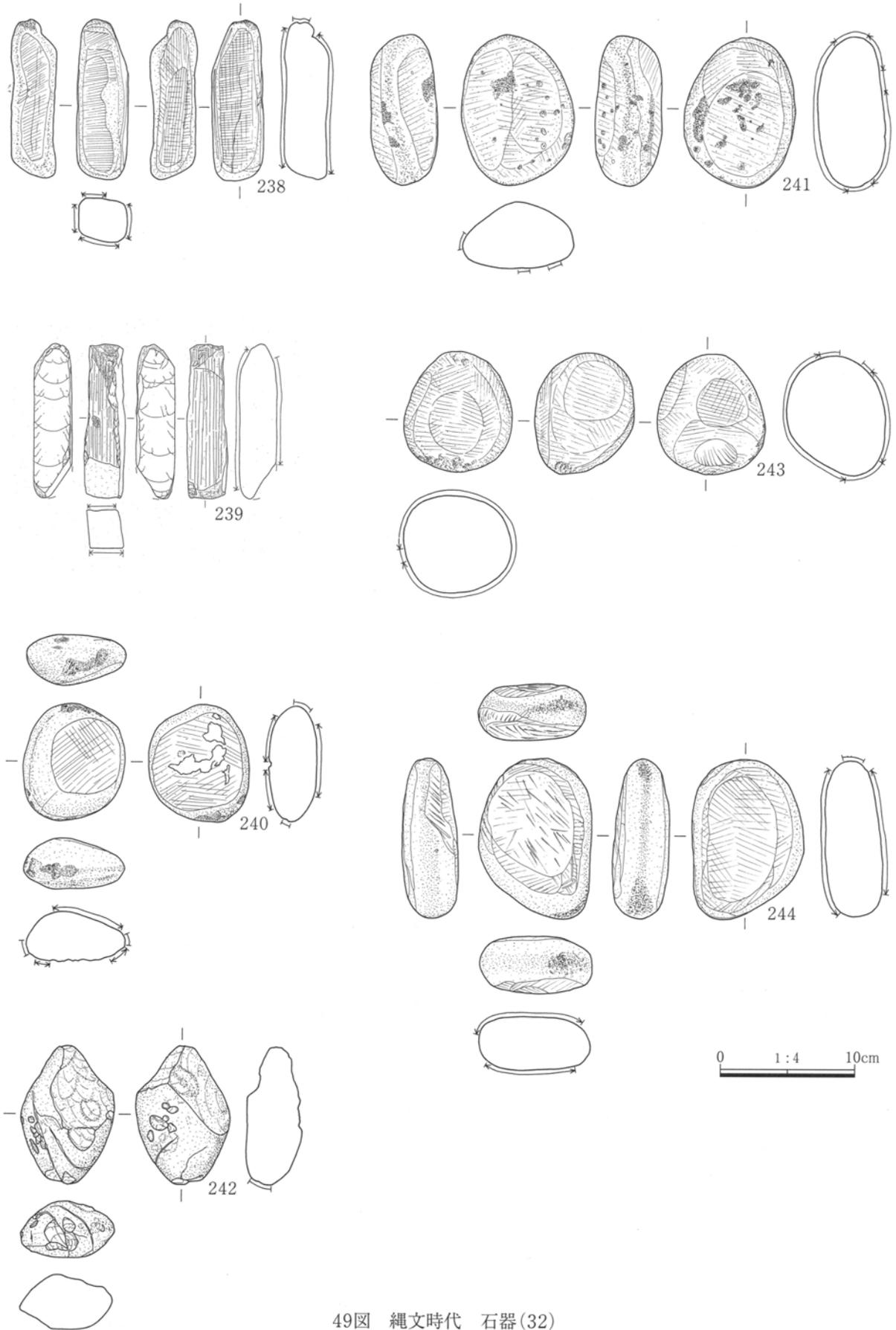
47図 縄文時代 石器(30)



48図 縄文時代 石器(31)

0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物

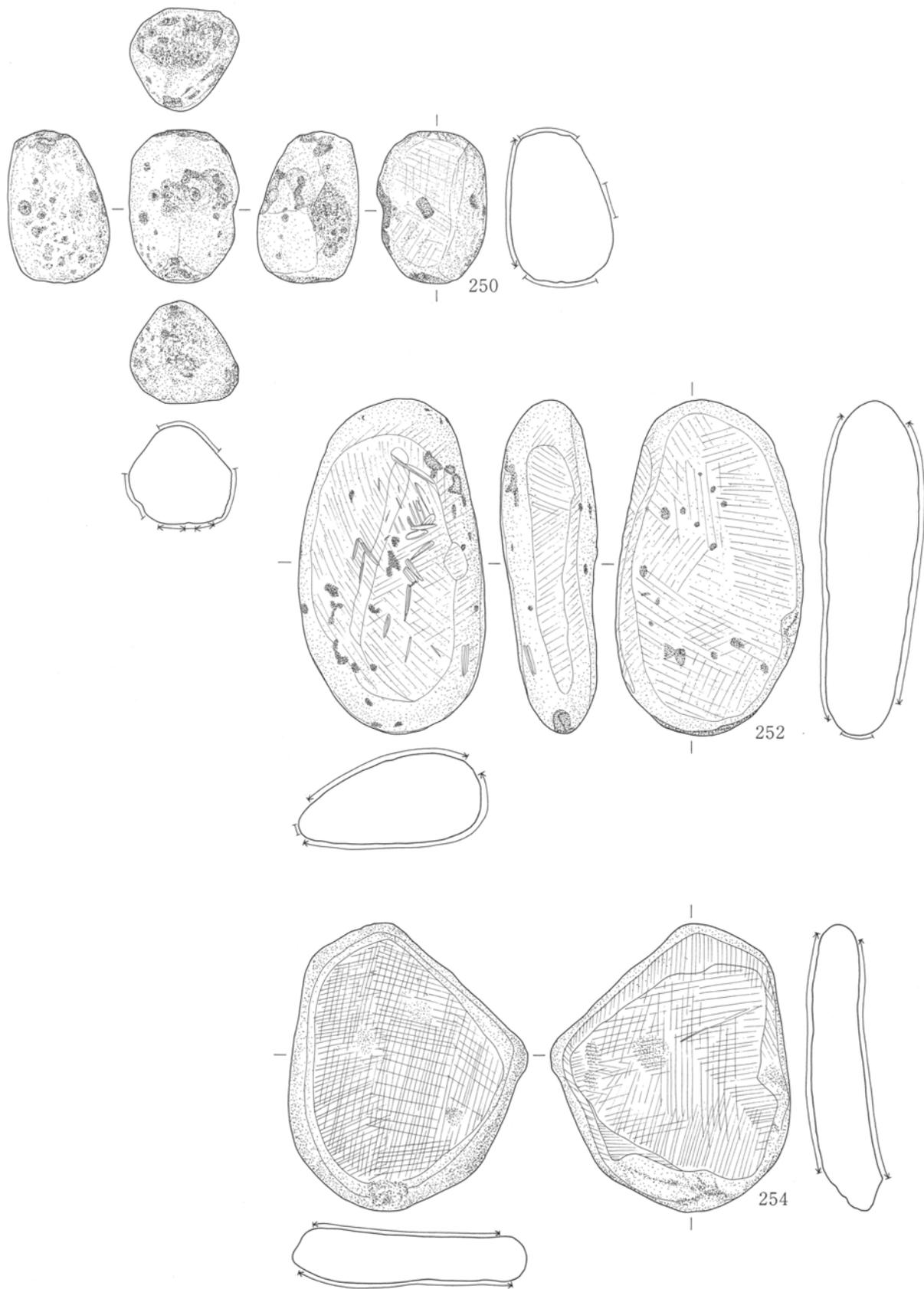


49図 縄文時代 石器(32)

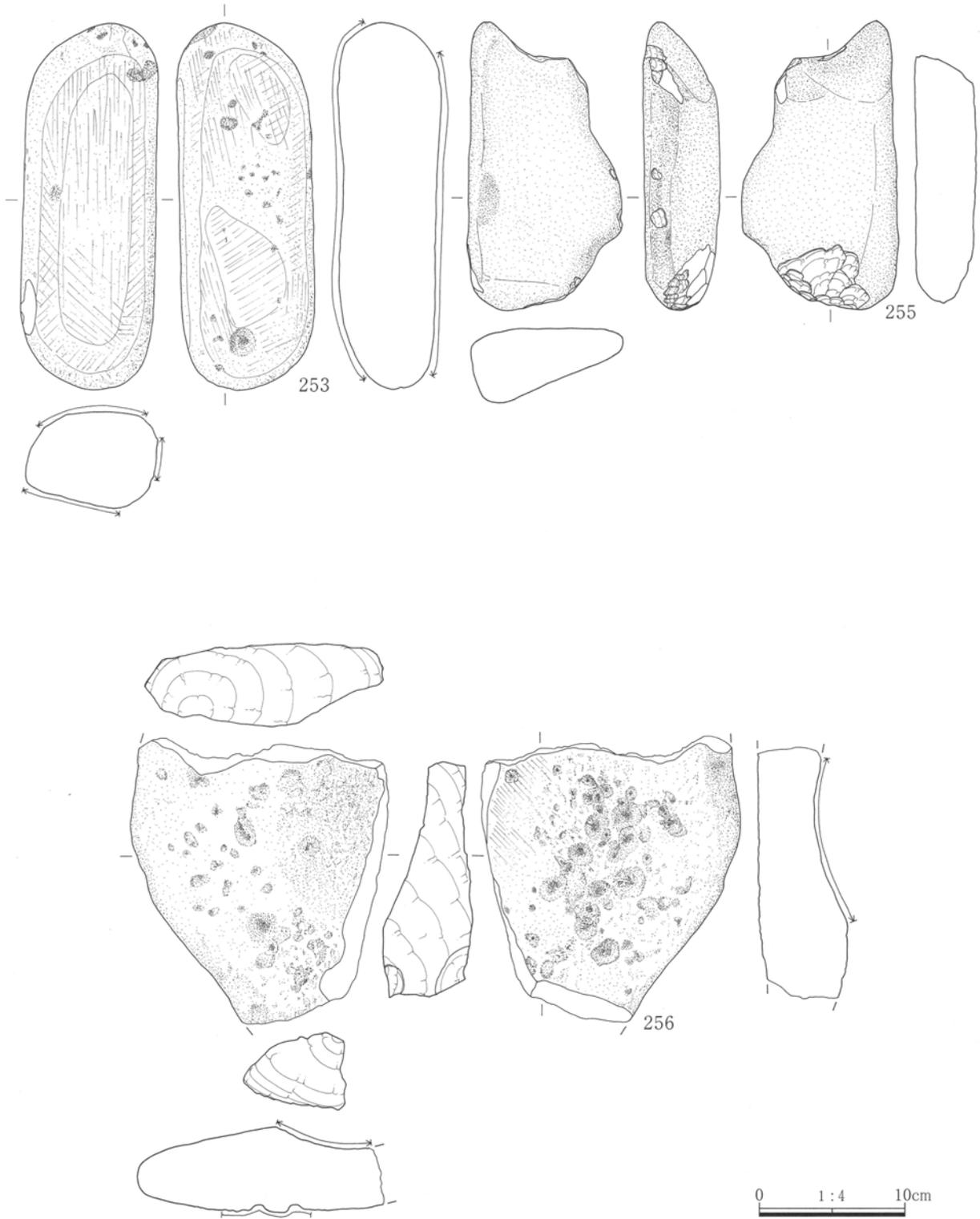


50図 縄文時代 石器(33)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

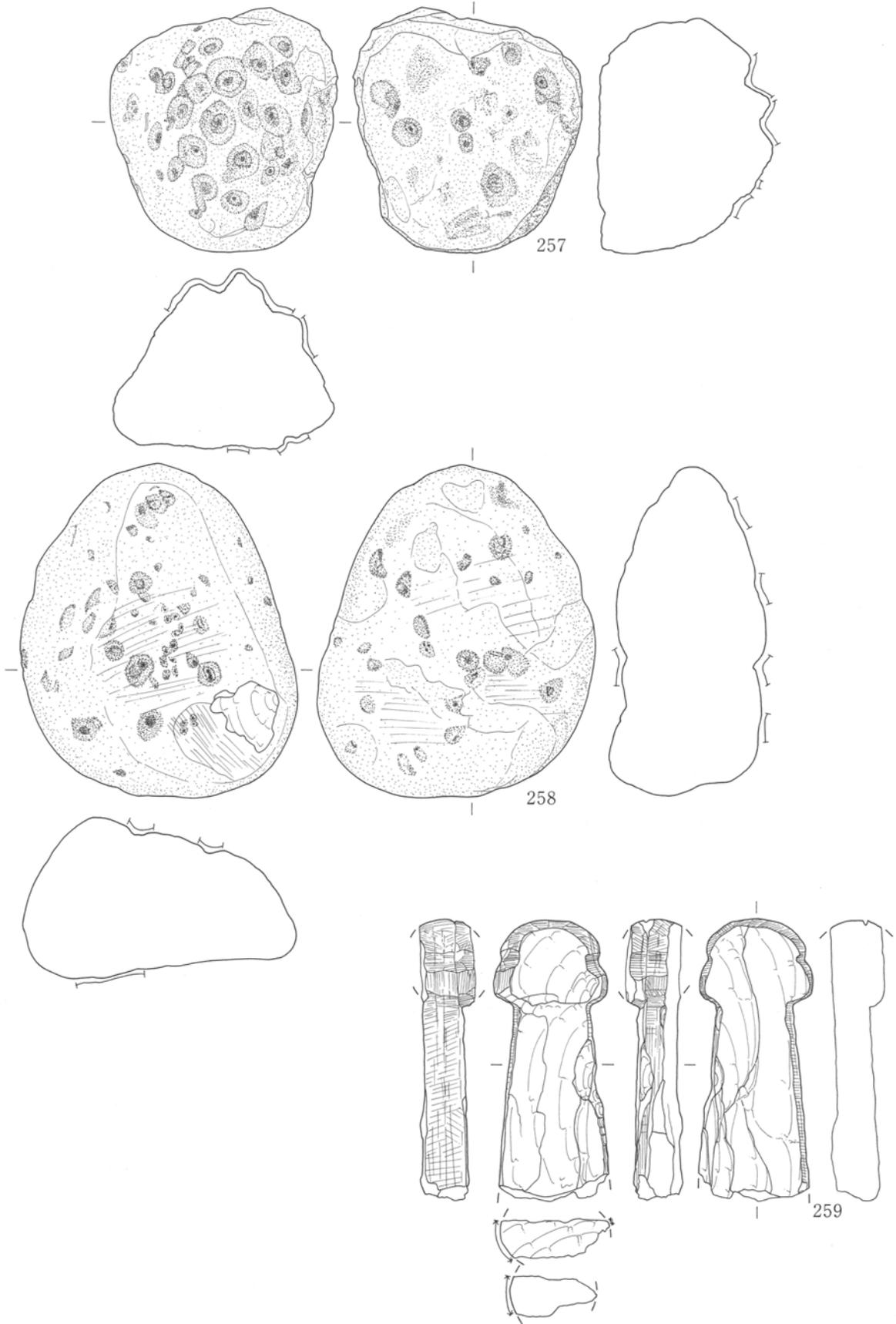


51図 縄文時代 石器(34)



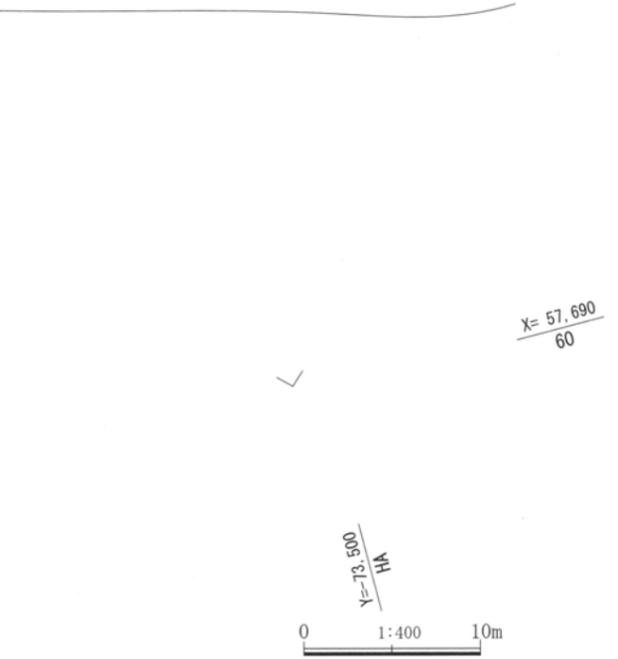
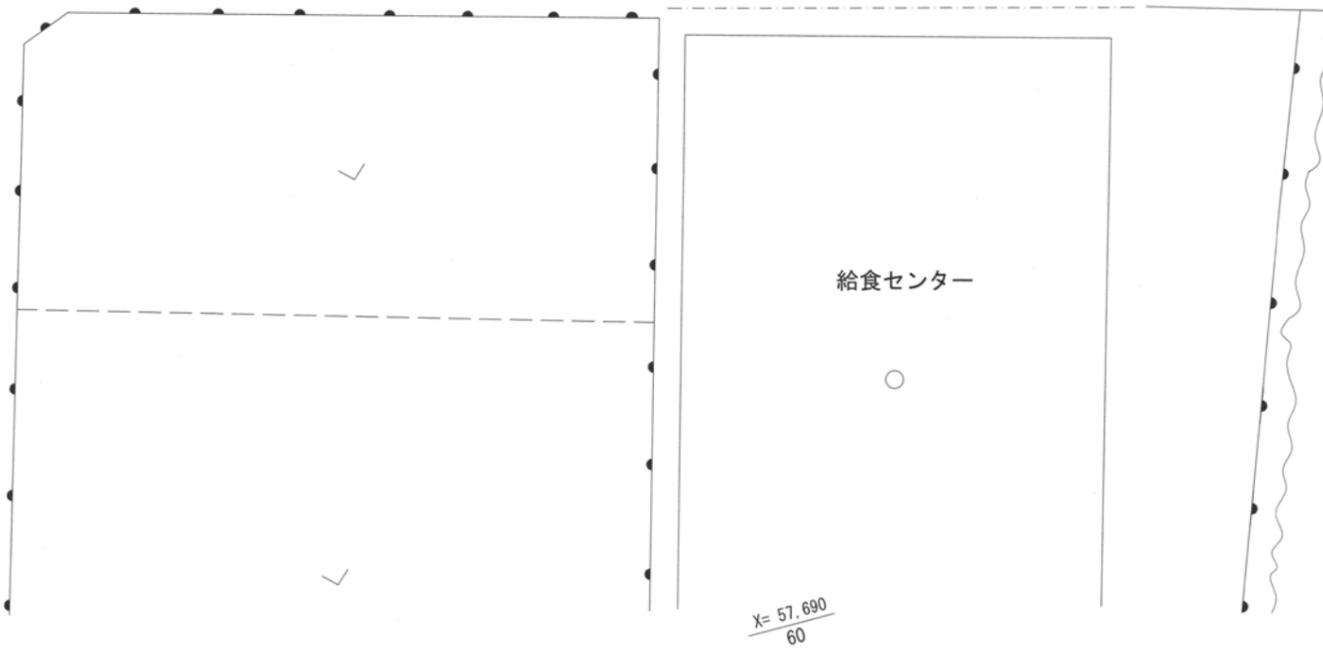
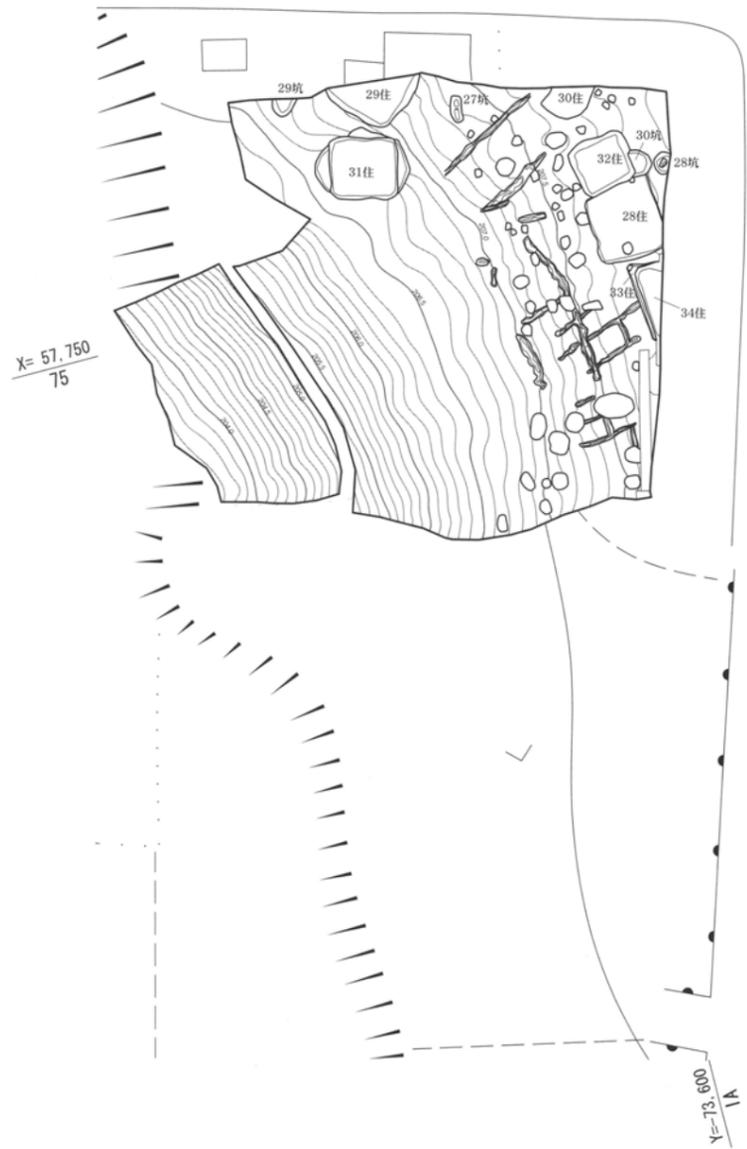
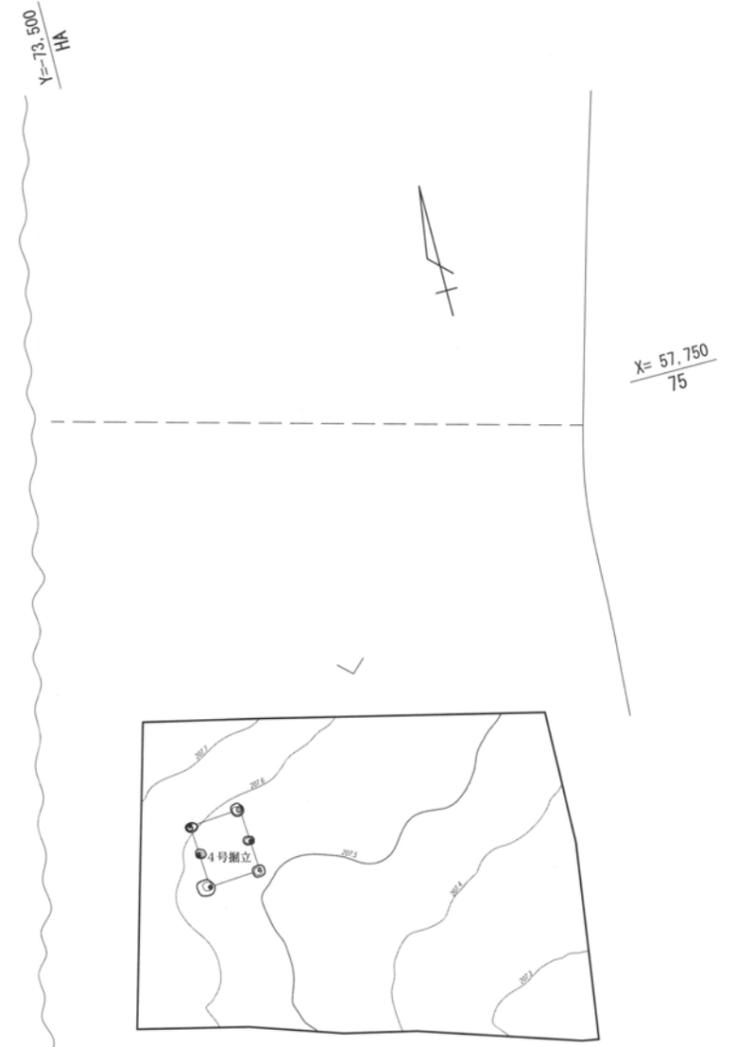
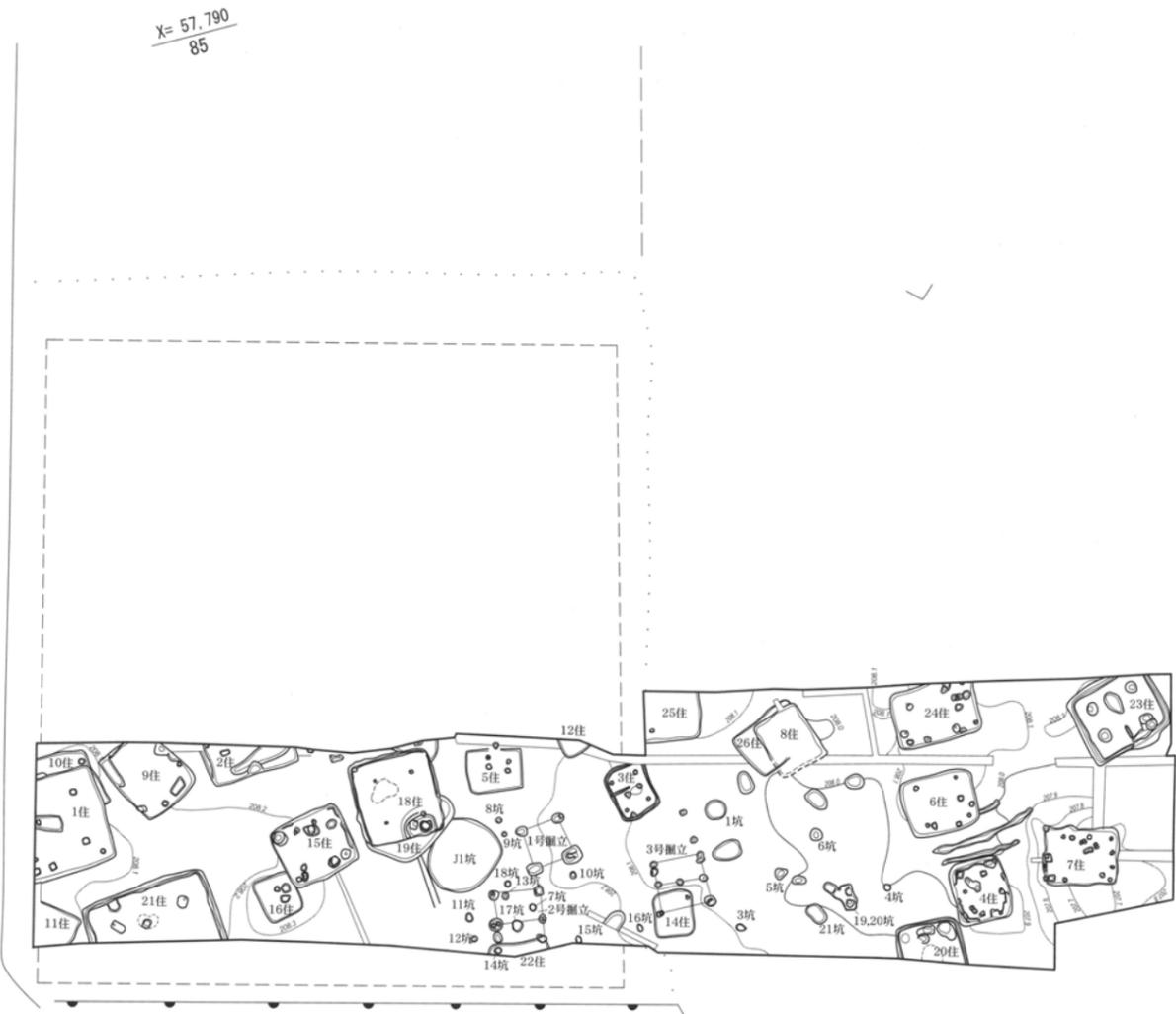
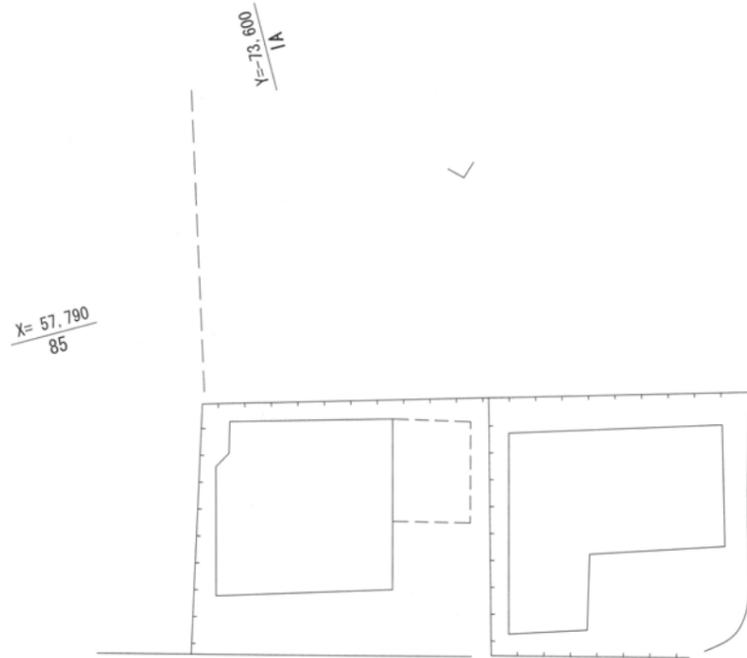
52図 縄文時代 石器(35)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



53図 縄文時代 石器(36)

0 1:4 10cm



54図 ローム上面全体図

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物

本節では、F A下黒色土からローム上面（ローム漸移層）にかけて検出された、古墳時代前葉に比定される集落跡を中心とした遺構と遺物に関して述べる。本遺跡の場合、古墳時代地表面がF PとF Aによって厚く覆われているため、その良好な遺存度は、他地域の遺跡に比してかなり高く、F A下の黒色土中より古墳時代前葉の集落跡の調査を果たせた。竪穴住居跡を主体とした集落跡であるが、他に掘立柱建物跡4棟を検出している。Ⅱ区とⅢ区台地部に集中した占地状況であり、竪穴住居跡相互が重複・近接する配置からも、数段階を経た居住痕跡とみることができよう。

調査はF A下面の文化層終了後に、人力により下層の黒色土～黒褐色土を掘り下げた。いわゆる遺物包含層であり、多量の土器片が出土した。この際、既にF P下面において凹地として、その存在が把握し得た1号住居跡等はF A下面よりセクションベルトを設定し、周堤帯の把握に努めた調査を併行した。その他の住居跡は包含層を徐々に下げ、淡色黒ボク土及びローム漸移層において平面形確認を果たす通常の調査方法をとった。

その結果、1号住や21号住、23号住などの掘り込みの深い大型の住居跡を得ることができたが、それ以外に3号住や16号住などの掘り込みの浅い小型住居も併存する可能性が見られた。確実な同時性が保証されない限り断定できないが、おそらく集落内の住居組成においては、大型住居と小型住居の共存はあり得たものと考えられる。また、当時の生活面をF A下黒色土中に設定したとしても、掘り込みの深さの差は歴然としており、大型住居－小型住居の居住形態や居住環境の差が当初から設けられていたことが想起されよう。

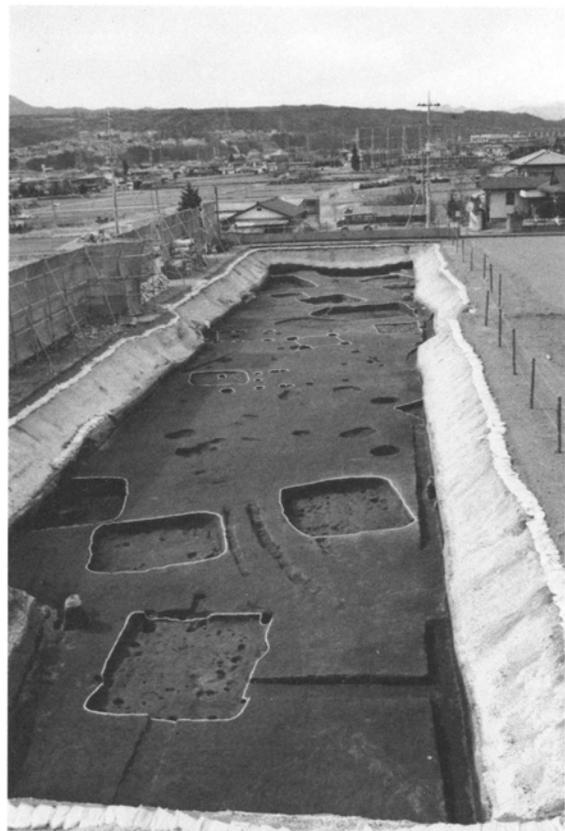
さらに、4棟のみであるが、掘立柱建物跡も重要な施設である。おそらく高床式の倉庫や居住施設と思われるが、調査ではその性格までは特定できなかった。詳細は後述するが、占地傾向は台地中央部と

東端に位置する傾向があり、重複する竪穴住居跡もあるが、分別の傾向は見受けられよう。

本来ならば、集落内の施設としては、祭祀跡や垣などの施設が古墳時代集落には付設する。しかしながら、本遺跡の発掘調査では、竪穴住居跡などの竪穴施設を主眼にしたため、祭祀跡などを特定するに至らなかった。遺構外出土遺物である、HY-72・74等の土器集中出土地点はその可能性を持つ。

東側低地部であるⅠ-2区では木製品がまとまって出土した。調査も終盤に差し掛かった段階での出土で、記録化は充分ではなかった。伴出する土器が見られず、詳細な時期決定には至らないが、F A下黒色粘質土の上層より出土することからも、Ⅱ区集落跡と同時期の古墳時代前葉を考えている。

竪穴住居跡平面形の検出時にローム漸移層で幾条かのサク状遺構を検出した。住居跡との重複状況から、住居廃棄後に開削されたものと捉えられ、居住域→生産域といった用益地の変容も想定されよう。



Ⅱ-2区遠景（東から）平成11年度の調査

Ⅲ 検出された遺構と遺物

1号住居跡 (図版3～5)

Ⅱ-2区西端で調査した大型の竪穴住居跡である。F P下面調査の際には、凹地に営まれた長サク状畠跡が検出された箇所である。いうまでもなく、凹地は本住居跡の埋没が完了せずに、高低差約60cm程の凹みとして、F A及びF Pによる埋没を迎えることになる。このように凹地としてその存在を残す竪穴住居跡は、当地域では弥生時代や古墳時代の大型住居跡に良く見られる現象のようだ。通常の洪積台地では、凹地は自然堆積あるいは人為埋土によって平坦となり、あるいは後世の削平によって平坦になってしまうのである。また、凹地として残る場合、竪穴住居跡はその付随する施設として壁周りの周堤帯をも残す例が大多数である。本住居跡も、F A除去後壁周りの高まりを5cm間隔の等高線で資料化した(55図)。南側と北東側の周堤帯が顕著で、若干南東側が低くなる傾向が見られた。南側の例からは幅約3.7m、高さは約35cm程である。緩やかな盛り上がりであり、我々が想起するしっかりした盛り土による堤状でなかった。これは、住居跡構築後F A降下前に至る間、人為的あるいは自然営力による周堤帯を構成する盛り土が流出して、なだらかな形状となったと考えられる。また、垂木の痕跡も精査を重ねたが確認できなかった。

本住居跡は西側を現道で遮られ、西半を調査区域外へ延ばす。調査は東半のみに限られ、全体像は把握できないが、おそらく平面形は軸長5.7m程の整った方形を基調としており、深さも60cmを超え、壁もロームを地山として直立気味に立ち上がる、しっかりした作りである。おそらく大型住居跡の部類に入るものと捉えている

重複遺構としては、北側の周堤帯下より10号住が本住居跡に切られる。また、東側壁にも住居状の方形の落ち込みがあり、調査当初は13号住として、位置付けたが、10号住の延長としても可能性を持ち、また、極めて浅い落ち込みのため、住居跡とはせず、13号住は欠番扱いとした。また、床面中央に大型の方形土坑が検出され、調査中は床下土坑としての考

えも念頭においたが、土層観察の結果、住居埋没過程における人為的な掘り込み(土坑)と判断した。しかしながら性格は不明である。

床面は中央が僅かながら段状に凹み、2段の床面となる間取りであろうか。硬化面は中央部に顕著である。

柱穴は中央の方形部の隅(P1・P2)、及び外周の南東隅に顕著な例が(P4)見られた。いずれも90cm以上の深さで柱痕も観察できた。また、南西隅にかけて辺長40cm程の方形土坑が検出された(P5)。位置的には柱穴としての可能性を持つが、貯蔵穴としての蓋然性が高い。

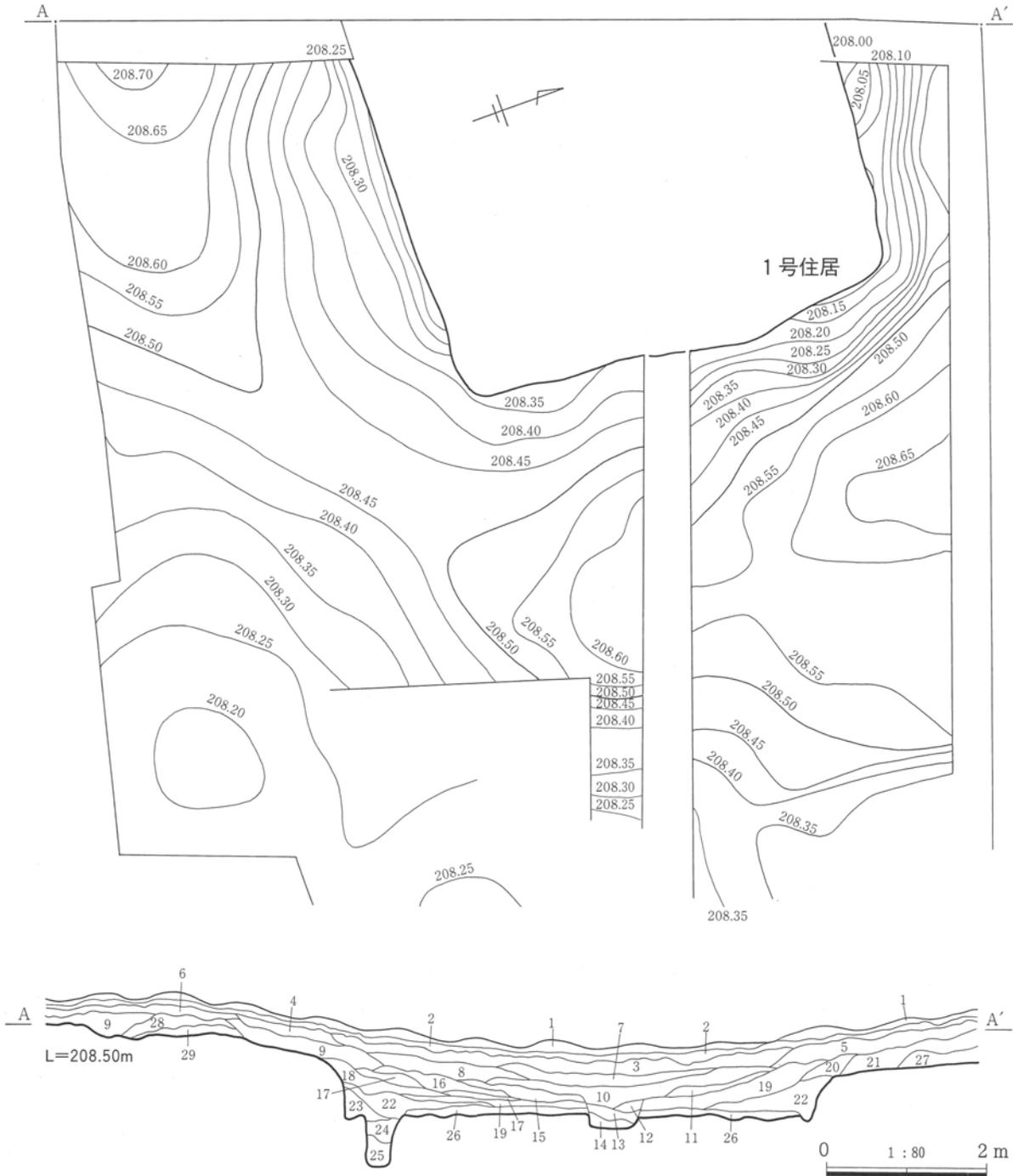
壁周溝は幅狭の溝が北壁の一部を残して巡るようだ。北壁で途切れる箇所は壁も若干ながら緩やかであり、あるいは入り口施設等の存在のため周溝が途切れるのであろうか。

さて、1号住は本遺跡屈指の焼失家屋である。埋土中より炭化物の出土が顕著であり、床直及び床直上では柱・梁・垂木に相当する炭化材が多量に出土している。特に南側炭化材の残存度が比較的良く、大型のものが集中している。また、火力が強かったのは北側なのか、埋土中に焼土塊がまとまって確認された。おそらく土葺き屋根の一部が火災により焼土化したものと捉えられる(a-a')。

貼床は大型のローム塊を主体とした鈍黄褐色土を主体としており、全体に硬く締まっていた。床下遺構として幾つかの浅い土坑が検出されたが、構築時の掘削坑であろうか。その中で、床面では検出し得なかった方形のピット(d-d')を見ることができた。貯蔵穴の作り替えであろうか。

遺物は埋土出土が圧倒的に多く、床面出土のものは38や40の磨石類である。土器類は小形器種の出土が目立ち、3や5が壁際の埋土中層より出土している。またF A下で周堤帯上から炭化した桃種子が2点出土しているが、本住居跡に伴う例かは不明である。

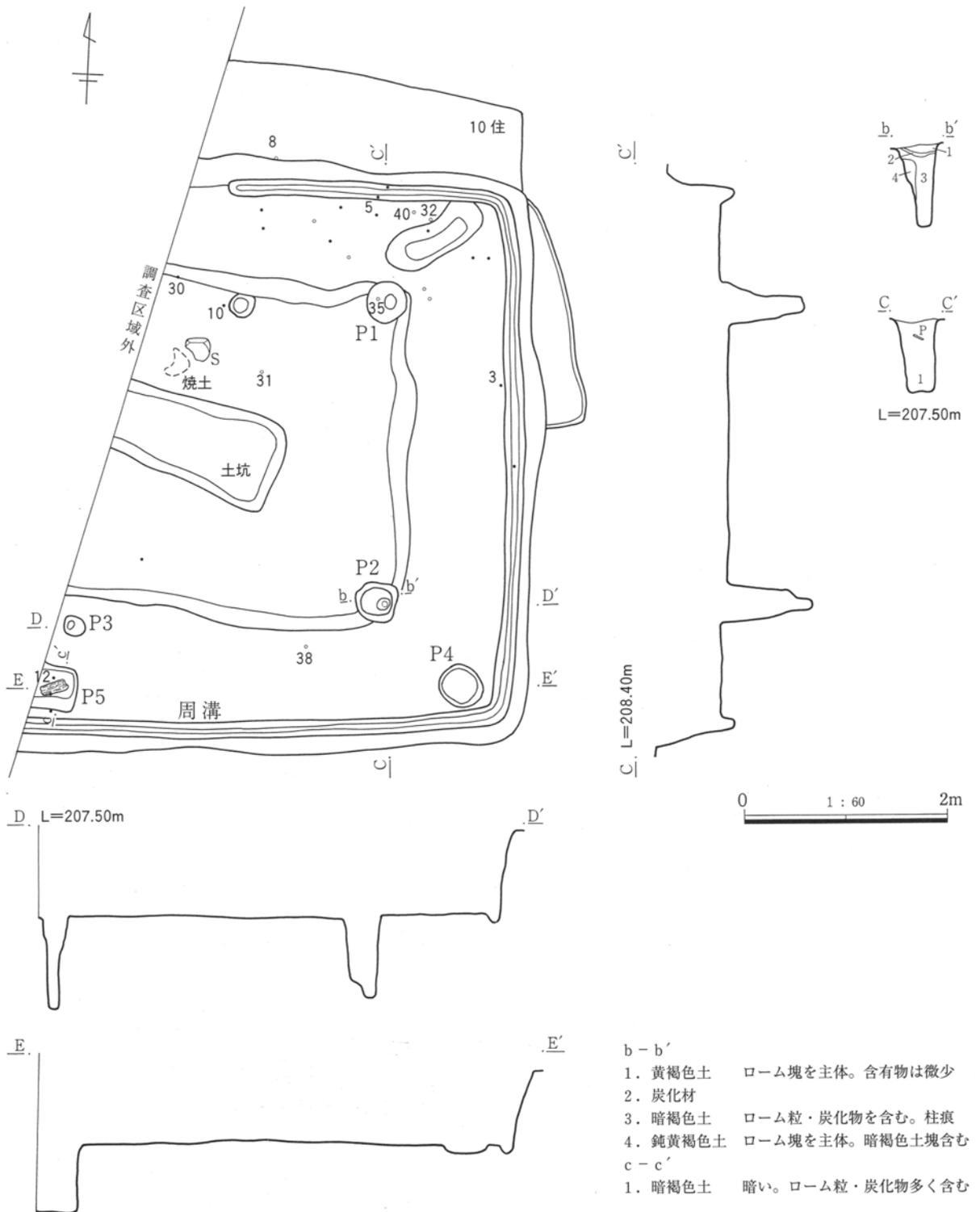
住居跡



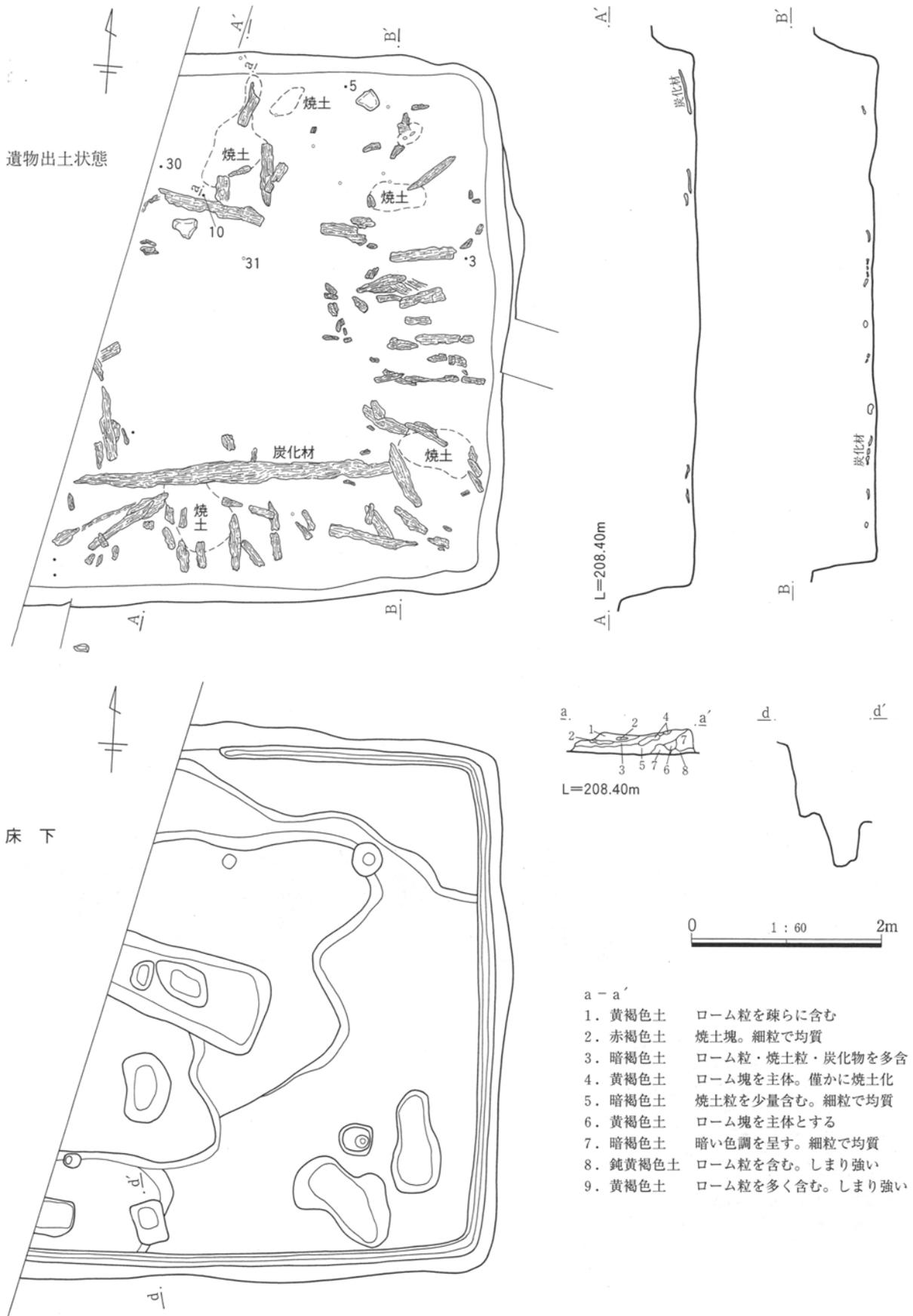
- | | | | | |
|----------|----------|--------------|-----------|--------------|
| 1号住 | 10. 黒褐色土 | 多量の炭化物を含む | 20. 黄褐色土 | ローム塊主体とする。硬い |
| 1. 黒褐色土 | 11. 暗褐色土 | 明るい。ローム粒多含 | 21. 黒褐色土 | 灰色味を帯びる。炭化物含 |
| 2. Hr-FA | 12. / | 炭化材・ローム塊を多量含 | 22. / | ローム塊。炭化物・焼土含 |
| 3. 暗褐色土 | 13. / | 明るい。炭化材・ローム粒 | 23. 明褐色土 | ローム塊主体。炭化材含 |
| 4. 褐色土 | 14. / | 暗い。炭化材・ローム粒含 | 24. / | 明るい。炭化物片少量 |
| 5. / | 15. 褐色土 | 炭化材・焼土粒・ローム塊 | 25. / | ローム塊・炭化物を少量含 |
| 6. 暗褐色土 | 16. 暗褐色土 | 均質。炭化物・ローム粒含 | 26. 鈍黄褐色土 | 大型のローム塊の貼り床土 |
| 7. / | 17. / | 均質。明るい。炭化物含む | 27. 暗褐色土 | 細粒で均質。包含物も微少 |
| 8. / | 18. 褐色土 | 均質。暗い。ローム塊少含 | 28. 褐色土 | ローム塊の周提帯構成土 |
| 9. 褐色土 | 19. / | 炭化材・ローム塊を多量含 | 29. 暗褐色土 | 黒色土塊の周提帯構成土 |

55図 1号住周辺地形図(F A下)

Ⅲ 検出された遺構と遺物

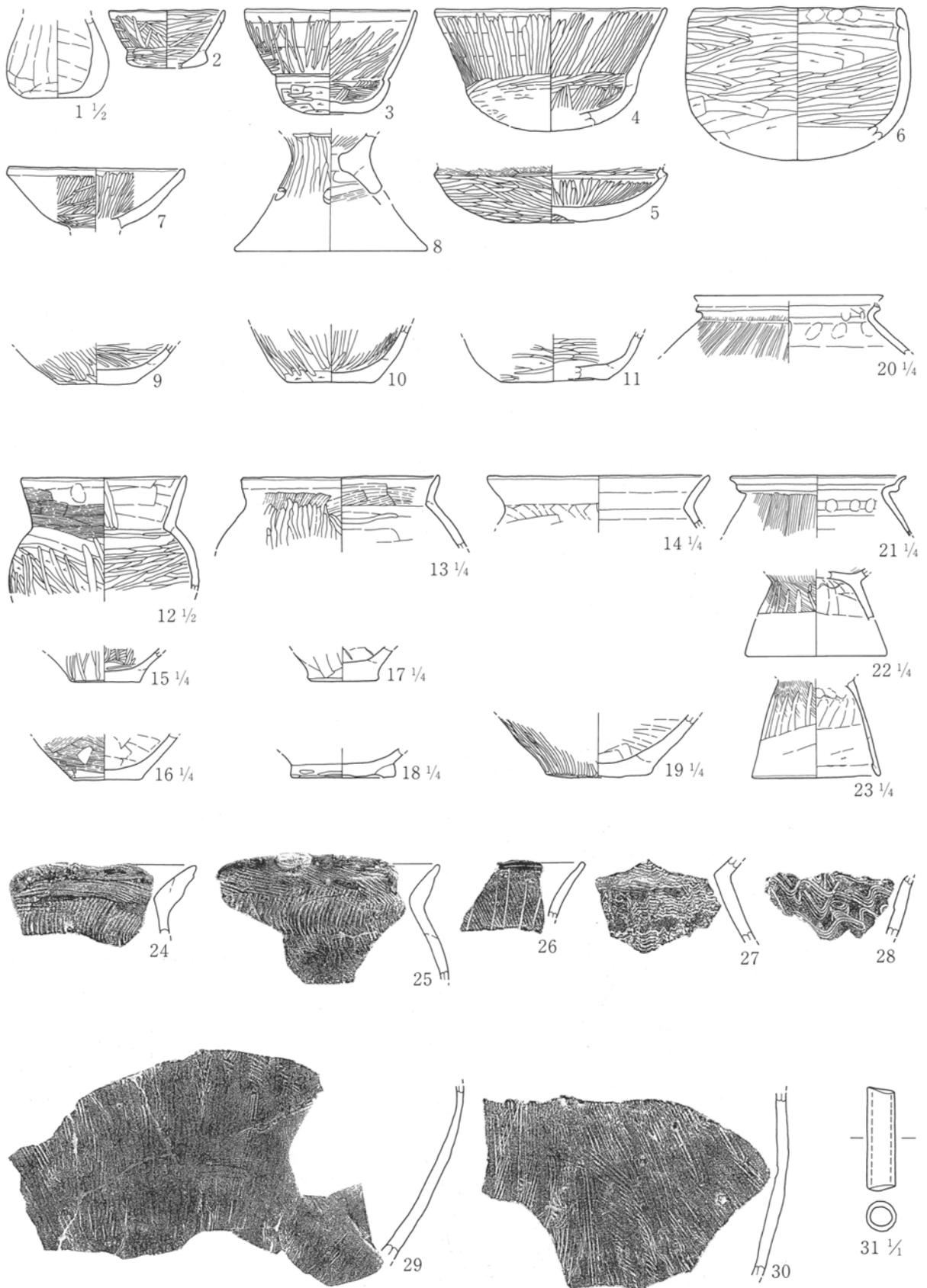


56図 1号住居跡床面



57図 1号住居跡遺物出土状況・床下

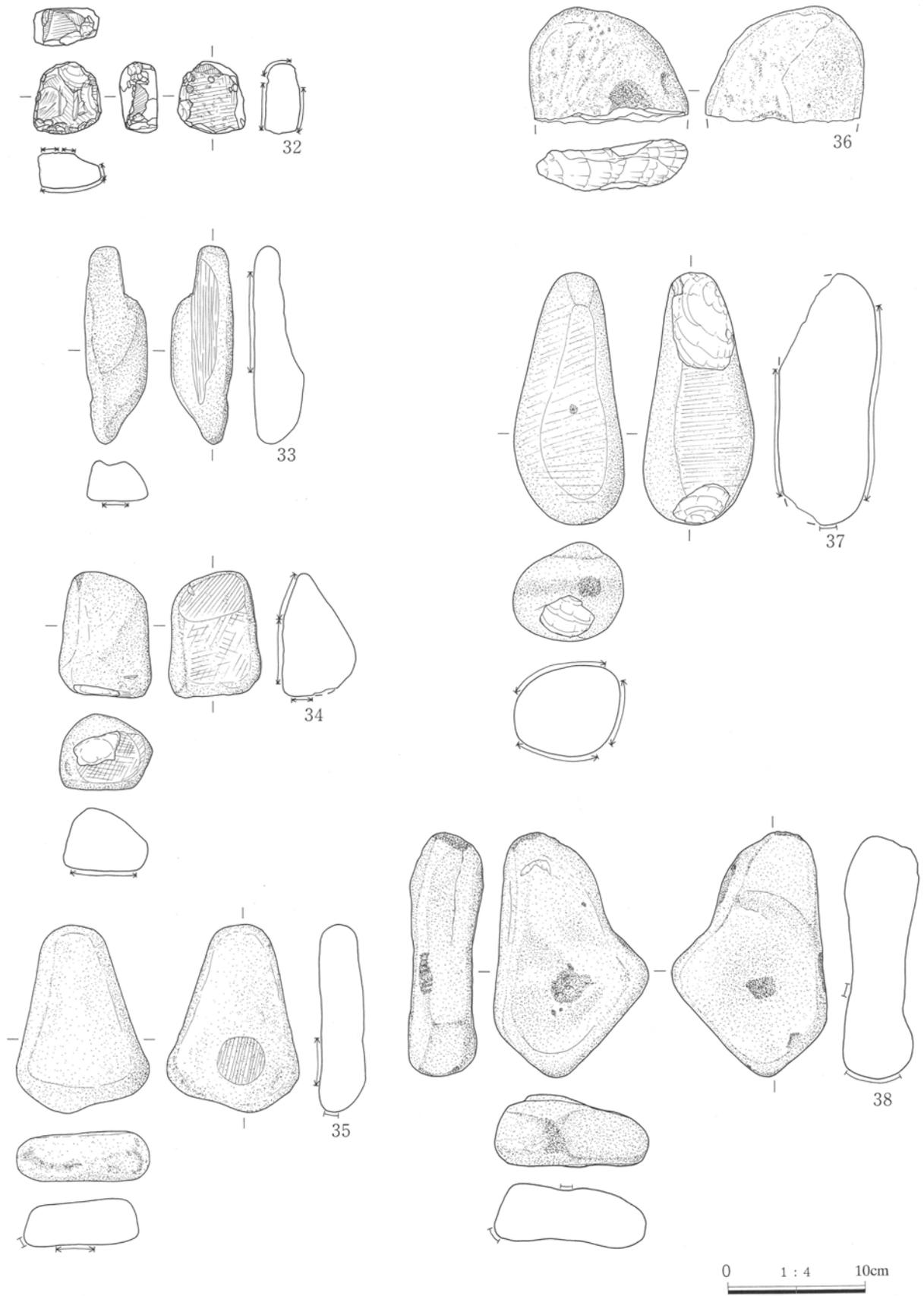
Ⅲ 検出された遺構と遺物



58図 1号住居跡出土遺物(1)

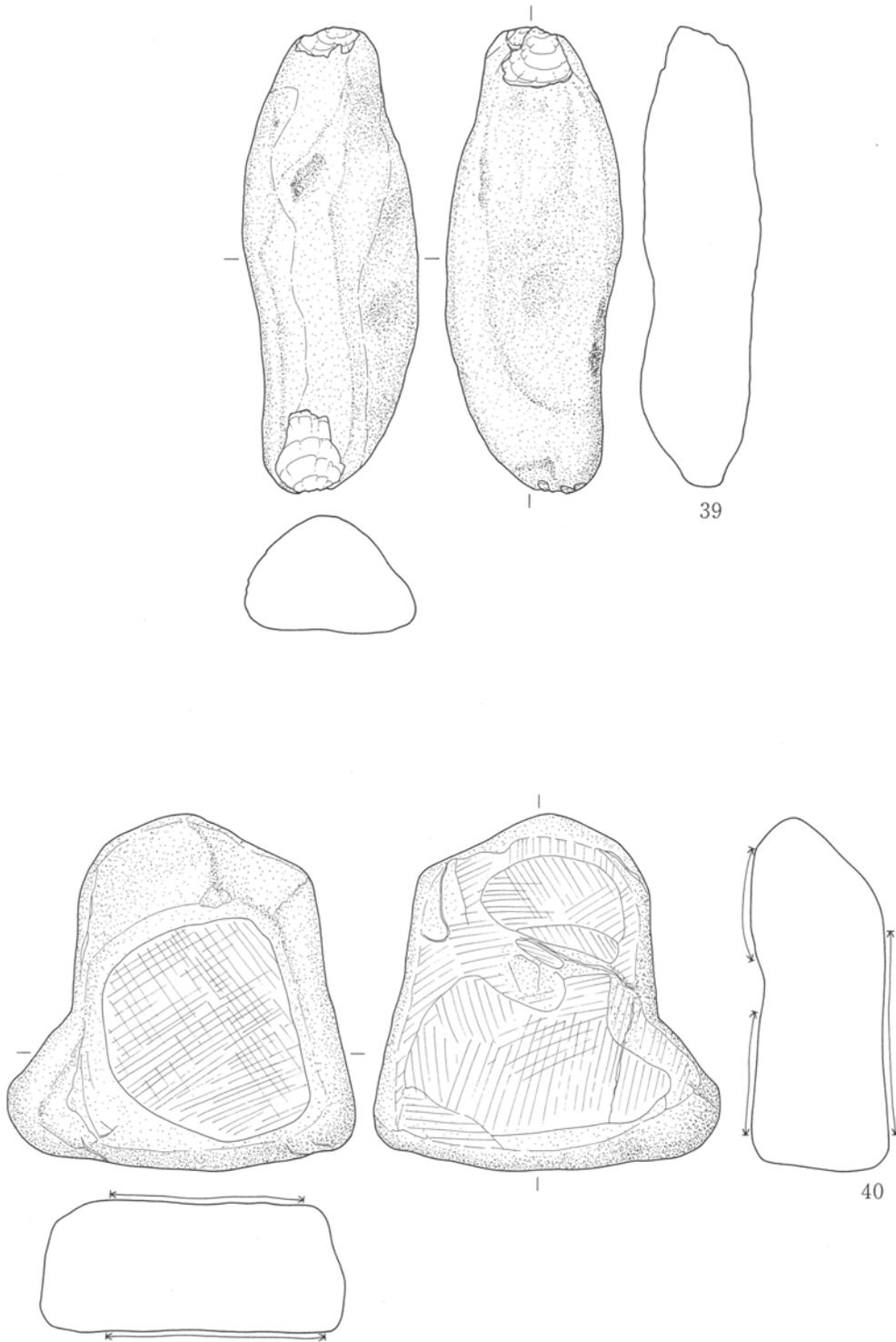
0 1:3 10cm

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



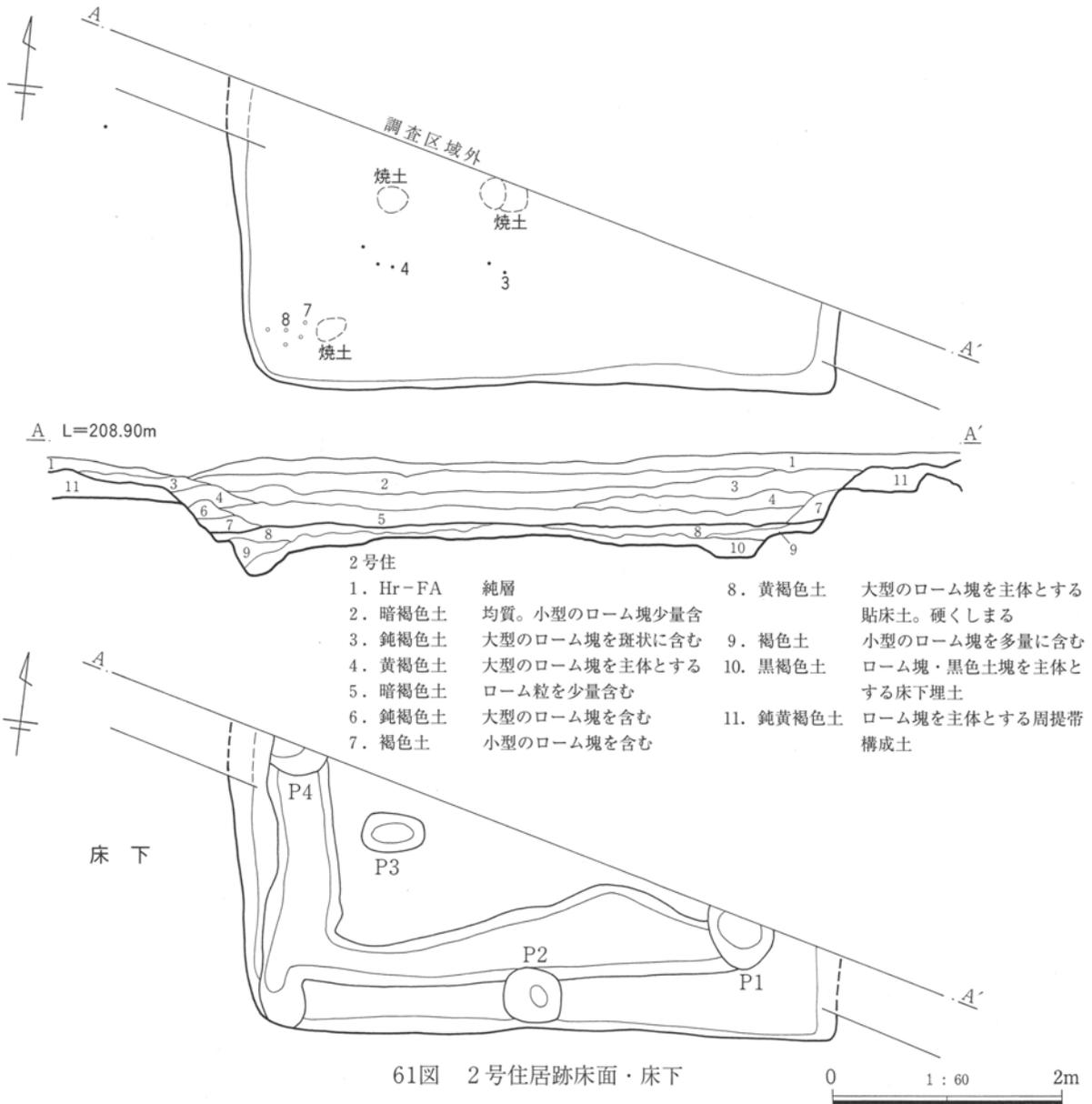
59図 1号住居跡出土遺物(2)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



0 1 : 4 10cm

60図 1号住居跡出土遺物(3)



61図 2号住居跡床面・床下

2号住居跡 (図版5)

II-2区北西部の調査区北壁際で調査された。北側を調査区域外に延長し、南半のみの調査となった。調査範囲では重複する遺構は無いが、東側に9号住が近接する。また南側3m程に15号住が南東には18号住が近接する、西側の住居跡群の中にある。

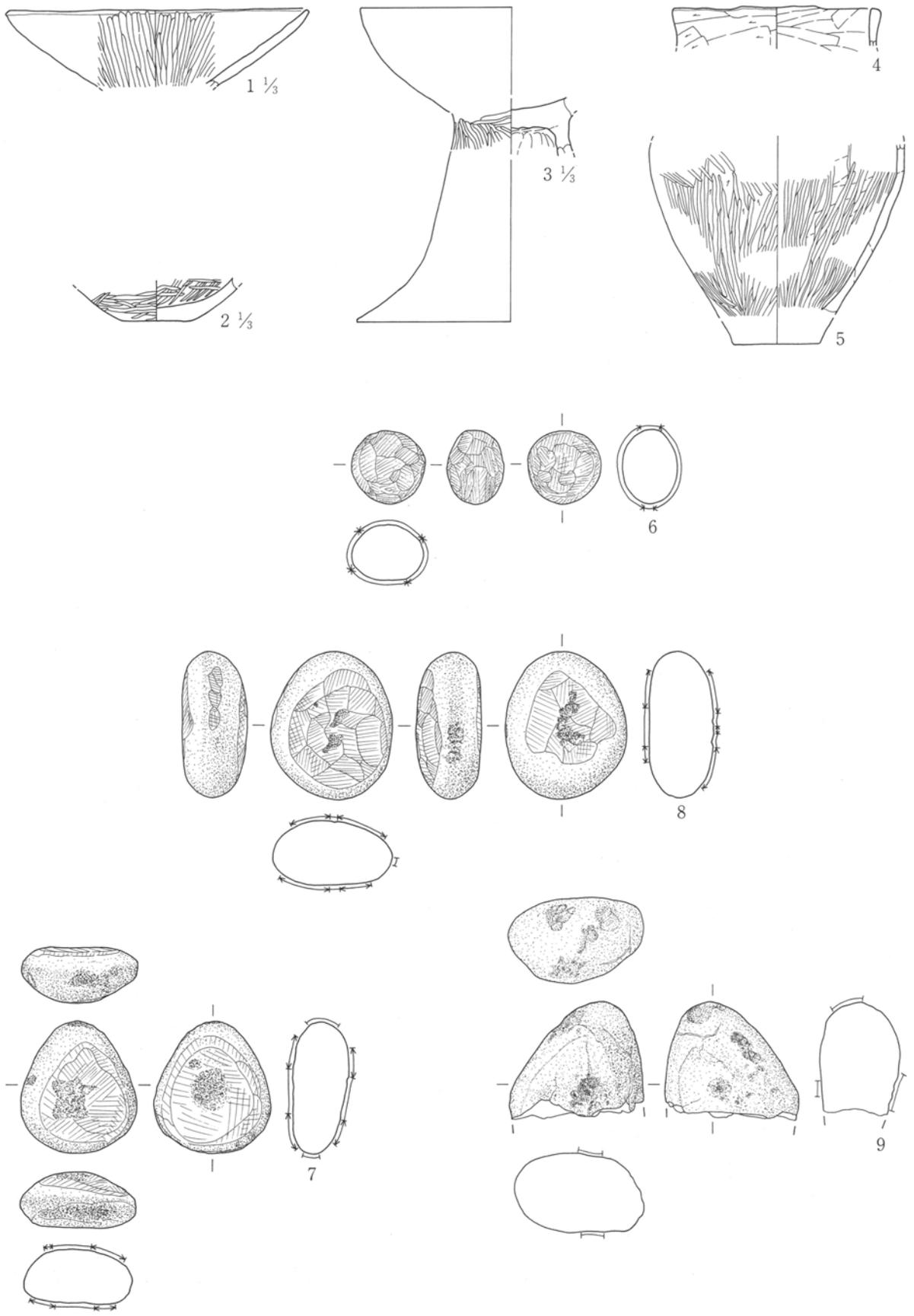
平面形は南半のみの検出のため判然としないが、主軸長5.2m程の方形を基調とすると思われる。大型の住居であるが掘り込みは比較的浅く、地山ロームを僅かに掘り込む程度で、確認面である漸移層から2cm程の深さである。壁も直立気味ではあるが、浅いために全体に弱い印象を受ける。

埋土は鈍黄褐色土や暗褐色土を主体にする。全体にローム塊を多く含み、人為的な埋没行為が想定できよう。

周堤帯は調査着手時は確認できなかったが、土層断面に僅かにその痕跡を認めることができた。ローム塊を主体とした、鈍黄褐色土によるものである。1号住とは深さに差があるため、あるいはその後の開削行為などから、周堤帯はほぼ消失したものと捉えられよう。埋土にローム塊が多かったことから凹地の段階を経ずに人為的に埋没を完了させたと考えられる。

炉は特定できなかったが、床面の各所に焼土が散

Ⅲ 検出された遺構と遺物



62図 2号住居跡出土遺物

0 1:4 10cm

布していた。床面中央相当の北壁にかかる箇所が焼土と炭化物の散布が著しいため、調査区域外ではあるが、中央やや北寄りに炉の存在を想定した。

柱穴も良好な例を得られなかった。床面からはピット平面形を特定し得ず、床下調査の際に精査を重ねたが、柱穴に相当する深さを誇るピットは検出できなかった。位置的にはP1～P4が相当するがいずれも浅く、確定性に乏しい。

壁周溝は見られず、貯蔵穴は確認できなかった。

貼床は床面全域に渡ってローム塊を主体とする黄褐色土からなる。北壁より中央及び南西隅に硬化面が著しく、全体に硬く締まっていた。

さて、床下調査で新たな平面形が検出された。本住居跡の内側約40cm程に、軸をやや北に傾けて新たな南壁を見ることができた。また、この新たな壁に沿って溝状に巡る床下形状を検出した。ローム塊を含む黒色土を埋土としており、明らかな人為埋土を示唆することから、本住居跡は拡張・建て替え住居の可能性が高く、拡張時に軸をやや南に変えたものと考えられる。ただし、確定的な柱穴が得られておらず、拡張住居としての可能性は土層観察と床下調査から得られたが、建て替え痕跡は見出せなかった。重複住居の可能性も考慮すべきだろう。

遺物は極めて少ない。埋土下位より床直上にかけて散漫な散布を見せた。その中で、7・8の磨石類が南西隅の硬化面上で出土している。

3号住居跡（図版5）

II-2区中央、調査区北壁寄りで検出した。2号住と同様に漸移層での確認である。重複遺構はなく単独の検出で、北に25号住や12号住が近接する。また、北東隅を北壁試掘坑に破壊される。

長軸を北北西に向ける小型住居である。東壁がやや内湾する隅丸方形を平面形とする。軸長は約3.1×2.4mを測り、深さは約13cmと極めて浅い。漸移層確認において一部焼土が浮いた状態で検出されたために、急遽住居跡として確認作業に入り、辛うじて床面を検出できたのである。

周堤帯は確認できなかった。

床面はローム層を掘り込むこともなく、非常に軟弱で硬化面を見ることはできなかった。色調変化も乏しく確認作業は小試掘坑を設けて、床面確定作業を行った。この断面観察による僅かな色調差と中央やや東寄りで確認できた炉址の広がりから、住居跡として床面検出作業が果たせた。

炉は床面中央やや東寄りで焼土をまとめて確認した。概ね70cm×50cm程で、主軸に沿った楕円状の散布状態である。掘り込みは極めて浅く、ほぼ平坦面に築かれた状態である。上面に焼土塊を多く見ることができ、周辺には焼土粒や炭化物の散布も少量見られた。

柱穴は四本柱穴を配置良く確認できた。径20cmほどの小規模な柱穴で、深さも18～21cm程度にとどまる浅い例である。柱穴間距離は短軸方向が約1.5m程でまとまるのに対し、長軸方向は東辺が1.8mで西辺が1.6m程で若干の差を設けていた。

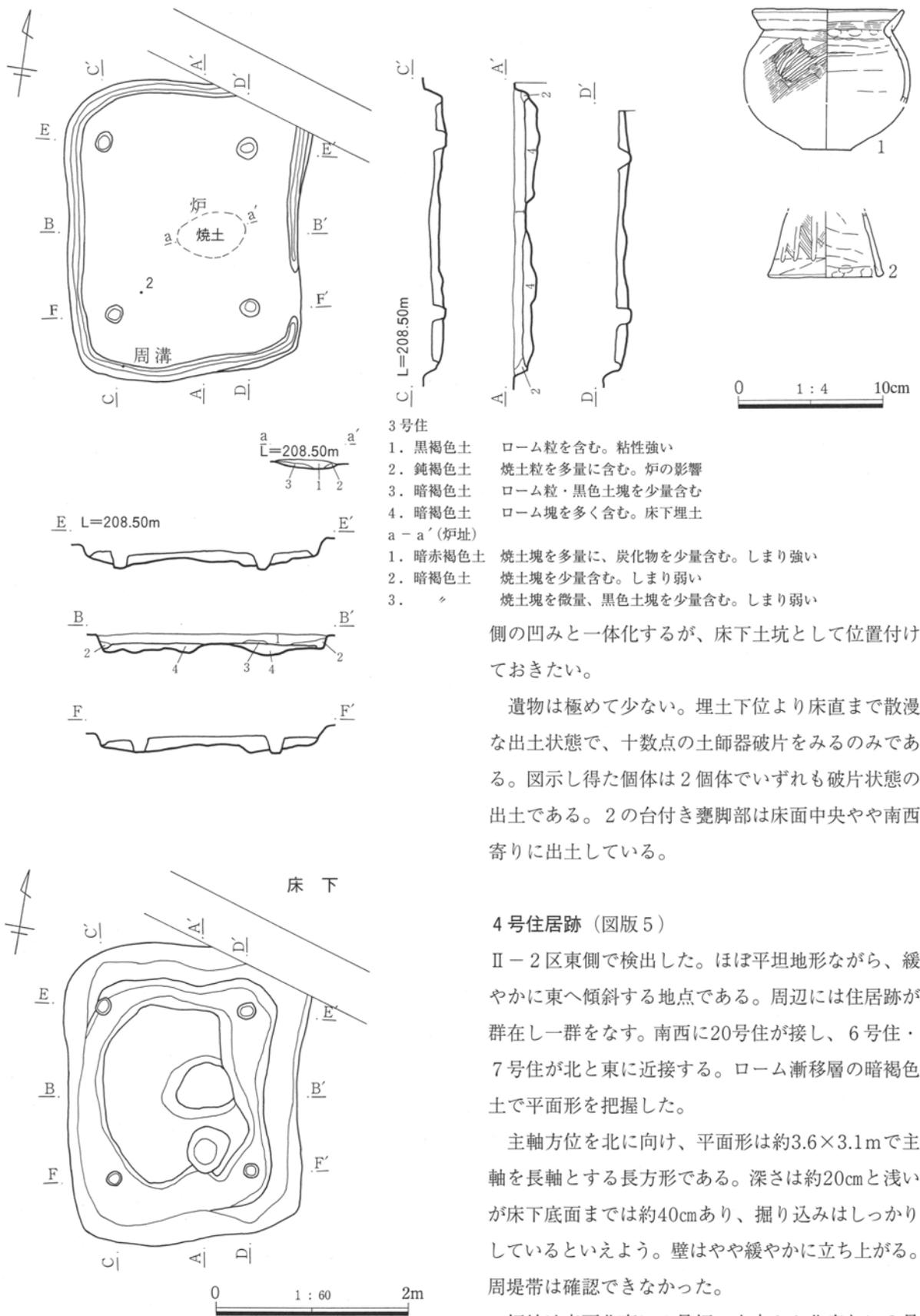
壁周溝はほぼ全周する傾向だが、東壁の一部で途切れる。1号住北壁に見られた入り口などの施設も想定されるが、壁そのものの遺存が悪く、確定には至らない。

貯蔵穴は床面上では確認できなかった。

貼床は床面全域に暗褐色土を基調に覆われていた。ローム塊を含むとはいえ前述のように軟弱な床面であった。

床下調査では、中央部が高まり、壁内側が大きく凹む例を検出した。本遺跡の該期住居跡では比較的普遍的な床下状態であり、掘削時における動作と作法が想起されよう。住居平面形を方形に仕上げる方法としては、簡便な方法なのかもしれない。また中央床面の強度と壁周囲の施設の設営にも利便性が保たれたのであろう。本住居跡床下も中央部東寄りが僅かながら盛り上がる。この箇所は床面調査では炉址が設けられており、住居構築時に既に炉位置を念頭においた掘削が指向されていた可能性がある。その他の床下調査で得た施設としては、中央部やや南東寄りで、径50cm程の土坑を確認した。浅く、壁内

Ⅲ 検出された遺構と遺物



63図 3号住居跡床面・床下・出土遺物

側の凹みと一体化するが、床下土坑として位置付けておきたい。

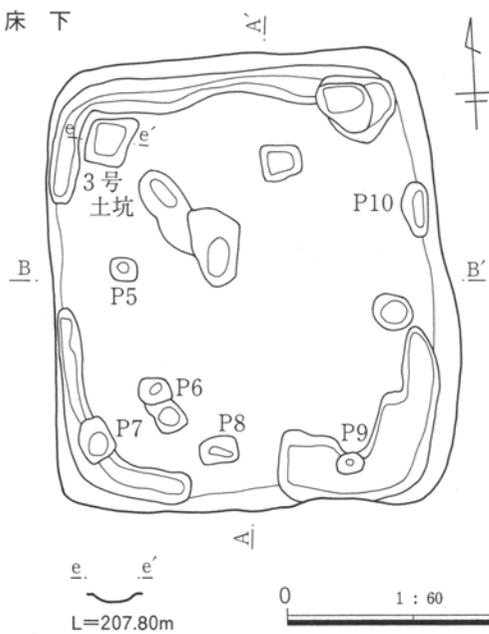
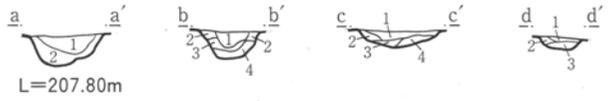
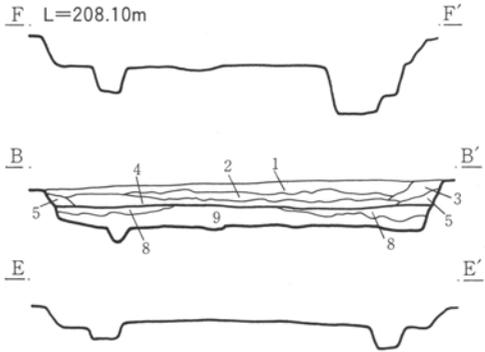
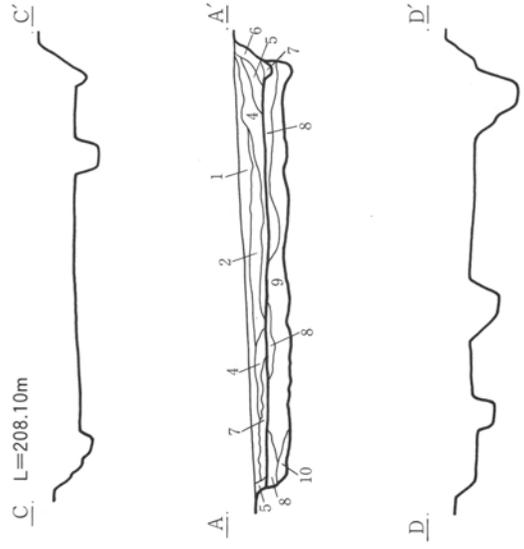
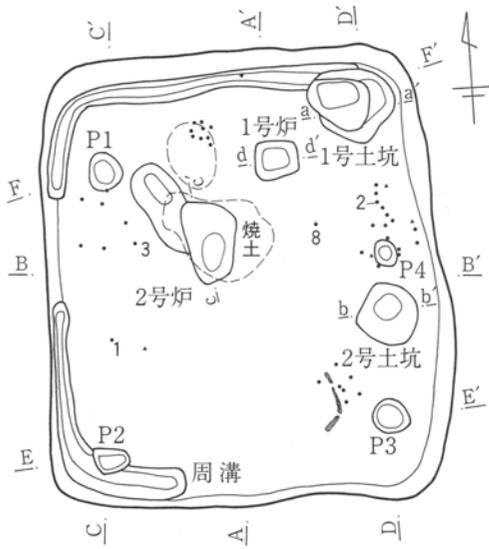
遺物は極めて少ない。埋土下位より床直まで散漫な出土状態で、十数点の土師器破片をみるのみである。図示し得た個体は2個体でいずれも破片状態の出土である。2の台付き甕脚部は床面中央やや南西寄りに出土している。

4号住居跡 (図版5)

Ⅱ-2区東側で検出した。ほぼ平坦地形ながら、緩やかに東へ傾斜する地点である。周辺には住居跡が群在し一群をなす。南西に20号住が接し、6号住・7号住が北と東に近接する。ローム漸移層の暗褐色土で平面形を把握した。

主軸方位を北に向け、平面形は約3.6×3.1mで主軸を長軸とする長方形である。深さは約20cmと浅いが床下底面までは約40cmあり、掘り込みはしっかりしているといえよう。壁はやや緩やかに立ち上がる。周堤帯は確認できなかった。

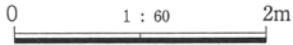
炉址は床面北東に1号炉、中央やや北寄りに2号炉を検出した。1号炉は辺長30cm程の方形の浅い掘



4号住

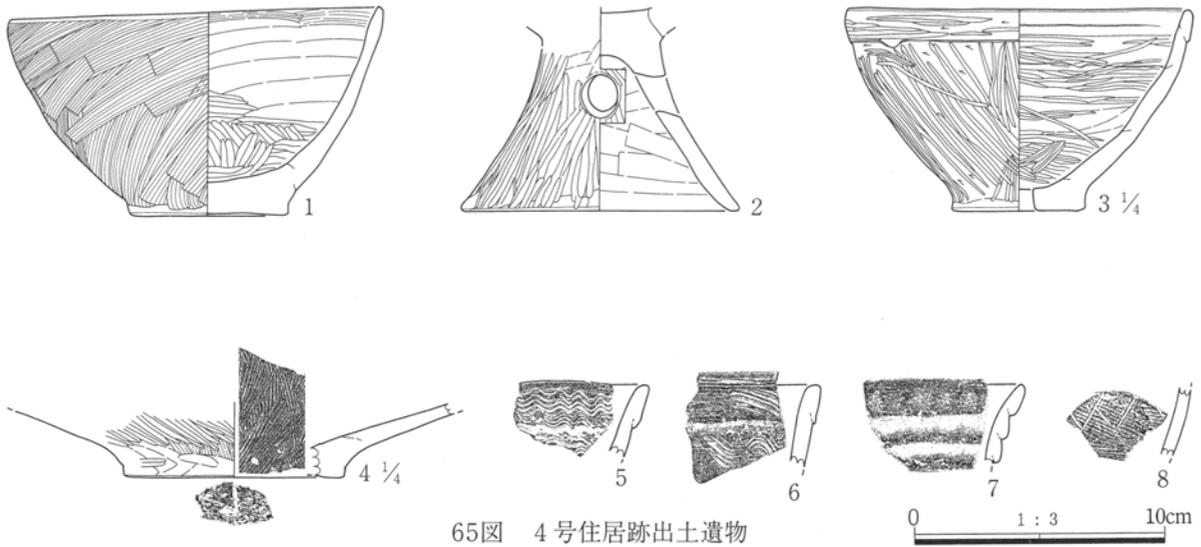
- 1. 暗褐色土 細粒で均質。白色粒・ローム粒を多く含む
- 2. 黒褐色土 細粒で均質。白色粒・ローム粒を少量含む
- 3. 暗褐色土 ローム塊を多く含む。しまり弱い
- 4. 黒褐色土 ローム粒・炭化物・焼土粒を少量含む
- 5. 暗褐色土 大型のローム塊を多く含む。しまり弱い
- 6. 黒褐色土 ローム粒・黒色土塊を少量含む。焼土は微量
- 7. 褐色土 暗褐色土塊・ローム塊を斑状に含む
- 8. 黒褐色土 ローム塊を少量含む。貼床土。硬くしまる
- 9. 褐色土 ローム塊を多く含む。床下埋土
- 10. 褐色土 ローム塊を主体とする

- a - a' (1号土坑・貯蔵穴)
 - 1. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまり弱い
 - 2. 褐色土 ローム塊を多量に含む。しまり弱い
- b - b' (2号土坑・柱穴)
 - 1. 黒褐色土 ローム塊を少量含む。しまり弱い。柱痕か
 - 2. 褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりやや強い
 - 3. 黒褐色土 ローム粒を微量含む。しまり弱い
 - 4. 暗褐色土 ローム塊を多量に含む。しまり強い
- c - c' (2号炉)
 - 1. 鈍褐色土 焼土を多量に含む。焼土部分は硬くしまる
 - 2. 褐色土 ローム塊・黒色土塊による。しまり弱い
 - 3. 暗褐色土 黒色土塊を多く含む。しまり弱い
 - 4. 黄褐色土 ローム塊を主体とする。しまり強い
- d - d' (1号炉)
 - 1. 黒褐色土 炭化物・焼土塊を少量含む
 - 2. 鈍赤褐色土 焼土層。炭化物を少量含む
 - 3. 褐色土 焼土塊を多量に含む。しまり弱い



64図 4号住居跡床面・床下

Ⅲ 検出された遺構と遺物



65図 4号住居跡出土遺物

り込みを持ち、中層に焼土層を堆積する。2号炉は軸長60cm程の不整楕円状の浅い掘り込みを有す。周辺にも焼土・炭化物が散布しており、1号炉に比して規模は大きい。両者とも積極的な遺物の出土は見なかった。

柱穴は床面上で検出したP1～P4及び2号土坑を充てたい。P1～P4はいずれも径20～40cm程で浅く小規模なものだが、配置上から柱穴と判断した。あるいは1号土坑の一部に重複していた可能性もある。2号土坑は貯蔵穴とする解釈もあるが、土層観察で柱痕を見いだしたため、柱穴とした。また、床下調査で得られたP5～P9も柱穴としての位置付けが妥当であろう。

貯蔵穴は1号土坑を充てた。北東隅に設けられ、配置的にも妥当性が高く、径約70cm程の不整円形ながら、規模も良好な例である。ただし、柱穴としての可能性も残しており、検討を要する。

壁周溝は北壁と西壁中位から南壁の隅にかけて検出した。東壁は設けられておらず、また、西壁の一部が途切れていた。

貼床は全面に黒褐色土を貼床土として埋められていた。床面はほぼ平坦面を築き、硬化面は広く、床面中央及び2号炉周辺は特に硬く締まっていた。

床下調査で先述の柱穴としてのピットを確認したがそれ以外に、東壁際に不整形の小ピットを検出し

ている。柱穴とは判断できず、平面形状から梯子穴としての性格を想定した。また、床下の状態としては、壁周辺を広く凹み中央部を掘り残す普遍的な形態を示していた。

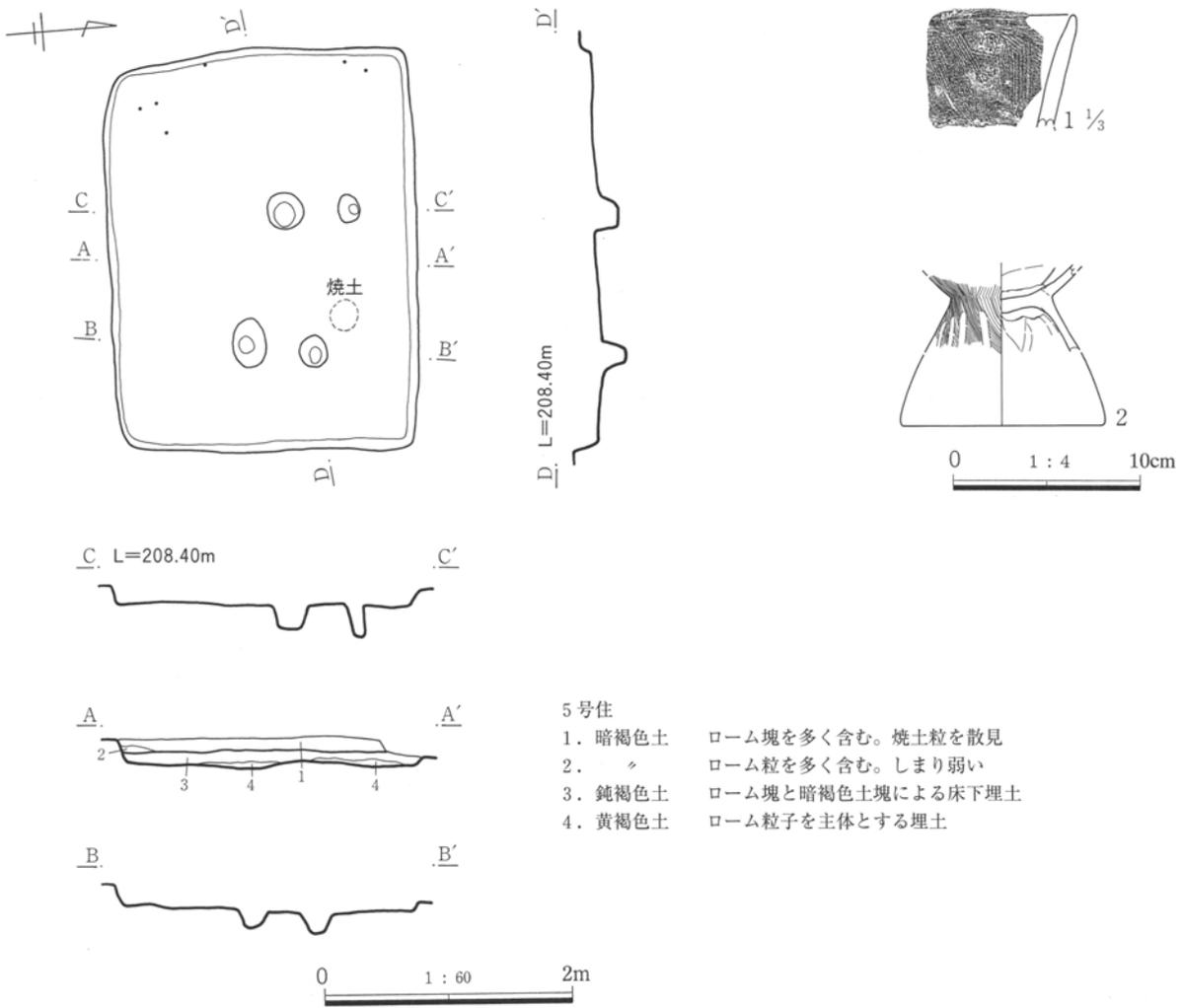
遺物は埋土中より比較的多く出土した。床面出土の物もあり、鉢(1)甑(3)が中央やや東寄りに距離を置いて出土している。また西壁寄りにも遺物の集中が見られ、高坏脚部(2)や甕破片(8)などが出土した。

5号住居跡(図版6)

Ⅱ-2区中央の調査区北壁に接して調査された。周辺はほぼ平坦地形で、Ⅱ区では高標高部分にあたる。約2m西に18・19号住、南約2.5mに1号掘立柱建物跡が近接する。重複遺構はなく、西側の住居群の東端に位置するといえよう。

ローム上面で平面形を確認した。漸移層の堆積がやや薄く、少量の遺物や焼土粒が散布するため、住居跡として平面確認を重ねた結果、ローム層上面で床面の露出を見る結果となり、住居跡として認定した経緯がある。埋土の特徴も漸移層と近似していたため、確認をローム層まで下げざるを得なかったのである。

本住居跡は、長軸を東に持つ長方形の平面形で、規模は約3.2×2.5mを測る小型住居である。浅く10



66図 5号住居跡床面・出土遺物

cm未満の壁高である。特に北側の遺存度が悪く、数cmの壁高だった。

周堤帯は調査区北壁にも痕跡は見出せなかった。

炉は確定的なものは検出できなかったが、床面中央やや北東寄りに僅かながら焼土が散布していた。あるいは炉址の可能性もある。

柱穴は炉址と同様にやや北東よりに4基のピットを確認し、一応柱穴と捉えた。平面規模・深さとも妥当性はあるが、配置が北東に偏っており、柱穴として確定できない。貯蔵穴・壁周溝は検出されなかった。

床面は平坦ではあるが、やや軟質で硬化面は中央部に僅かに認められたのみである。貼床は鈍褐色土で構成され、床面全域に渡っていた。

遺物は土師器片少量が出土している。西壁際で床

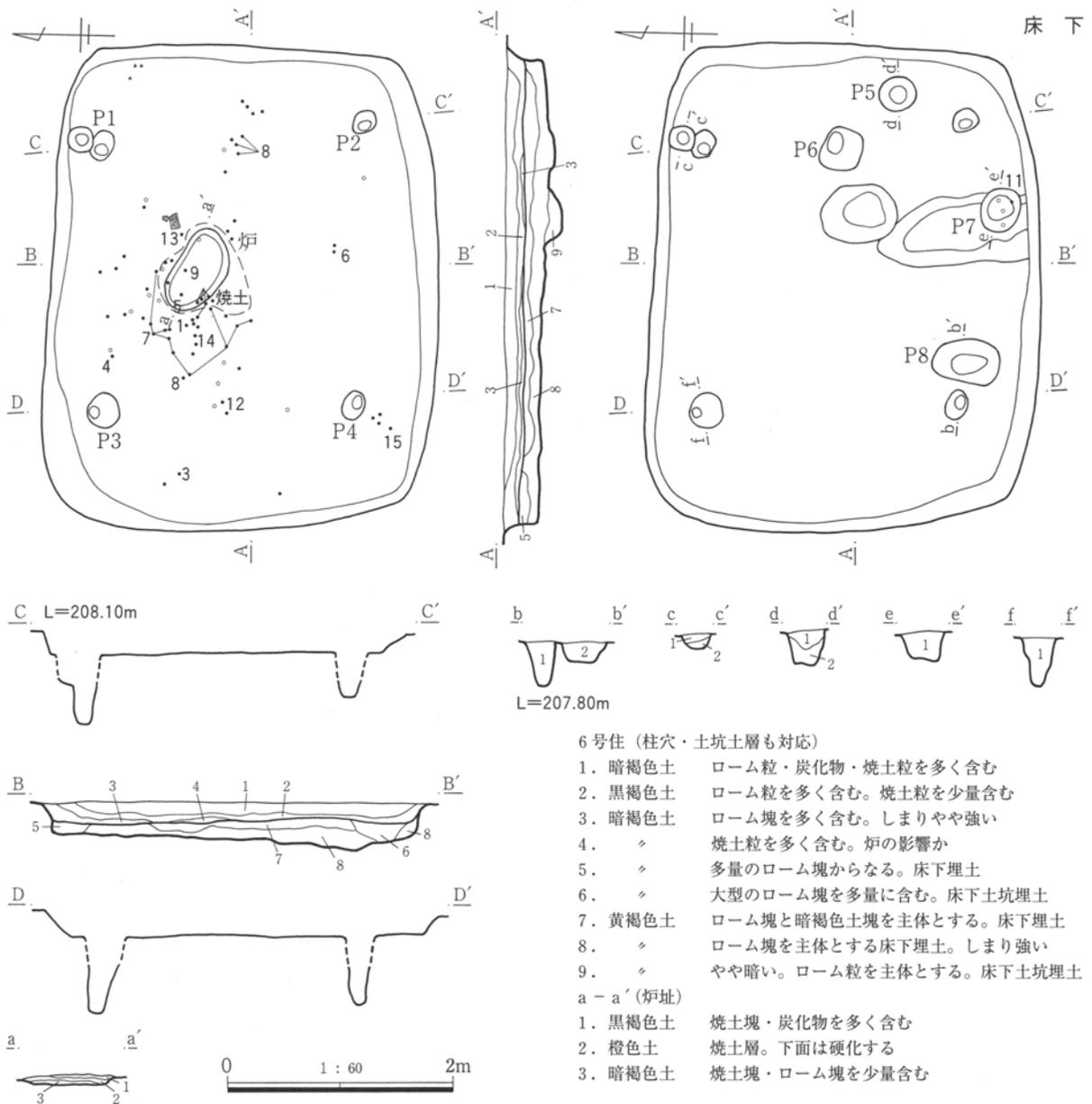
直・床直上の出土であるが、小破片のため本住居跡に直接的な関わりは薄いといえよう。甕口縁部破片(1)、台付き甕台部(2)を図示した。

6号住居跡 (図版6)

II-2区東側の住居群の中で調査した。ほぼ平坦地形ながら、東側へ緩やかな傾斜を見せる地点である。単独の検出となったが、周辺には南側に4号住、北側に24号住が近接する。平面形の確認はローム漸移層で果たした。調査着手時より遺物の集中が多く見られ住居跡として調査を進めたが、周辺の4号住やサク状遺構の平面形に惑わされ確認に手間取った経緯がある。

平面形は隅丸長方形で、長軸を東に向ける。規模は約4.2×3.4mで中規模の住居といえよう。床面ま

Ⅲ 検出された遺構と遺物



67図 6号住居跡床面・床下

での深さは約20cm程でやや浅い。確認に手間取ったためである。壁は緩やかな立ち上がりだが明瞭である。周堤帯は確認できなかった。

炉址は床面中央やや北にあり、軸長1m程の不整楕円状の掘り込みを有していた。軸方位が住居方位より南に傾く特徴があった。中層に焼土層を堆積し、周辺にも焼土粒・炭化物が散布していた。また、周辺には遺物の集中も多く見られた。

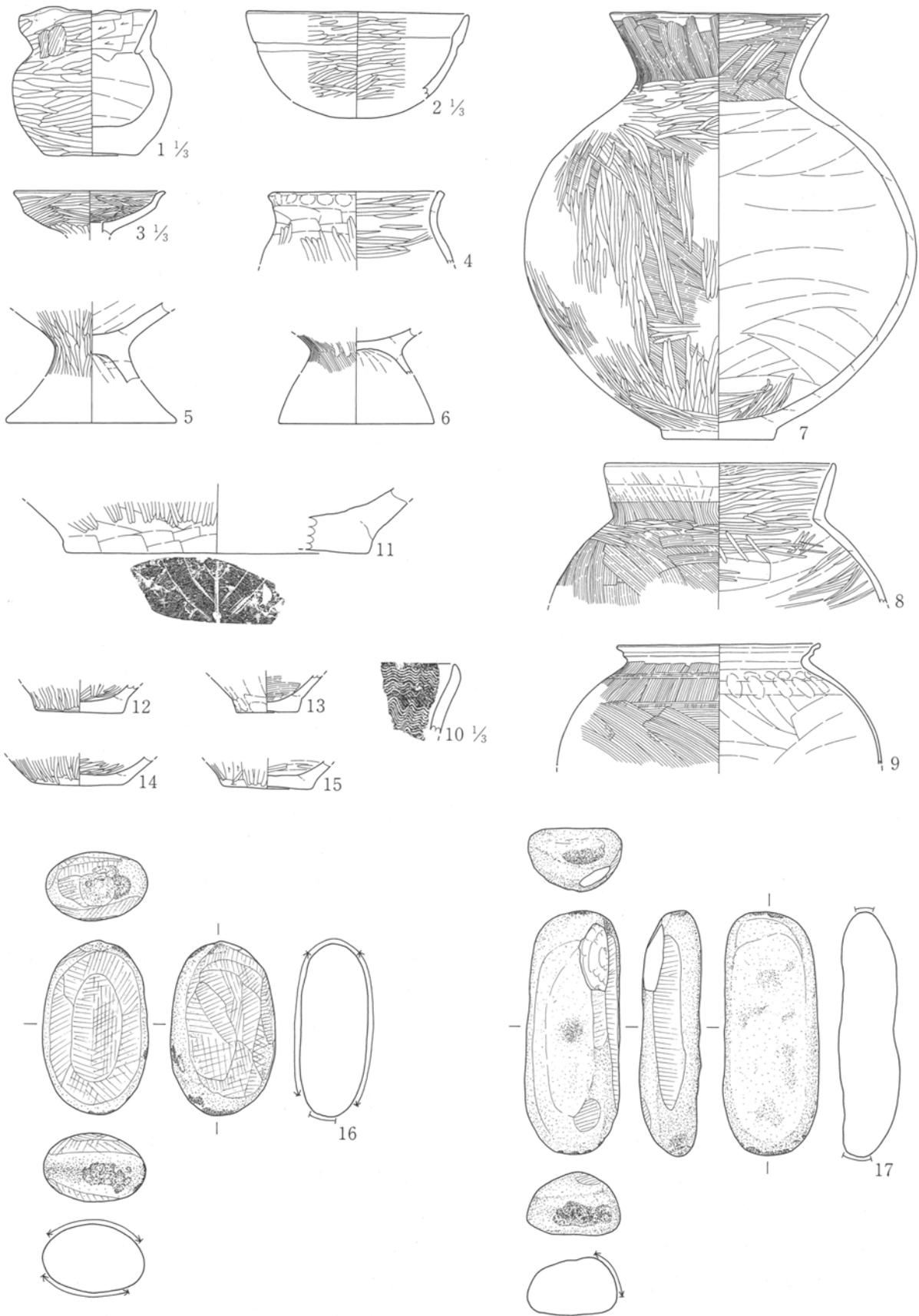
柱穴は床面では確認が果たせず、床下調査で得られたピット4基 (P1～P4) を配置から柱穴として捉えた。四本柱穴と見なせよう。いずれも浅く径

25～30cm程の小ピットだが、床面からの距離を鑑みると相応の規模になるものと考えられる。P1は2基の小ピットが接しており、あるいは建て替えや柱の付け替えがあったのだろうか。柱穴間の距離としては、ほぼ2.4～2.5mの範囲で収まり、極めて統一性のとれた配置である。柱穴土層の観察も果たしたが床下段階の観察に止まったため、柱痕は把握できなかった。

貯蔵穴は特定できなかった。壁周溝も無い。

床面はほぼ平坦面を築くが、壁下が僅かに凹む傾向が見られた。硬化面は中央部分が顕著で、特に炉

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



68図 6号住居跡出土遺物

0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物

周辺が硬く締まっていた。貼床は黄褐色土で構成され、床面全域を覆う。

床下底面はローム上面で止まる。硬質土のためであろうか。床下遺構としては、P5～P8及び床下土坑2基を確認した。底面は凹凸が多いものの平坦であり、特徴的な掘削痕跡は見出せなかった。また、床下土坑2基のうち南壁に接する1基からは大型の甕破片(11)が出土している。

遺物は比較的多く出土している。平面形確認段階から、遺物の出土が多く、おそらく廃棄後の堅穴内への一括廃棄や短時間での流入によるものと捉えられる。出土層位も埋土下位～床直上のものが多く、床面に密着する例は少ない。炉周辺の集中が顕著でやや床面から浮いた状態で甕類(7～9)を中心にミニチュア土器(1)・甕台部(5)・底部破片(12～14)、磨石類(16)が見られた。甕類はこの炉址周辺を中心に周辺に散乱する状態で出土が見られ、例えば8は東側にやや距離を置いて見ることができる。また、器台口縁部(3)は西側で床面に密着して出土していた。尚、炉址東に近接して炭化材が1点出土している。焼失家屋としての可能性も指摘しておきたい。

7号住居跡(図版6)

Ⅱ-2区南東で調査した。周辺は東側への傾斜変換点で、洪積台地ながらも6～9月は湧水を見る箇所である。本住居跡の調査は冬期に行われたため、湧水に悩まされることはなかったが、確認面である漸移層にいたる黒色土が厚く堆積しており、この黒色土中で平面形の確認ができず、黒色土下位の若干色調が明るくなる面を選んで、調査を進めた。

重複遺構はなく、単独の検出である。近接する住居としては、西に4号住・北西に6号住があり、東側の住居群中に占地するといえよう。また、本住居跡東側はⅡ-1区であり、4号掘立柱建物跡のみの検出で、堅穴住居跡は検出されていない。堅穴住居跡群としては、東側住居群の東端にあたる位置ともいえよう。

長軸を西北西に向けるやや縦長長方形の平面形である。南辺長が北辺長に比してやや長く、そのため全体に歪な印象を受ける。規模は4.2×3.7mで中型の住居跡といえよう。深さが20cm程で、やや浅いのは遺構確認面も原因している。壁は暗褐色土からなるため、やや立ち上がりが弱く、南東隅等が判然としない部分がある。

床面は全体に軟弱であり、検出時も明瞭な把握に至らなかった。調査では、貼床土であるローム塊混在の黒褐色土上面をとりあえず床面としたが、柱穴や壁周溝等床面上施設の特定には至らず、床下調査での検出に委ねた。

尚、挿図69の平面図は床下遺構とも併せた状態で表現している。本住居跡の調査では、床下遺構と床面遺構の分別が極めて困難であったためである。

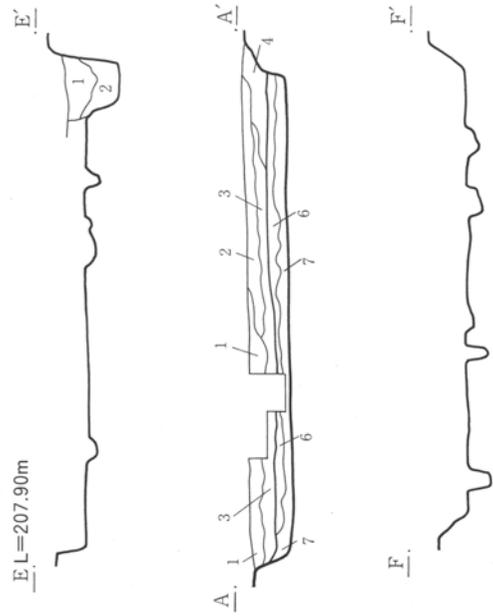
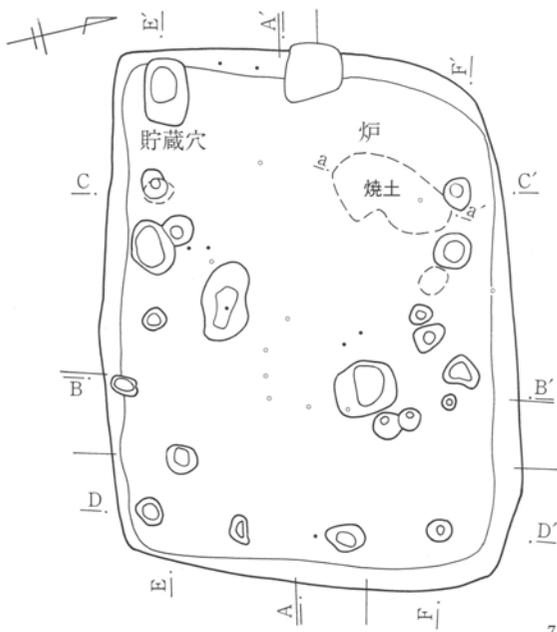
炉址は床面北西側にやや浮いた状態で確認した。床面上が極僅かに凹むものの、ほぼ平坦であり、焼土層もやや浮いた状態で堆積が見られ、炉址としての堆積状態として妥当ではない。ただ、本住居跡では焼土はこの箇所のみで検出されているため、調査時において炉址と判断したが、1号住にみられたような焼失家屋における土屋根焼土化の痕跡とも捉えることができ、確定的ではない。

柱穴は、前述のように床下調査で得られたピットを幾つか充てる結果となった。即ち、南壁と西壁及び北壁際に穿たれる小ピット群を壁柱穴として把握した。床面中央にも幾つかの土坑を見るが、配置的には壁際のピット列に妥当性を求めたい。

貯蔵穴は、南西隅にある方形の小型土坑を充てる。60×40cm程で深さは約40cmを測る。床面検出時より平面形は明瞭に把握できた。

壁周溝は検出できなかった。壁柱穴の並列を見るとあるいは存在し得たかもしれないが、土層断面観察でも抽出できなかった。

貼床は鈍黄褐色土と黒褐色土からなる。ローム塊を斑状に混在するため、床面の把握が難しかったが、床下の状態から、貼床は全域に及ぶ例として把握できた。

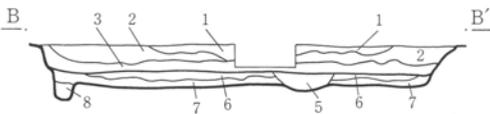


7号住

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|-------------|
| 1. 黒褐色土 | 炭化物・焼土多含む | a-a' (炉址) | |
| 2. 〃 | 炭化物・焼土少含む | 1. 橙色土 | 焼土層。炭化物含む |
| 3. 暗褐色土 | ローム塊多量含む | 2. 赤褐色土 | 焼土層。ローム塊少含む |
| 4. 〃 | ローム粒多量含む | 3. 黒褐色土 | 焼土・ローム塊少含む |
| 5. 〃 | ローム粒含む | 4. 暗褐色土 | ローム塊多含む |
| 6. 黒褐色土 | ローム塊含貼床土 | E-E' (土坑) | |
| 7. 鈍黄褐色土 | 黒色土塊床下埋土 | 1. 暗褐色土 | ローム粒多含む |
| 8. 褐色土 | ローム塊多含む | 2. 〃 | ローム塊多含む |



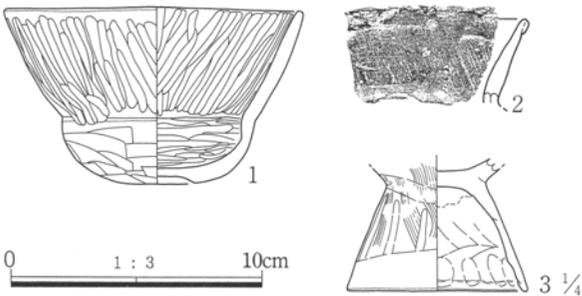
C. L=207.90m



0 1 : 60 2m

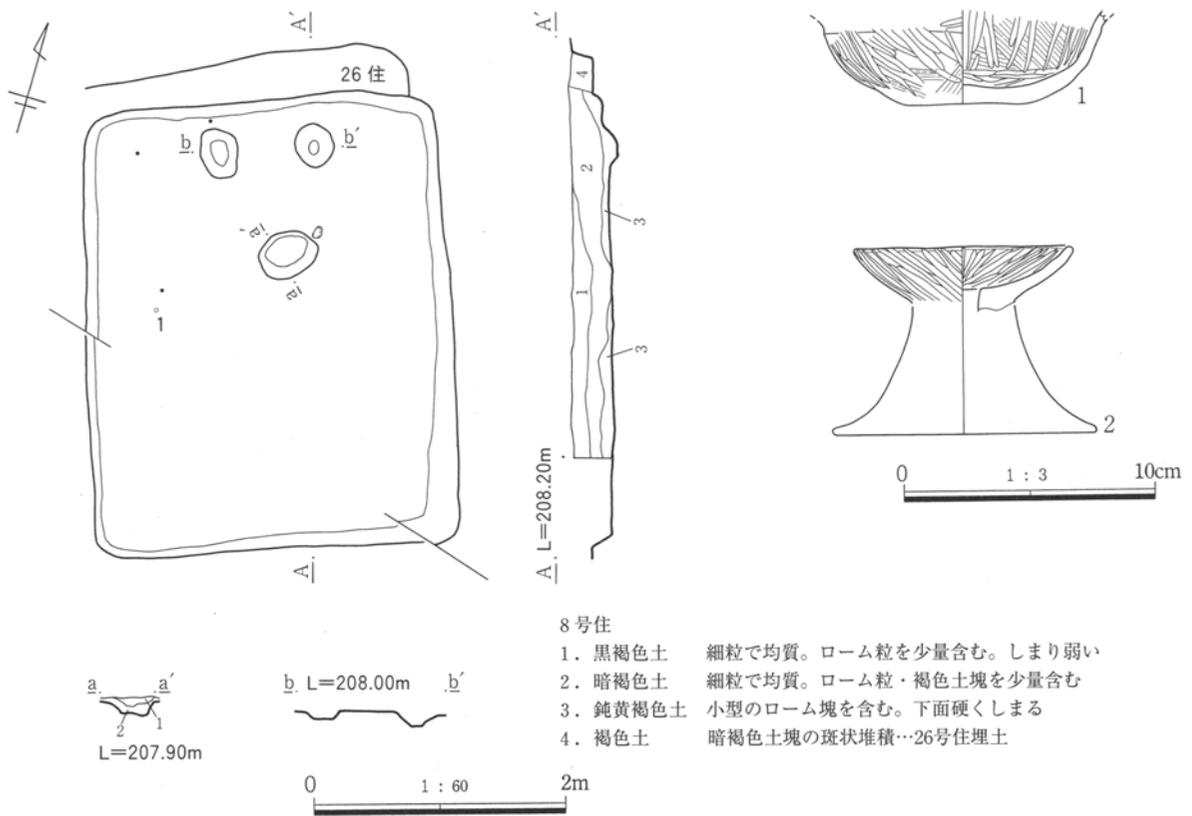
床下底面はローム層上面に至る。当該面の落ち込みの検出は用意であり、多くの小穴やピットを得ることができた。ただし、厳密な床下遺構としては明瞭な例は把握できなかった。前述の壁柱穴の一部があるいは床下施設としてあるのかもしれない。床下の状態は多くの小穴が開くもののほぼ平坦で、特徴的な床下の状況ではなく、また、構築時の掘削痕跡等も見出せなかった。

遺物は、住居跡中央部を中心に、埋土中位より下位にかけて少量出土している。破片状態の出土であり、本住居の生活痕跡には密接には関連しない。その中で、東壁際より小型埴（1）が出土しているのは注意されよう。



69図 7号住居跡床面・出土遺物

Ⅲ 検出された遺構と遺物



8号住

- 1. 黒褐色土 細粒で均質。ローム粒を少量含む。しまり弱い
- 2. 暗褐色土 細粒で均質。ローム粒・褐色土塊を少量含む
- 3. 鈍黄褐色土 小型のローム塊を含む。下面硬くしまる
- 4. 褐色土 暗褐色土塊の斑状堆積…26号住埋土

70図 8号住居跡床面・出土遺物

8号住居跡 (図版6)

平成11年度と平成12年度に渡って、分割調査された経緯を持つ住居跡である。Ⅱ-2区中央北寄り調査された。平成11年度は南西隅の調査にとどまり、次年度に他を調査している。

重複遺構として26号住が北半で重なる。新旧関係は発掘時の所見では8号住が26号住を切る様相を把握したが、両者とも掘り込みが浅く確定的ではない。

平面形は長方形で 長軸を北北西に向ける。規模は約3.5×2.8mでやや小型の住居である。深さは約10cm程度で浅い。

床面は貼床ではなく、ローム上面の褐色土を地床としていた。小規模な凹凸があるもののほぼ平坦面を築く。

炉址は床面中央やや北寄りで検出した、小規模な焼土範囲を充てたい。焼土は塊状堆積であるが、浅い掘り込みを持っていた。

柱穴は明瞭な例を把握できなかったが、北壁際に1対の小ピット2基を検出した。柱穴ではないが、

何らかの施設と思われる。

貯蔵穴・壁周溝は見られなかった。

遺物は極めて少量の出土に止まる。すべて破片状態の出土である。床直出土の坏(1)及び埋土出土の器台を図示する。

9号住居跡 (図版6)

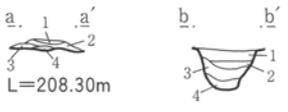
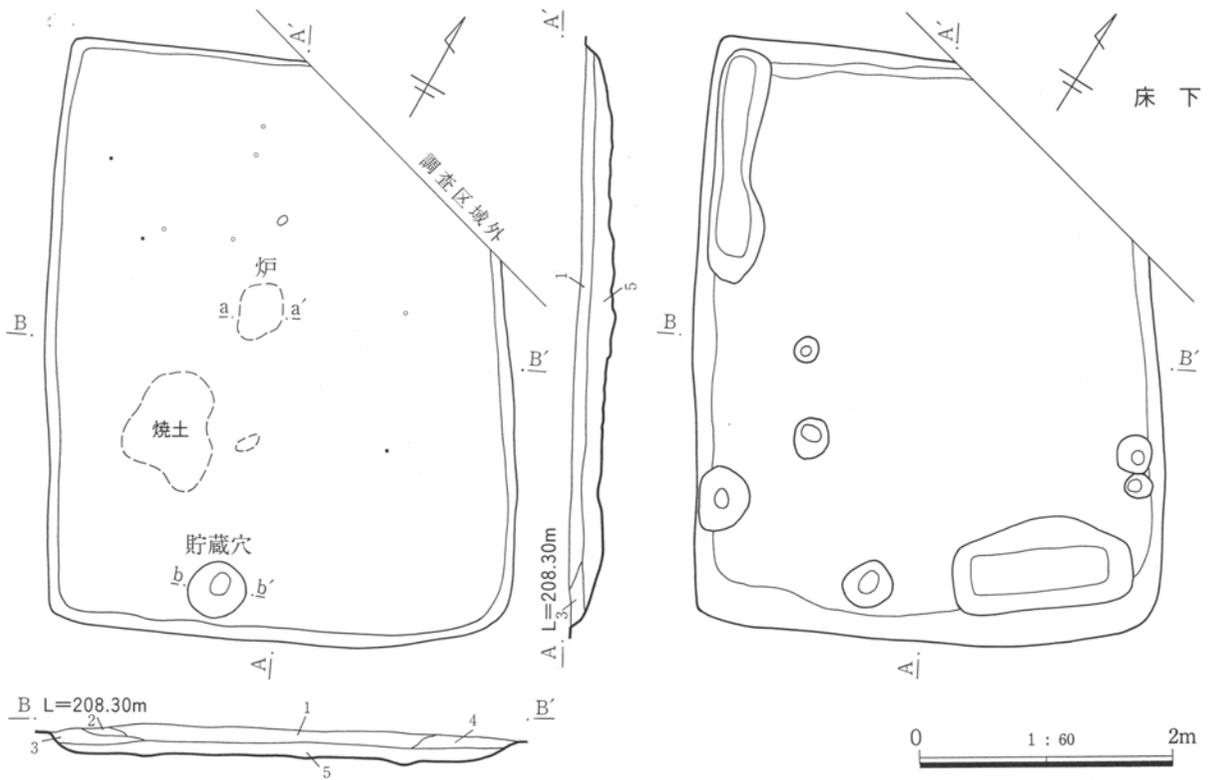
Ⅱ-2区北西端で1号住の周堤帯下の調査で10号住と共に検出された住居跡である。周辺は平坦だが、東への傾斜が始まる地点である。重複遺構は無く、単独の検出だが、1号住と2号住の間に近接するように位置し、西側住居群の一隅を占めている。

北東隅を調査区域外に延ばすが、平面形は約4.5×3.7m程の整った長方形を呈する。主軸方位は北北西を向き、近接する1・2号住とは差が見られる。深さは約20cmを測り、壁も緩やかに立ち上がる。

床面は暗褐色土の貼床からなり、硬化面は中央部に顕著に見られた。

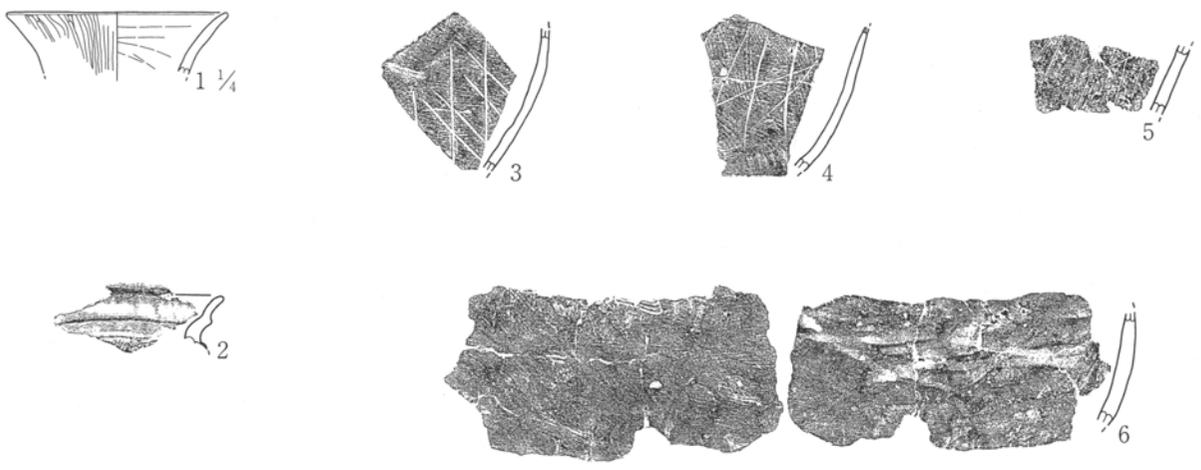
炉址は、床面中央で確認した小規模な焼土範囲を

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



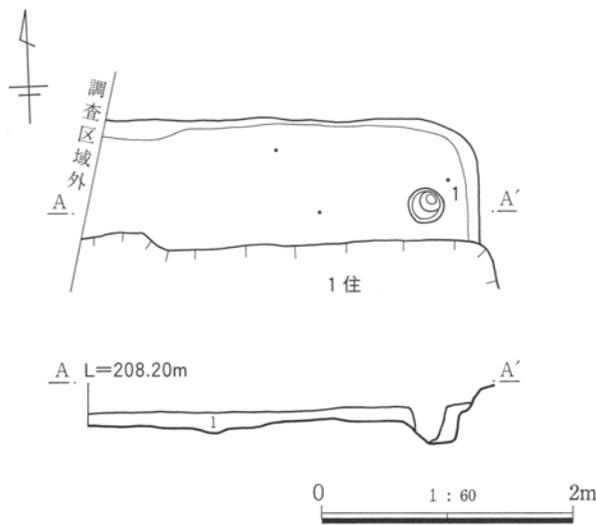
- 9号住
- 1. 暗褐色土 ローム塊を斑状に含む。しまり強い
 - 2. 褐色土 明るい色調。ローム塊を多く含む
 - 3. 〃 やや暗い色調。ローム塊は多い
 - 4. 暗褐色土 1に比して暗い。ローム塊を含む
 - 5. 〃 暗褐色土塊とローム塊を含む

- a-a' (炉址)
- 1. 赤褐色土 焼土層。緻密で硬質
 - 2. 暗赤褐色土 焼土粒を多く含む。炭化物少量
 - 3. 黒褐色土 均質。粘性強くしまる
 - 4. 〃 やや明るく、ローム粒を含む
- b-b' (貯蔵穴)
- 1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。炭化物は少量
 - 2. 黒褐色土 細粒で均質。粘性・しまりも強い
 - 3. 暗褐色土 ローム塊を少量含む。しまりやや強い
 - 4. 〃 ローム粒を多量に含む。しまりやや弱い



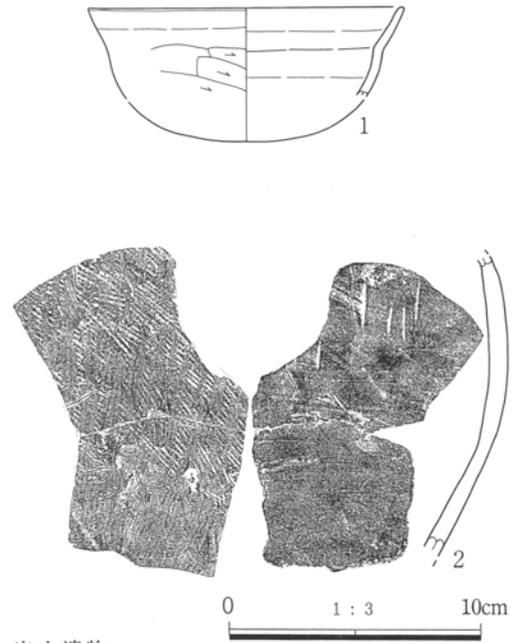
71図 9号住居跡床面・床下・出土遺物

Ⅲ 検出された遺構と遺物



10号住

1. 暗褐色土 小型のローム塊を少量含む。しまりは強い



72図 10号住居跡床面・出土遺物

充てたい。掘り込みを持たず、焼土塊が床面から僅かに浮いた状態であるが、床面が焼けており、炉址として確定できよう。その他に南西側に焼土・炭化物が散るが、こちらは極めて薄い堆積である。

柱穴は床面上及び床下遺構の調査でも確証を得られるピットを検出できなかった。

貯蔵穴は南壁際で検出した径40cm程の円形土坑が相当しよう。壁周溝は見られなかった。

床下調査では、西壁及び南壁際に不整楕円状の土坑を検出している。壁際の広い凹みと同等の性格が想定されよう。

遺物は少量の土師器破片が床直上に散布していた。6点を図示し得たが住居に伴う例とは思われない。

10号住居跡（図版6）

9号住と共に、1号住周堤帯下調査の際に、1号住北壁に重複する状態で調査された住居跡である。西側の住居跡群の中にある。

1号住と大きく重複しており、本住居跡は北側壁と床面の一部を残すのみである。また、西側を調査区域外に延ばすため、住居跡の全容は把握できない。平面形はおそらく方形を呈する。深さは10cm前後であり、極めて残存状態は悪い。

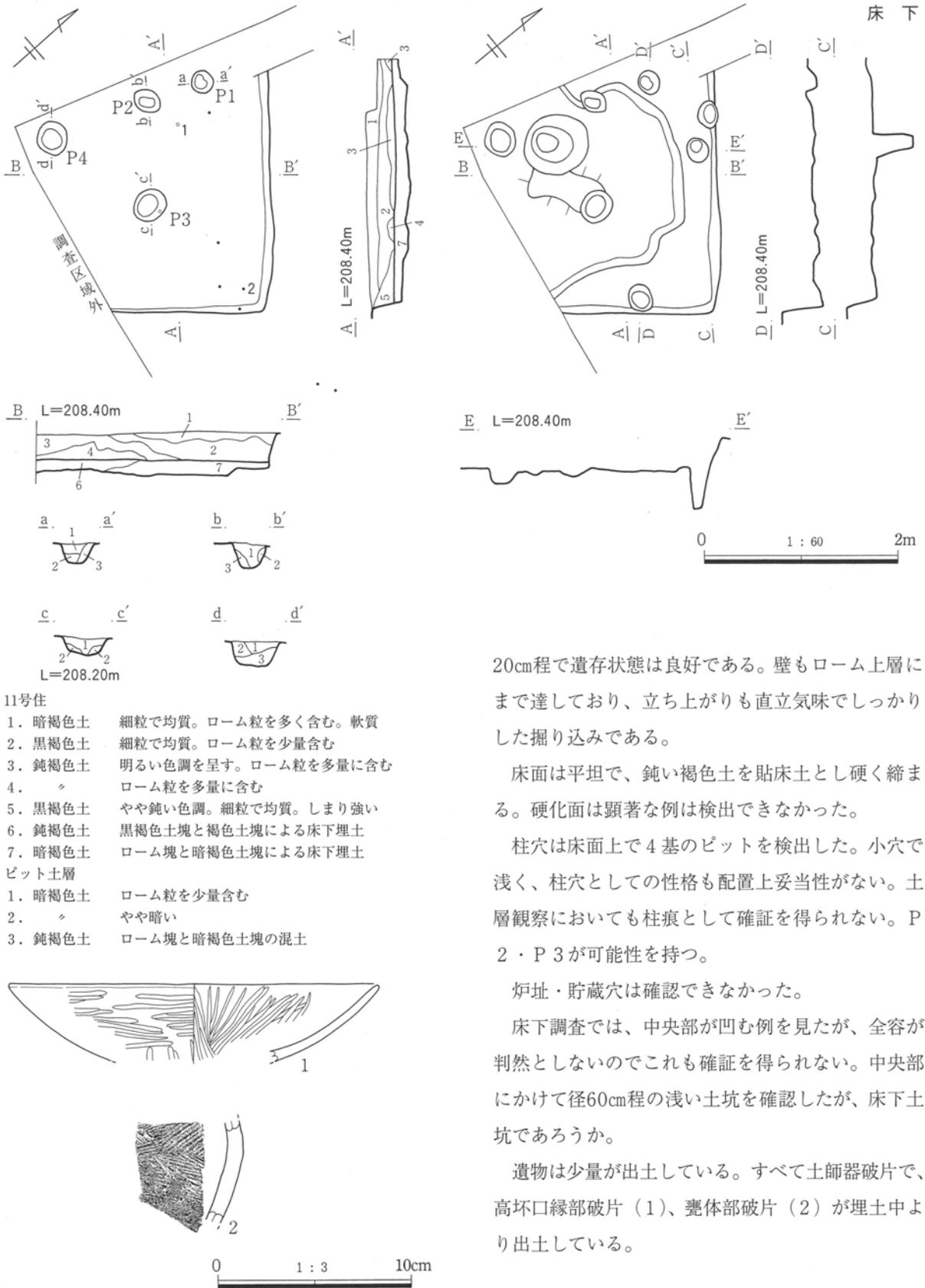
調査においては、1号住周堤帯下調査で住居跡と認定せずに、埋土である暗褐色土を掘り下げ、床面が露出し一部床下底面まで達する結果となり、急遽、住居跡として調査を進めた経緯がある。故に、床面の状態、さらに炉址・壁周溝は把握できなかった。僅かに北東隅にある円形のピットが検出されたのみで、これを貯蔵穴あるいは柱穴として位置付けるのみである。遺物は東壁際から坏破片（1）が出土している。

なお、1号住北東側に方形の張り出しが重複する。調査では13号住としたが、住居跡として確証性に乏しく、欠番とした。あるいは10号住の東壁の延長の可能性もある。

11号住居跡（図版7）

Ⅱ-2区西側の南西隅で調査した住居跡である。東側への傾斜変換点に占地する。1号住周堤帯下調査で、9号住や10号住とともに検出され、1号住と21号住の間で両住居跡に接した位置にあり、一群の住居跡群の中にあるといえよう。

重複する遺構は見られないが、東側と南側を調査区域外に延ばすため、調査は北側壁と東側壁の検出に止まり、全容把握にまで至っていない。深さは約



73図 11号住居跡床面・床下・出土遺物

20cm程で遺存状態は良好である。壁もローム上層にまで達しており、立ち上がりも直立気味でしっかりした掘り込みである。

床面は平坦で、鈍い褐色土を貼床土とし硬く締まる。硬化面は顕著な例は検出できなかった。

柱穴は床面上で4基のピットを検出した。小穴で浅く、柱穴としての性格も配置上妥当性がない。土層観察においても柱痕として確証を得られない。P2・P3が可能性を持つ。

炉址・貯蔵穴は確認できなかった。

床下調査では、中央部が凹む例を見たが、全容が判然としないのでこれも確証を得られない。中央部にかけて径60cm程の浅い土坑を確認したが、床下土坑であろうか。

遺物は少量が出土している。すべて土師器破片で、高坏口縁部破片(1)、甕体部破片(2)が埋土中より出土している。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

12号住居跡

Ⅱ-2区中央、調査区北壁寄りで見出した。2号住や3号住と同様に漸移層で平面形を確認した。住居跡の大半を調査区北側へ伸ばすため、南西隅のみの確認に止まった。単独の検出で東に25号住、南に3号住が近接する。

おそらく方形の平面形であろう。深さは20cmを測り残存状態は良く、調査区北壁における土層観察では40cmを超える壁高である。壁は直立気味に立ち上がり、しっかりした掘り込みである。周堤帯の痕跡は見られなかった。

床面は暗褐色土を基調とした貼床がなされ、一部には硬化面が認められた。尚、炉址・柱穴等の床面上の施設は特定に至らなかった。故に74図は床下の状態を優先した平面図である。床面の様相は土層図を参照して頂きたい。

床下調査では隅部における段差を確認した。おそらく浅い床下土坑の一部と思われるが、有段の床下構造の可能性もある。

遺物は埋土中より土器細片少量が出土したのみで、図示には至らなかった。尚、床面上には細片とはいえ、炭化材が散布していた。図示できなかったが、焼失住居の可能性もある。

14号住居跡（図版7）

Ⅱ-2区中央の南よりで見出した小型住居である。ほぼ平坦地形であり、3号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は不明である。ローム層上面で平面形を確認した。調査着手時は小型の平面形のため土坑の可能性を優先し、遺構確認時に床面と焼土が露出し、住居跡として調査にあたった経緯がある。

平面規模は軸長2.5m前後で、長軸は北北東を向く。平面形は小型の正方形を呈し、深さは15cmを測る。やや浅く遺存度は良くない。

調査は焼土が広がる面を床面として把握したが、柱穴など諸施設の検出は床面を数cm下げて確認し、さらに、床下遺構の検出に努めた。

床面はやや凹凸があり、暗褐色土を全域に貼床し

ていたが、硬化面は見られなかった。全体にやや軟弱な印象を受けた。

炉址は床面中央やや南寄りに小規模な掘り込みを持って見出した。確認時は比較的広い焼土範囲を得たが、床面レベルでは小型化してしまった。しかし、掘り込みの底面も強く焼けており、火力の強さを窺わせた。

柱穴は床面下で確認したP1～P5を充てたい。深さは20cm程度で、柱穴としては浅いが、床面からの深さを考慮し、配置上から柱穴として捉えた。

貯蔵穴は西壁際の径約60cmの不整円形の土坑（b-b'）を考えた。

床下底面は凹凸が多く不連続性が看取された。その中で、床下遺構として土坑数基が検出されている。

出土遺物は埋土中より極少量の土器細片を見た。図示には耐え難く、埋土中より出土した磨石類1点を掲載した。

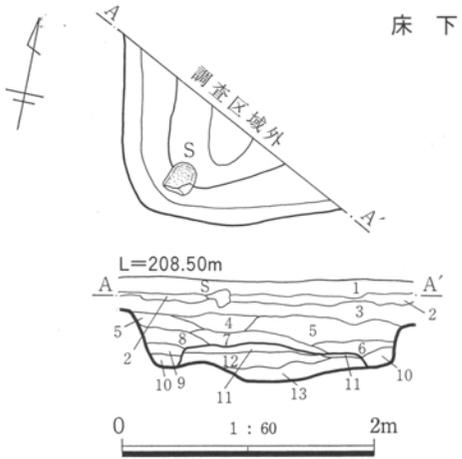
15号住居跡（図版7）

Ⅱ-2区西側で見出した。周辺は平坦地形で、住居跡が群在する地点である。本住居跡にも16号住が西壁に接し、東に18・19号住が近接する。また、やや距離を置いて2号住が北に位置する。

確認は漸移層下面で行った。明瞭な平面形であり平面確認は極めて容易だった。長軸を東北東に向け、整った隅丸方形の平面形を呈し、規模は4.3×3.8m程の中型の住居跡であるが、深さは約40cm前後の、遺存度の良好な住居である。掘り込みもローム層下にまで達しており、立ち上がりも直立するしっかりした壁である。深い住居跡であり、それだけにFA除去時には極僅かであるが凹みが見られ、調査着手より住居跡の存在が予想された。しかし凹みの状況は1号住の比ではなく、周堤帯の残存も明瞭ではないため、調査面を漸移層下面に設けた。

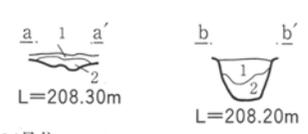
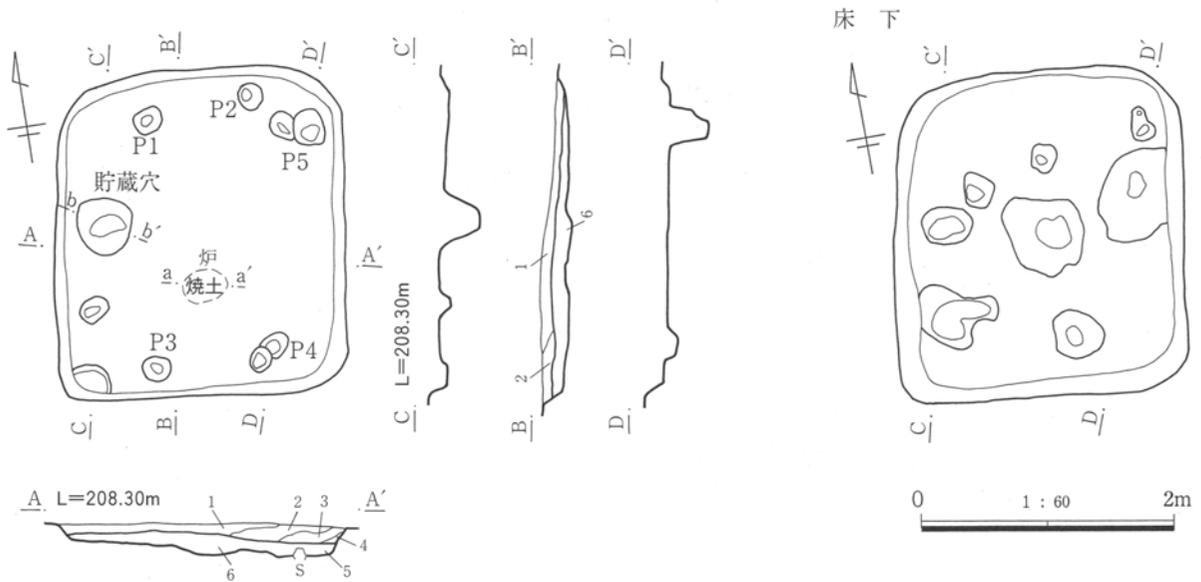
土層の観察では上層から中層にかけてローム塊を含む埋土で構成されていた。明らかに短時間の人為埋土を示唆しており、住居跡廃棄後に周堤帯等を使って埋め戻された可能性が高い。故にFA下面にお

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物

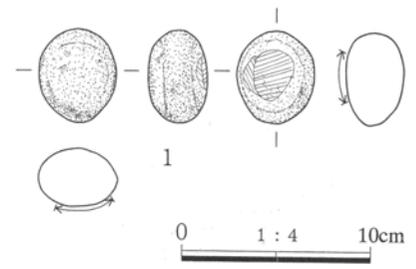


- 12号住
- | | |
|----------|-----------------------|
| 1. Hr-FA | 純層。鈍黄橙色を呈す |
| 2. 黒色土 | 白色粒を含む |
| 3. 黒褐色土 | 細粒で均質。炭化物・焼土粒少量含む |
| 4. / | 細粒で均質。ローム粒・炭化物を少量含む |
| 5. / | ローム塊を斑状に含む。しまりは弱い |
| 6. / | ローム塊を多量に含む。しまりは弱い |
| 7. 暗褐色土 | ローム塊を多量に、焼土粒・炭化物を少量含む |
| 8. / | ローム粒を少量含む。炭化物は微量含む |
| 9. / | ローム粒を多量に含む。しまりは弱い |
| 10. 褐色土 | ローム塊を多量に含む。しまりはやや強い |
| 11. 暗褐色土 | ローム塊を少量含む貼床土。上面に炭化材散布 |
| 12. / | ローム塊を主体とした床下埋土。しまり弱い |
| 13. 褐色土 | 大型のローム塊を主体とする。床下土坑埋土 |

74図 12号住居跡床下

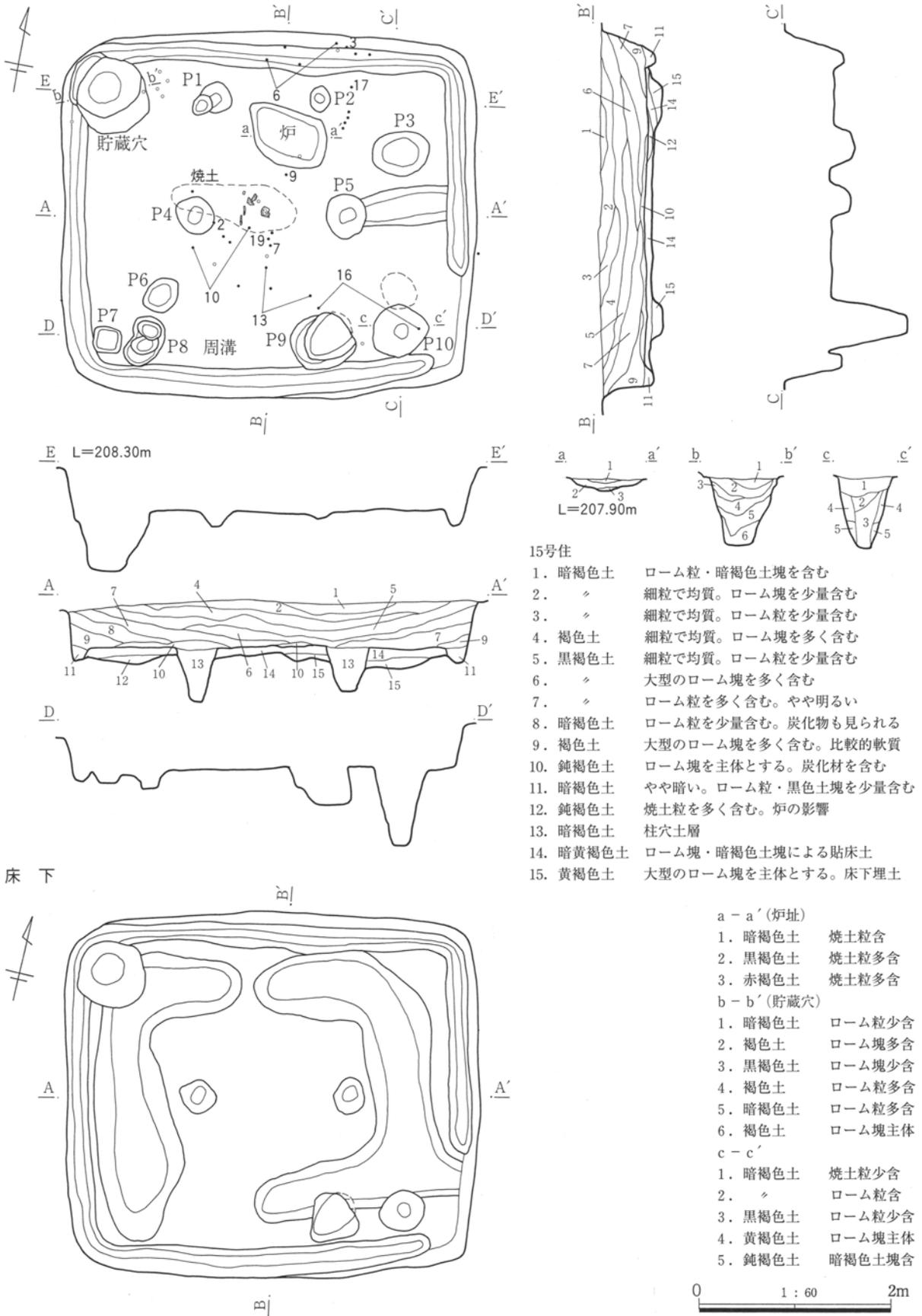


- 14号住
- | | | | | |
|---------|--------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム塊多含 | a - a' (炉址) | 1. 鈍褐色土 | 焼土層。細粒 |
| 2. / | ローム粒多含。焼土粒少含 | | 2. 黒褐色土 | 焼土塊・黒色土塊少含 |
| 3. / | 細粒で均質。ローム粒少含 | | b - b' (貯蔵穴) | |
| 4. / | 細粒で均質。ローム粒微含 | | 1. 暗褐色土 | ローム塊多含 |
| 5. 黒褐色土 | ローム塊と黒色土塊含 | | 2. 黒褐色土 | ローム塊多含 |
| 6. 暗褐色土 | 多量の小型ローム塊含 | | | |



75図 14号住居跡床面・床下・出土遺物

III 検出された遺構と遺物



76図 15号住居跡床面・床下

いても、明瞭な凹みではなく、自然沈下による僅かな凹みで止まったものと考えられる。

床面の各所及び中央部周辺にかけて、小型ではあるが炭化材・炭化物が散布していた。柱材等の特定はできなかったが、焼失住居跡と判断した。しかし、1号住に見るような土葺き屋根の痕跡を示唆する、濃密な焼土堆積は見られなかった。

床面は平坦面を築き、暗黄褐色土を貼床土とし全域に渡っていた。硬化面も極めて顕著で、特に中央部を中心に広く硬く締まっていた。

炉址として、床面中央北寄りに不整形の浅い掘り込みを充てる。周辺には炭化物が多く散布し、炉址本体にも下層に焼土層を堆積していた。また、床面中央部も炭化物と焼土が散布するが、掘り込みを有さず、焼土のまとまった堆積を見ないことから、炉としては除外した。

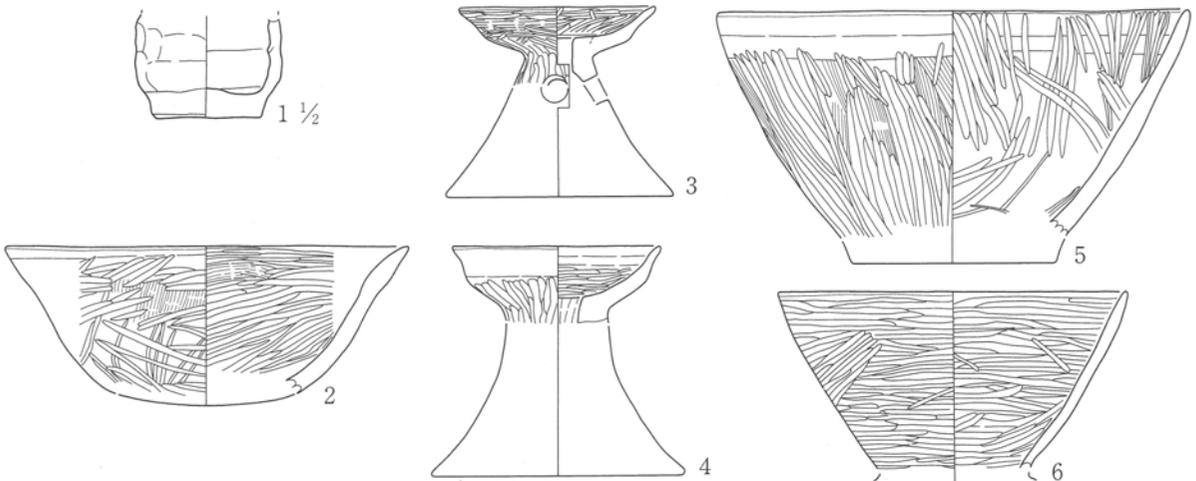
柱穴は、床面中央で対に検出されたP4・P5が、次いで柱痕の確認されたP10が規模も妥当であり、配置からも主柱穴として位置付けられよう。さらに配置の良好なP1・P2・P3・P8が浅いピットながら可能性を充てたい。また、P9は壁際に向かって斜位に設けられ、柱穴以外の施設と考えられる。

貯蔵穴は 北西隅の不整円形の土坑を充てる。規模は径80cm程で深さも約70cmを超えるしっかりした土坑である。

壁周溝は、四辺の壁に設けられるが、南東隅部で途切れる。特に出入口等の施設は見あたらないが、意図的なものであろうか。また、東壁際中位よりP5を繋ぐ位置で、間仕切り溝を検出している。

床下調査では、定型的な壁下を全周する凹みを検出している。方形の平面形を指向した掘削が窺われよう。ただし、北壁中位と南壁西半で途切れており、住居構築時の何らかの指向が想定されよう。その他の床下土坑等は見られなかった。

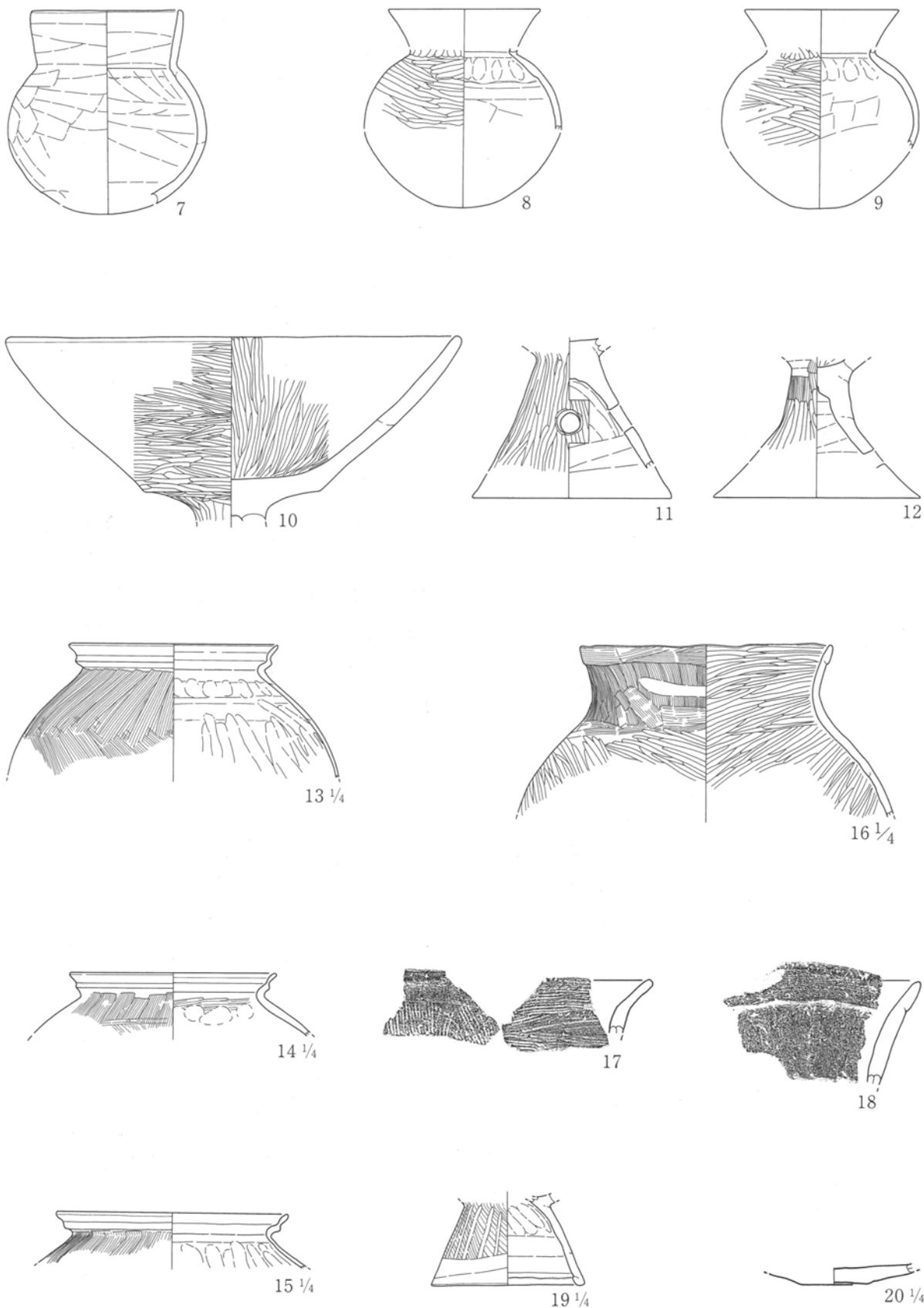
遺物は比較的多く出土している。埋土中からも多く出土しており、床直上に集中が見られる。すべて土師器の破片状態での出土で、炭化材より上位に出土を見ることから、住居焼失後の廃棄と捉えられよう。土師器以外には、自然石が埋土中より幾つか出土している。周堤帯破壊時の流入であろうか。縄文時代の凹み石も混じる。平面的には床面中央の集中が見られる。坏(2)・小型甕(7・9)・高坏(10)・S字甕(13・19)が床直上で、甕(16)の口縁部分がP10の上層より出土している。また、器台口縁部(3)や埴口縁部(6)は甕底部などと伴に北壁上位から下位にかけて出土している。



77図 15号住居跡出土遺物(1)

0 1 : 3 10cm

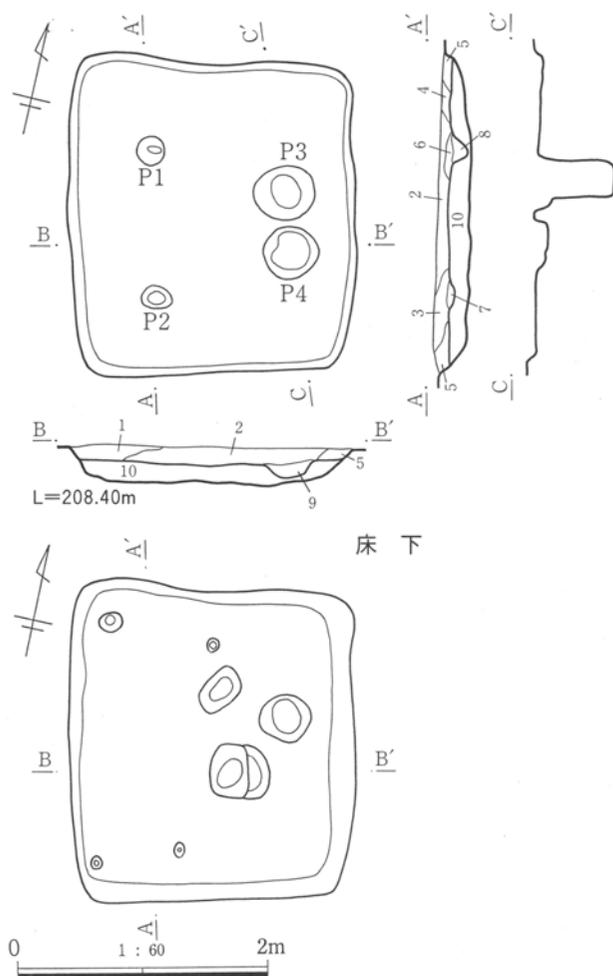
Ⅲ 検出された遺構と遺物



78図 15号住居跡出土遺物(2)

0 1:3 10cm

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



79図 16号住居跡床面・床下

- 16号住
- | | |
|-----------|----------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム塊を少量含む。しまりやや強い |
| 2. 暗褐色土 | 黒色土塊を少量含む。しまりやや強い |
| 3. ♪ | やや明るい。ローム粒を含む。しまり強い |
| 4. ♪ | やや暗い。ローム塊を少量含む。しまり強い |
| 5. ♪ | ローム塊を多量に含む。しまり強い |
| 6. 褐色土 | ローム粒・炭化物を少量含む。しまり強い |
| 7. 黒褐色土 | ローム粒を少量含む。2号ピット土層 |
| 8. 暗褐色土 | ローム塊を少量含む。1号ピット土層 |
| 9. ♪ | ローム塊を多く含む。4号ピット土層 |
| 10. 鈍黄褐色土 | ローム塊を主体とする床下埋土 |

16号住居跡 (図版7)

II-2区西側で15号住西に接して検出された。東に21号住が近接し、西側の住居跡群の中にある。

平面形は軸長2.3mの小型の正方形を呈する。深さは10cm程で浅い。

床面は鈍黄褐色土を主体とした貼床がなされるが、硬化面は顕著ではなく全体に軟弱な印象を得る。

柱穴として床面上でP1~P4を検出したが、良好な規模のP3、配置上からはP1・P2だがいずれも確証性に乏しい。炉・貯蔵穴も検出されなかった。床下遺構として、数基の土坑を得たが重複・別種遺構の可能性がある。

遺物は土師器細片が数点出土したのみで図示し得なかった。

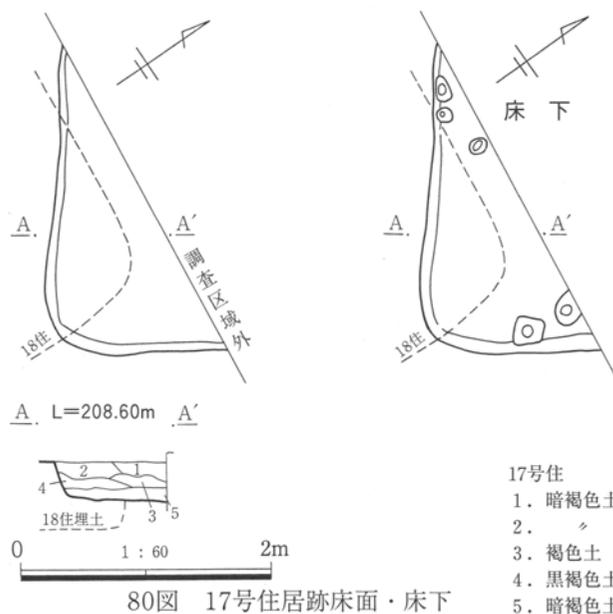
17号住居跡 (図版7)

II-2区西側で調査区壁際で調査した。南壁を大きく18号住居跡と重複する。新旧関係は本住居跡が18号より新しい。本住居跡大半は北側を調査区域外へ延ばすため全容は把握できない。おそらく方形を呈し、20cm程の深さを測る。

床面は暗褐色土を貼床とし、硬化面は見られない。炉址・柱穴・壁周溝の検出は果たせなかった。

床下も凹凸が多く、また、18号住埋土との分別が難しく、床下土坑等も把握できなかった。

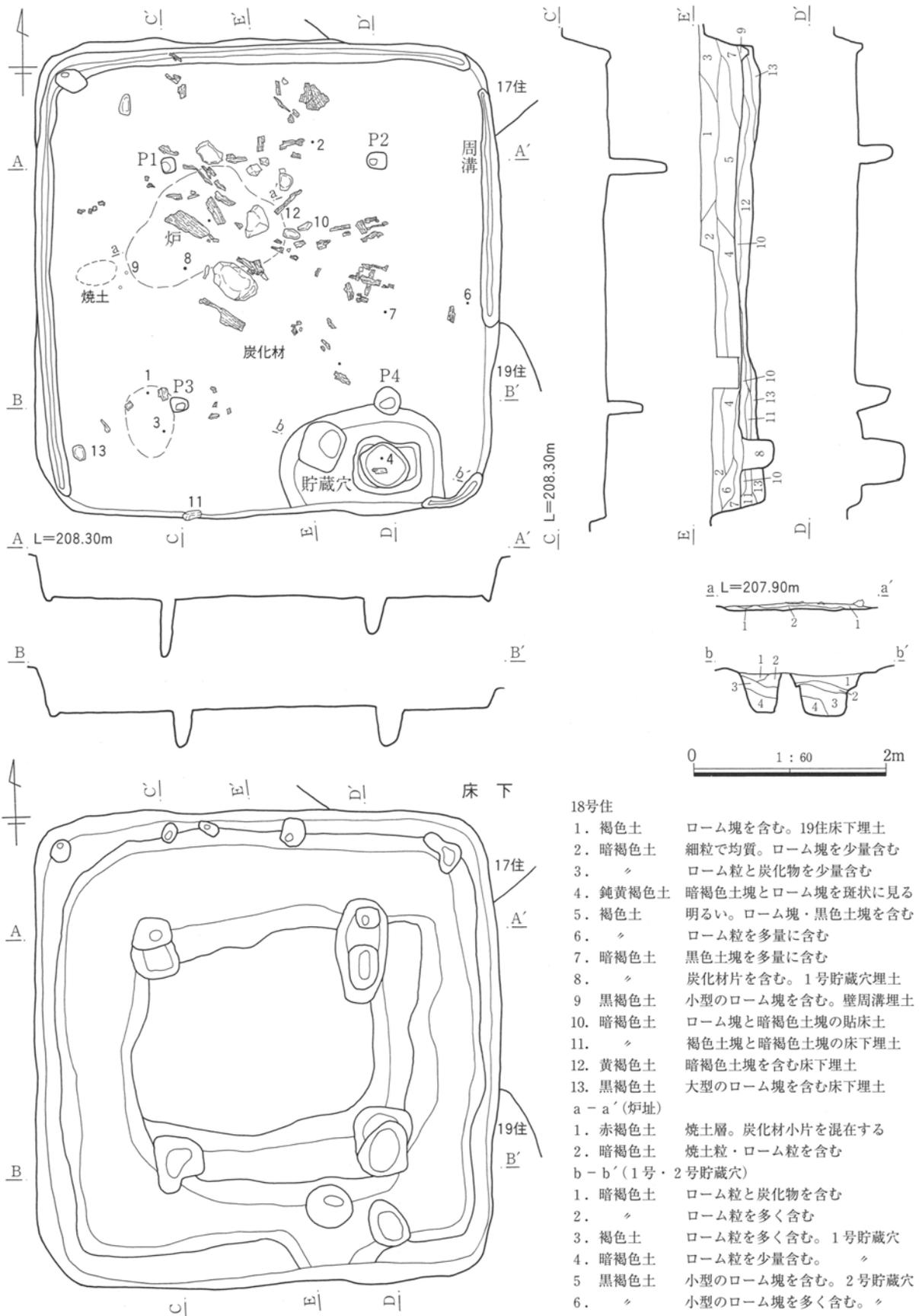
遺物は、土師器細片と自然石を出土したが、図示し得なかった。



80図 17号住居跡床面・床下

- 17号住
- | | |
|---------|----------------------------|
| 1. 暗褐色土 | 細粒で均質。ローム粒を少量含む。しまり強い |
| 2. ♪ | 細粒で均質。明るい色調を呈す。ローム粒を多く含む |
| 3. 褐色土 | ローム粒を多量に含む。炭化物を少量見る。しまりは強い |
| 4. 黒褐色土 | 黒色土塊・ローム粒を少量含む。しまりはやや強い |
| 5. 暗褐色土 | ローム塊・黒色土塊からなる床下埋土。しまりは強い |

III 検出された遺構と遺物



81図 18号住居跡床面・床下

18号住居跡 (図版8・9)

Ⅱ-2区西側で調査区壁際で検出した大型住居である。北壁で17号住と、南壁で大きく19号住と重複する。いずれも層位的に両住居が新しく、本住居跡が最下層に位置付けられる。確認面は漸移層下位で、19号住との重複があるものの、比較的容易に把握できた。

周辺は、ほぼ平坦地形であり西に15号住、東に5号住が近接するように西側住居跡群の中にあり、一際存在感ある占地状況である。

平面形は、軸長4.4m程の整った隅丸正方形を呈す。深さも約40cmを測り、良好な遺存度を誇る。方位も北を向き、近接する4号住や同様な焼失住居である1号住と軸を同じにする。

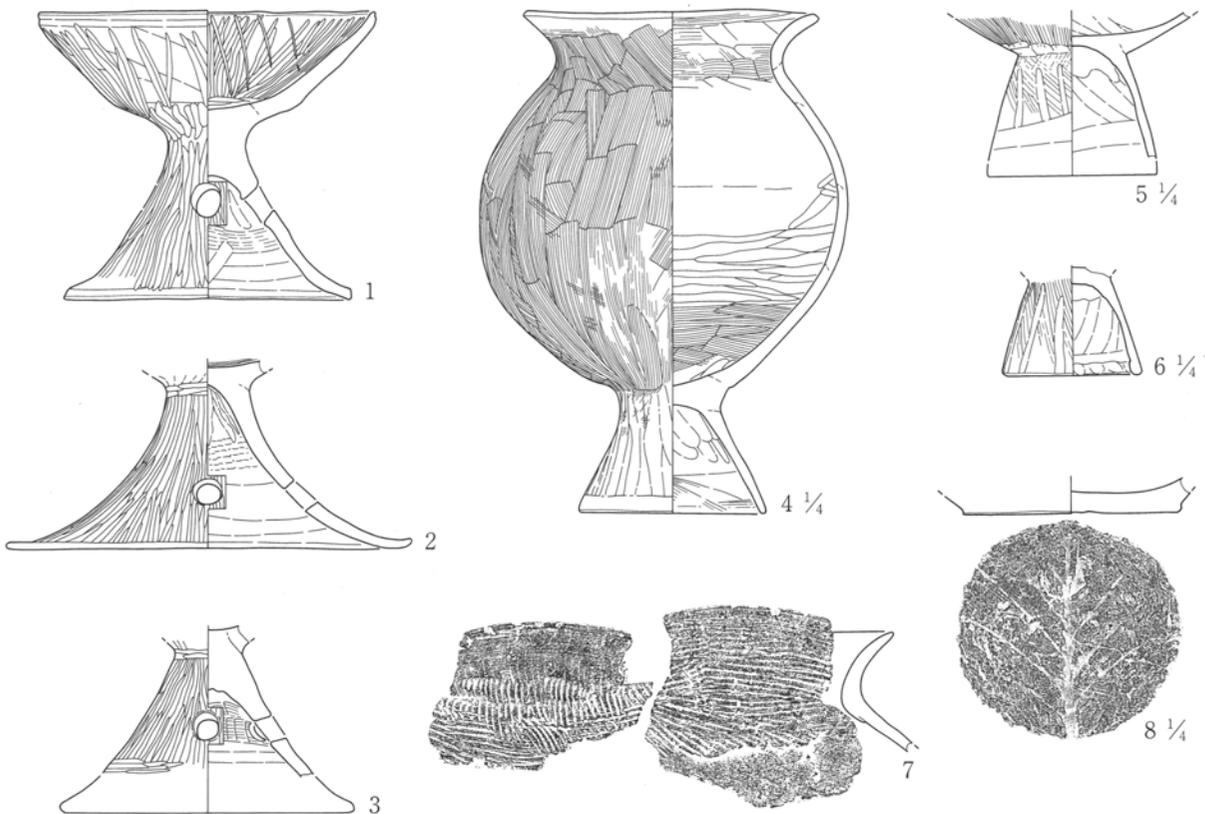
壁はやや開くものの、しっかりとした掘り込みでローム中にまで達する。周堤帯は確認できなかった。おそらく17号住や19号住に削平されたものと捉えたい。

床面は平坦面を築き、暗褐色土を主体とした貼床

土が全面に渡っていた。硬化面も全面で確認され、特に中央部分で広く硬く締まっていた。また、床面全域には炭化材が散乱した状態で確認され、焼失住居として確定できよう。しかし1号住のように梁や垂木等を想定できる状況ではなく、炭化材自体の遺存度はあまり良くない。

炉は床面中央のやや北東寄りで見出した。焼土・炭化物を広く分布し、床面が僅かに凹む箇所を炉址として判断した。焼土が集中し下面も焼土化していた。周辺には大型の自然石が散乱した状況で出土している。床直と床直上の例があるが、石囲い施設ではないものの、炉址周辺のみ出土を考えると、何らかの煮沸施設が存在していたのかもしれない。

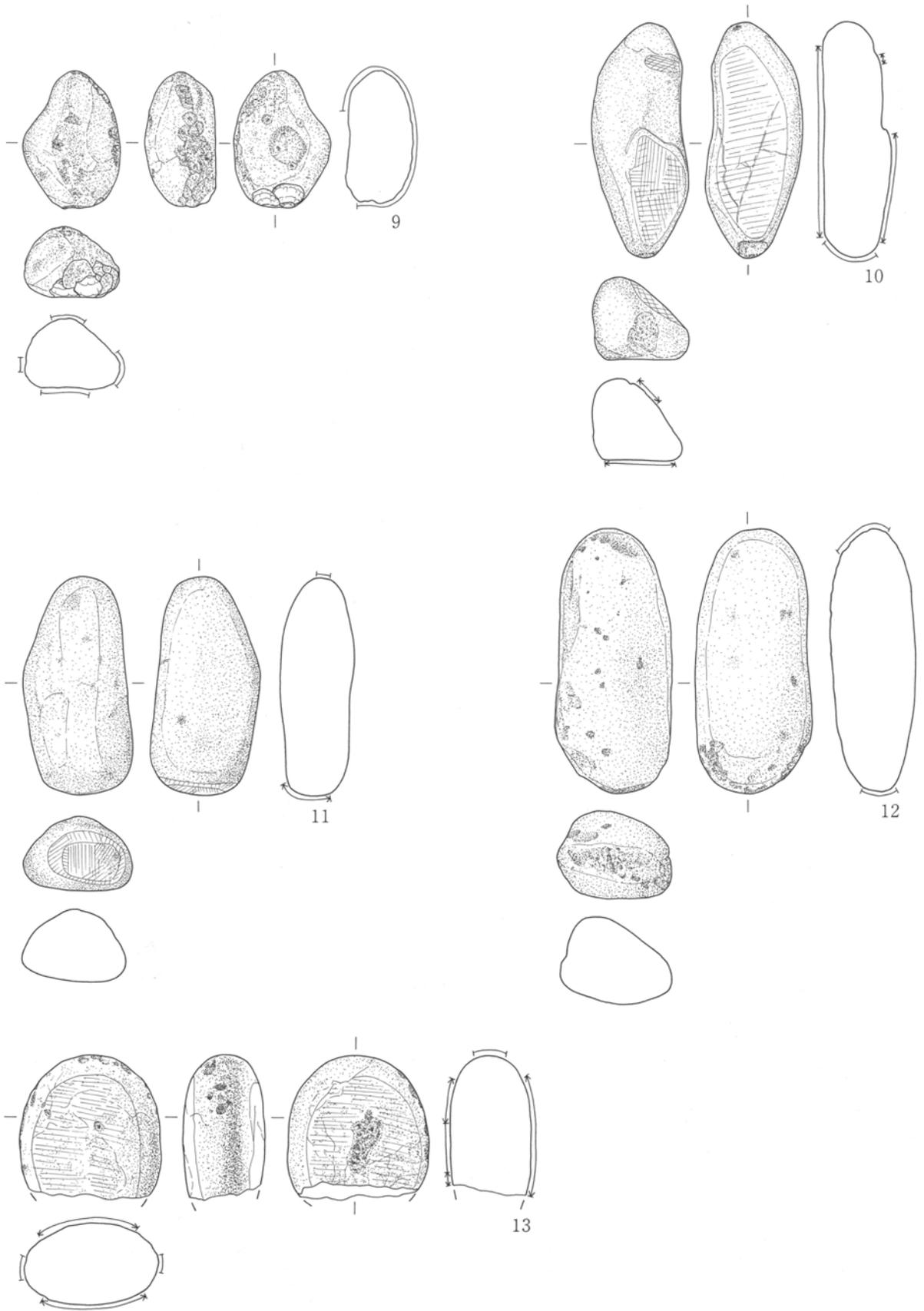
柱穴はいわゆる四本柱穴といえよう。床面上に配置良くP1~P4が配されていた。さらに床下調査で得られた北壁際の小ピット列はあるいは壁柱穴の可能性を示唆する。柱穴間の距離は南北が約2.5m、東西が2.2mと4基が同一距離を保つ。規則性を持った配置である。



82図 18号住居跡出土遺物(1)

0 1:3 10cm

III 検出された遺構と遺物



83図 18号住居跡出土遺物(2)

0 1:4 10cm

貯蔵穴は南壁の南東隅寄りに開く2基の土坑を充てたい(b-b')。南壁に接した緩やかな凹み内に2基の貯蔵穴が並列する。両者とも径50cm前後の不整形円形を呈し、深さも約40cm程を測る。住居内の施設移動を想起するが、新旧は不明である。

壁周溝は北壁と西壁にあり、北東隅に途切れを設け、東壁北半に設けられる。さらに南東隅にのみ小規模に設けられる。つまり南壁の大半と東壁南半には巡っておらず、貯蔵穴あるいは壁上の施設との関連が想起されよう。

床下調査では前述の北壁下の小穴列を検出した。あるいは床面上からの施設の可能性がある。柱穴外郭が確認できた。土層確認を果たせなかったが、床面状の柱穴は柱痕に相当し、柱穴設定時は床下に見るように規模の大きな柱穴と考えられる。さらに、各柱穴は2回程度の建て替えを示唆しており、住居平面形を変更することのない柱の付け替えが行われていたようだ。おそらく、この建て替えに伴い、先に述べた貯蔵穴の移動も果たされたものと捉えられる。柱穴の土層観察を怠った調査時の不手際が悔やまれる。

床下構築の様相としては、壁際の広い凹みが明瞭に観察し得た。中央の方形を形作る段差に沿って、柱穴が設定される例も、住居構築時の計画性が看取される良好な資料として位置付けられる。

遺物は住居規模に比して、比較的少量の出土である。しかしながら、床直・床直上の遺物は同時性を現す出土状態を示す。高坏(1)は南西隅で3の脚部と共に床直上より逆位で出土している。2も脚部のみだが、炉北側で床直出土である。台付き甕(4)は完形で、南東隅の貯蔵穴上層で斜位に埋まった状態で見ることができた。炭化材が傍らより出土しており、外面に煤が付着することから、あるいは焼失時に火災を受けた可能性がある。5~8の甕破片は床面に散乱する状況で床直・床直上で出土している。台付き甕(4)と高坏(1)は原位置の可能性あるいは焼失後時間を経ずに置かれた例と思われ、その他の土器と併せて同時性は高いものと捉えられよう。

その他に、磨石類の出土が多い。9・10・12は炉周辺から、11は南壁に掛かって、13は南西隅で床直上で出土している。

19号住居跡(図版9)

Ⅱ-2区西側で、18号住に重複して調査された。西側住居跡群の中にある。縄文時代の所産であるJ-1号土坑が東壁に接するが、本住居跡調査終了後の検出である。

確認面は漸移層下位で行った。調査着手時より平面形に複数軒の住居跡の存在が予想され、試掘坑をグリッド軸に併せて設定し、18号住との新旧を確認した。

長軸を東北東に傾ける不整形長方形の平面形を呈す。規模は、4.5×3.3m程で深さは約20cmを測る。壁高は各辺で差があり、遺存度の良好な北壁では20cm程の高さだが、南壁や東壁では10cm未満であり、全体に遺存度は良くない。特に南壁はロームが一部露出するほど浅く、明瞭な壁として確定しづらく、結果不整形な壁を検出することになった。

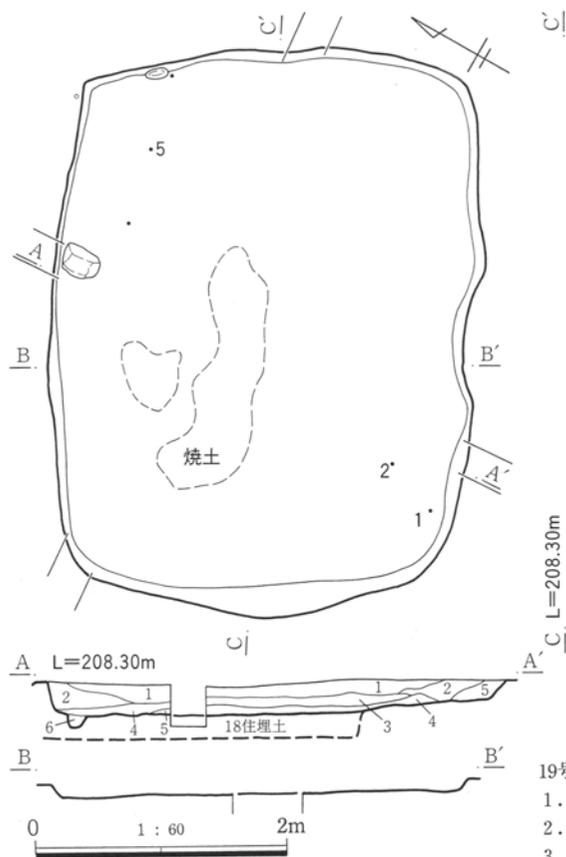
床面はローム面上面で止まる。地床であり、一部貼床の痕跡も見受けられたが、18号住埋土との分別が不可能であり、18号住と重複していない南壁際の床面レベルを踏襲して広がりを確認した。

炉址は明瞭な例を把握できなかった。床面中央北寄りに焼土のまとまりを見ることができ、土層の観察や掘り込みの検出に努めたが、焼土塊の堆積をみるものの、掘り込みを有さず、焼土塊以下に炭化物を混在する暗褐色土が存在することから、炉址としては確定性に乏しく、焼失時の土屋根痕跡かあるいは単なる焼土塊廃棄に伴うものと判断した。炉址と考える場合は住居廃棄時に破壊の手が加わった例とみることもできよう。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝は見られなかった。床下遺構も検出できなかった。

遺物は、土師器が少量出土している。殆どが破片状態の出土だが、完形の小型埴(1)は南東隅の床直で出土する。2も近距離で埋土下位で出土した。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



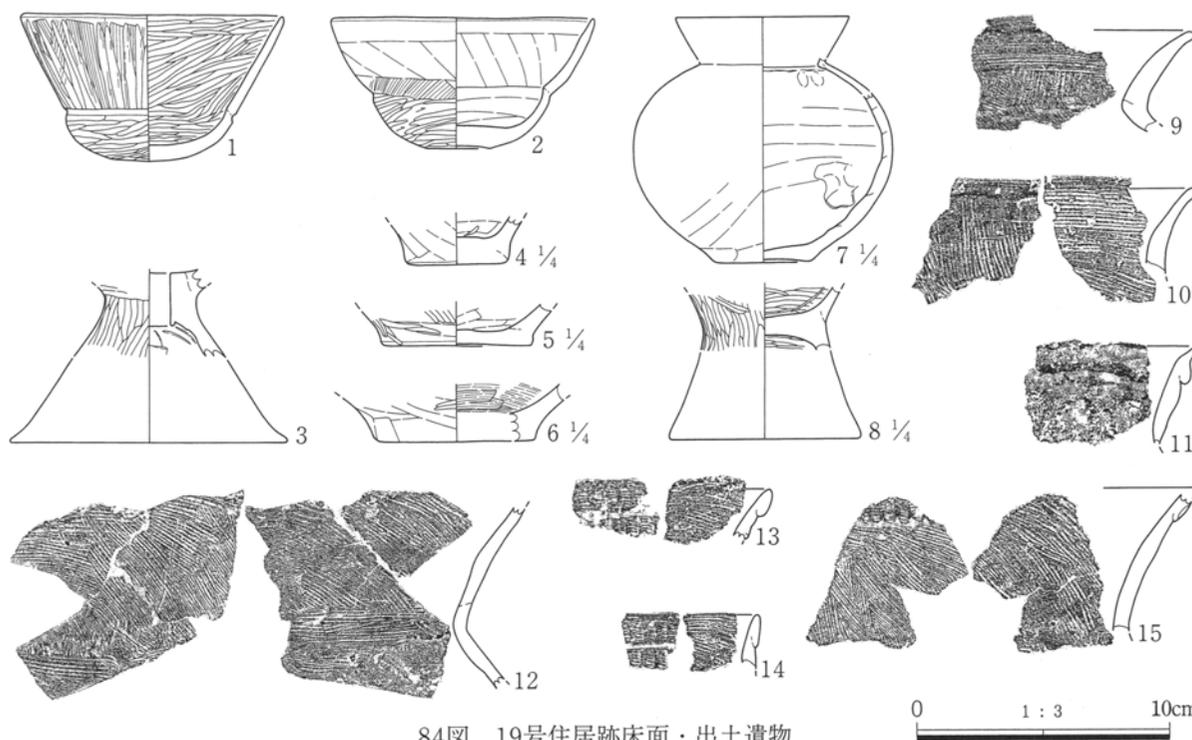
また5の甕底部も北東隅の床直より出土している。

尚、本住居跡周辺は大型の自然石が散乱する状況が見られた。漸移層からの出土で規則性もないことから、記録から排除したが、縄文時代包含層出土という解釈もあるが、一方で古墳時代の何らかの施設の痕跡として、例えば本住居跡の炉址としなかった焼土範囲にみるような、炉址廃棄行為等にも注意を払うべきだった。

本住居跡は、平面形が辛うじて確認され、床面上に柱穴などの諸施設が検出できなかった。住居跡としての認定条件としては、床面と床面に広がる焼土・出土遺物であり、他の住居跡に比して極めて乏しい条件である。調査途中でも、本住居跡を住居として捉えるのか、疑問があったが、下位に重複する18号住との平面形の差も考慮して、住居跡として報告する。

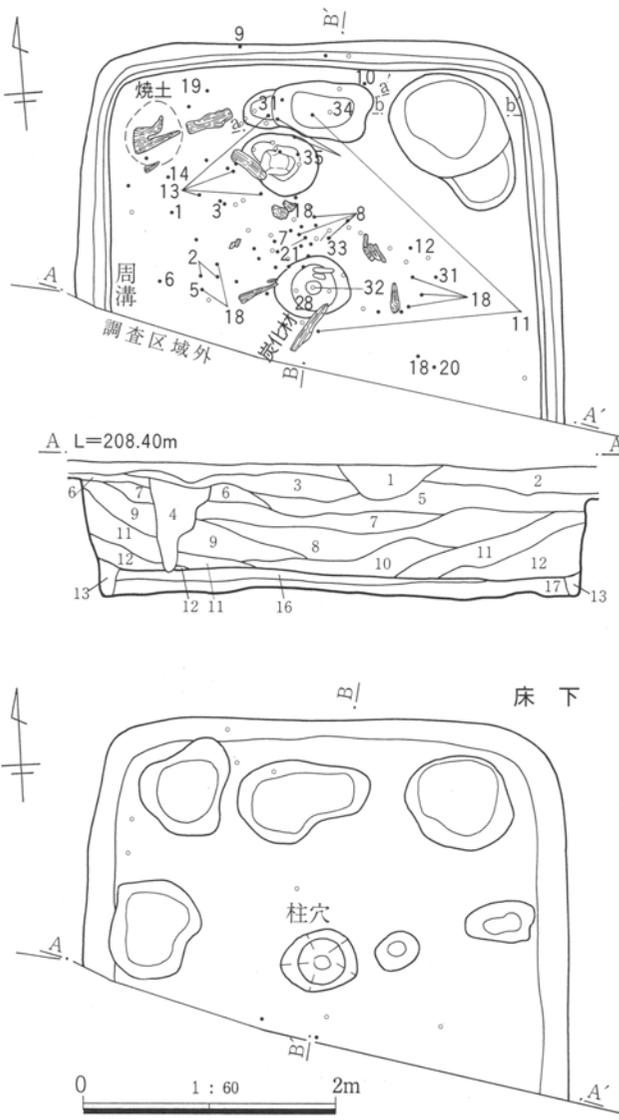
19号住

- | | |
|---------|-----------------------|
| 1. 暗褐色土 | 細粒で均質。ローム粒を含む |
| 2. 〃 | 細粒で均質。やや明るい。ローム粒を多く含む |
| 3. 黒褐色土 | 小型のローム塊を少量含む |
| 4. 褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む |
| 5. 鈍褐色土 | ローム粒を多く含む。しまりは強い |
| 6. 黄褐色土 | 小型のローム塊を主体とする。壁溝埋土 |



84図 19号住居跡床面・出土遺物

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



- 20号住
- | | |
|----------|-----------------------|
| 1. 暗褐色土 | 暗い。均質。別種土坑埋土 |
| 2. 黒褐色土 | F A下黒色土に相当 |
| 3. 暗黄褐色土 | ローム塊を多量に含む |
| 4. 暗褐色土 | 暗い。均質。別種土坑埋土 |
| 5. 〃 | 明るい。ローム粒少量含む |
| 6. 〃 | ローム粒を多く含む |
| 7. 鈍褐色土 | 小型のローム塊・暗褐色土塊を多く含む |
| 8. 〃 | 大型のローム塊・暗褐色土塊を多く含む |
| 9. 褐色土 | 小型のローム塊・黒褐色土塊を多く含む |
| 10. 暗褐色土 | 暗い。ローム塊・黒褐色土塊を少量含む |
| 11. 〃 | 小型のローム塊・黒褐色土塊を多量に含む |
| 12. 黒褐色土 | ローム粒を少量含む。均質 |
| 13. 褐色土 | ローム粒・黒褐色土塊を含む |
| 14. 暗褐色土 | ローム粒を含む。柱穴埋土 |
| 15. 〃 | 炭化物を含む。土坑埋土 |
| 16. 鈍褐色土 | 暗褐色土とローム塊による貼床土。層状をなす |
| 17. 暗褐色土 | 黒褐色土とローム塊を含む |
- a-a' b-b'
1. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む

85図 20号住居跡床面・床下

20号住居跡 (図版9)

II-2区東側の調査区南壁際に位置する。周辺はほぼ平坦地形で、東側は緩やかに傾斜する。単独の検出だが、北東に4号住が接するように、東側住居跡群の一隅を占める。確認面はローム漸移層で平面形の把握は比較的容易だった。

南半を調査区域外へ延ばすため、全容は把握できないが、おそらく整った隅丸方形を呈すると思われる。東西方向の軸長は3.3mでやや小型の感があるが、近接する4号住と同等の規模と推定したい。深さは約50cm前後で、極めて良好な遺存度を誇る。

F P除去時更にF A直下で僅かに凹みが見出された箇所で、住居跡の存在が予想されていたが、明瞭

な周堤帯は検出できなかった。調査区南壁の土層観察においても確定には至らなかった。

床面はローム塊主体の鈍褐色土を貼床とし、硬化面が顕著に見られた。炭化材が中央から西側にかけて散在しており、焼失住居として位置付けられる。

炉址は調査区域外なのか確認できなかった。

柱穴は床面中央の径60×52cm程の不整円形のピットを充てる。深さも60cmを超え、規模・配置とも妥当性を持つ。

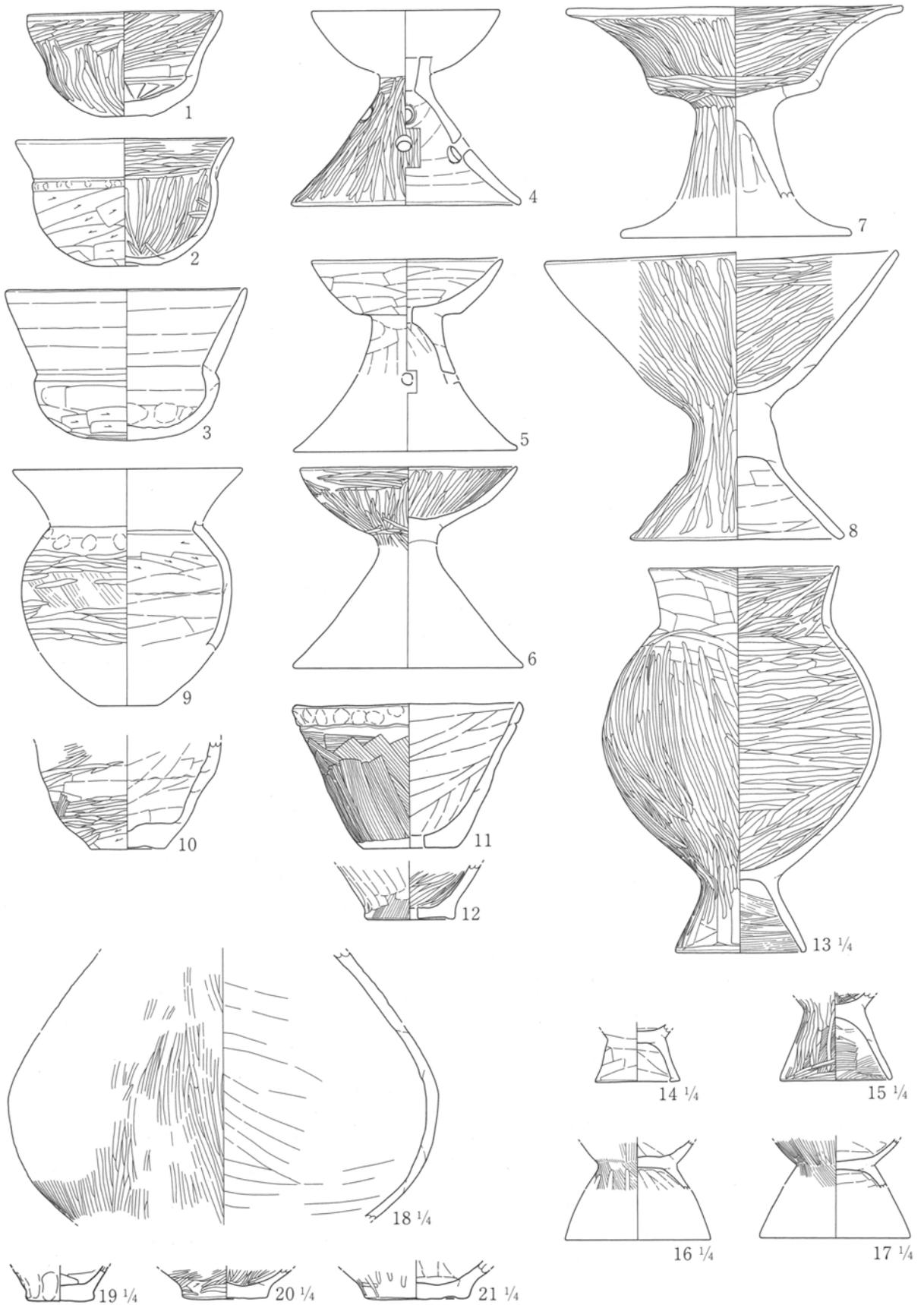
貯蔵穴は北東隅や北壁際の土坑が位置的に可能性を持つが、浅く、貯蔵穴としては確定できない。

壁周溝は、調査された各壁下に確認できた。

床下遺構としては、複数の床下土坑を得たが、いずれも浅く、床下底面の凹凸と一体化する。また、特徴的な構築時の掘削痕跡は見出せなかった。

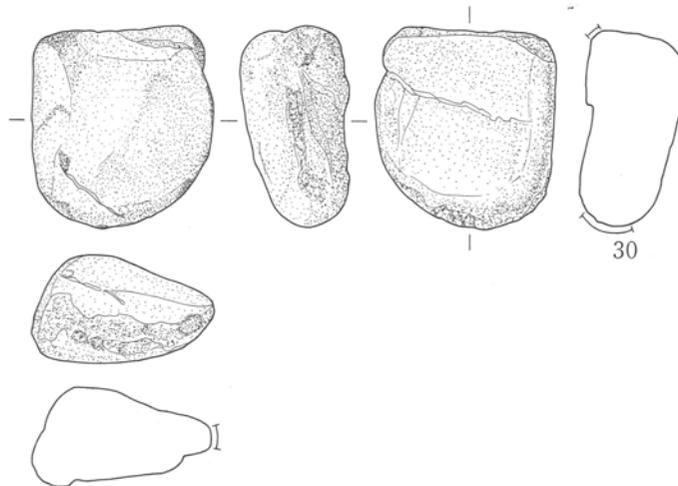
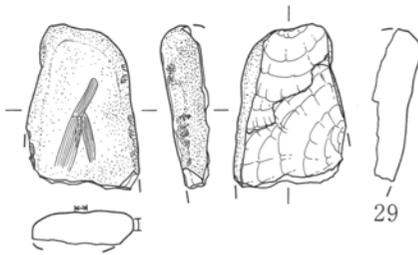
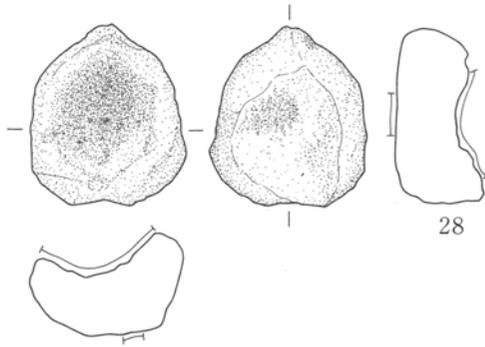
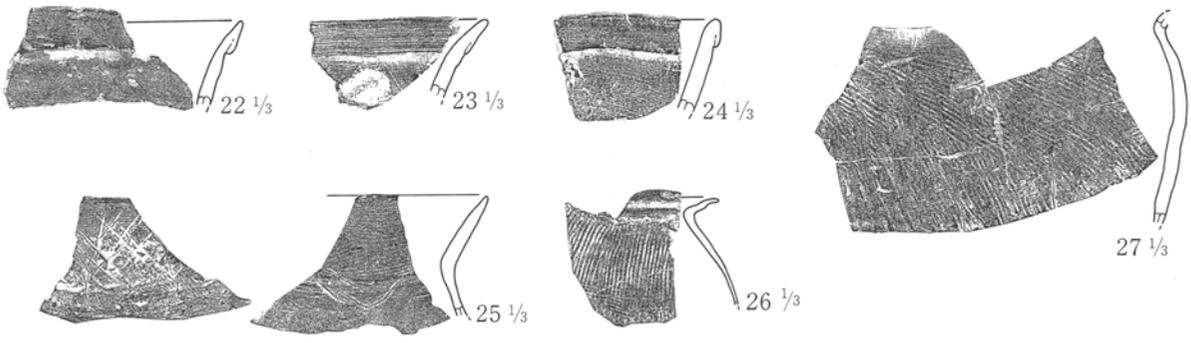
本住居跡は出土遺物が豊富である。埋土中より満遍なく出土し、床直上・床直に至ると完形・半完形土器の出土も目立った。炭化材と同様に中央から西側へ若干偏りが見出せた。特に11の甑は炭化材下位より出土しており、出土遺物の幾つかは居住に伴う例を示唆した。台付き甕(13)は床直上で正位で出土する。また、磨石・敲石類の出土も豊富である。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



86図 20号住居跡出土遺物(1)

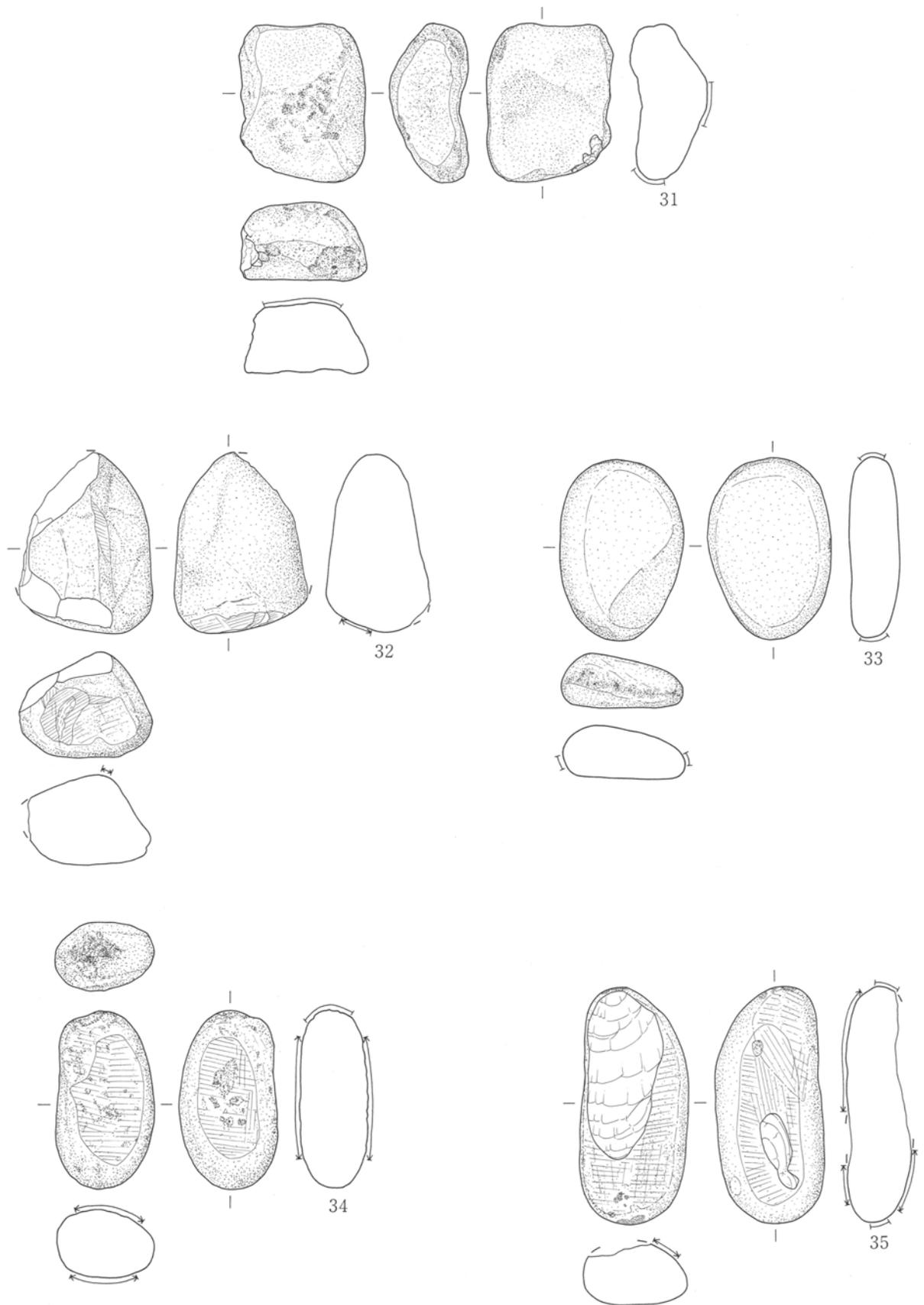
3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



0 1 : 4 10cm

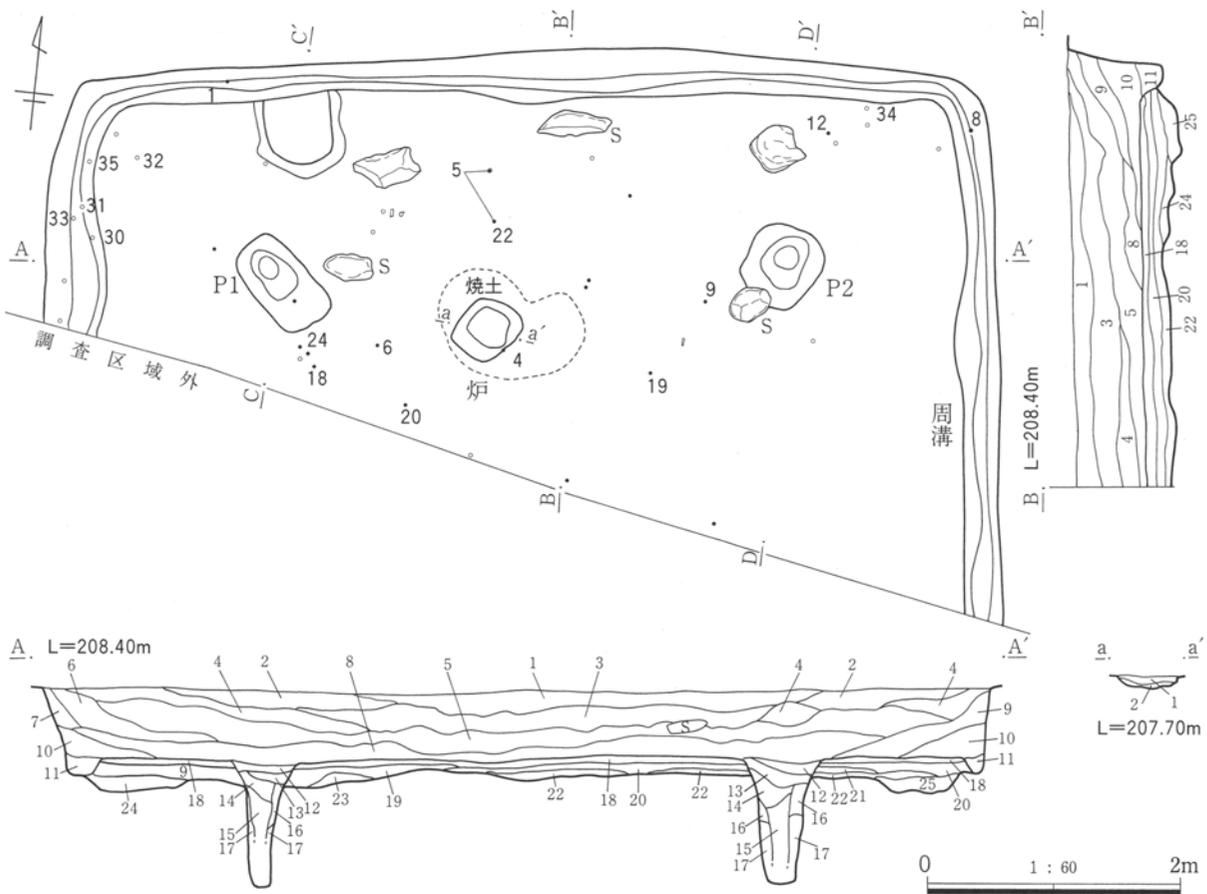
87図 20号住居跡出土遺物(2)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



88図 20号住居跡出土遺物 (3)

0 1 : 4 10cm



21号住

- 1. 鈍黄褐色土 小型のローム塊を多く含む
- 2. 暗褐色土 細粒で均質。少量のローム粒を含む
- 3. ♪ やや暗い色調を呈す。ローム粒・炭化物を含む
- 4. 褐色土 小礫・炭化物を少量含む
- 5. ♪ 小礫・大型のローム塊を含む
- 6. 暗褐色土 粗粒。ローム粒・炭化物を多く含む
- 7. 黒褐色土 細粒で均質。ローム粒を微量含む
- 8. 暗褐色土 暗褐色土・炭化物を多量に含む。ローム塊少量含む
- 9. 鈍褐色土 小型のローム塊を多く含む。しまり弱い
- 10. 暗褐色土 暗い色調を呈す。小型のローム塊を少量含む
- 11. 褐色土 ローム粒を主体とする。しまり弱い。壁周溝埋土
- 12. 暗褐色土 やや暗い色調。ローム粒・炭化物を少量含む
- 13. ♪ 細粒で均質。包含物も最少
- 14. ♪ 黒色土塊を少量含む
- 15. 黒褐色土 細粒で均質。少量のローム粒を含む。軟質。柱痕
- 16. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 17. 鈍褐色土 小型のローム塊を主体とする
- 18. 暗褐色土 ローム塊と黒褐色土塊による貼床土。硬くしまる
- 19. 黄褐色土 ローム主体の床下埋土。しまりは強い
- 20. 暗褐色土 ローム粒と黒褐色土小塊による下面貼床土か
- 21. ♪ 暗褐色土塊を主体に小型のローム塊を斑状に含む貼床か。硬くしまる
- 22. 鈍黄褐色土 大型のローム塊を主体とし上面が硬化。床下埋土
- 23. 黄褐色土 ローム塊主体。暗褐色土塊を含む。床下埋土
- 24. ♪ 大型のローム塊主体。床下埋土

a - a' (炉址)

- 1. 暗褐色土 少量の焼土粒・炭化物・ローム粒を含む
- 2. 赤褐色土 焼土層。細粒。しまりは強い

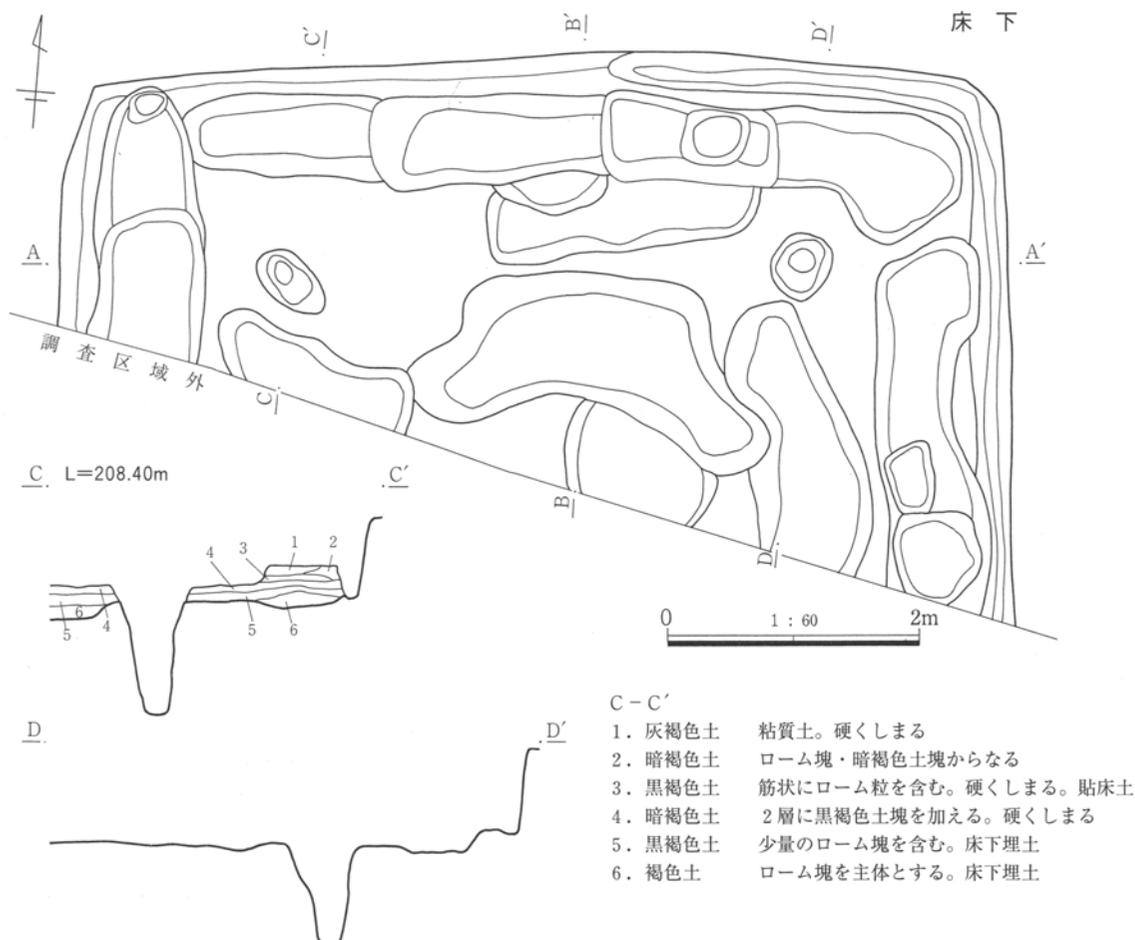
21号住居跡 (図版9・10)

II-2区西側の住居跡群の中で検出した。周辺はほぼ平坦で、西側への傾斜変換点にあたる箇所である。北に1号住が近接し、西に11号住が接する。また、東に2~3m程距離を置いて16号住と15号住が連続する。

確認面はローム上面で行った。これは1号住周堤帯下の調査におけるもので、本住居跡の存在は、F P下の段階から、凹みが確認されていたため認知されていたのである。にもかかわらず、確認面をローム上面とした理由としては、凹みを重視し、住居跡として調査に着手した際、多くの失敗例として、土層観察軸—いわゆるセクションベルトの設定を誤り、必ずしも平面形に沿った設定ではない例が見られる。また、平面形の確認も誤りがちで、凹み—周堤帯の

89図 21号住居跡床面

Ⅲ 検出された遺構と遺物



90図 21号住居跡床下

調査を優先すると住居跡本体の調査を失敗することが多い。また、本住居跡周辺の高まり一周堤帯は1号住に付帯するものと捉えられ、21号住居跡が廃棄された後に1号住があるものと考えた。あるいは両住居とも周堤帯を併存させる可能性も想定したが、両者の間隔は2m程にすぎず、上屋が重なる位置関係と判断した。故に、両住居には時間差があり、1号住周堤帯を優先し、本号住居跡はローム上の調査となった次第である。

本住居跡の南半は調査区域外に隠れるため、全体像は判然としないが、軸長7.5mの整った方形を平面形とする。本遺跡では最大規模の大型住居跡である。深さも約60cmを測り、ロームを深く掘り込んだ壁は直立し、良好な遺存を示す。軸方位も東北東を向き、1号住や15号住との統一性が窺われる。

床面は平坦面を築き、暗褐色土塊とローム塊を主体とした貼床土が全面に渡る。硬化面も光沢を持ち、

炉址を中心に広く認められた。

柱穴はP1とP2を充てたい。両者とも、壁際から1.3m程の距離を保ち規則性を持った配置を示していた。柱穴間の距離は約4.1mを測り、おそらくこの規則性の上で、四本柱穴が配されるものと捉えられた。P1は長方形の外郭で平面形は85×50cm、深さは90cmを超える。P2は径約65cm程の不整形円で、深さは96cmを測る。両者とも柱痕が観察された。

炉址として、P1とP2の間に焼土の広がりとし小規模な掘り込みを検出した(a-a')。やや北寄りの設営といえよう。床面精査時より、焼土及び炭化物が明瞭にまとまっており確認は容易だった。尚、北寄りの配置を考えるに、あるいは調査区域外にも複数の炉址が存在する可能性がある。

貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は確認された範囲では、全ての壁下で検出し得た。前述の高まりも壁間に壁周溝が連続する。

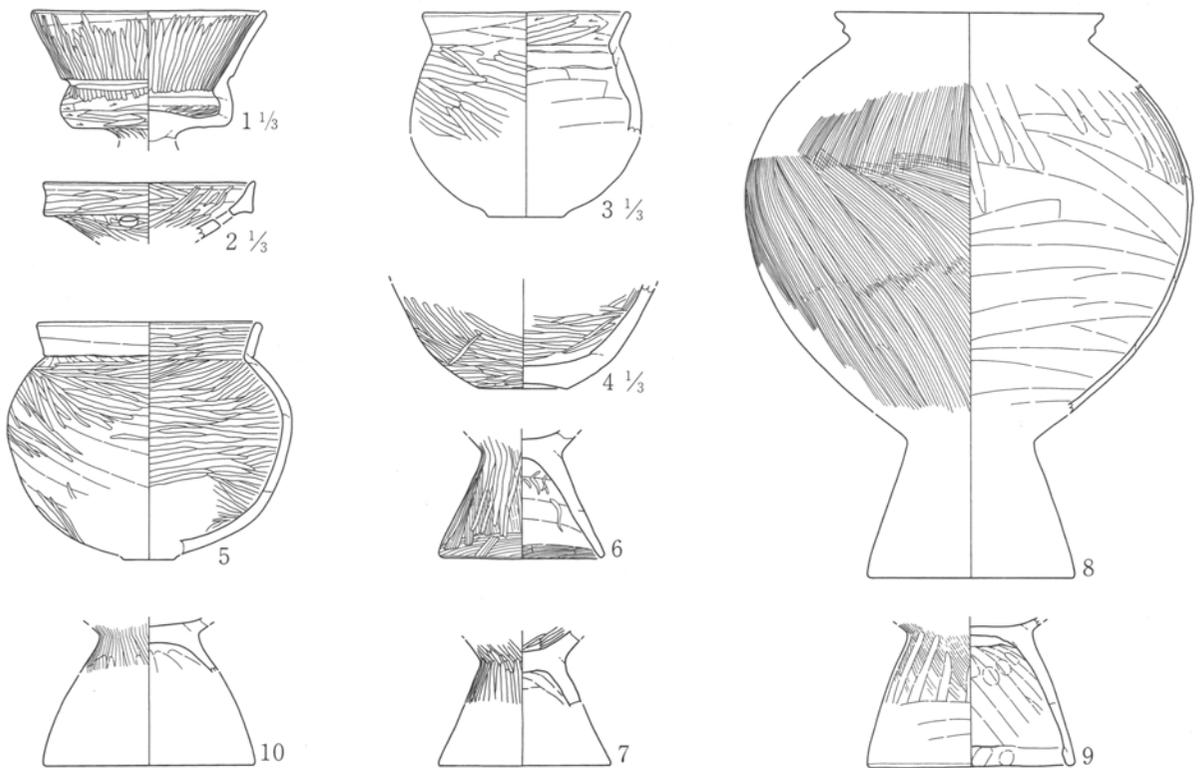
その他の床面上の施設としては、北壁西寄りに、上面に硬化面を持つ僅かな高まりが検出されている(C-C')。約70×65cmの平面規模で15cm程の高まりを有していた。上面に灰褐色粘質土があり、極めて硬く締まっていた。下層は硬化層が筋状に入り、後述するが、重層する貼床と同様の様相であり、本住居跡の貼床と同目的的な構築と捉えられた。性格は特定できないが、入り口施設の種類と考えられよう。1号住にみる壁周溝の途切れ部も北壁であり、共通性が窺えることから、検討を要しよう。

床下遺構としては、壁下の幅広の凹みを検出した。不整楕円形の土坑状の掘り込みが連続する様相が把握できた。柱穴も中央部の高まりの隅部に設定されていたようだ。

また、床下調査では複数枚の硬化面を見ることができた。残念ながら断面のみの観察で、平面的な広がりには捉えきれないが、炉周辺から南側にかけて、硬化面が重層していた。床面の貼り替えとも捉えら

れるが、柱穴などに建て替え痕跡が見られず、床面構築時の版築行為と考えている。

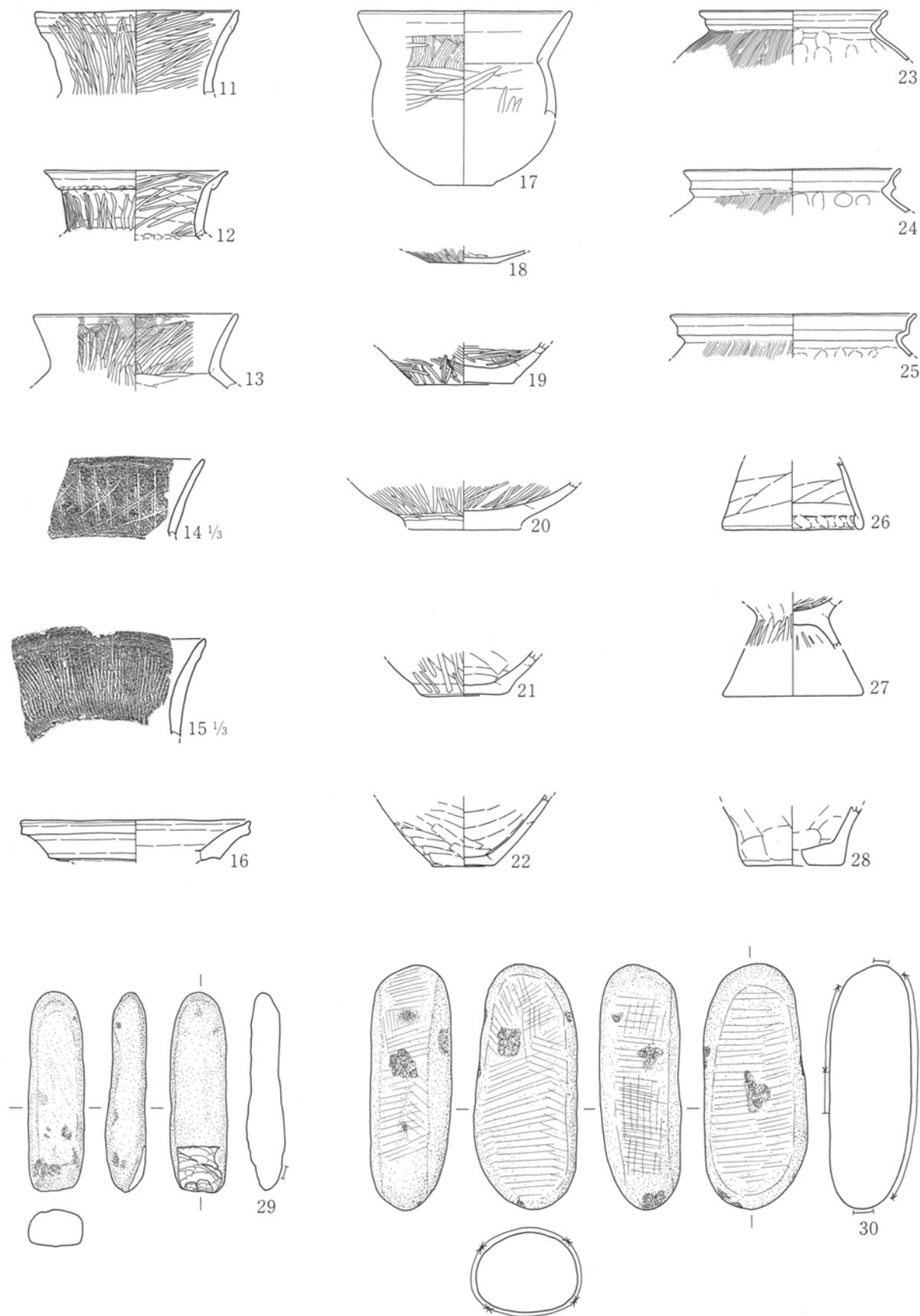
出土遺物は、住居跡規模に比してやや少ない。完形の出土は見られず、全て土師器で破片状態である。28点を図示し得た。比較的埋土中層から下層の出土が多く、床直出土の例は見られなかった。平面的にも極端な集中は見せず、中央部にかけて、散漫な散布状況であった。住居跡廃棄後の流入であろうか。小型高坏(1)は東壁際下の床直上で出土を見た。坩底部(4)小型甕(5)・甕台部(6・9)と甕底部(18~20・22)・S字口縁甕口縁部破片(24)が炉址周辺の埋土下位~床直上で広がる。北東隅周辺では、壺口縁部(12)やS字口縁甕体部破片(8)が上層から中層にかけて出土を見る。また、本住居跡は薦網石状の棒状礫が床直より出土している。磨石類・敲石類との分別が困難だが、7点を図示した。30~33・35が北西隅でまとまる。34は北東隅で出土した。



91図 21号住居跡出土遺物(1)

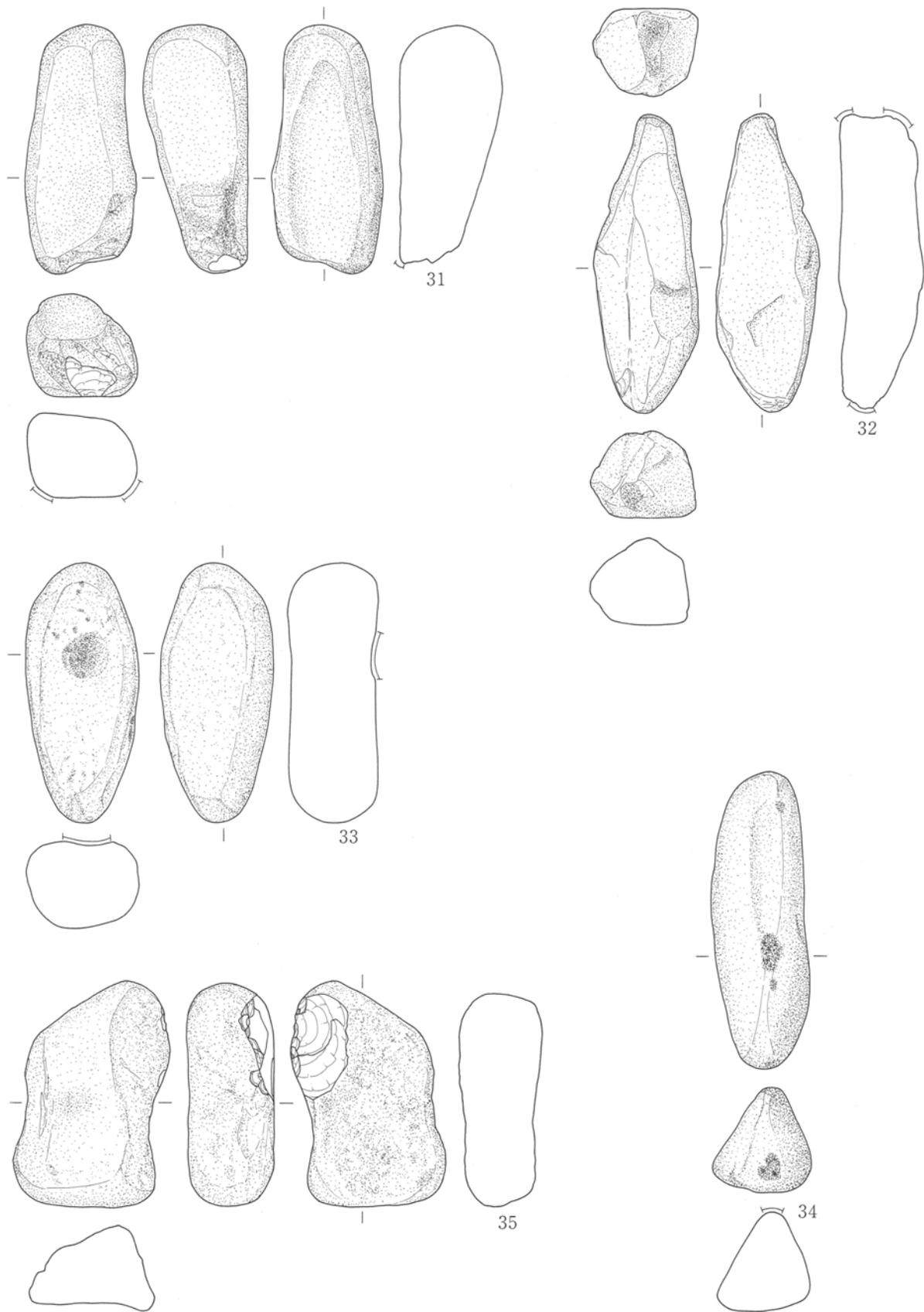


Ⅲ 検出された遺構と遺物



92図 21号住居跡出土遺物(2)

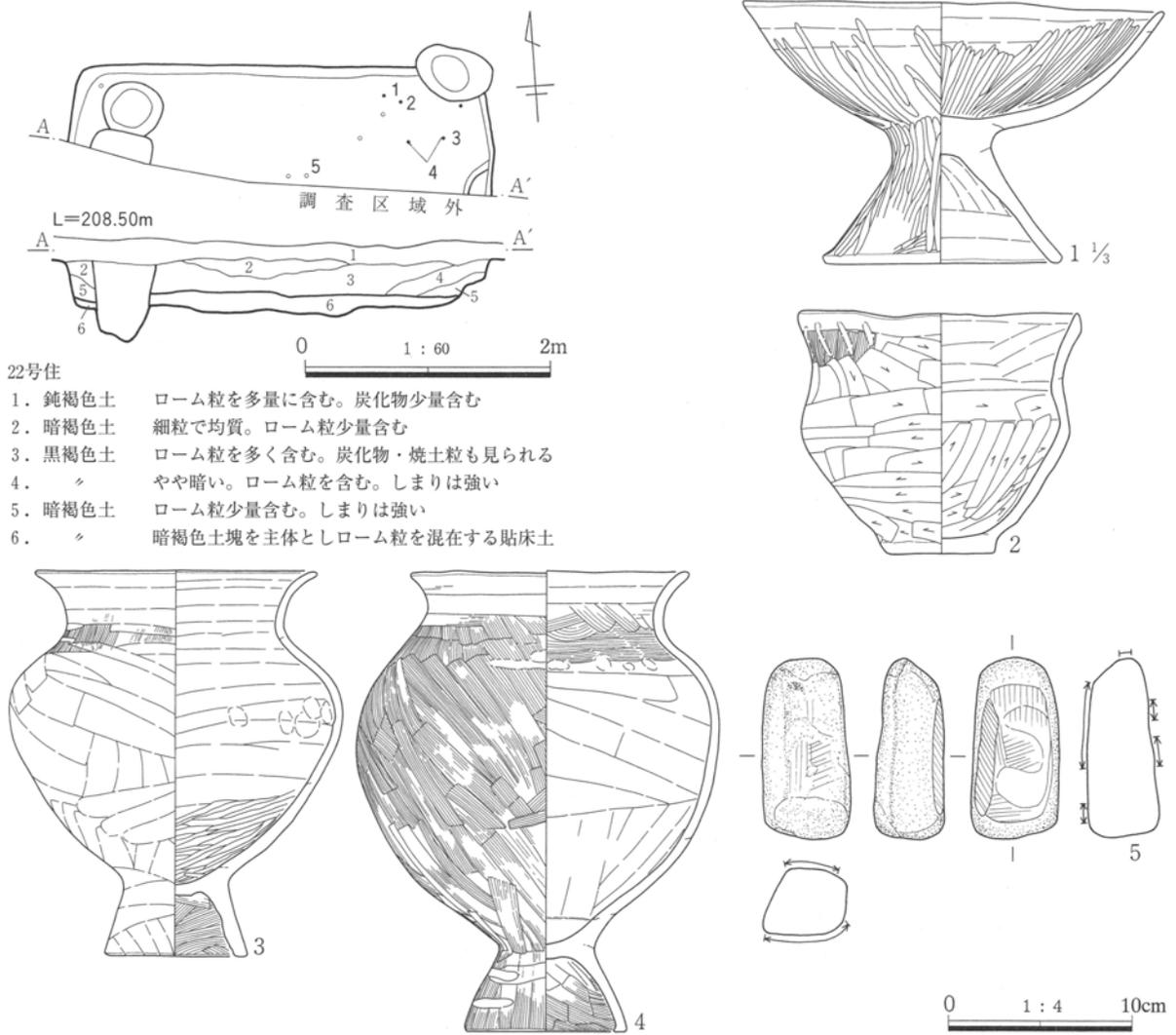
0 1:4 10cm



93図 21号住居跡出土遺物(3)

0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物



22号住

- 1. 鈍褐色土 ローム粒を多量に含む。炭化物少量含む
- 2. 暗褐色土 細粒で均質。ローム粒少量含む
- 3. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。炭化物・焼土粒も見られる
- 4. やや暗い。ローム粒を含む。しまりは強い
- 5. 暗褐色土 ローム粒少量含む。しまりは強い
- 6. 暗褐色土塊を主体としローム粒を混在する貼床土

94図 22号住居跡床面・出土遺物

22号住居跡（図版10）

Ⅱ-2区中央部の南壁際で調査された。周辺はほぼ平坦地形で、掘立柱建物跡が群在する地点に位置する。本住居跡も2号掘立柱建物跡の南端の6号ピットが北東隅に重複する。発掘時の所見では6号ピットに切られる新旧関係をj得ている。他の堅穴住居跡群とは距離を置いた占地で、14号住と同様に孤立した住居跡の可能性もある。ローム層上面での確認である。

本住居跡南側の大半が、調査区域外に隠れるため、北壁と周辺の床面のみの検出となった。周堤帯は調査区壁の観察においても確認できなかった。

軸長3.4m程のやや小型の住居跡であろうか。おそらく方形の平面形を呈し、北壁に緩やかな内湾が見

られる。深さは約30cmを測り、遺存度は良好といえよう。

床面は、僅かな凹凸があるもののほぼ平坦面を築き、暗褐色土の貼床がなされていた。硬化面は西側が顕著に見られた。

炉・柱穴は確認できなかった。幾つかのピットが床面上に開くが、全て重複で本住居跡が切られる関係である。おそらく重複する2号掘立柱建物跡の延長部の可能性を持つ。土層と平面確認時の所見で新旧を判断した。壁周溝は見られなかった。

床下遺構も判然としない。検出した底面の東半分jに縄文時代に相当する風倒木址があり、そのため色調変化による床下遺構の検出が果たせなかった。

遺物の出土は比較的個体を揃えた。埋土中からは

土師器小破片が少量出土していたが、北東隅の床直上において、完形・ほぼ完形の土師器4個体がまとまって出土した。高坏（1）が逆位に、広口甕（2）が斜位に、台付き甕（3）は逆位、4は横位になって出土している。4の原位置は逆位で、埋没時に横位に倒れた可能性もあろう。いずれにしても、この4個体は意図的な配置あるいは埋置行為によるものと考えた。磨石（5）は調査区壁際で床直上より出土した。

23号住居跡（図版10）

平成11年度と12年度に跨って調査された住居跡である。11年度は南西隅の極一部を調査し、用地解決後の12年度に、北側の大半を調査した経緯がある。尚、北東隅は調査区域外にかかり調査は果たせなかった。

Ⅱ-2区北東の東への傾斜変換点に位置する。東側住居跡群の東端に占地し、他の住居跡とはやや距離を置く。西約6mに24号住、南西約6.8mに6号住、南約4mに7号住があるように、住居跡群の中にありながら距離を保っている。東側住居跡群の中でも一際存在感ある住居跡である。

F P 下面でも凹地として確認され、下層に竪穴住居跡の存在が予測されていた地点である。F P 下では30cm程の高低差であり、F A 下に至ると40cmを超える差が見られた。無論周堤帯の痕跡は認められ、F A 下においては本住居跡の西側にかけて、幅約5.5m程の広さで高さ約20cm程の緩やかな高まりが確認された。発掘調査では、調査区北壁において周堤帯の土層記録化を果たしたが、黒色土と黒褐色土で構成され、土層軸も周堤帯に対し直交しておらず、そのため、土層では周堤帯範囲が表現され得なかった。故に報告書では周堤帯の掲載は控えたが、その存在は明らかであり明記しておきたい。

調査は漸位層中層を確認面とした。東側傾斜にかかるため黒褐色土～漸移層の堆積が厚く、漸移層下面～ローム上面の平面確認は住居跡本体を逸失する恐れがあったためである。漸移層中層は、色調差に

よる平面確認が極めて困難な層位であり、前述の凹地を手がかりに調査を進めた。結果、住居跡上位に置いてはその平面形の把握に誤差が生じ、床面検出後に再度住居跡上位の壁の再検出をし、住居跡の外郭を抽出し得た。手戻りが多く凹地＝住居跡の調査を進める際の反省点が残った。また、床面に達した際、ローム層上層より湧水があり、床面の検出さらに柱穴など諸施設検出に困難が伴った。

平面形は、長軸を東北東に向ける、約5.1×4.2mの整った方形を呈する中規模の住居である。深さは70cmを超え、ローム層上面にまで達していた。良好な遺存度と言えよう。

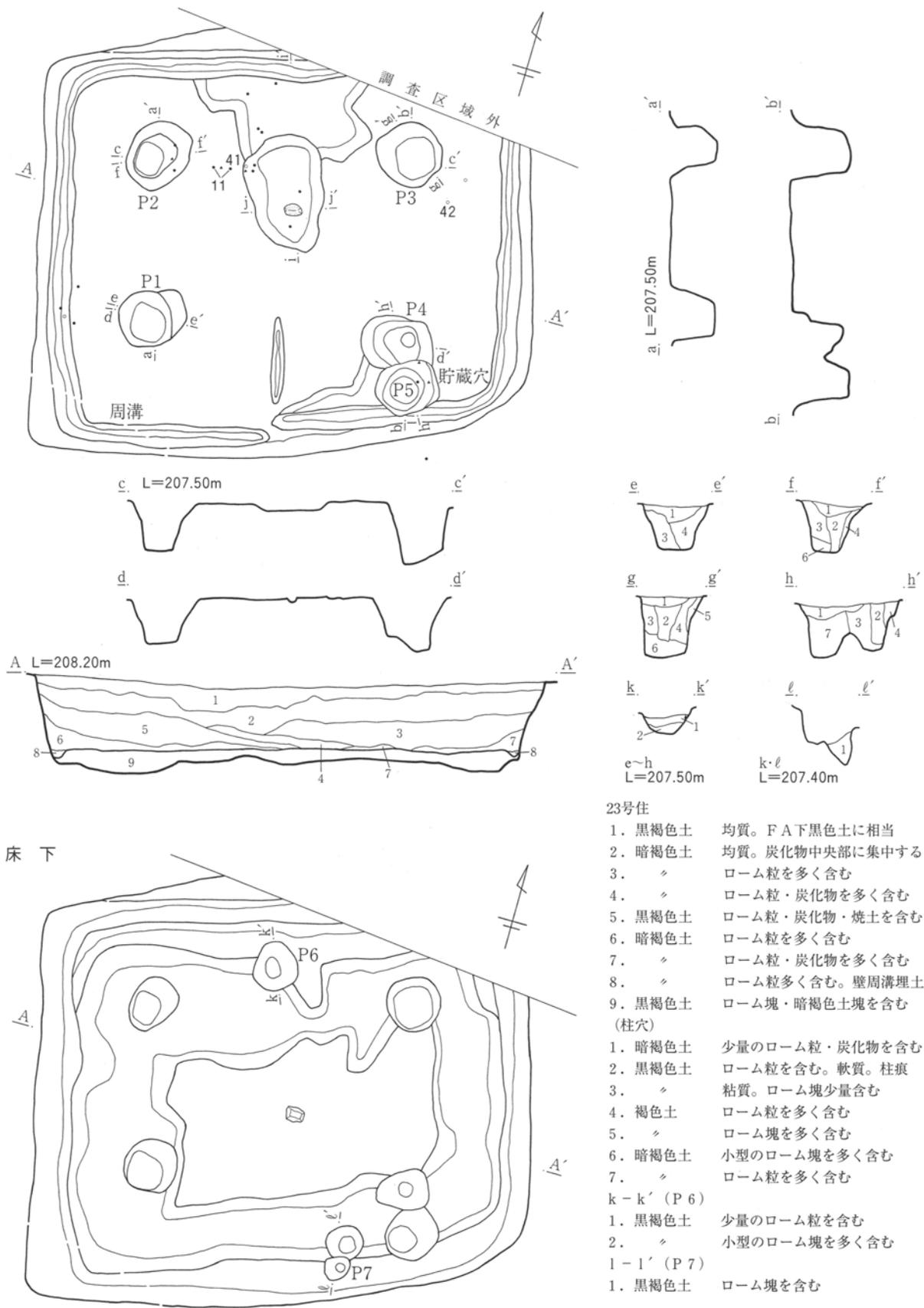
床面は、ほぼ平坦面を築くが東側の一部がやや凹む。黒褐色土を基調にローム塊を混在した貼床土が全面になされていた。硬化面は床面中央から西側にかけて顕著であった。ローム塊の混在が少ない東側はやや軟弱な感触を得た。

また床面各所には、小型で少量であるが炭化材が散布していた。焼失住居として考えておきたい。

炉は床面中央やや北寄りで検出した。120×80cm程の不整楕円形の浅い掘り込みを有する。さらに北壁に接するように不整形の浅い落ち込みが連続し、楕円形の炉本体との関係を窺わせていた。この不整形の落ち込みが炉及び北壁とも関連するならば、壁に係わる燃焼施設として、例えば竈の前駆的な様相として位置付けられよう。しかしながら、炉周辺には竈構築材に相当する粘土や自然石等は検出されおらず、炉中央に自然石が1個置かれているのみだった。また、北壁には壁周溝が巡っており、壁を跨ぐ施設を遮蔽する結果となっている。本報告では、本住居跡の炉と北側の落ち込みでは竈と断定せず、前駆段階の様相として、炉が壁に近接することによる調理施設範囲の定着化を想定しておきたい。

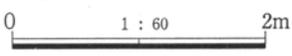
柱穴は四本柱穴である。各柱穴は径60～70cmの不整円形を呈し、深さは40cm～60cmを測る良好な例である。配置も各々、壁際から約80～90cmの距離を保ち、規格性を帯びて配されていた。そのうち柱穴1のみが南壁より1m離れており、規格性から若干外

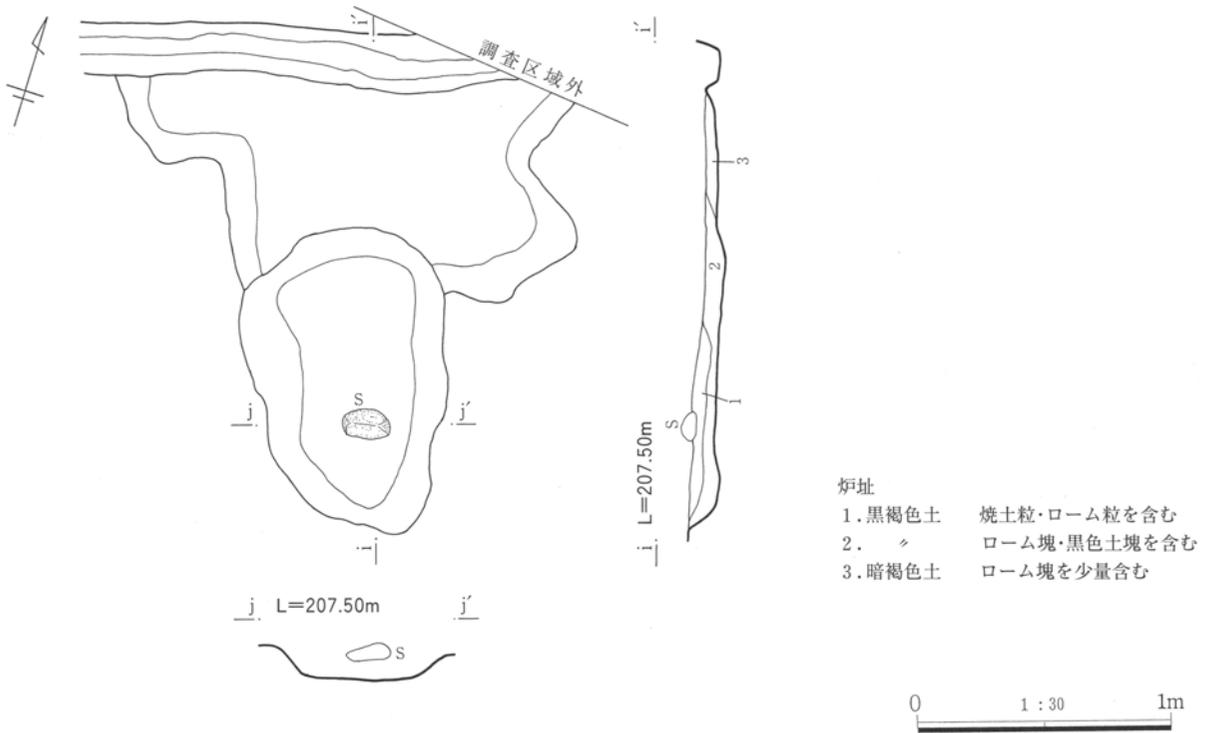
Ⅲ 検出された遺構と遺物



- 23号住
- 1. 黒褐色土 均質。F A下黒色土に相当
 - 2. 暗褐色土 均質。炭化物中央部に集中する
 - 3. 〃 ローム粒を多く含む
 - 4. 〃 ローム粒・炭化物を多く含む
 - 5. 黒褐色土 ローム粒・炭化物・焼土を含む
 - 6. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
 - 7. 〃 ローム粒・炭化物を多く含む
 - 8. 〃 ローム粒多く含む。壁周溝埋土
 - 9. 黒褐色土 (柱穴) ローム塊・暗褐色土塊を含む
 - 1. 暗褐色土 少量のローム粒・炭化物を含む
 - 2. 黒褐色土 ローム粒を含む。軟質。柱痕
 - 3. 〃 粘質。ローム塊少量含む
 - 4. 褐色土 ローム粒を多く含む
 - 5. 〃 ローム塊を多く含む
 - 6. 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む
 - 7. 〃 ローム粒を多く含む
 - k-k' (P 6)
 - 1. 黒褐色土 少量のローム粒を含む
 - 2. 〃 小型のローム塊を多く含む
 - l-l' (P 7)
 - 1. 黒褐色土 ローム塊を含む

95図 23号住居跡床面・床下





96図 23号住居跡炉址

れる。柱穴間の距離も東西約2.7mと南北約2.0mを平均的に測るが、柱穴1・2間が約1.7m程で短い。柱痕は柱穴2～4に認められた。尚、床下調査で得られたP6も配置上、柱穴とするに充分であるが、やや浅いことと炉址に近すぎることから柱穴としては除外した。

貯蔵穴は、南東隅やや西よりで検出したP5を充てたい。当初は柱穴4の建て替えの可能性を含めたが、他の柱穴に建て替え痕跡が認められず、配置上も貯蔵穴として判断した。規模は70×60cmの不整形円形を呈し、60cmの深さを測る。

壁周溝はほぼ全周する様相だが、僅かに南壁中位で途切れる箇所がある。走行を違え15cm程の隙間を形成する。この隙間の北側には間仕切り溝があり、壁周溝の途切れが床面分割・間取りに関連する例として注意したい。

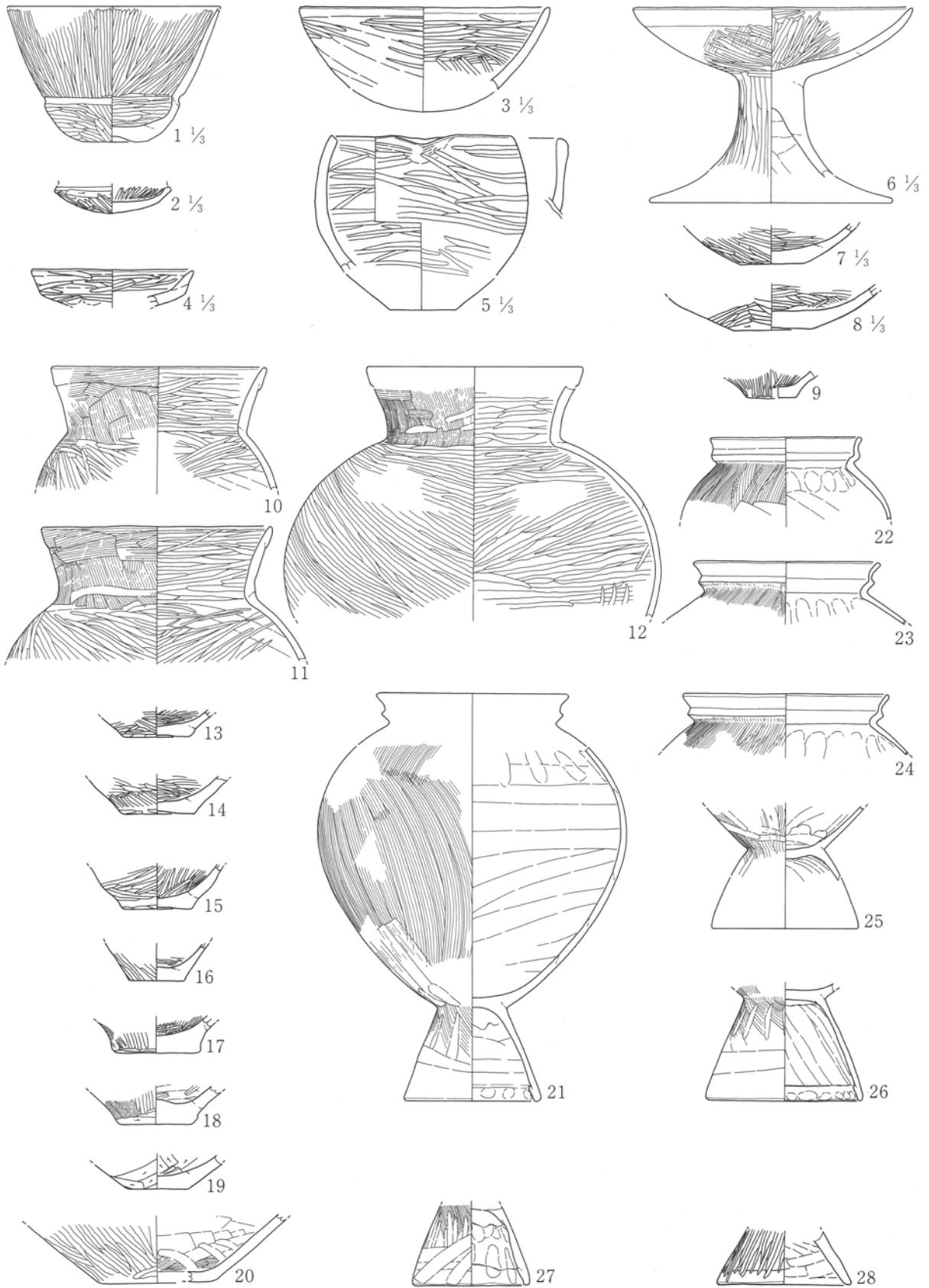
間仕切り溝は、壁周溝の途切れを基点に、短軸方向に90cm程延び、柱穴1と4の中間で止まる。幅約10cm程の細長い溝で深さも10cm未満で浅い。床面を2分割する位置にあり、間取りを捉える上で重要な施設である。

床下調査では、壁下が広く凹む例を検出した。幅約70～120cmと統一性が無く壁下を巡るが、幾つかの土坑状のまとまりも見られる。21号住床下に見た土坑状の掘り込みが連続する様相と近似する。壁下の凹みも本住居跡は壁直下は約10～30cmの平坦面を持たせ段差が設けられる。土層では新旧は観察できないことから、拡張や建て替え痕跡ではなく、構築時の一手法として考えている。

その他の施設としては、床面上では検出できなかった、P7を挙げたい。南壁際で検出した2基の小ピットが重なる例であるが、北側のピットが、南壁に向かって斜位に設けられている。おそらく梯子穴と捉えられ、南壁にかかる昇降施設を想定したい。床面で検出した壁周溝の途切れ箇所とも近接しており、間仕切り溝も関連させて、入り口と間取りを把握するに示唆的な配置であろう。

遺物は、埋土中から多量の土師器破片が出土した。床直上より床直出土の破片類もあるが、前述のように床面に達するあたりから湧水が見られ、遺物の出土地点を十分に記録化出来なかった。11の甕口縁部破片が炉址脇の床直上から出土している。

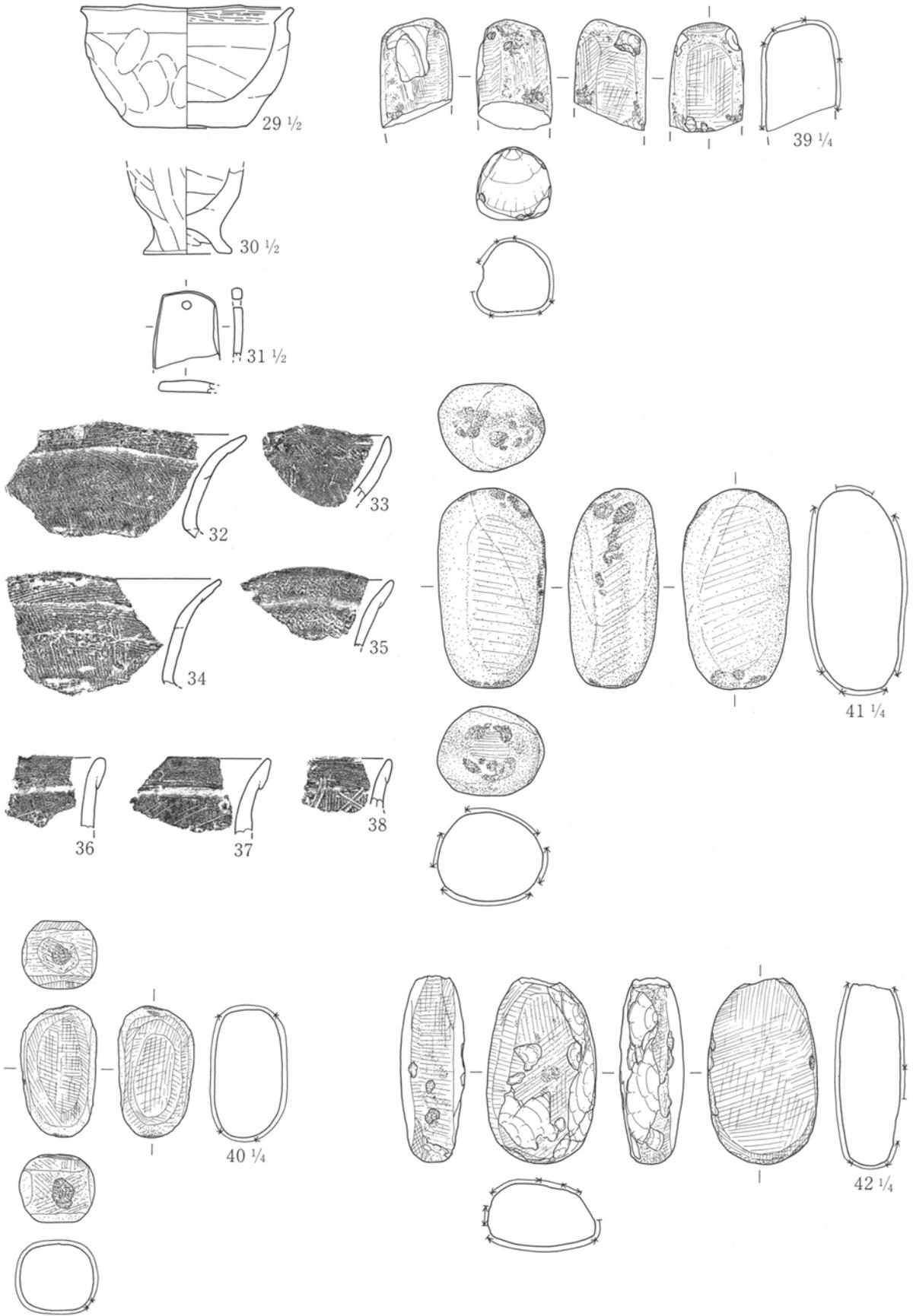
Ⅲ 検出された遺構と遺物



97図 23号住居跡出土遺物(1)

0 1:4 10cm

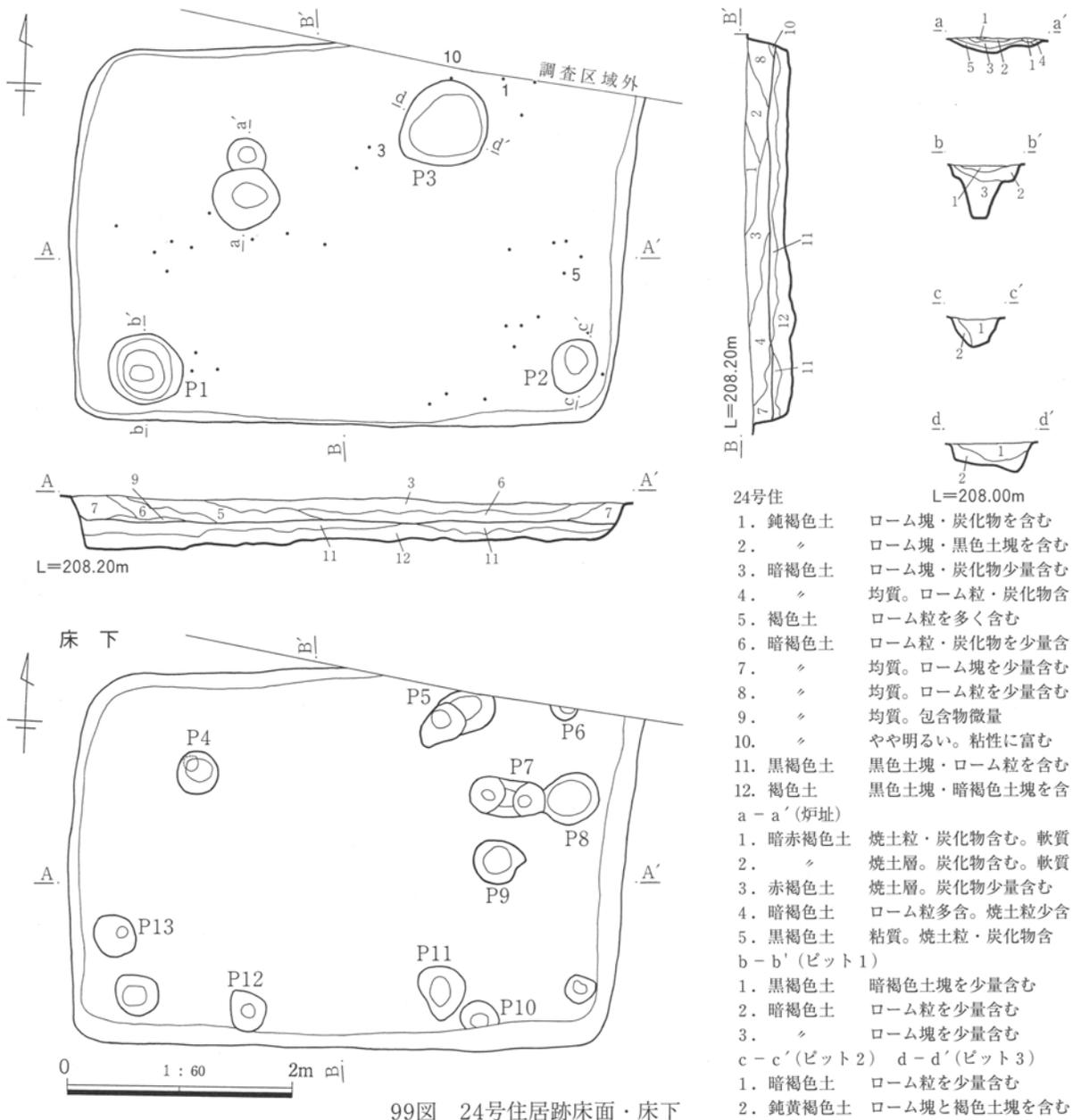
3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



98図 23号住居跡出土遺物(2)

0 1:3 10cm

III 検出された遺構と遺物



99図 24号住居跡床面・床下

24号住居跡 (図版11)

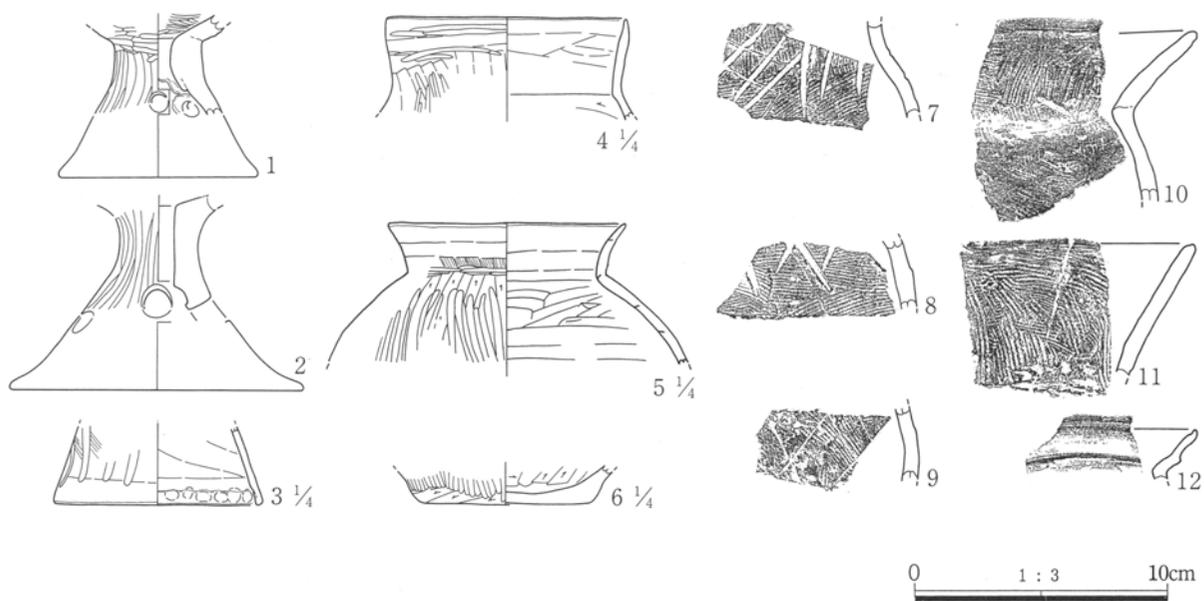
II-2区東側の調査区北壁際で検出した。周辺は東への緩やかな傾斜変換点であり、東側住居跡群の一角を占める。おそらく住居跡群は北に延びる傾向が見出せよう。南約1.6mに6号住が軸を同一にして近接する。また、距離をおいて23号住が東6mに占地している。確認面は漸移層中層で地山は暗褐色を呈す。単独の検出で重複遺構も無いため、比較的容易な検出だった。

北壁から北東隅部を調査区域外に延ばすため、厳密な平面形は判然としないが、やや縦長の長方形と

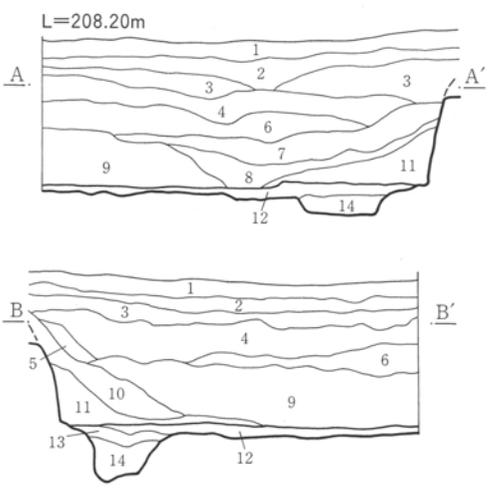
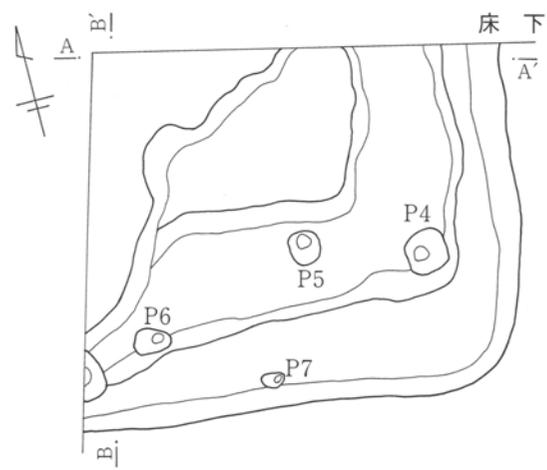
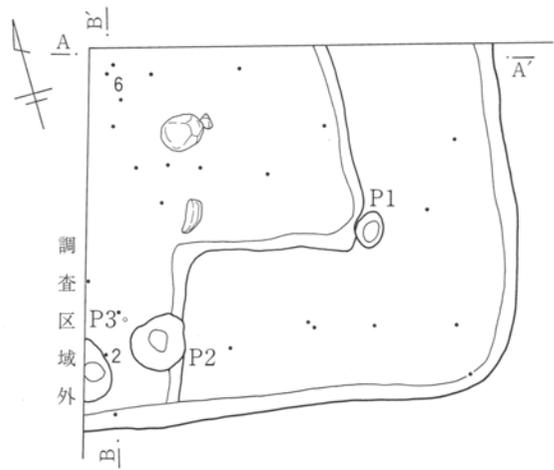
思われ、長軸をほぼ東西に向ける。北壁と東壁の走行を見ると調査区域外に延びるが、やや歪つな感があり、平面形は不整長方形になる可能性もある。規模は平面規模約5.0×3.3m、深さは20cmを測る。中規模の住居といえよう。壁は暗褐色土を掘り込み、立ち上がりもやや開くものの、直立気味でしっかりしたものである。

床面は、漸移層下位に止まる。ほぼ平坦面を築き、暗褐色～黒褐色土塊を貼床土とし、床全面に渡っていた。硬化面は床西側にやや偏りがあるが、これは炉址周辺が硬化するためであろう。

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



100図 24号住居跡出土遺物



- 25号住
- | | |
|----------|--------------|
| 1. Hr-FA | 純層 |
| 2. 黒褐色土 | ローム粒・炭化物を少量含 |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒を多く含む |
| 4. 黒褐色土 | ローム塊・焼土粒を少量含 |
| 5. 暗褐色土 | ローム粒を少量含む |
| 6. 鈍黄褐色土 | 大型のローム塊を主体 |
| 7. / | ローム塊・黒色土塊を含む |
| 8. 暗褐色土 | ローム粒を少量含む |
| 9. 鈍黄褐色土 | 小型のローム塊を多く含む |
| 10. / | ローム塊を多く含む |
| 11. / | やや暗い。ローム粒を含む |
| 12. / | ローム塊・暗褐色土塊含む |
| 13. 鈍褐色土 | ローム塊を多く含む |
| 14. / | ローム粒を多く含む |

101図 25号住居跡床面・床下

Ⅲ 検出された遺構と遺物

炉址は、床面中央やや北西寄りに明瞭な焼土の範囲を確認した。径約60cmの小型円形の掘り込みと北側に径30cmの小穴が接しており、円形の掘り込みと小穴を含めて炉址と考えた。両者とも掘り込みは浅い。焼土は上面～底面に至るまで堆積しており、底面基盤も若干焼土化していた。火力の強さを窺わせよう。

柱穴は床面上で検出したP1とP2を充てたい。しかしながら、両者とも貯蔵穴にも相当する位置にあり、確定性に乏しい。床面精査時においても、2基のピットに対応する北西隅部を中心に、柱穴の確認を重ねたが、浅い不整形の小穴しか得られなかった。また、床下調査で得られたP4～P13も可能性を探ったが、いずれも浅く配置上も問題があり、柱穴としての性格は充てがたい。

貯蔵穴はP3を考えた。やや浅い上に、隅部では無く、配置に疑問が残るが、平面規模と北壁による様相から判断した。壁周溝は見られなかった。

床下調査はローム上面で行った。検出し得た床下遺構としては、前述のP4～P13が挙げられるが、床下土坑としての位置付けはP8・P9が妥当である。また床下底面は僅かな凹凸を持ち西側へ傾斜する傾向が見られるが、特徴的な掘削痕跡は見出せなかった。ほぼ平坦の床下底面である。

遺物は土師器破片が少量出土した。層位的には、埋土下位～床直上出土が多く、床直遺物は無い。平面的には、極端な集中傾向は見られなかったが、炉址周辺と南東隅周辺に破片が集まる傾向があった。12点を図示したが、全て破片であり、本住居跡に積極的な帰属は見出せない。

25号住居跡 (図版11)

Ⅱ-2区中央の調査区北壁際で調査された。周辺地形はほぼ平坦である。住居の北半及び西側を大きく区域外に延ばすため、南東部の約1/4の調査となった。本住居跡を中心に中央部北の住居跡群を想定できる可能性がある。南東には3号住が約1.5m、西にある8号住・26号住は約2mの距離に近接する。

また、調査区域外本住居跡と12号住は重複あるいは接する可能性を持つように、住居跡群は北側へ延長する兆しを見せる。

確認面は漸移層下位である。平面確認時から、上層に多量のローム塊の堆積が見られ、均質土と不均質土の分別で平面形を把握した。

埋土調査に置いても、ローム塊は多く、幾度となく床面を誤認した経緯がある。

平面形は判然としないが、方形で軸長4m以上の中～大型住居跡が想定される。遺存度も良好で、深さも約70cmを測ることからも、大型住居跡の可能性は高い。壁はローム層を主体としており、直立気味でしっかりと掘り込まれていた。

上層の調査では明瞭な凹地、凹みは確認していない。FP下面ではほぼ平坦地形であり、FA下の調査では10cm程度比高差の凹みとして把握されており、住居跡の存在は予測されていなかった。おそらく、本住居跡は、短時間の埋土行為一住居廃棄後の埋め戻しが行われ、その際に周堤帯は壊され埋土に充てられたのではないかと考えられる。調査区北壁の土層の観察でも、周堤帯の痕跡は見受けられなかった。

さて、70cm下の床面の遺存度は極めて良好である。ローム層中にまで達しており、鈍黄褐色土が貼床土として埋められていた。また、東壁際と南壁際に幅2m程の平坦面を持って、中央部にかけて高さ約10cm弱の段差が認められた。この段差は、東壁と南壁に併行し、南壁中位で途切れ、P2・P3が開く。上位平坦面幅は一定で、途切れ部も壁に直交気味に切れることから定型的な形状と思われる。通常、上位平坦面を棚状施設とも捉えられるが、本住居跡の場合、段差が10cm程度と低く、床面中央を区切る間取り施設として判断した。同様の例は先に述べた1号住にも見られる。

床面硬化面は段差下の下位平坦面に顕著である。光沢面を持ち硬く締まる。上位平坦面は下位程ではないものの、床面としての硬さは確認でき、生活面であることが理解できる。

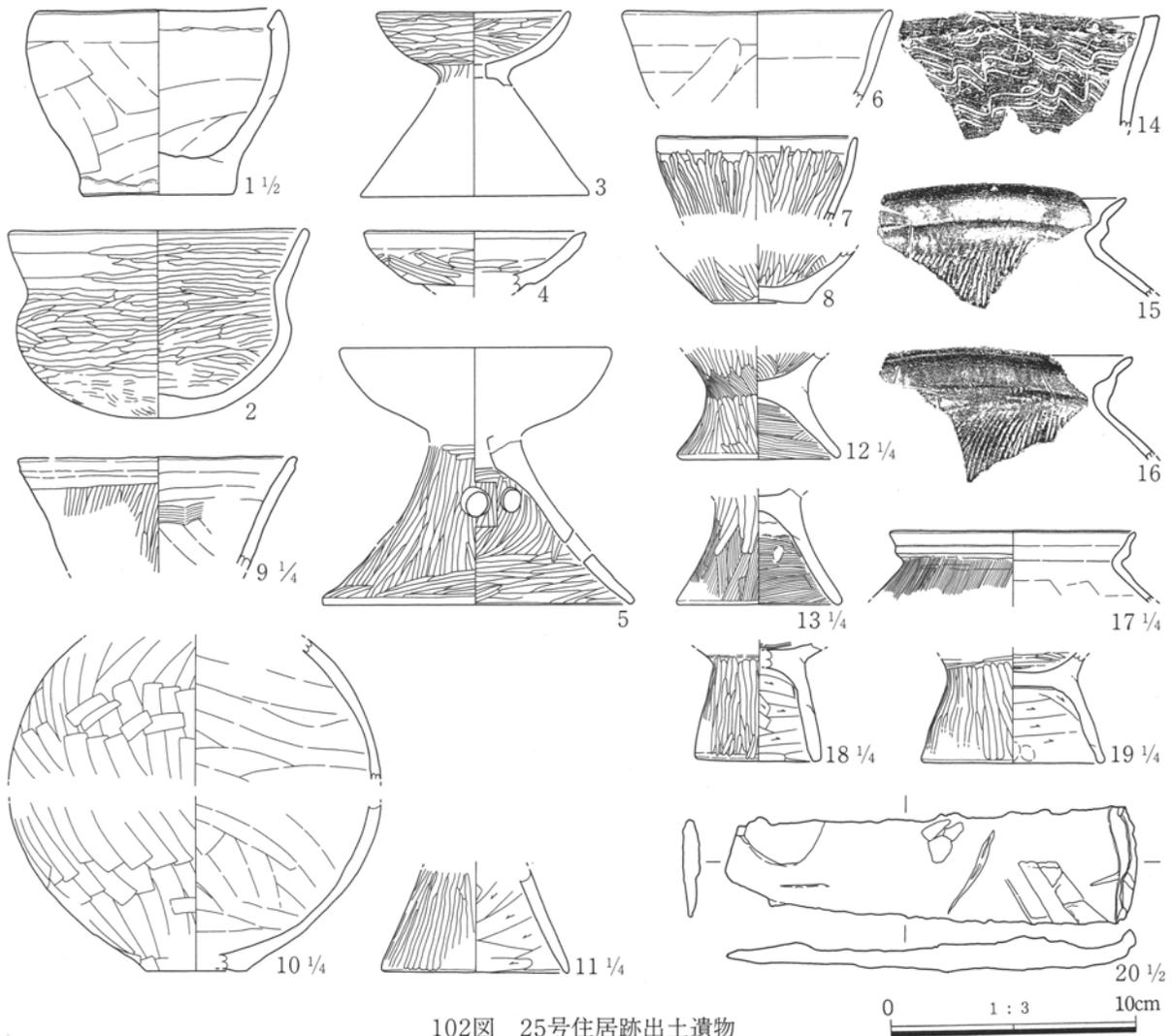
3. 古墳時代前葉の遺構と遺物

床面上では3基のピットを検出した。P 1は径約30cmで深さは30cm、P 2は、径約45cmで深さは約60cmを測る。P 3は調査区域外に延びるため平面規模は不明だが、深さは40cmを超えるしっかりしたピットである。柱穴としてはP 1及びP 2を規模・配置から位置付けておきたい。両者とも床面段差に沿う配置で設けられている。P 3も可能性は高いが、段差に沿っていない配置から、柱穴としては除外した。また、床下調査で得られたP 5～P 7のうち、P 5が深さが約35cmを測るため、柱穴の可能性はある。

炉址・貯蔵穴・壁周溝は確認できなかった。このうち壁周溝に関しては、東壁際に極僅かな凹みが沿っていたが、浅く幅狭のため図化が果たせなかった。あるいは壁周溝と考えるべきだったかもしれない。

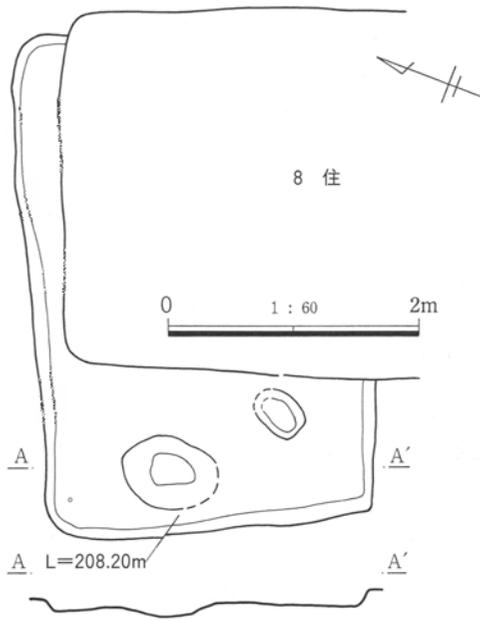
床下調査では、壁下の幅広の凹みと中央部の盛り上がりを見る事ができた。壁下の凹みは、23号住と同様に若干段差を持たせて、幅90cm程の溝状の凹みを掘っていた。また中央部は2段の段差が認められた。その他の施設としては、P 7が南壁際に見られ、梯子穴としての可能性を見せるが、壁に近過ぎており、機能的には否定材料である。

遺物は埋土中より床直上にかけて満遍なく出土した。比較的量は多いものの殆どが破片出土である。完形品としては、埴(2)がP 3上で埋土下位より出土している。その他の破片は図示に耐える例が少なく、埋土中の出土である。特筆すべきは、鉄製品鎌(20)が床直上で出土している。



102図 25号住居跡出土遺物

Ⅲ 検出された遺構と遺物



103図 26号住居跡床下

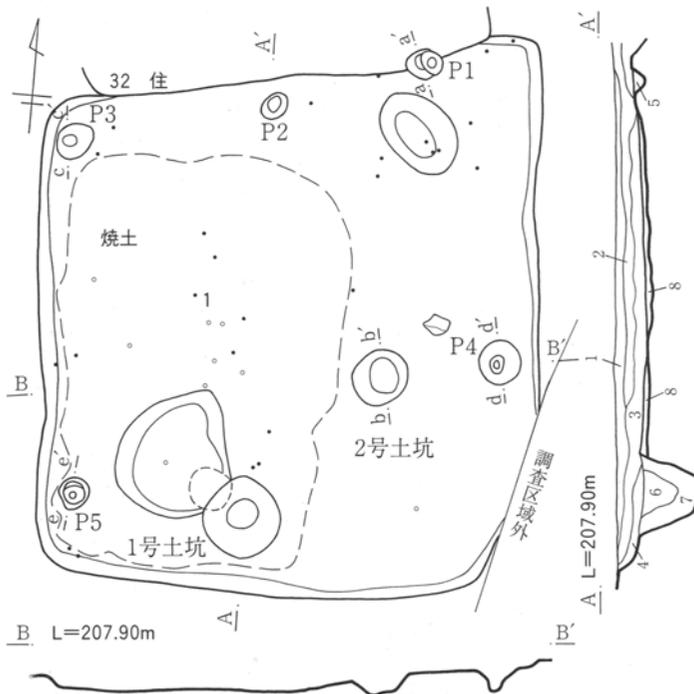
26号住居跡 (図版6)

Ⅱ-2区中央北寄りで8号住と重複して調査された。平成11年度に8号住として調査された一部が、12年度調査で分別され、重複関係でも8号住に切られる新旧が把握されたが、確証性に乏しい。

平面形は長方形で、平面規模は約4×2.5m・深さ約10cmを測る。長軸方位は北東を向き、重複する8号住や近接する25号住とは差が見られる。8号住に、大きく北東半を切られるため、全容の把握には至らなかった。

さらに本住居跡確認は8号住と伴に行われており、床面までの深度が勝る8号住平面形を優先したため、本住居跡の床面相当のレベルは逸失してしまった。故に、26号住は床下のみ資料化に止まる。

床下底面は、漸移層下位の暗褐色土ととどまる。



28号住

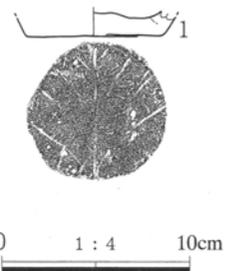
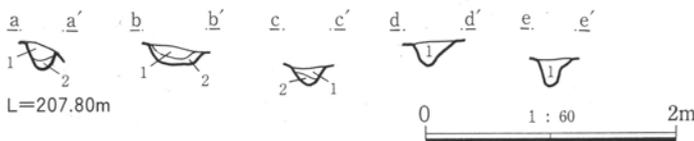
- 1. 暗褐色土 粘質土。暗くローム粒を含む
- 2. 〃 黒色土塊を少量含む
- 3. 褐色土 ローム塊を多く含む
- 4. 黄褐色土 ローム塊を主体とする
- 5. 暗褐色土 炭化物・焼土粒を少量含む
- 6. 鈍黄褐色土 ローム塊と黒色土塊を含む
- 7. 黄褐色土 ローム塊を主体とする貼床土

- a-a' (1号ピット)
- 1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む
- 2. 鈍黄褐色土 黒色土塊を少量含む。軟質

- b-b' (2号土坑)
- 1. 鈍黄褐色土 ローム粒を多く含む。軟質
- 2. 〃 ローム塊を多く含む。軟質

- c-c' (3号ピット)
- 1. 黒褐色土 ローム粒を含む。軟質
- 2. 鈍黄褐色土 ローム塊を主体。軟質

- d-d' (4号ピット)
- 1. 鈍黄褐色土 炭化物・焼土粒少量含む
- e-e' (5号ピット)
- 1. 鈍黄褐色土 ローム塊を主体とする。軟質



104図 28号住居跡床面

細かな凹凸があるものの平坦面を築く。構築時の際だった施設は見られないものの、東壁際で約80×60cm程の不整楕円形の床下土坑1基を検出した。南壁際の小ピットは、11年度調査で得られたもので、当初は柱穴として捉えていたが、確証に乏しい。

遺物は埋土中より土師器細片が極少量出土したが、図示し得なかった。



Ⅱ-2区北 遠景 (12年度調査 西から)

平成12年度のⅡ-2区の調査は、北側に僅かに残った残地を対象とした。ローム上面で5軒の住居跡を調査したが、手前の25号住と最奥の23号住は遺存度も良く、良好な資料を提示した。

28号住居跡 (図版11)

平成13年度にⅢ-1区で調査された住居跡である。現道によって分断されるが、Ⅱ-2区と同一台地であり、Ⅱ-2区東側からの緩やかな傾斜が連続し、本住居跡の周辺に至ると西側への傾斜がより明瞭になる。また、Ⅱ-2区の東側住居跡群もⅢ-1区に至っても連続しているものと考えられる。

28号住はⅢ-1区東端に位置する。周辺は西側傾斜地の変換点に占地し、住居跡が群在する様相を示す。本住居跡も32号住が北壁で重複しており、また33・34号住が南に近接する。

平面形の確認は漸移層下面である。平面形規模は3.8×4.0mで、深さは浅く10cm程度である。不整形を呈するが、壁高が低いため、確定に苦慮した。

床面はほぼ平坦で、ローム塊を主体とした貼床土が全面を覆う。しかし薄い貼床で、数cmで地山の漸移層下面になる。硬化面は床面西半に顕著に見られたが、全体に軟弱な印象を得た。

炉址は確定できなかった。僅かな焼土範囲を床面南西に検出したが、堆積が薄く、炉址ではなかった。

調査所見では、P1～P5及び2号土坑を柱穴として充てた。ただし、全てが浅く確証性に乏しい。

貯蔵穴は南壁寄りの1号土坑を充てる。円形で径約60cm、深さ約50cmを測る。他に、P1南に楕円形の土坑が見られ、遺物も散布するが、浅く貯蔵穴とする妥当性は弱い。壁周溝は見られなかった。

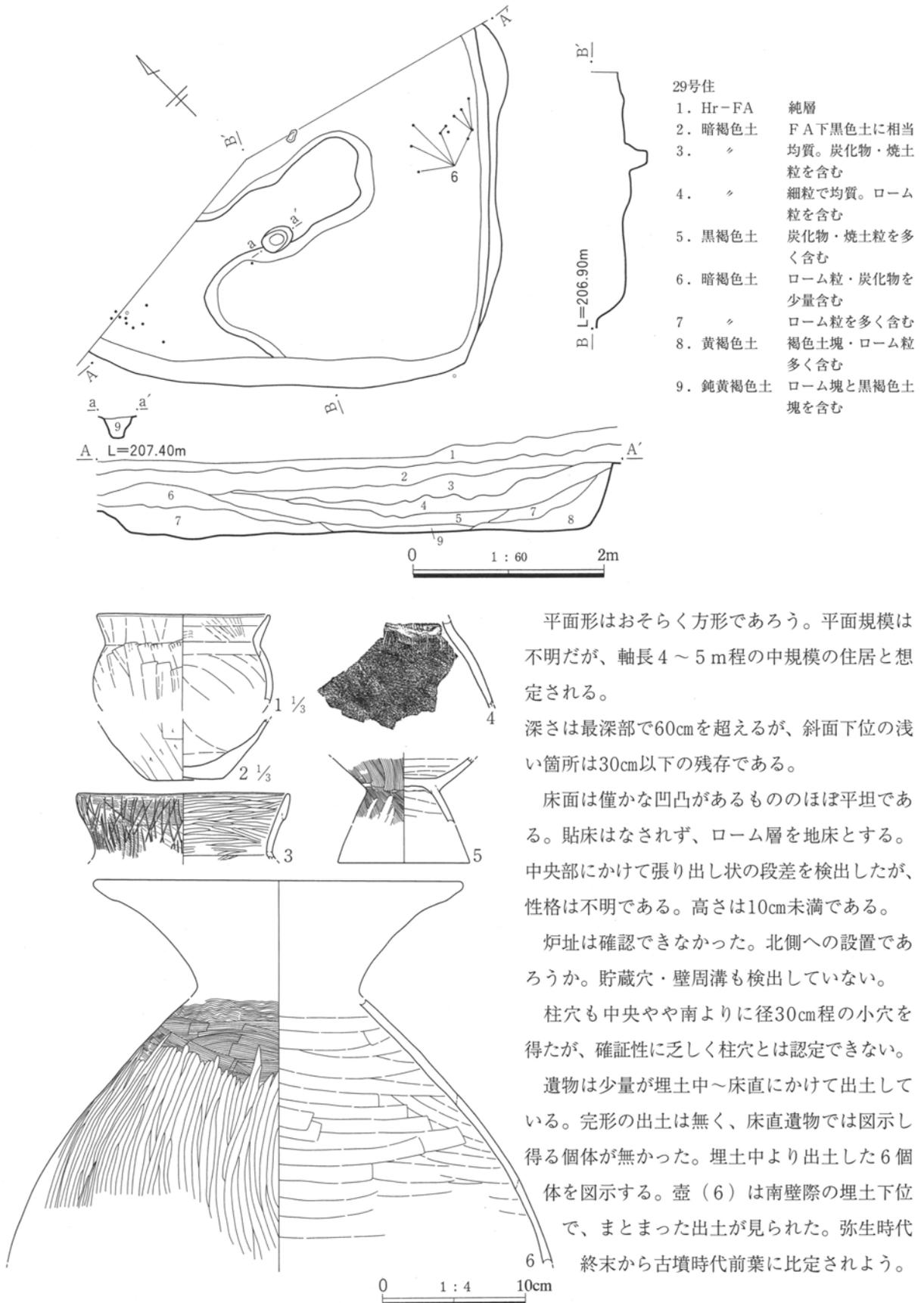
床下遺構は特筆すべき例はない。底面は緩やかな皿状を呈すが、ほぼ平坦であった。

遺物は床面及び床直上に密度を持たず散布していた。すべて土師器小破片で、図示に耐えるものが無く、底部破片1点のみが図示し得た。

29号住居跡 (図版11)

Ⅲ-1区北で調査区北壁際で調査された。周辺地形は西斜面であり、勾配はやや強くなる地点である。群在する28号住や32号住とは東に距離を置き、南に31号住と近接する。また、住居跡北側約1/2を調査区域外に隠すため、南半のみの調査となった。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



平面形はおそらく方形であろう。平面規模は不明だが、軸長4～5m程の中規模の住居と想定される。

深さは最深部で60cmを超えるが、斜面下位の浅い箇所は30cm以下の残存である。

床面は僅かな凹凸があるもののほぼ平坦である。貼床はなされず、ローム層を地床とする。中央部にかけて張り出し状の段差を検出したが、性格は不明である。高さは10cm未満である。

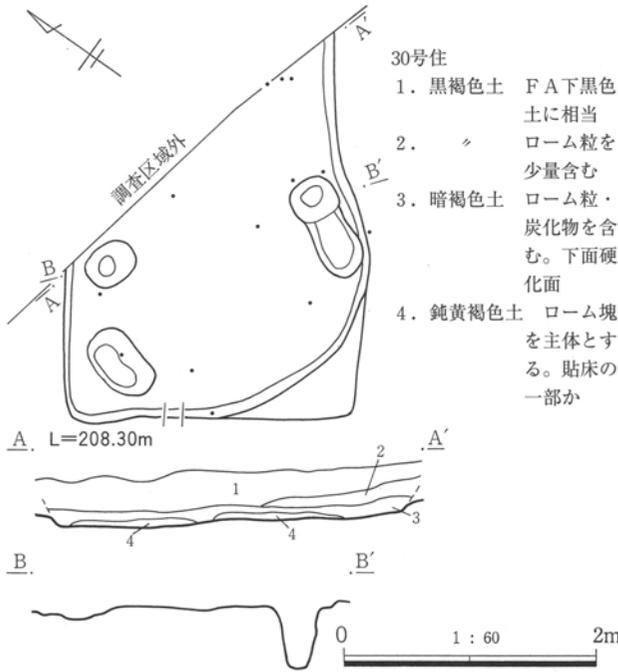
炉址は確認できなかった。北側への設置であろうか。貯蔵穴・壁周溝も検出していない。

柱穴も中央やや南よりに径30cm程の小穴を得たが、確証性に乏しく柱穴とは認定できない。

遺物は少量が埋土中～床直にかけて出土している。完形の出土は無く、床直遺物では図示し得る個体が無かった。埋土中より出土した6個体を図示する。壺(6)は南壁際の埋土下位で、まとまった出土が見られた。弥生時代終末から古墳時代前葉に比定されよう。

105図 29号住居跡床面・出土遺物

30号住居跡 (図版11)



106図 30号住居跡床面

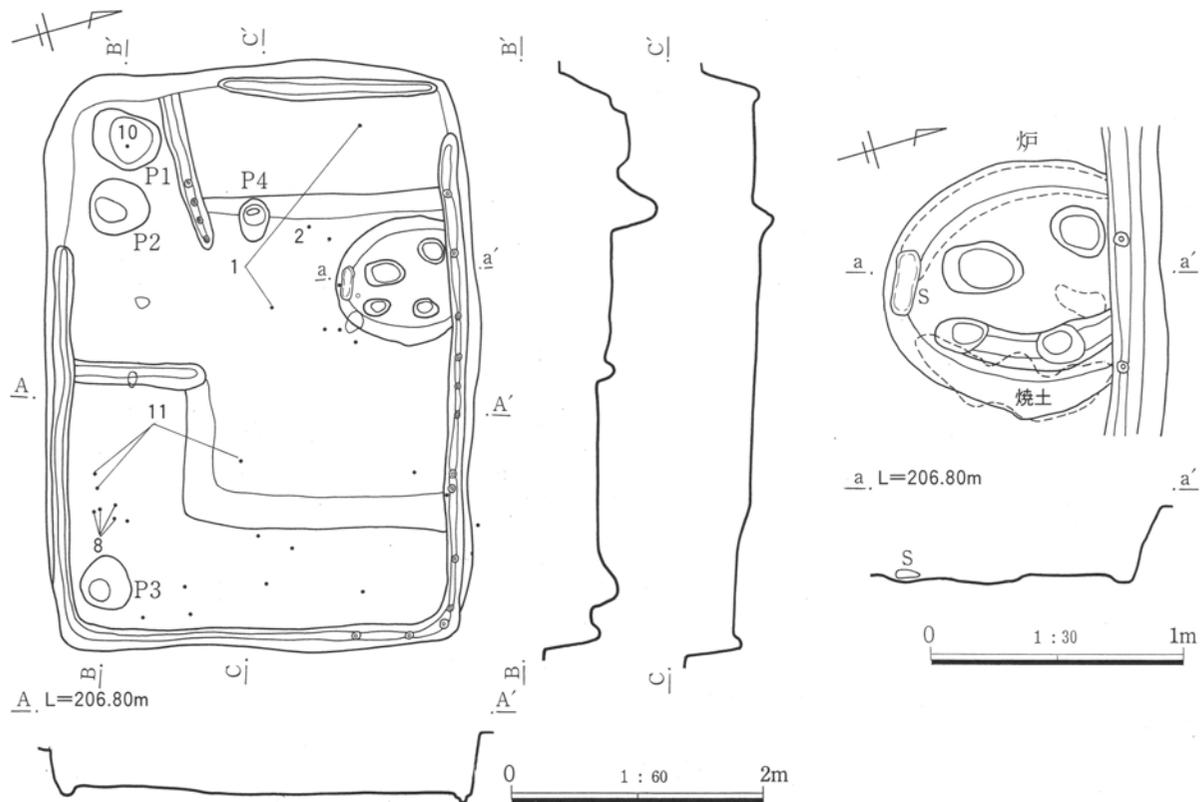
Ⅲ-1区北東隅で検出した。32号住が南約1.8mに近接する。平面形確認時に床面が露出し、急遽住居跡とした経緯がある。そのため、壁高は極めて薄く、平面形把握も確実性を伴わない。短軸長2.5m程で小型の長方形を呈する。

床面は床下底面しか検出し得ず、様相は判然としない。土層観察では貼床の一部を抽出したが、遺存状態は不良である。おそらく地床に近い状態と考えられる。硬化面は無かった。

炉址・壁周溝は検出できなかった。柱穴は西壁と東壁に径約40cmのピット2基を検出したが、深さ・配置からは東壁のピットを柱穴として捉えたい。

貯蔵穴は南西隅の不整楕円状の土坑が位置的に可能性があるが、やや浅く確定できない。

出土遺物は小破片のみで、図化は果たせなかった。



107図 31号住居跡床面

31号住居跡 (図版12)

本住居跡はF P 下面やF A 下面で凹地として認識されていた。比高差約30cm程の凹地で下層に周堤帯を付帯する住居跡の存在が予測されていた。調査は、F A 下の黒色土より周堤帯の存在を念頭に土層観察軸を設けて掘り下げたが、傾斜地が災いしたのか、周堤帯を示唆する土層を得ることができなかった。おそらく、F P 下の畝耕作が斜面地にかかり、本住居跡周辺の掘削が頻繁に行われたためと考える。

更に、本住居跡調査中に台風被害が度重なり、また湧水期という要素も相俟って、調査半ばにして湧水による水没—土層軸流失という憂き目に遭遇してしまい、残念ながら周堤帯の詳細や埋土の観察が不可能となった。

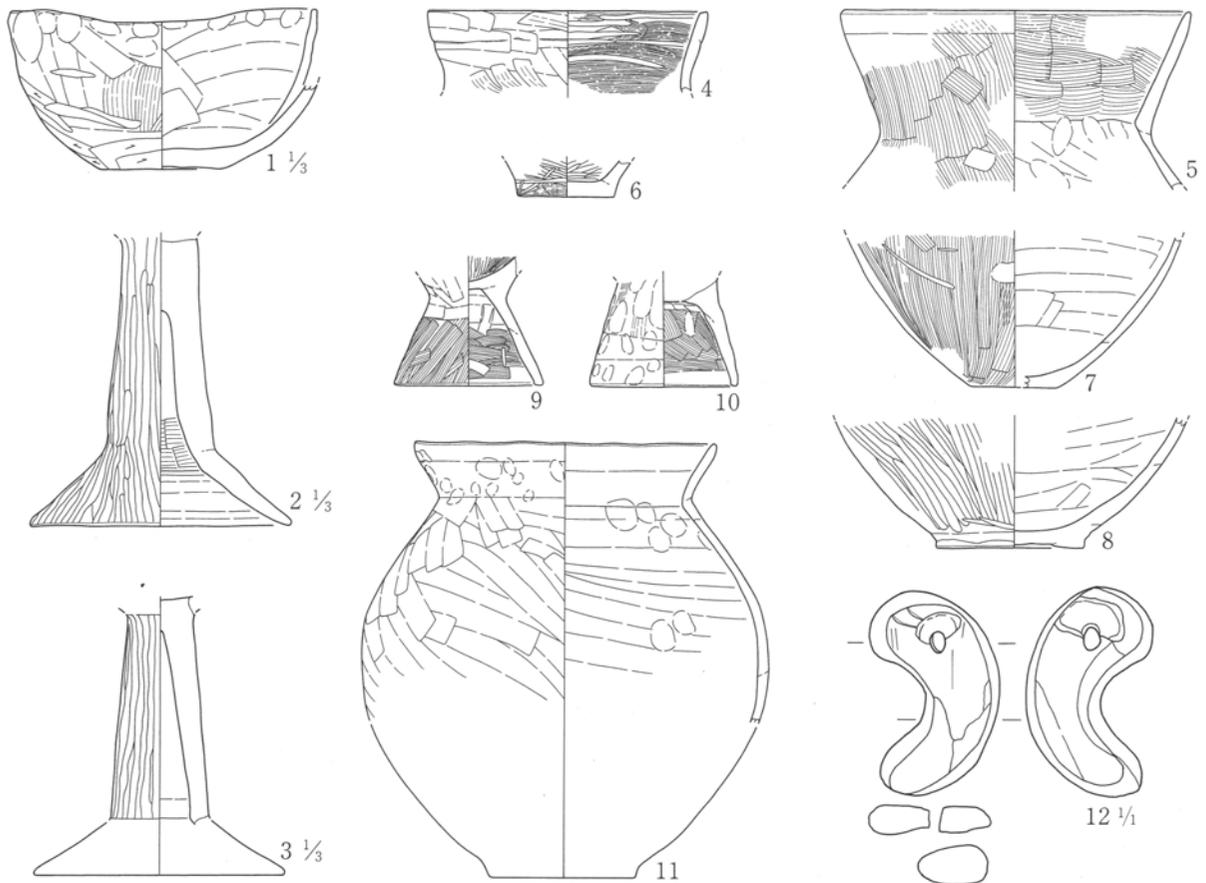
以上のような経緯があるため、住居跡上部構造の把握は果たせなかった。おそらく低位の周堤帯は存在していたものと考えるが、編者の不手際により、

記録化が果たせなかった。明記して反省したい。

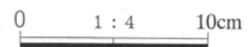
本住居跡は、Ⅲ-1区北側で調査された。周辺は西側への傾斜が強く、特に本住居跡南西側は急傾斜地形となる。そのためか、南西側の住居占地は見られず、本住居跡が最も西端の住居となる。単独の検出だが、北側に29号住が近接する。おそらく北側は傾斜が緩やかであり、あるいは別の住居跡群が調査区外北域において形成される可能性もある。

平面形は、長軸を西北西に向ける縦長の長方形を呈す。平面規模は約4.7×3.4mを測り中型の住居跡といえよう。確認面であるローム上面からの深さは約30cmで、遺存度は良好である。壁の立ち上がりはほぼ直立し、掘り込みもローム層に深く至っており、しっかりとっていた。

床面はローム層中位にまで達し、ほぼ平坦面を築く。ローム塊を主体とした鈍黄褐色の貼床土が全面に及ぶ。硬化面も全面に及ぶが、炉址周辺及び中央



108図 31号住居跡出土遺物



部にかけて顕著な光沢面を見た。

炉址は北壁に接して検出された。同様な例は23号住にもあり、注意を要しよう。径100cm前後の不整円形の浅い掘り込みを有し、焼土・炭化物を上層に堆積し、特に焼土は外縁に濃密に分布していた。また、炉址内東に、浅い溝と小穴2基・西にも小穴2基を検出した。浅い小穴だが、竈にみる袖石抜き取り穴を想起する様相である。ただ炉周辺には、構築材としての袖石は出土しておらず、炉南端に枕石様の自然石を見るのみである。この自然石は底面に密着しており、炉に付帯する施設と見做せよう。

本炉址を竈の前駆形態とする判断は控えたい。明瞭な構築材（粘土・補強石・袖石）も出土しておらず、23号住と同様に炉址壁際に壁周溝が巡ることから、壁に密着していない形態が想定される。壁際に付属する燃焼施設一炉として判断しておきたい。また、竈導入段階の時期的な問題も念頭に置かねばならないだろう。

さて、本住居跡の床面では、段差と間仕切り溝による間取りの痕跡が看取されている。間仕切り溝は南壁中位から北へ伸びる例と西壁南寄りからやや斜位に東へ伸びる例が検出された。この間仕切り溝に接続して、僅かながらも段差が設けられていた。段差の比高差は10cm未満であるが、明瞭に床面を区分していた。特に東側は住居平面形に沿って、段差も屈曲し間仕切り溝に繋がる。また、西側も西壁に平行し、東に伸びる斜位の間仕切り溝に接していた。このように、間仕切り溝と段差によって、床面が3区画され、炉周辺から南西隅にかけて低位の床面となり、前述した硬化面もこの低位床面に顕著にみられたのである。低位床面には炉址と後述する貯蔵穴が設けられており、「土間」としての用途が想起されよう。一方、高位床面は東側と南側の一部、西側の一部に平面形に即して設けられており、硬化面は低位ほどではないにしても、床面は硬く締まり、生活空間として機能する施設として判断できた。残念ながら、遺物の出土状態は各間取りの性格を具体化しておらず、例えば、高位床面の用途まで言及し得な

い。類例や事例の検証が必要となろう。このように、本住居跡の床面の様相は、住居内間取りの一例を具体化する資料を提示している。

柱穴はP2～P4を充てたい。P2・3は南西と南東隅に開けられ、やや浅いものの配置と平面規模から判断をした。P4は小規模な例であるが、段差を意識した配置も考慮し柱穴に加えた。

貯蔵穴は、南西隅に検出した土坑を充てたい。40×60cm程の不整円形を呈し、深さは10cm程度である。浅くやや確証に欠けるが、配置上から貯蔵穴として捉えた。

壁周溝は、北壁から東壁に至り、南壁の隅部手前までを連続する。また、西壁北半にも設けられる。即ち北壁の西端と南西隅部に途切れが認められた。出入り口等の施設は見られなかった。

床下遺構は、湧水の中検出に努めたが、詳細な記録が果たせなかった。貼床自体も薄く、底面も平坦だった。

出土遺物は埋土中～床直まで量が多い。土師器は破片状態での出土で、完形土器の出土は見なかった。鉢(1)と高坏脚部(2)は炉周辺より床直上出土である。8の甕底部と11も床直で、南壁際で見える。台付き甕台部(10)は貯蔵穴より出土している。

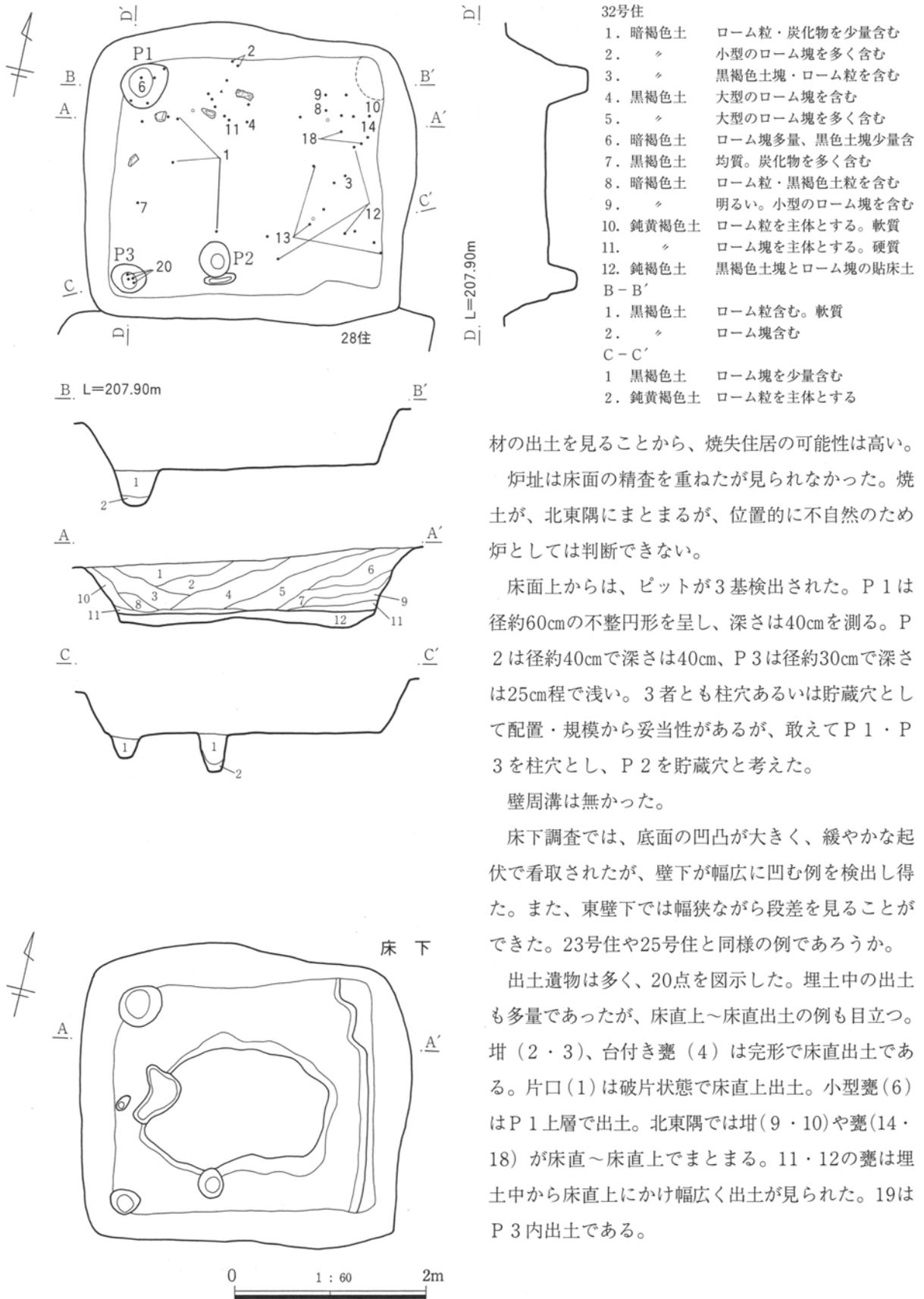
32号住居跡(図版12)

Ⅲ-1区東端に占地する。西側傾斜地の変換点であり、住居跡が群在する地点である。本住居跡は28号住と南壁で重複しており、北に30号住が近接する。また、東壁に縄文時代の30号土坑が重複する。尚、28号住との新旧関係は、壁上位での重複のため判断できなかった。確認面は漸移層下面で行った。

軸長3.5m前後の小型の住居跡である。深さは、約60cmを測り、壁の立ち上がりも開き気味ながら、しっかりとしていた。

床面はローム上層に達しており、僅かな凹凸があるものの、ほぼ平坦面を築く。黒褐色土塊とローム塊による貼床土がなされ、硬化面は中央部に顕著に見られた。また、床面中央北寄りに少量ながら炭化

Ⅲ 検出された遺構と遺物



材の出土を見ることから、焼失住居の可能性は高い。
 炉址は床面の精査を重ねたが見られなかった。焼土が、北東隅にまとまるが、位置的に不自然のため炉としては判断できない。

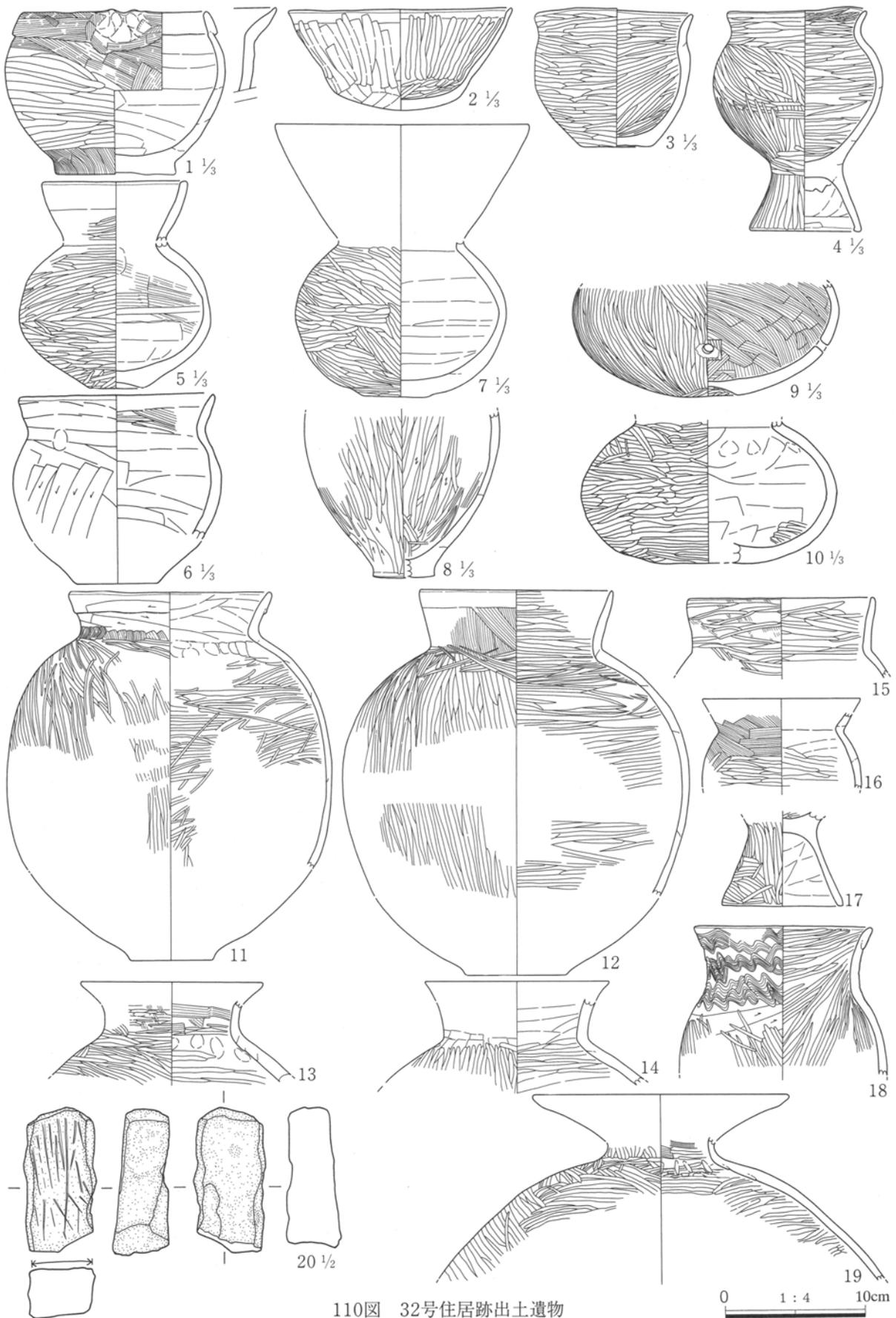
床面上からは、ピットが3基検出された。P1は径約60cmの不整円形を呈し、深さは40cmを測る。P2は径約40cmで深さは40cm、P3は径約30cmで深さは25cm程で浅い。3者とも柱穴あるいは貯蔵穴として配置・規模から妥当性があるが、敢えてP1・P3を柱穴とし、P2を貯蔵穴と考えた。

壁周溝は無かった。

床下調査では、底面の凹凸が大きく、緩やかな起伏で看取されたが、壁下が幅広く凹む例を検出し得た。また、東壁下では幅狭ながら段差を見ることができた。23号住や25号住と同様の例であろうか。

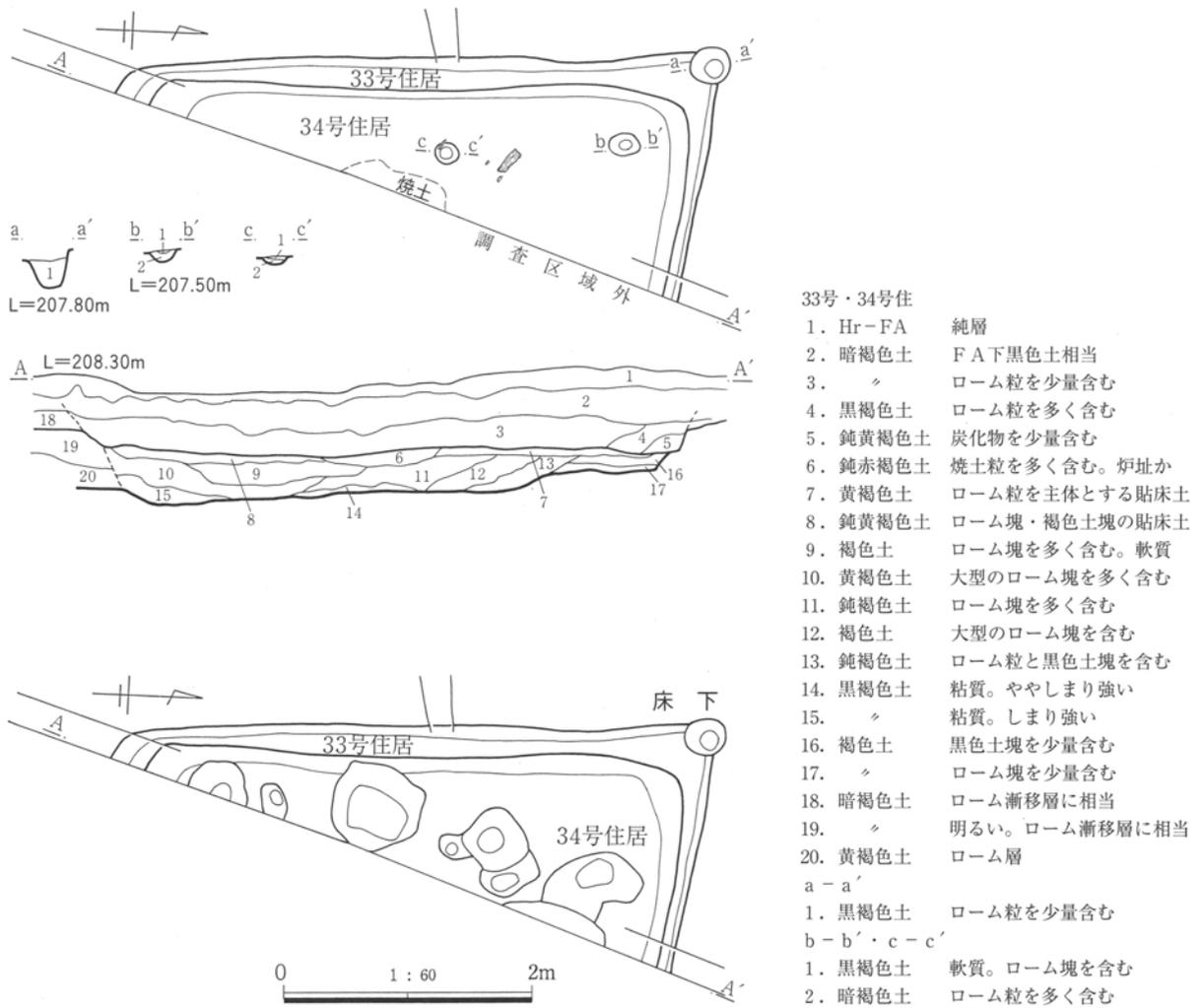
出土遺物は多く、20点を図示した。埋土中の出土も多量であったが、床直上～床直出土の例も目立つ。埴(2・3)、台付き甕(4)は完形で床直出土である。片口(1)は破片状態で床直上出土。小型甕(6)はP1上層で出土。北東隅では埴(9・10)や甕(14・18)が床直～床直上でまとまる。11・12の甕は埋土中から床直上にかけ幅広く出土が見られた。19はP3内出土である。

109図 32号住居跡床面・床下



110図 32号住居跡出土遺物

Ⅲ 検出された遺構と遺物



111図 33・34号住居跡床面・床下

33・34号住居跡 (図版12)

Ⅲ-1区東端で調査した重複住居跡である。北には28号住が近接し、Ⅱ-2区より連続する住居跡群の中に占地する。

本住居跡は、大半を調査区域外に伸ばすため全容は判然としない。調査着手時は1軒の住居跡として把握していたが、調査区東壁の土層観察によって、上下に2軒の重複を確認した。上位の住居が33号住居跡で軸長約4.8mのやや大型の平面形を呈す。下位を34号住とし、33号住の内側で検出した軸長約4.3mの中型の住居跡と判断した。新旧は土層の判断から、33号住が34号住上に床面を重ねると見た。故に、33号住下部構造は殆どが34号住を壊しており、図示したピットや床下遺構は分別が困難である。

両住居跡ともに、浅く遺存度は極めて悪い。壁の

立ち上がりも僅かであり、平面形の確定に苦慮した。

床面は33号住がローム塊を主体した貼床土を全面に覆う。硬化面は観察し得なかった。34号住床面は僅かに北西側に残るのみである。褐色土の貼床であろうか。

柱穴は33号住床面及び北西隅で3基の小ピットを得た。小規模で柱穴としての確証性は薄い。

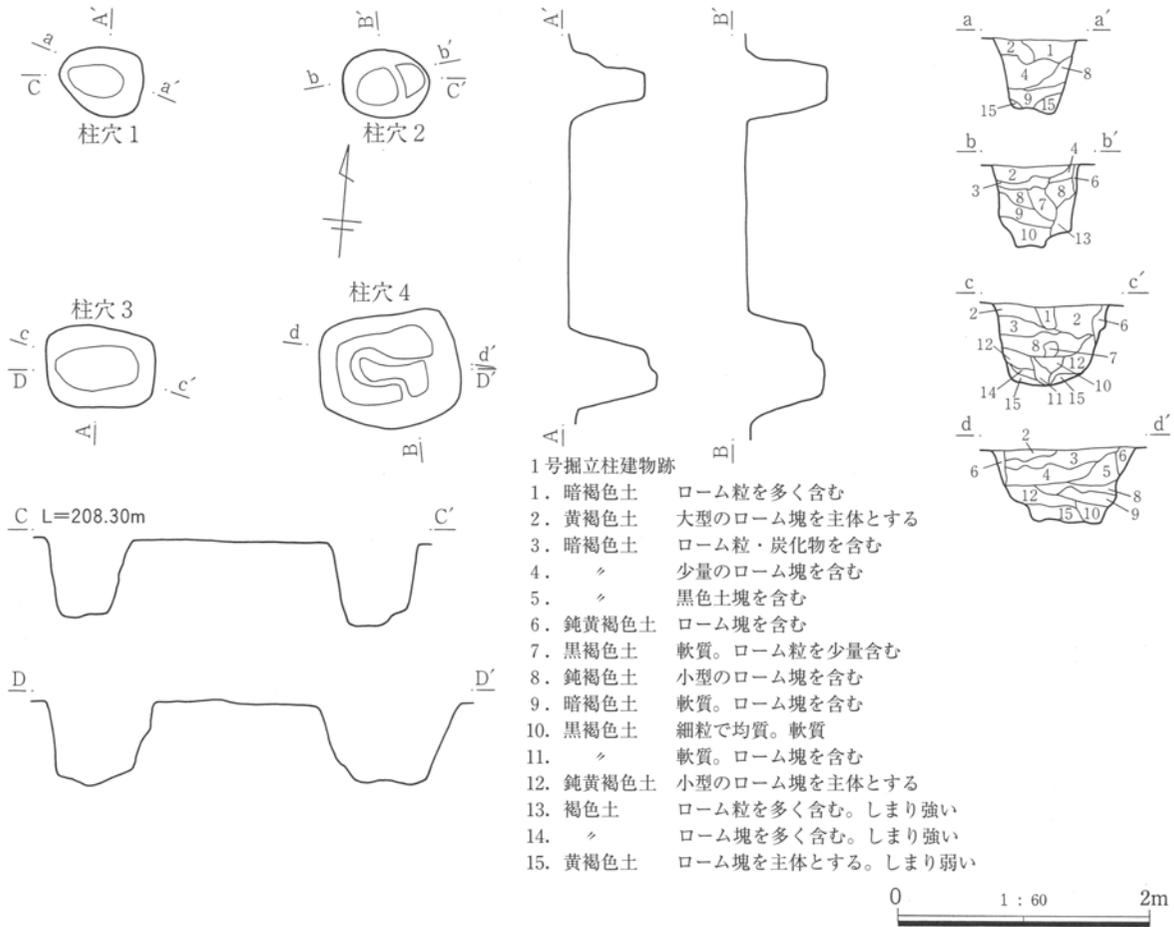
炉址は調査区壁際に焼土をまとめて検出し、33号住に帰属するものと判断した。断面観察では緩やかな掘り込みを見ることができた。

貯蔵穴・壁周溝は検出し得なかった。

床下調査で、複数の土坑を得ている。おそらく33号住の床下土坑であろう。

遺物の出土は極めて少ない。土師器小破片を得たのみで、図示に耐えられなかった。

掘立柱建物跡



112図 1号掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図版13)

II-2区中央部で調査した。ほぼ平坦地形ながら南東へ緩やかな傾斜が見られる地点に占地する。単独の検出で重複遺構は無い。縄文時代のJ-1号土坑が接するものの、同時期の竪穴住居跡はやや距離を置き、北約2mに5号住、東約4mに3号住、北西約5mに18・19号住が見られる。検出された集落跡全体感からは、西側住居跡群の東端に位置するといえよう。2号掘立柱建物跡が軸を傾けて南西に近接するように、掘立柱建物が群在する領域として可能性を示す。

竪穴住居跡の検出後に掘立柱建物跡の調査に着手したため確認面はローム上層である。周辺の小土坑群の検出と同時のため、土坑埋土との差は見出せず、

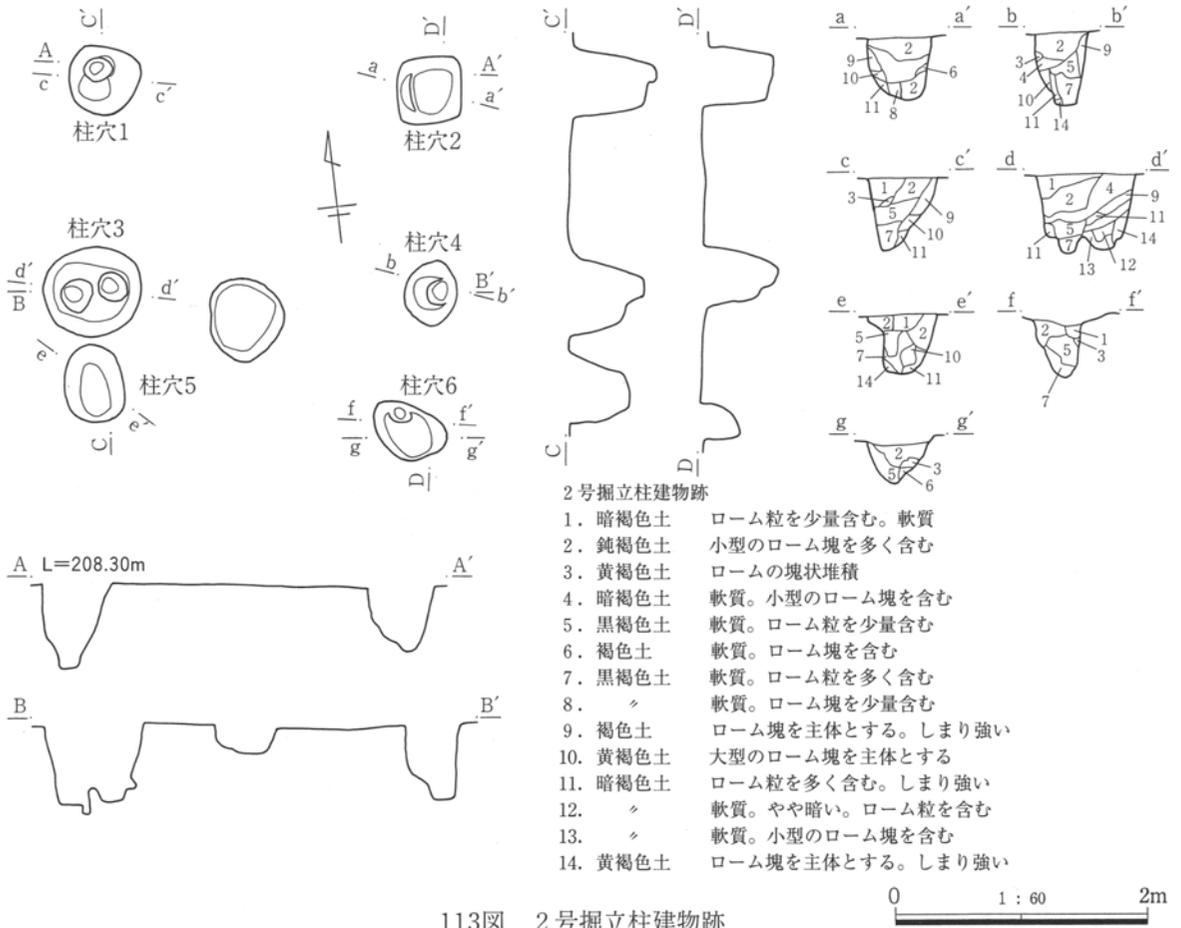
ピット完掘後に柱穴1~4を抽出し、1号掘立柱建物跡と認定できた。

軸方位をほぼ北に向け、4本の柱穴からなる1×1間の建物跡である。各柱穴間距離はほぼ2.5m前後に保たれ、整った配置を示す。柱穴の大きさは60cm~110cmと多様な規模だが、柱穴の深さは各柱穴とも60cmを超え、堅牢なつくりを示唆する。また、柱穴1・2の平面形が小型不整円形を呈するに対し、柱穴3・4がやや大型の方形を示している。

柱穴土層の観察を経たが、土層軸の設定を誤り、柱痕は観察できなかった。おそらく10・11層が相当すると考えられる。

炉址・周溝は確認されなかった。また、遺物の出土も示唆的な集中は見られなかった。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



113図 2号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡 (図版13)

Ⅱ-2区中央部南側で、1号掘立柱建物跡の南に接して検出された。周辺はほぼ平坦地形で、若干ながら南へ傾斜する兆しが見られた。22号住居跡と重複する。新旧関係は、本掘立柱建物跡の柱穴6が22号住居を切る所見を遺構平面確認時に得ている。

確認面は22号住や1号掘立柱建物跡と同様にローム層上層である。周辺には小土坑が群在しており、それらと同様の確認方法をとったため、ピット・土坑完掘後に、柱穴1～6をもって2号掘立柱建物跡を抽出した。

軸方位は北北東を向き、1号掘立柱建物跡に比してやや東に傾く。

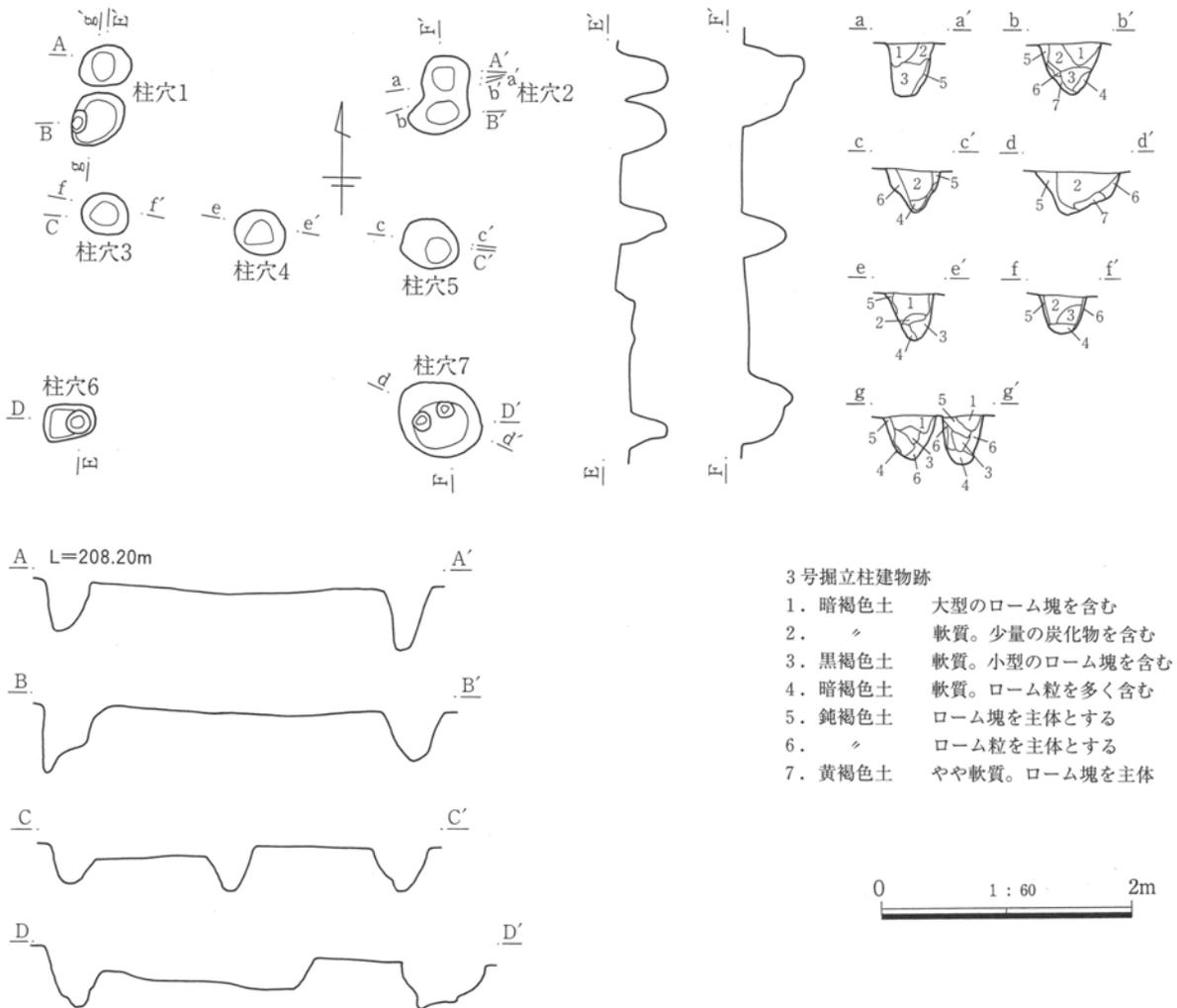
本掘立柱建物跡は6本の柱穴からなる。しかしながら、柱穴5・6は建物跡軸線上に乗るピットのため、建物跡の柱穴として加えたが、配置上は不規則であり、建物跡本体は柱穴1～4を主体とする例が妥当性が高い。

柱穴1～4では、柱穴間の距離が約2.7×1.5m程で、主軸を東西に向ける建物跡となる。平面規模は径約40cm～70cmと数値に差があるが、深さは約60～70cmにまとまり、良好な柱穴規模と言えよう。また、平面形状にも差があり、柱穴1・3・4が不整形を呈するに対し、柱穴2が方形を呈する。さらに柱穴3はやや大型の不整形である。

柱穴5・6は南側の付属設備の痕跡であろうか。確証性はなく、さらに、重複する22号住居には、柱穴5の南延長線に乗るピットが2基確認されており、あるいは別の掘立柱建物跡が存在する可能性がある。柱穴5・6を2号掘立柱建物跡へ帰属する例は曖昧であり確定しない。

その他の施設としては、柱穴3・4の間に不整形の土坑(17号土坑)を1基確認している。埋土の特徴は無いが、配置上これも付属設備の可能性を考え、図示した。

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



114図 3号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡 (図版13)

Ⅱ-2区中央やや南寄りで見出した。周辺はほぼ平坦地形を呈す。14号住居跡と重複するが新旧は不明である。他の掘立柱建物跡とやや距離を置き、北西の1号掘立柱建物跡とは約6m、2号掘立柱建物跡とは約9m以上離れる。14号住が竪穴住居跡群と距離を置くように、単独で独立した印象を得る建物跡である。確認面は14号住と同様にローム層上層で行った。周辺は土坑が点在し、それらの確認と同時に本建物跡を抽出した。

長軸方位を北に向ける1×2間の建物跡で、7基のピットからなる。柱穴間の距離から見る規模は、約2.9×2.8mで、柱穴の深さは40~50cmを測り、一

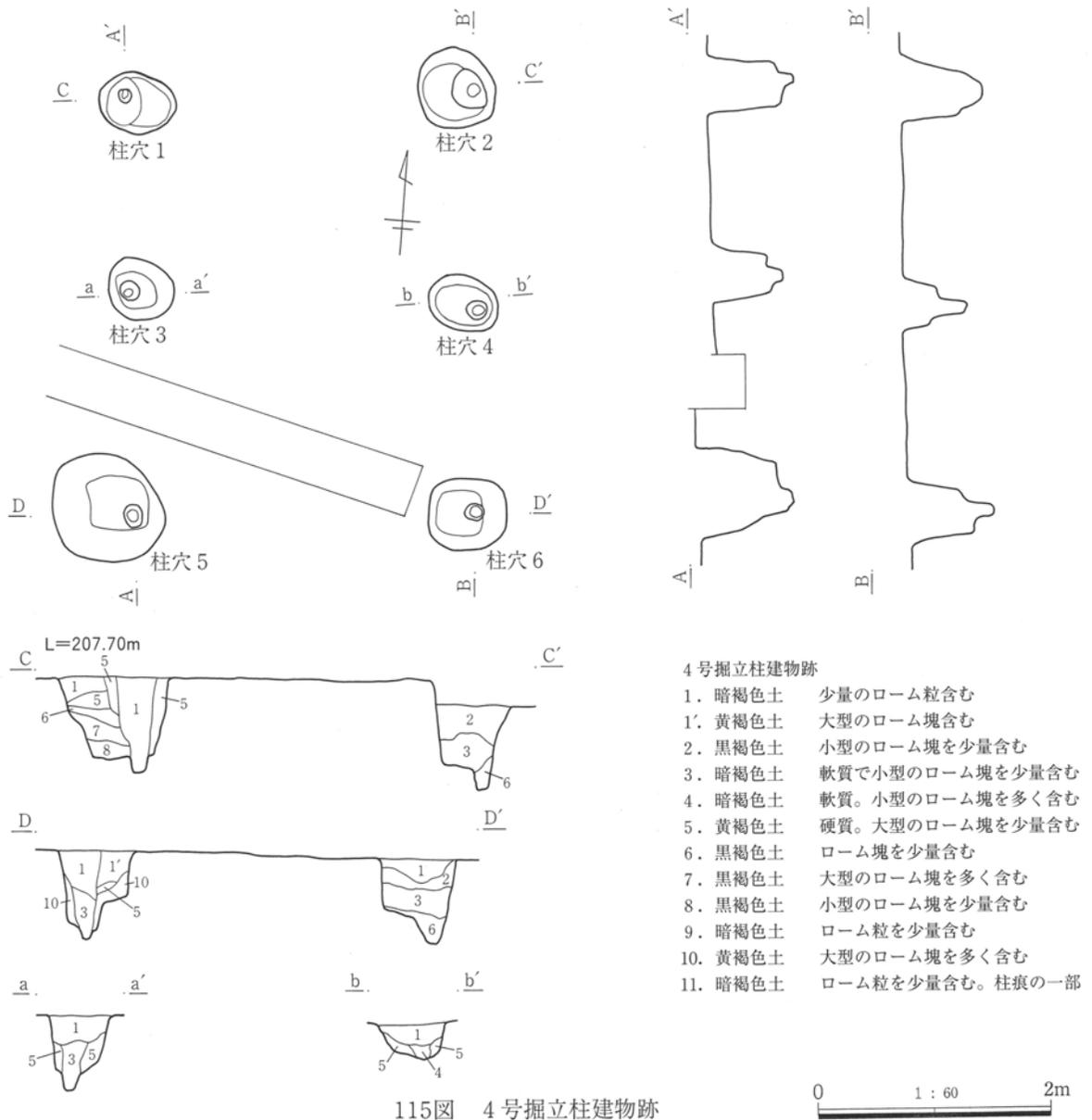
定の規則性は窺えた。各柱穴の平面形は径40~50cm程度の小型の不整形を呈すが、柱穴7のみ径60cmを超え、やや大型の柱穴となる。

また柱穴3と柱穴5の間に柱穴4が設けられている。総柱ではない建物跡の中位に柱穴を設ける例で、本遺跡では例を見ない。周辺に掘立柱建物跡やピット群が存在していないため、重複ではなく本建物跡に帰属し得る柱穴として判断した。

さらに、柱穴1と2は重複・近接する2基のピットからなる。おそらく建て替えの痕跡と思われるが、相互の新旧は不明である。

炉址及び周溝は確認できなかった。遺物の出土にも特徴性はなく、本建物跡に帰属する遺物は無い。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



115図 4号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡 (図版13)

Ⅱ-1区東側で調査した。周辺は平坦ながら東南方向へ緩やかな傾斜を見せており、台地縁辺に占地するといえよう。単独の検出で近接する遺構もなく、本遺跡で調査した古墳時代前葉の集落跡では、最東端に位置する。

確認面は漸移層中位で果たした。古墳時代前葉の包含層調査と同時に、黒色土中より柱穴埋土の一部であるローム塊がまとまって確認されたため、遺構の存在が予測され、掘立柱建物跡として認定された。また、湧水期であったため、柱穴内は常に湧水が溜まり、調査条件としては、やや不良であった。

長軸方位をやや西に傾けるが、他の掘立柱建物跡と同様に北を向く。6基の柱穴からなり、平面規模は約3.6×3.0mを測る。各柱穴間の距離も南北方向が1.8m、東西が3.0mと統一されており、6基の柱穴が整然と規則性を持って配置されていた。深さは60~80cmと差が認められたが、建物跡四隅にあたる柱穴1・2・5・6は深く、長軸中位に配置された柱穴3・4がやや浅い傾向が見られた。

柱痕は、土層観察において柱穴1・3・5に認められたが、各柱穴底面には柱材の下端痕跡である小穴が穿たれており、平面的には柱痕の痕跡が把握された。

炉址は明瞭な例が見られなかったが、周辺には焼土粒が散布していた。あるいは何等かの燃焼施設が付随していた可能性もある。

周溝等その他の施設も確認できなかった。

遺物は、包含層中よりまとまった出土が見られたが、本掘立柱建物跡に帰属し得る確証に乏しい。遺構外出土遺物のうち121図19や122図43、124図100・125図122・129図267等が該当するが、参考までに止めておきたい。

土坑（図版13～16）

本遺跡の古墳時代前葉の遺構遺物が調査されたローム層上面では、幾つかの土坑も調査されている。その多くは、住居跡平面形確認調査時、あるいは掘立柱建物跡検出時に同時に調査された例である。

土坑が比較的多く検出された地点は、Ⅱ区中央部から東側にかけてである。いわば、東側住居跡群と西側住居跡群の中間の、竪穴住居跡の分布がやや薄く、掘立柱建物跡が群在する様相を見せる地点である。竪穴居住域とは別の機能が想定される地点と判断できよう。しかしながら土坑相互の重複も多くななく、土坑群として把握出来る様相ではなかった。

また、遺跡全域には風倒木痕を初めとする、自然営力による落ち込みが各所で確認された。その多くが、縄文時代の遺構埋土やローム漸移層と近似しているため、古墳時代前葉の遺構とは分別が可能だったため、本節にあげる土坑もその殆どが古墳時代前葉に帰属されるものと考えている。しかしながら、古墳時代前葉とした土坑本体は、掘り込みが弱く、焼土や遺物を出土する例も極めて少ない。残念ながら墓壙・貯蔵穴・柱穴・祭祀等、土坑そのものの性格を想起することはできなかった。

尚、1号住床面で確認された、長方形の土坑は住居跡の施設ではない。土層の観察ではF A下黒色土中より掘り込まれており、住居跡を切る新旧関係を示す。掘り込みも平面形もしっかりしているが、無命名の土坑としている。

以上のように、本遺跡で検出された土坑は、特筆

すべき例が少なく、個々の土坑の詳細を述べることは控えたい。主な土坑の概要を述べるに止める。

1号土坑：Ⅱ－2区中央やや北東寄りで検出された径約100cmの不整円形を呈する土坑である。浅く皿状の断面の断面を呈するが、壁は明瞭だった。遺物は埋土中より器台口縁部～体部上位の破片が、坑底面より自然石が出土している。

3号土坑～6号土坑：Ⅱ－2区中央東よりで調査された小規模の土坑である。東側住居跡群の西側でやや距離を置いて占地する傾向を見せる。各土坑とも径40～60cm程の不整円形を呈し浅い。

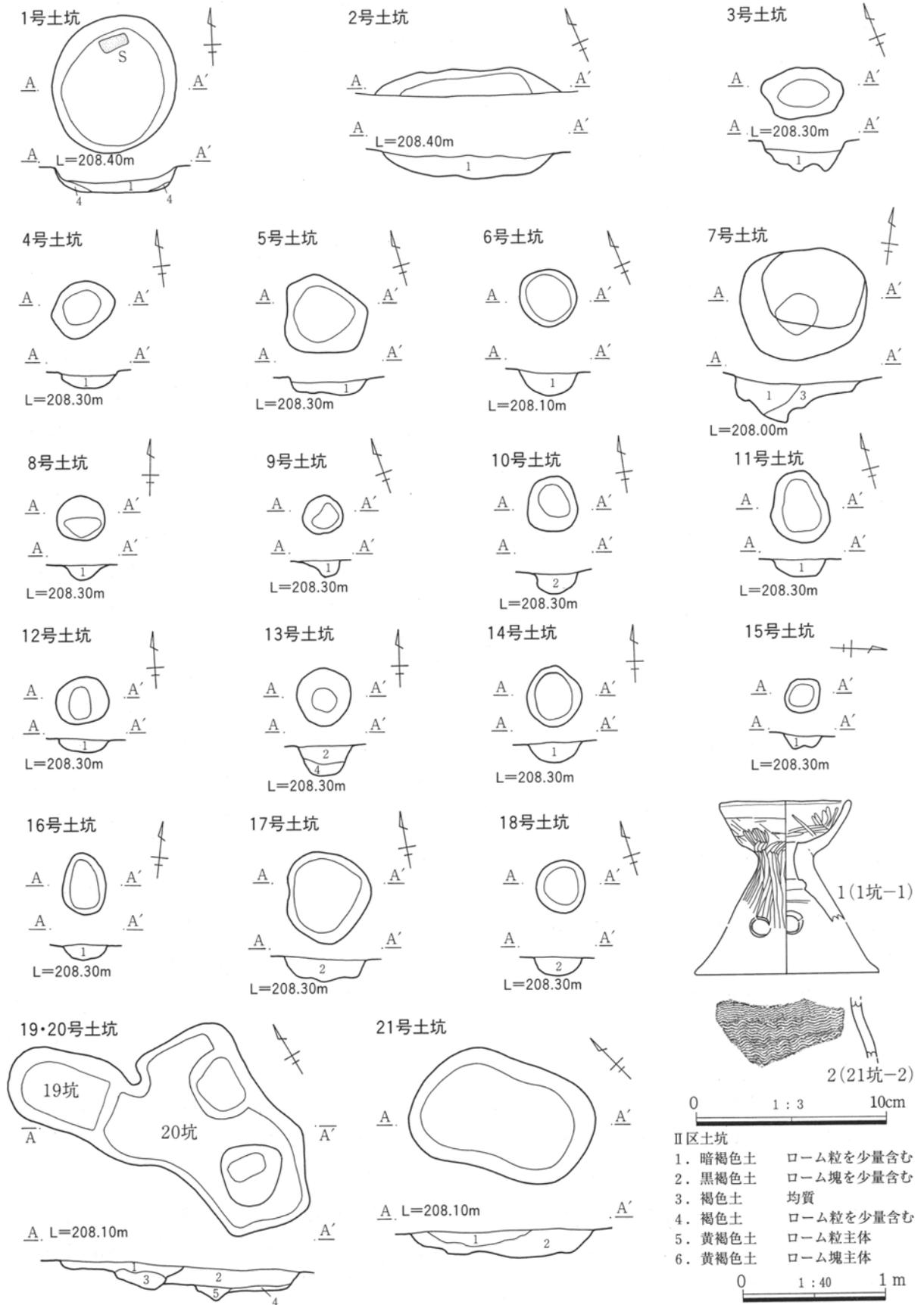
8号土坑～18号土坑：Ⅱ－2区中央部で、掘立柱建物跡確認時に同時に検出された土坑・ピットである。径30～60cm程の不整円形で浅い遺構である。掘立柱建物跡の軸線上に乗らず、また柱痕等が確認されないため、掘立柱建物跡からは除外したピットが多い。その中で17号土坑は2号掘立柱建物跡の柱穴間中位にあり、何等かの施設の可能性がある。

19号土坑・20号土坑：Ⅱ－2区中央東寄りで調査された。重複する土坑で、土層の観察からは19号土坑が新しい。19号土坑は長軸方位を北西に向け、規模が長軸長約110cm程の不整楕円状の浅い土坑と思われる。20号土坑は平面規模は約150×80cm、深さは約20cmを測る小型の不整形を呈する。軸方位はほぼ北を向く。両者とも坑底面は凹凸があり不連続な印象を受ける。

21号土坑：Ⅱ－2区中央東よりで調査された不整楕円状の土坑である。長軸方位を北西に向け、平面規模は約130×80cmで深さは20cmを超える。壁は緩やかな立ち上がりで断面形は浅い皿状を呈する。坑底面は凹凸があり不連続な感がある。埋土中より、波状文を施す甕肩部破片が出土している。

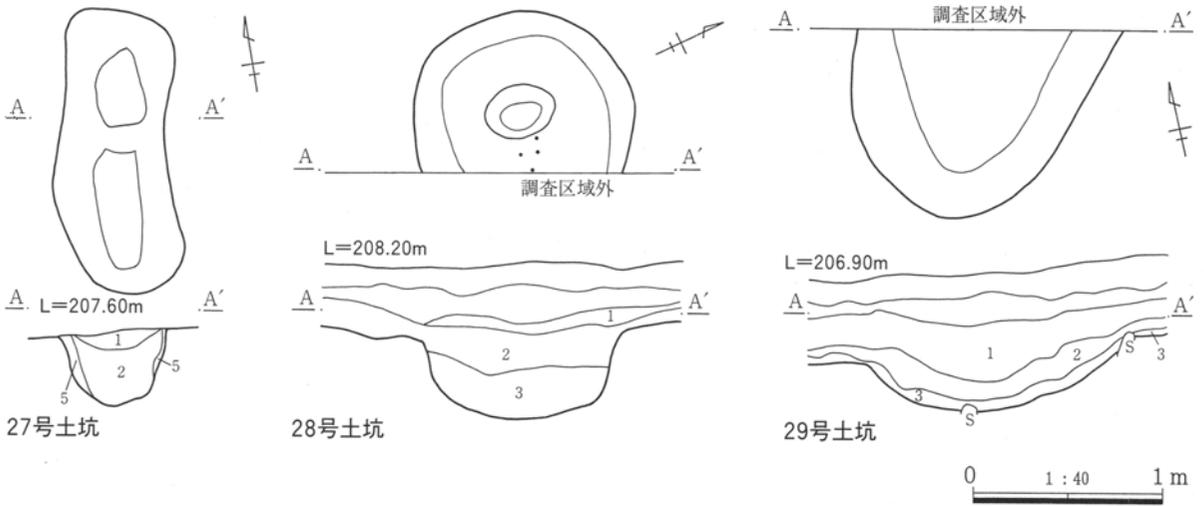
19号～21号坑は3者とも重複・近接しながら、ほぼ長軸を北方向に向け、平面形は楕円・方形を呈する。軸長が110～150と差があり、底面が浅くやや不連続な感があるが、平面形状を考慮すると、あるいは墓壙などの性格も想定できよう。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



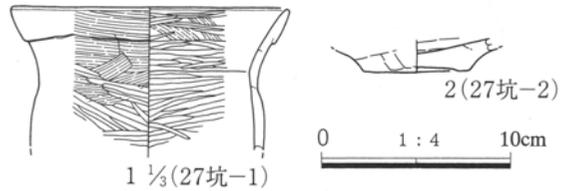
- Ⅱ区土坑
- | | |
|---------|-----------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒を少量含む |
| 2. 黒褐色土 | ローム塊を少量含む |
| 3. 褐色土 | 均質 |
| 4. 褐色土 | ローム粒を少量含む |
| 5. 黄褐色土 | ローム粒主体 |
| 6. 黄褐色土 | ローム塊主体 |

116図 Ⅱ区1~21号土坑・出土遺物



Ⅲ区土坑

- 1. 黒褐色土 ローム粒・炭化物を含む
- 2. 〃 やや軟質。ローム粒少量含む
- 3. 〃 やや硬質。ローム粒少量含む
- 4. 黄褐色土 軟質。黒褐色土塊を混在する



117図 Ⅲ区27～29号土坑・出土遺物

27号土坑：Ⅲ-1区北側で調査された。周辺は西側への傾斜が徐々に強くなる地点で、単独の検出となった。軸方位を北に向ける不整楕円状の土坑である。平面規模は約150×60cm、深さは約40cmを測る。壁はやや開き気味ながら、しっかりとした立ち上がりを示す。断面形は箱状であるが、坑底面はやや凹凸がある。遺物は、埋土中より出土した甕口縁部破片と底部破片を図示した。Ⅱ-2区で調査された19～21号坑と規模・形状に共通性があり、墓壙の可能性もあろう。

28号土坑：Ⅲ-1区調査区東壁際で検出された。周辺地形は緩やかな西への傾斜変換点で、西に30号土坑（縄文時代）や28号住・32号住が近接する。比較的遺構密度の高い地点である。

本土坑は東側の一部を調査区域外に延ばすため詳細な全容は把握できないが、径約120cm程の円形の平面形を呈するものと思われる。深さは確認面より40cmを超えており、壁も直立気味のしっかりした立ち上がりを示す。坑底面は緩やかに凹み、中央に径

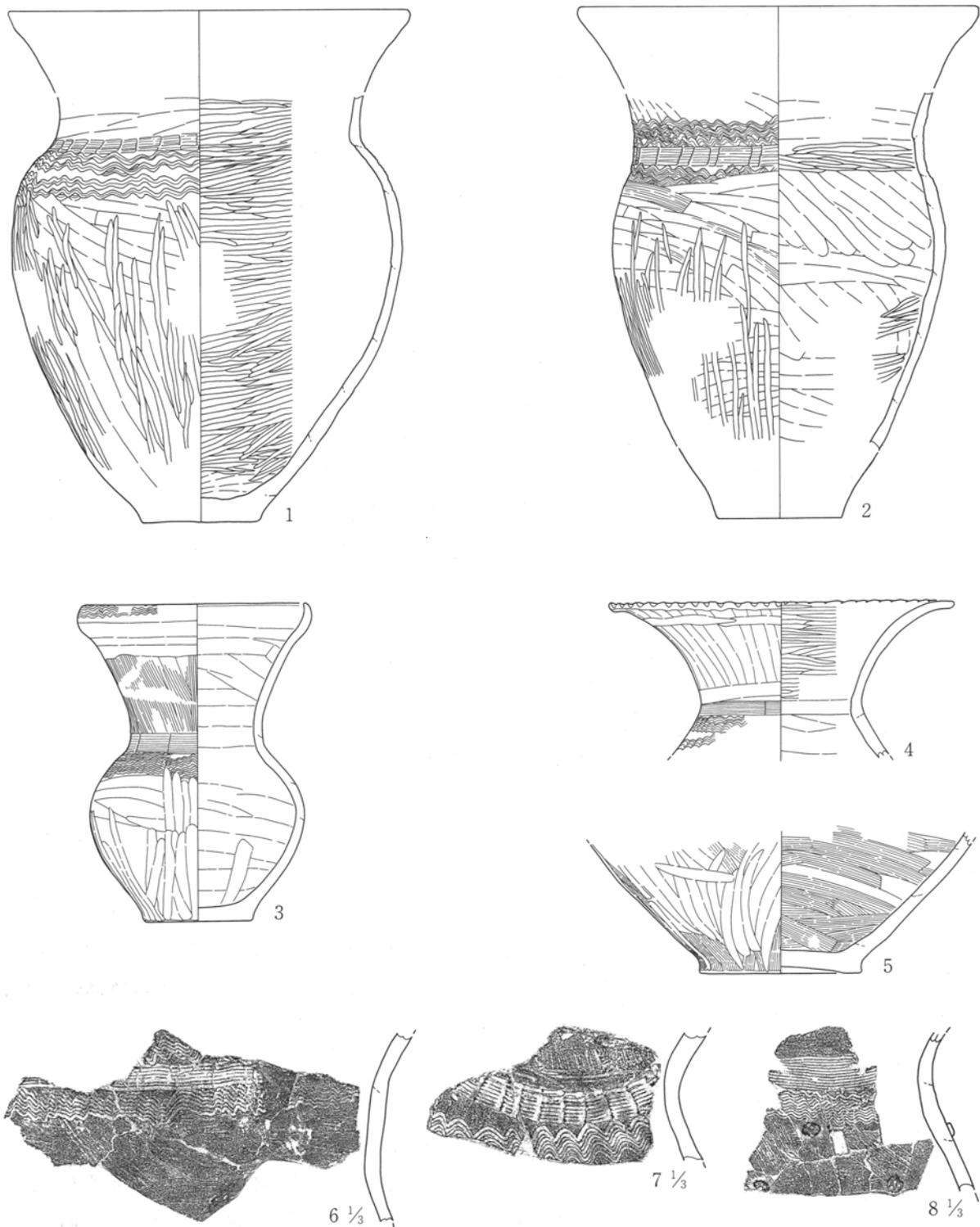
30cm程の浅い小穴が穿たれる。出土遺物は埋土中より土師器甕体部破片が出土したが、小破片のため図示には至らなかった。土坑の性格・用途などは不明である。

29号土坑：Ⅲ-1区北西の調査区壁際で調査された。西側の傾斜地形での検出であり単独の占地と思われる。29号住と31号住が東と東南に近接する。

土坑北半を調査区域外に延ばすため詳細は判然としない。大型の不整楕円状の平面形であろうか。短軸長は約130cm、深さは確認面より約40cmを測る。皿状の断面形で坑底面は凹凸が多く不連続である。性格・用途などは不明だが、あるいは墓壙の可能性もある。

尚、Ⅲ区西斜面は前述の風倒木等を要因とした土坑が数多く検出されている。すべて完掘はしたが、詳細な記録はとらず、本報告書でも掲載は控えさせていただく。全体図に下端線を表現せずに位置を示している。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



118図 Ⅲ区遺構外出土遺物(弥生)

0 1:4 10cm

遺構外出土遺物 (図版16・17)

ここでは、ローム上面における調査で、堅穴住居跡など遺構出土と認定され得なかった古墳時代遺物を中心に掲載する。

ただし、Ⅲ区 I J 74グリッドで出土した弥生時代終末に比定される土器も、まとめて掲載している (118図)。これ以外でも、Ⅱ区・Ⅲ区では弥生時代終末の可能性のある坏、甕口縁部破片、体部～底部破片や手捏ね土器等が混在していたが、古墳時代前葉の資料と分別できなかつたため、一括して掲載させていただいた。

また、古墳時代中葉～後葉の文化層－F A下及びF P下面の調査で少量の遺物が出土しており、これも、各区でまとめて掲載している。すなわち、119図1・2や121図11～15、132図347～349、136図79・80は古墳時代後葉の資料である。特に121図11～15はⅡ区東側のF A上における耕作痕調査の際にある程度まとまった出土状態を示していた。ただし、古墳時代前葉の土器も伴出しており、厳密な一括性は保証されない。これは、前述のⅢ区 I J 74でみた弥生時代終末に比定した土器群も同様であり、堅穴遺構以外の出土土器は、常にその同時性は確定的ではなく、土器の編年作業には避けるべき資料である。

古墳時代前葉の遺物もまとまった出土状態を示していた例がある。例えば、Ⅱ区 H K 72グリッドでは、120図1・4・8のミニチュア土器と管玉 (132図350・351) がまとまる。その他に、120図3、121図18、128図18、129図268、132図339が5号住北側の試掘坑でまとまるものの遺構には帰属し得なかつた。同様な例が6号住と24号住の間の試掘坑で、122図55、124図91、125図106、128図222がまとめて出土している。いずれも住居跡の存在を念頭に調査を進めたが、結局住居跡は検出し得ず、遺構外遺物として取り扱うことになった。Ⅱ－1区でも遺物の集中が見られた。G Y 69グリッドと周辺では多量の遺物が出土したが、住居跡等の遺構は検出し得ず、包含層として判断したが、あるいは確認面の誤認があつたかもしれない。

Ⅲ区では、H Y 72グリッドにおいて、133図3・12、134図26・34、135図52、136図67が、H Y 74グリッドで133図21、133図19・20、134図27がまとまった出土状態を示していた。これらは遺構外といえども、例えば、祭祀跡としての位置付けも可能であり、堅穴遺構以外の出土を本来ならば重要視すべきであった。今回の調査においては、包含層出土・遺構外出土となつてしまい、極めて残念でならない。

さて、これらの遺構外出土の遺物が全て堅穴外の施設に伴う遺物とは限らない。大多数が、破片状態の出土であり、おそらく廃棄行為や自然流入によって、原位置を大きく動いた結果の出土状態と考えられる。

つまり、本遺跡の堅穴住居跡を見た場合、大型の住居跡はおそらく周堤帯を付随していたものと考えられる。周堤帯を構成する封土は、当該住居を掘削した際の排土であり、その際に前代の住居跡を破壊している例もあると想定できよう。当該住居の周堤帯には前代の住居内の遺物が内包される現象が起きる。さらに、当該住居が廃棄される際、これも住居周りの周堤帯を削平し、堅穴住居を埋め戻す行為も容易に想像できる。その場合、前代住居の遺物が当該住居の遺物と混在する結果となる。また、堅穴の外一周堤帯周辺では、日常生活において祭祀行為が行われたり、何等かの廃棄行為等が行われる。これらも周堤帯削平により原位置を止めず、堅穴内や周辺に散布する結果となる。さらに、当該住居埋没後畠等の生産行為が行われた場合、周辺の遺物はかなり混在することになる。

確かに、本遺跡の古墳時代前葉の文化層は、F A 降下後には多くの攪乱を受けていないが、既に前葉段階の短い期間で土をかなり動かしているものと捉えている。前葉段階の集落内用地改変行為は、埋蔵する遺物を散乱させる結果と共に、我々に多量の遺構外遺物を採集させることになった。

このように、本遺跡の遺構外出土遺物は、必ずしも原位置を示唆していない。上層の遺物が下面で

Ⅲ 検出された遺構と遺物

で確認した遺構に帰属するとは限らないのである。しかしながら、やはり遺構外出土遺物の位置付けを模索するに、下位遺構との関連も考慮しておかなければならないだろう。以下に、Ⅱ区・Ⅲ区で検出した各住居跡や掘立柱建物跡が位置するグリッドと、遺構外遺物出土のグリッドの対象を一覧するが、全てが下位遺構に属するとは限らないことを申し添えておく。また同一グリッドに重なる住居跡・掘立柱建物跡は遺物番号が重複している。

Ⅱ区遺構外出土遺物 住居跡対象一覧

(120図～132図 番号は通番)

1号住居跡	30	180
2号住居跡	142	342
3号住居跡	90	138 155 192 199 265 276 412
4号住居跡	52	169 242 243 312
5号住居跡	16	90 123 138 155 192 199 217 276
6号住居跡	2	17 24 48 53 76 110 118 149 171 176 183 231 280 285 309 328 337 346
7号住居跡	26	32 72 93 99 125 159 194 218 224 225 281 303
8号住居跡	79	92 133 153 181 188 191 202 204 216 244 287 295 310 323 327
9号住居跡	30	
10号住居跡	1住・9住に同じ	
11号住居跡	205	
12号住居跡	16	90 123 138 155 192 199 217 276
14号住居跡	331	
15号住居跡	165 221 249 308	
16号住居跡	5	151 165 187 270 284
17号住居跡	——	
18・19号住居跡	29	56 124 221 249 308 321 322

20号住居跡	52	169 242 243 311 312
21号住居跡	40	129 168 205 298
22号住居跡	57	97 162 226 229 275 286
23号住居跡	45	66 88 281 303
24号住居跡	2	17 24 48 53 76 86 110 150 171 176 183 236 237 245 285 309 328 337 346
25号住居跡	61	74 80 90 138 155 192 199 209 276
26号住居跡	8住に同じ	

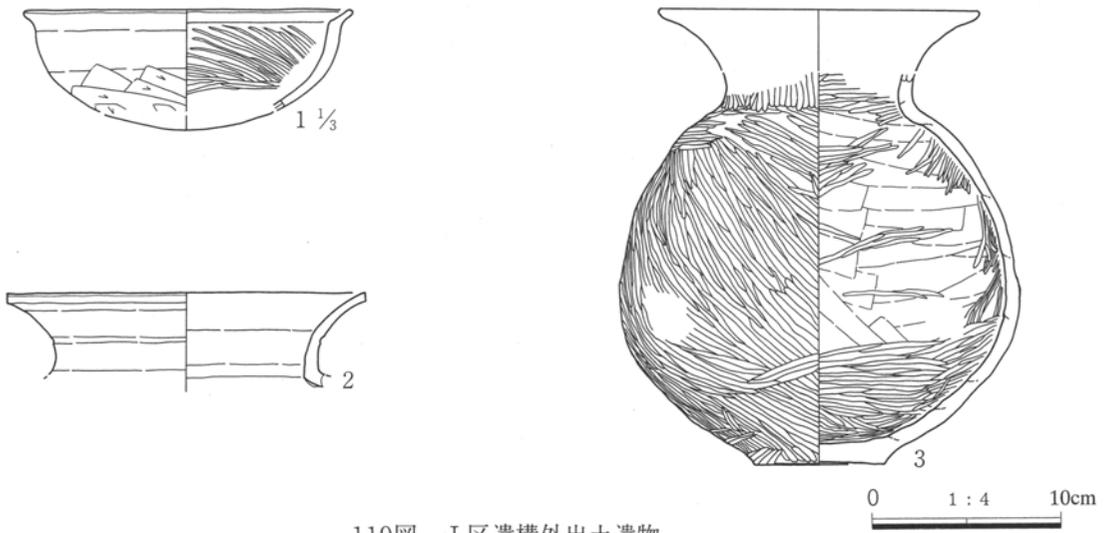
Ⅲ区遺構外出土遺物 住居跡対象一覧

(133図～136図 番号は通番)

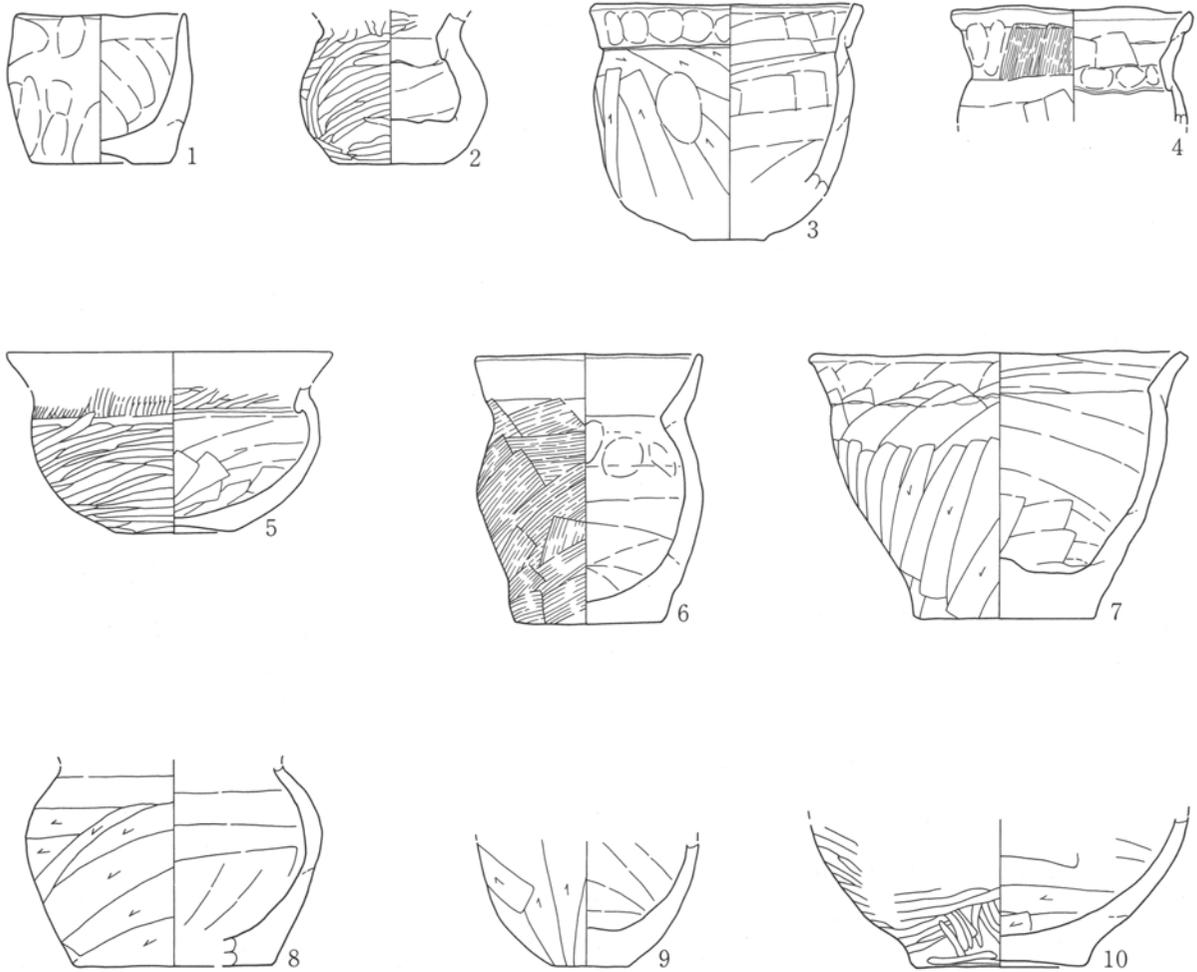
27号住居跡	19	20 21 27 48 49 66	祭祀か
28号住居跡	55		
29号住居跡	——		
30号住居跡	32	41 74	
31号住居跡	42	46 47 59	
32号住居跡	32	41 55 74	
33・34号住居跡	——		

Ⅱ区掘立柱建物跡 (120図～132図 番号は通番)

1号掘立柱建物跡	69	78 116 193 212 213 227 232 246 253 263 274 289 307 335
2号掘立柱建物跡	57	97 162 193 213 212 226 227 229 253 275 286
3号掘立柱建物跡	1	4 6 8 25 33 137 164 177 195 265 313 330 334 350 351 祭祀か
4号掘立柱建物跡	19	43 83 100 122 145 197 203 267



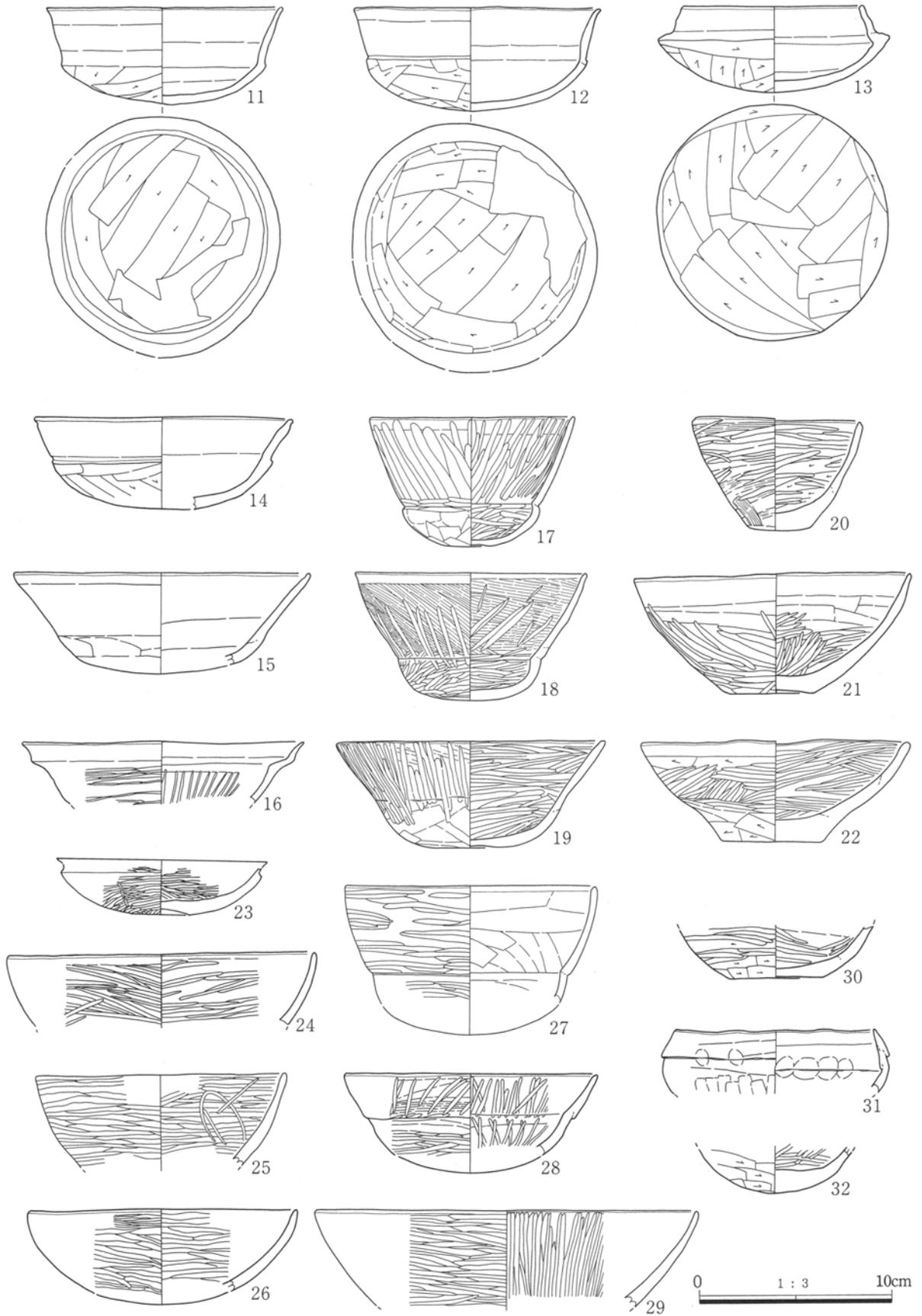
119図 I区遺構外出土遺物



120図 II区遺構外出土遺物(1)

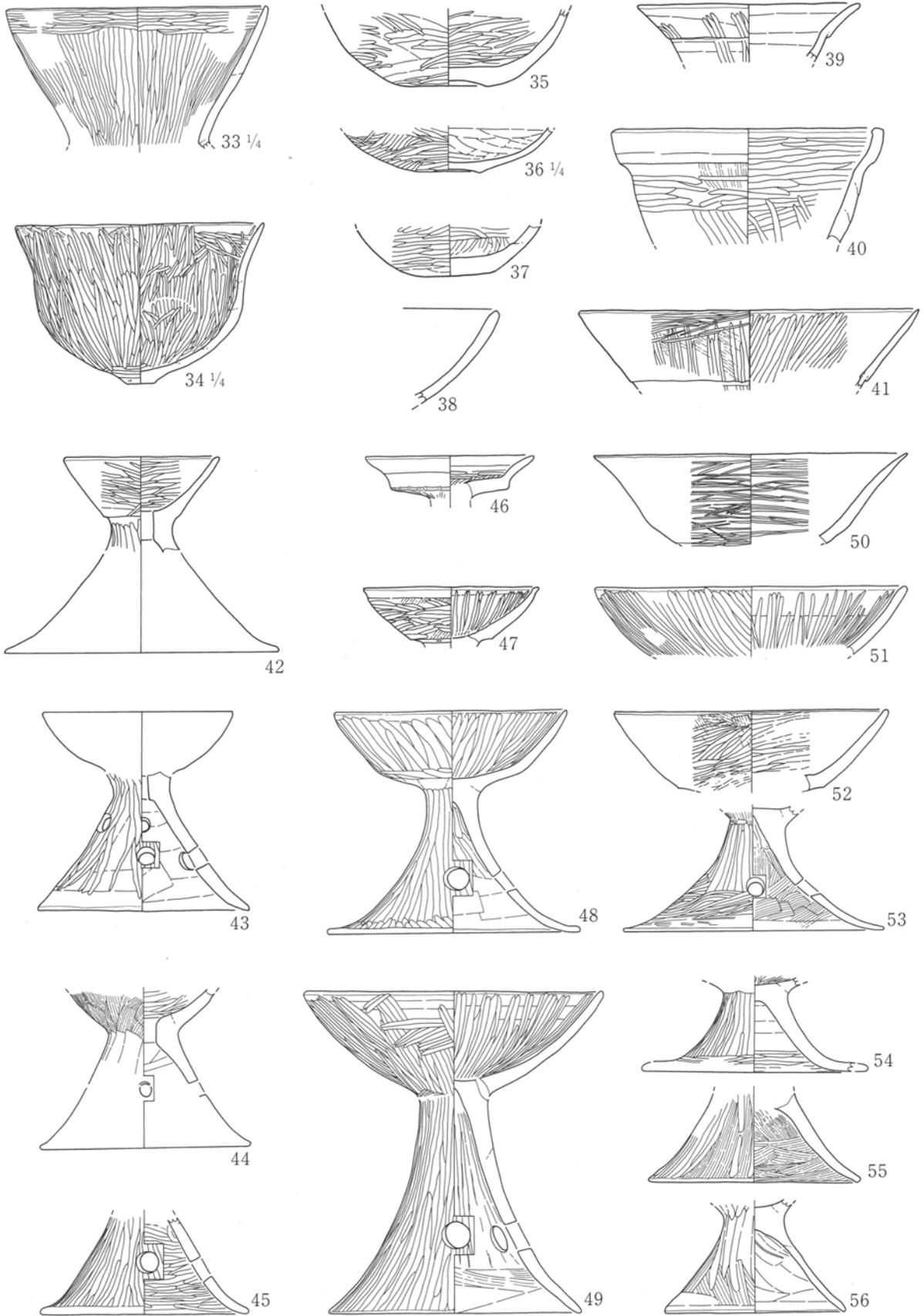


Ⅲ 検出された遺構と遺物



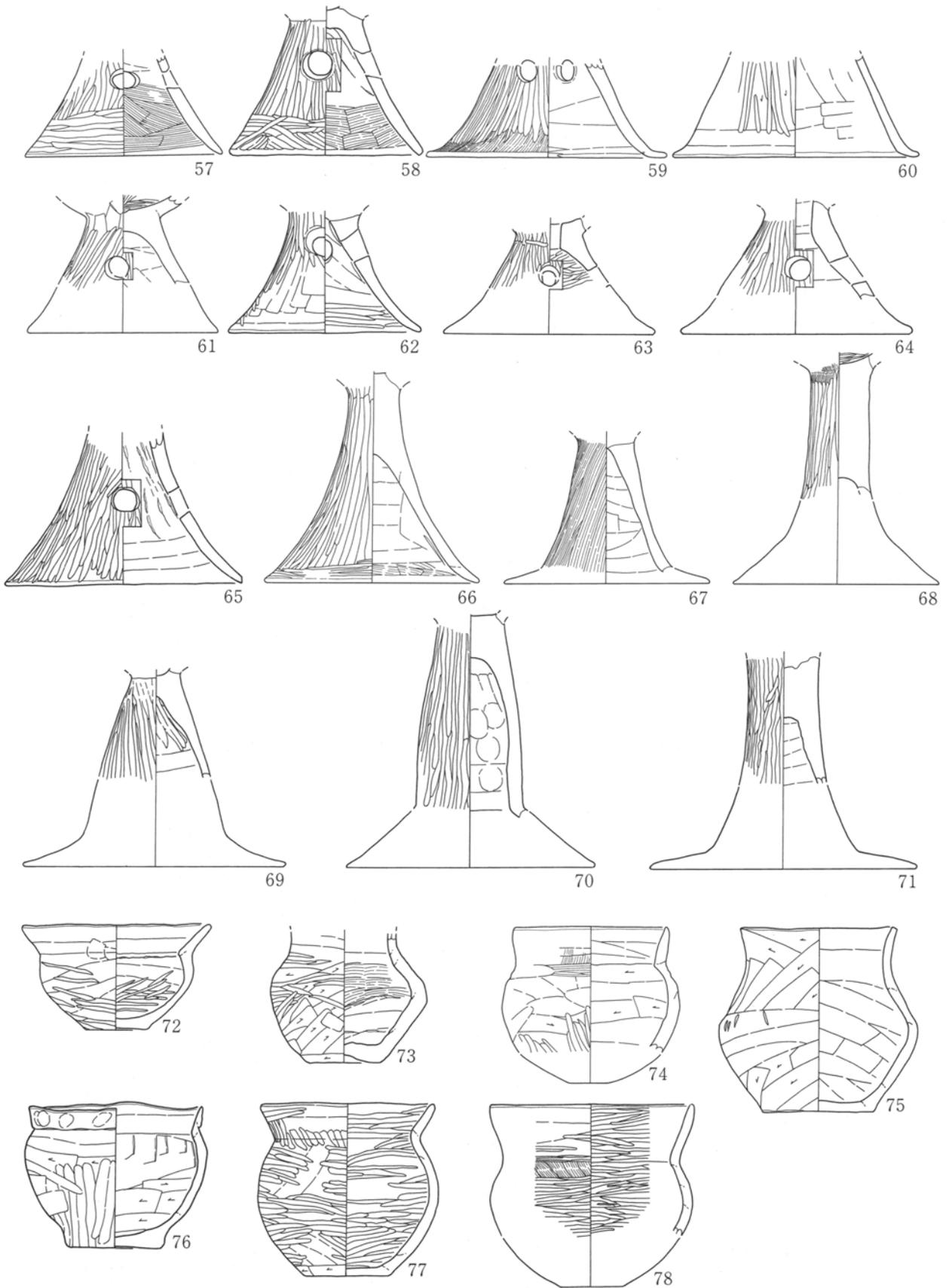
121図 Ⅱ区遺構外出土遺物(2)

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



122図 II区遺構外出土遺物(3)

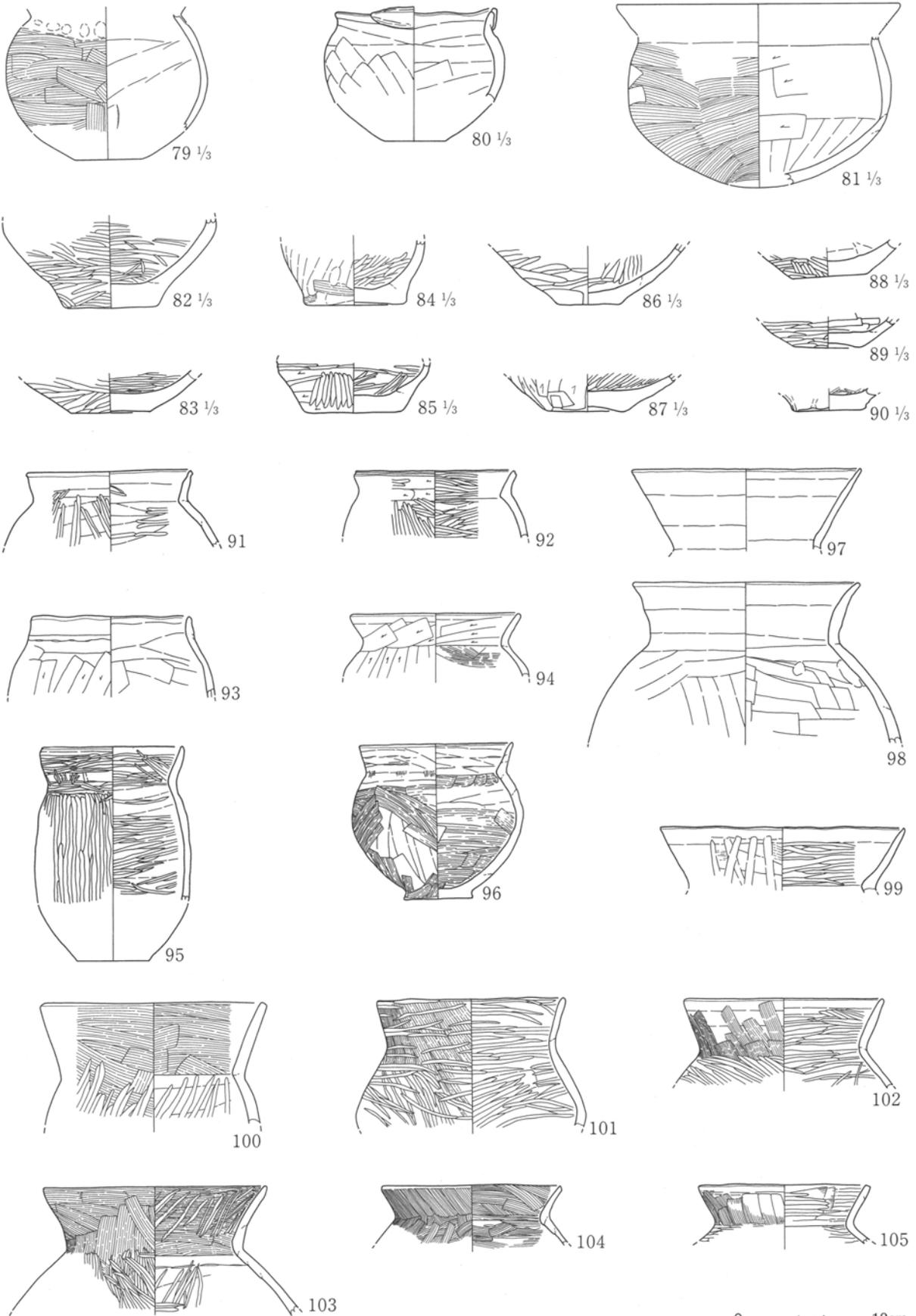
Ⅲ 検出された遺構と遺物



123図 II区遺構外出土遺物(4)

0 1 : 3 10cm

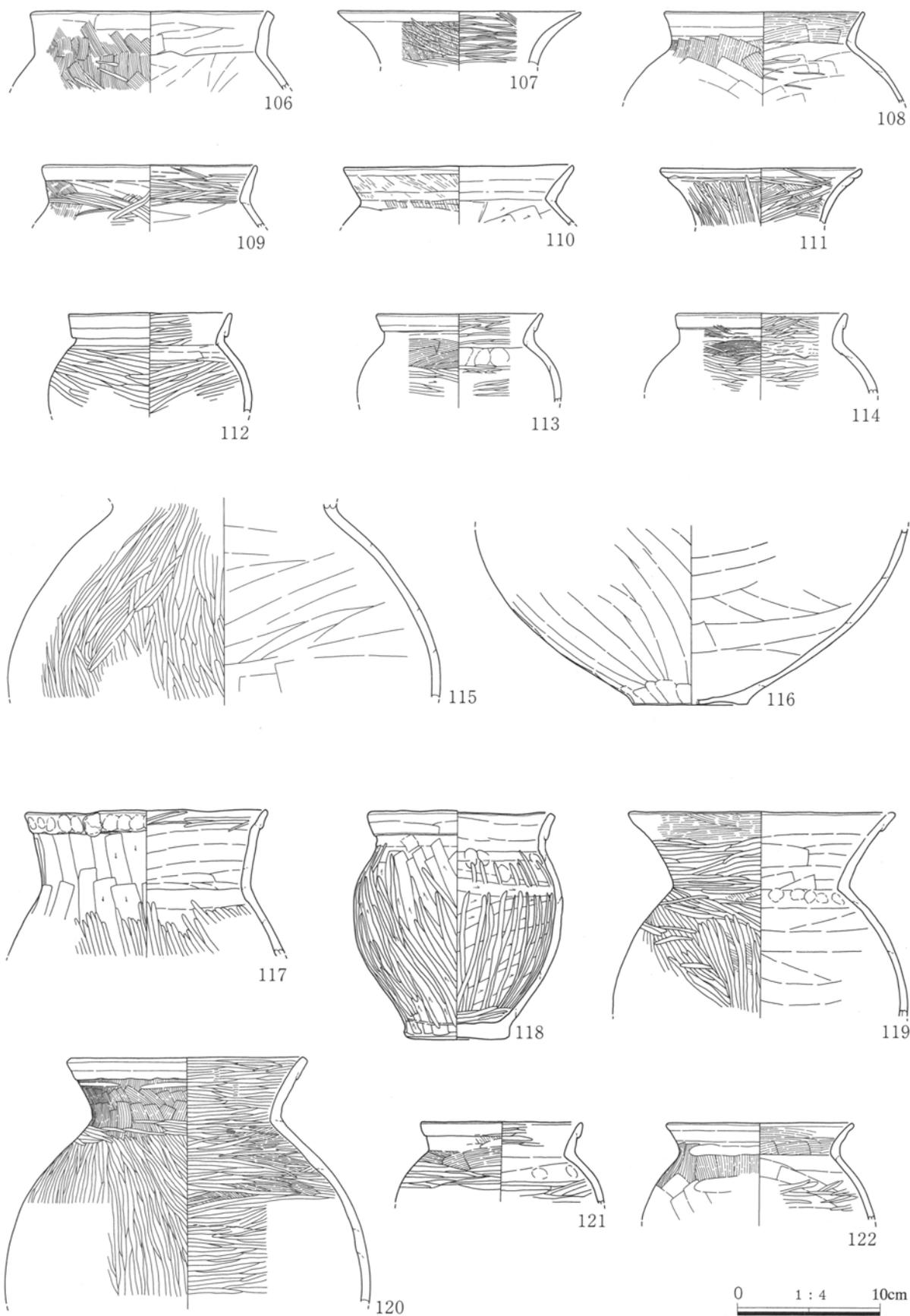
3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



124図 II区遺構外出土遺物(5)

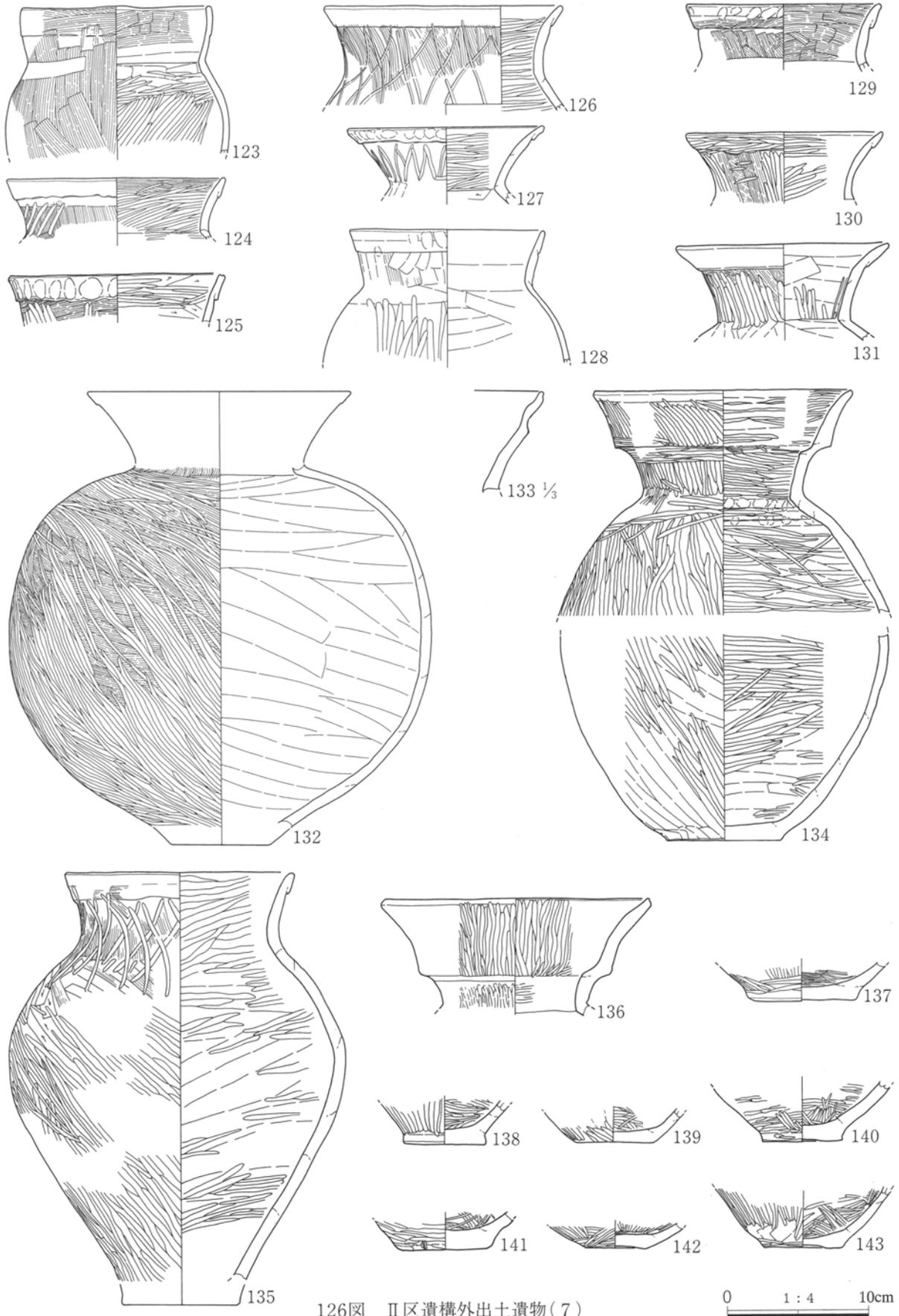
0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物



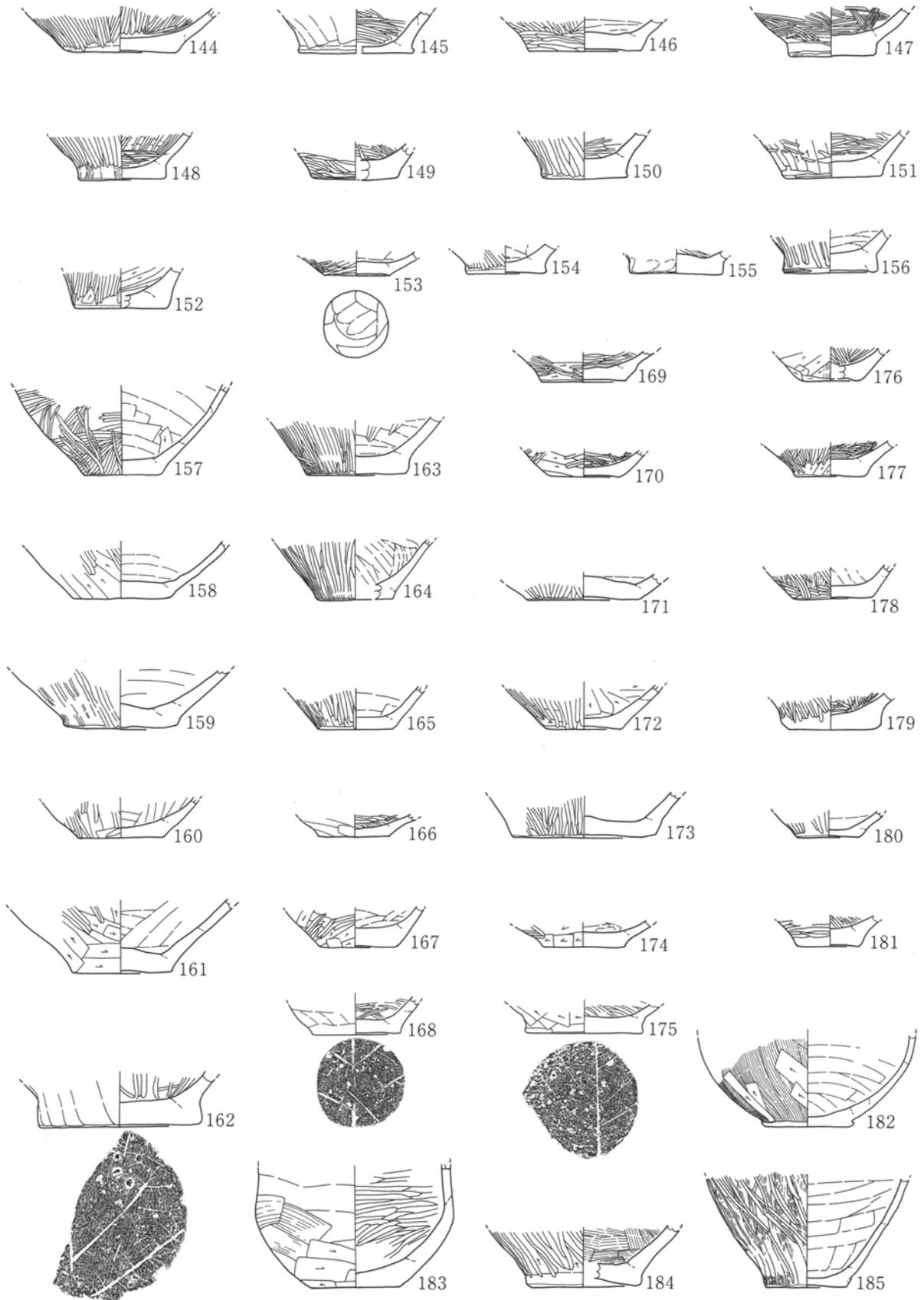
125図 Ⅱ区遺構外出土遺物(6)

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



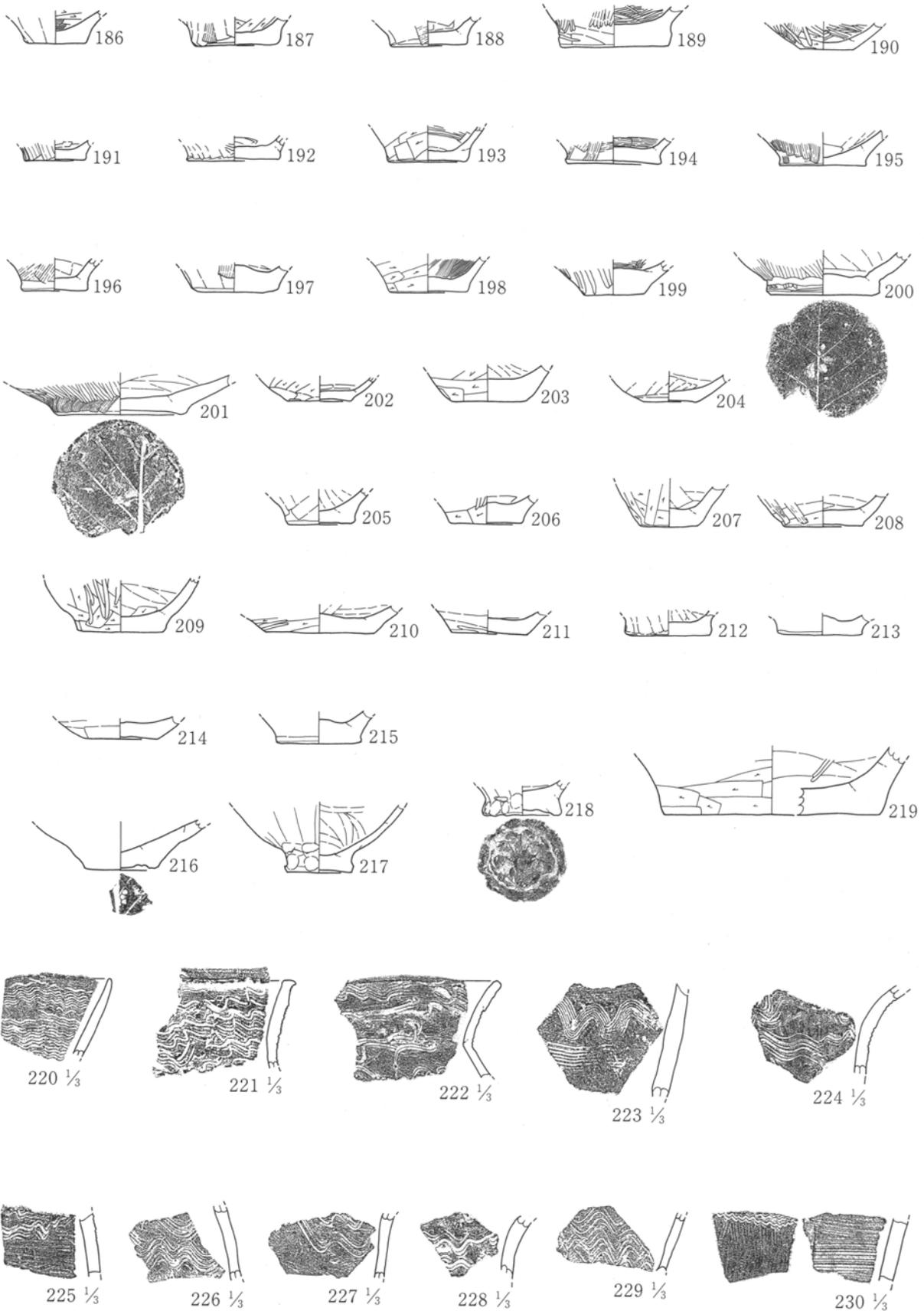
126図 II区遺構外出土遺物(7)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



127図 Ⅱ区遺構外出土遺物(8)

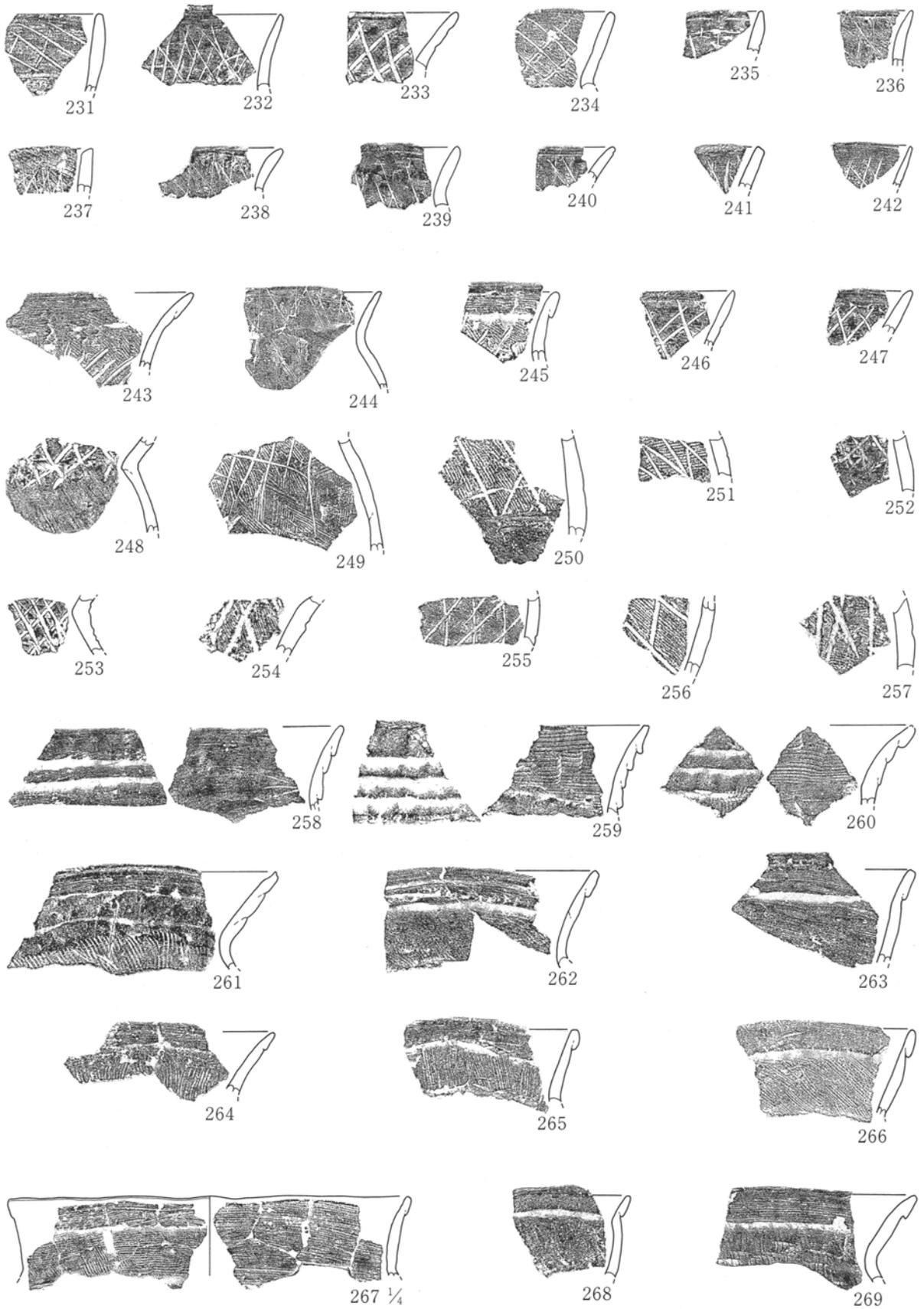
3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



128図 II区遺構外出土遺物(9)

0 1:4 10cm

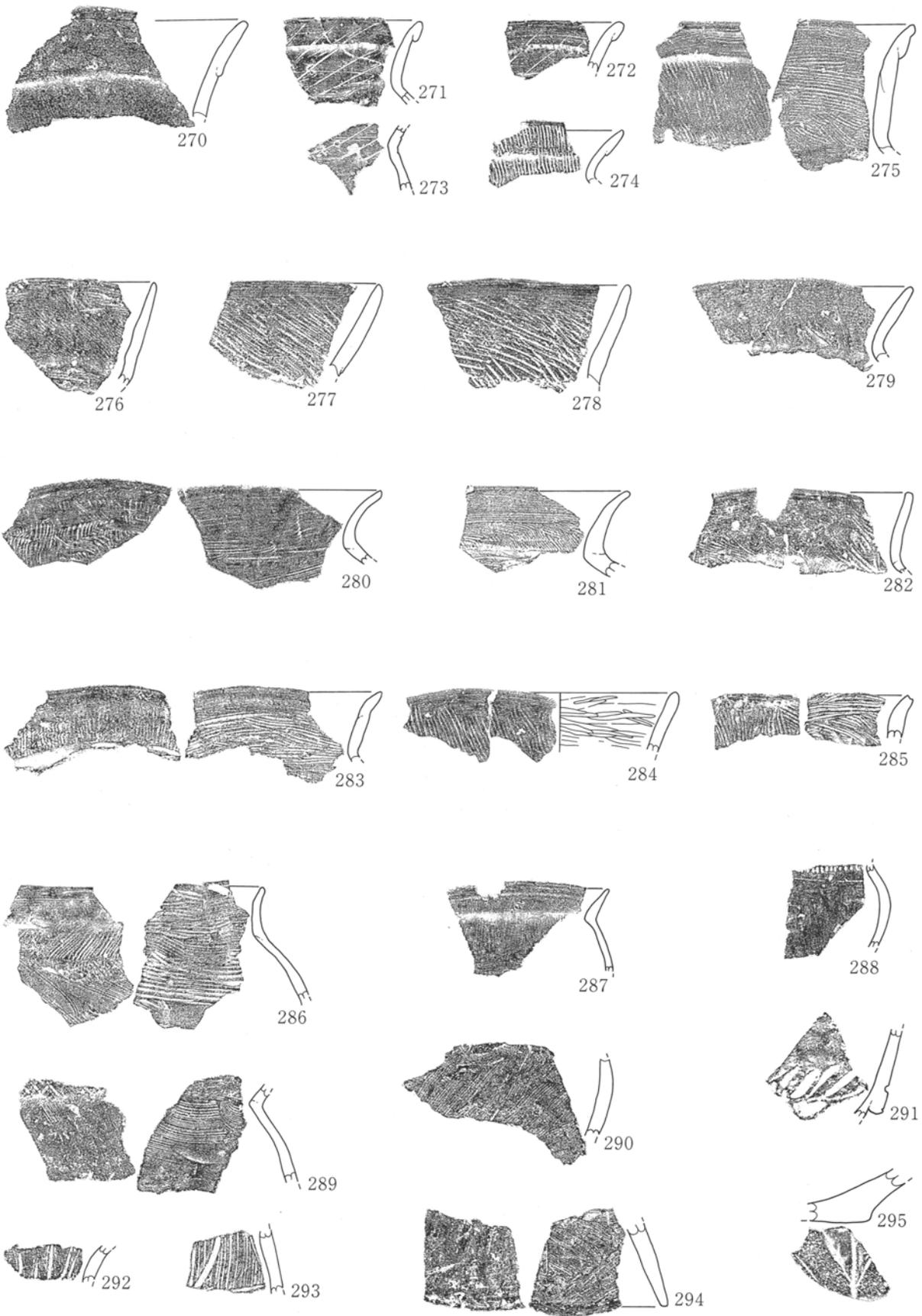
Ⅲ 検出された遺構と遺物



129図 II区遺構外出土遺物(10)

0 1 : 3 10cm

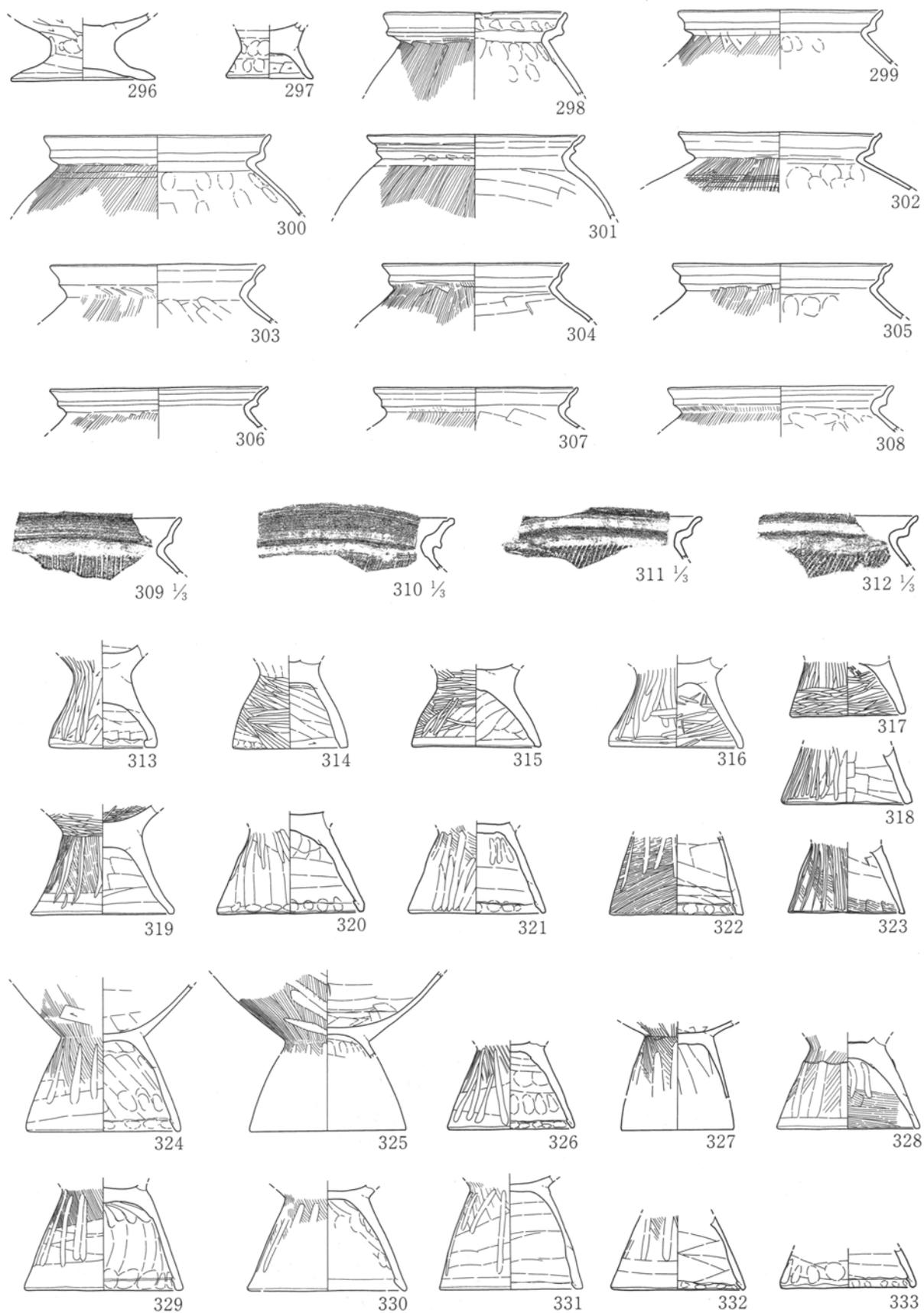
3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



130図 II区遺構外出土遺物(11)

0 1:3 10cm

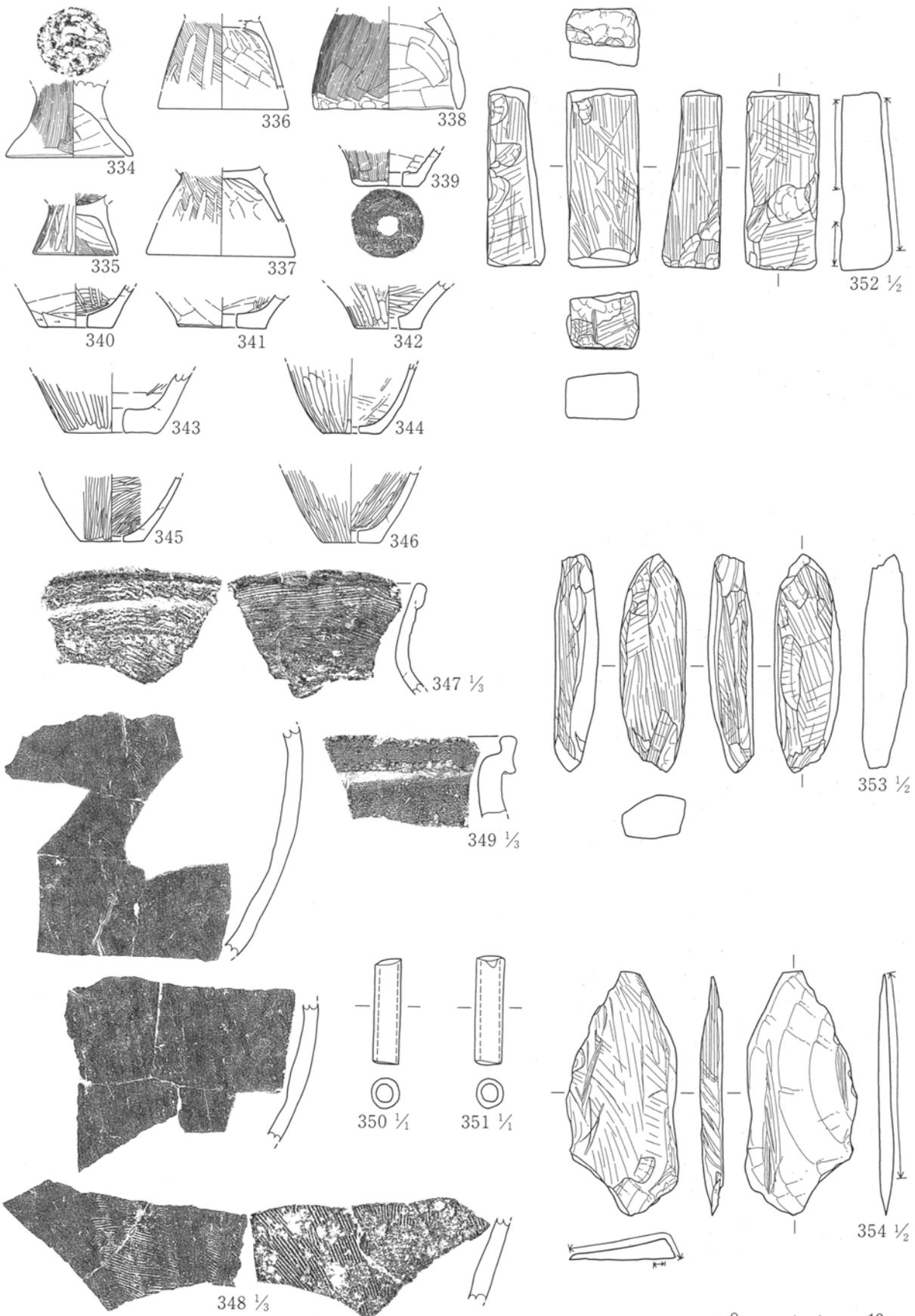
Ⅲ 検出された遺構と遺物



131図 Ⅱ区遺構外出土遺物(12)

0 1:4 10cm

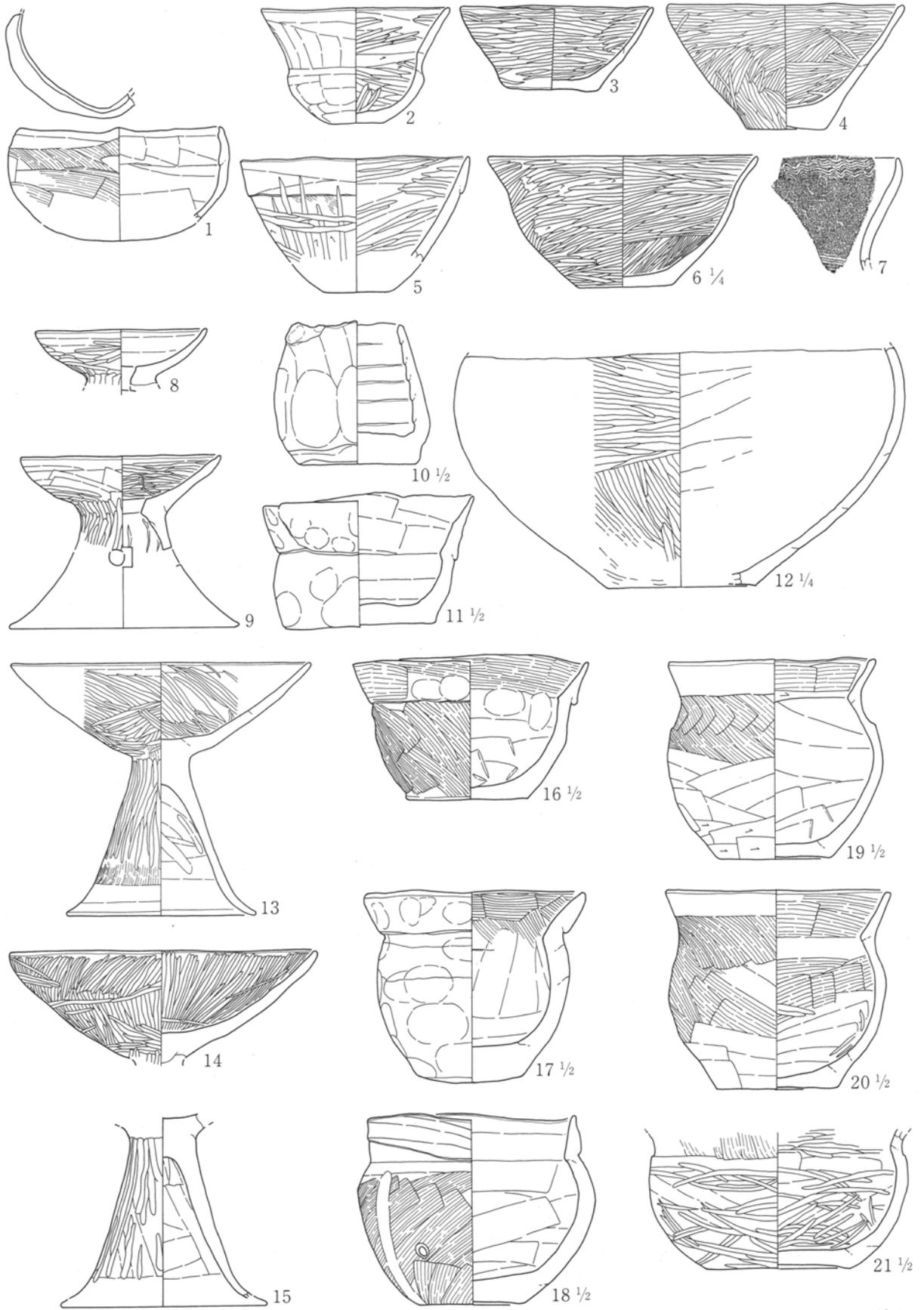
3. 古墳時代前葉の遺構と遺物



132図 II区遺構外出土遺物(13)

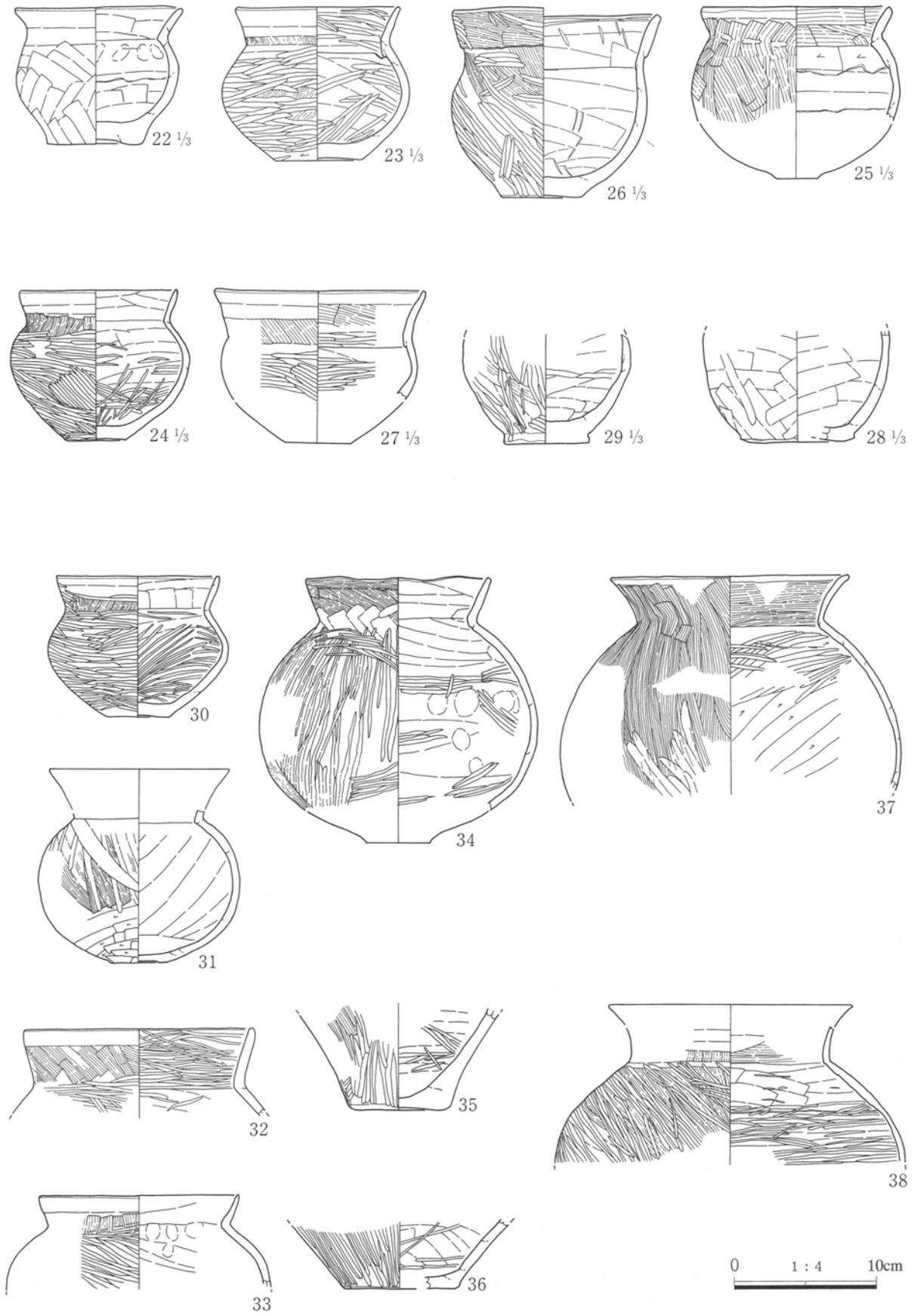
0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物



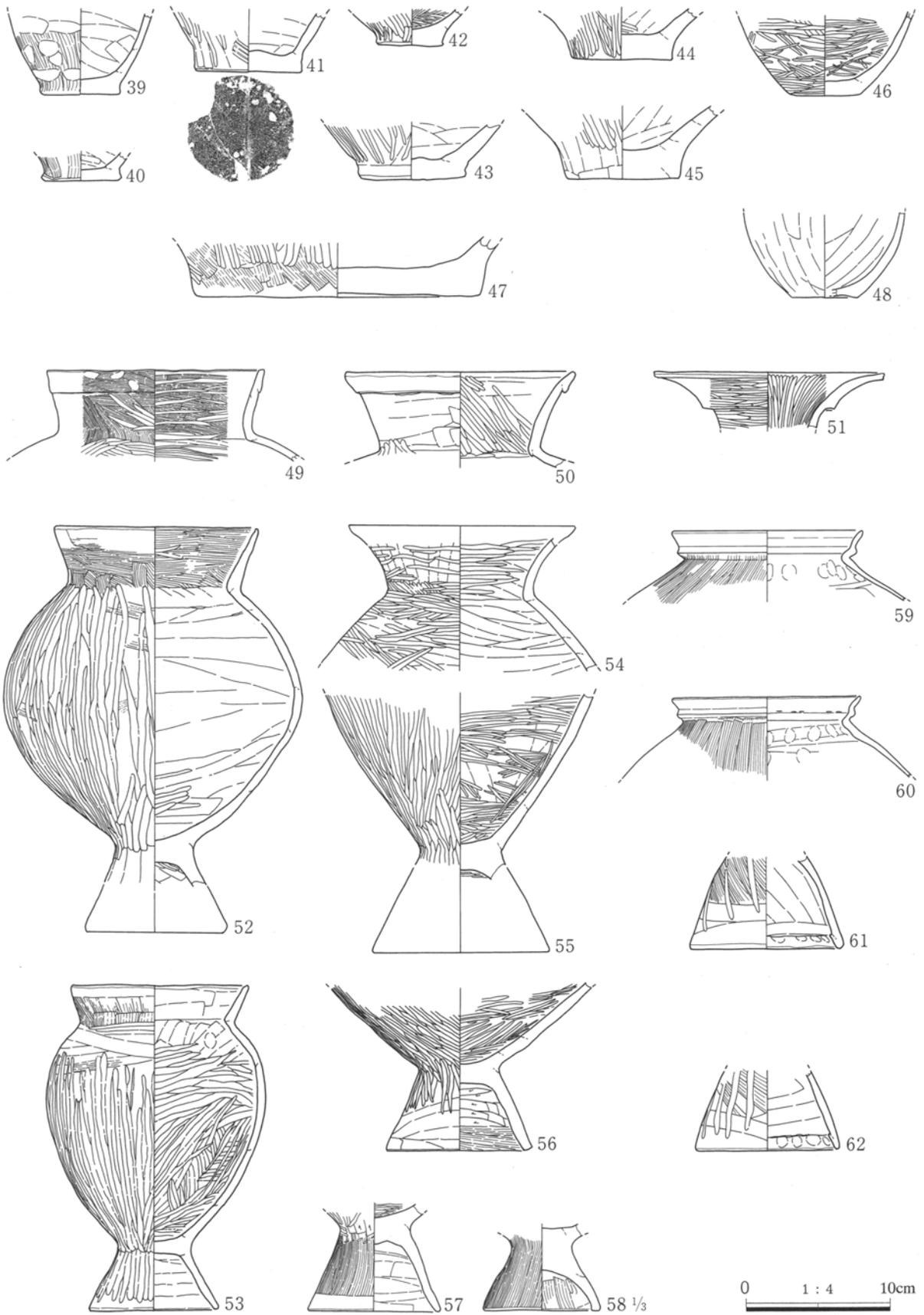
133図 Ⅲ区遺構外出土遺物(1)

3. 古墳時代前葉の遺構と遺物

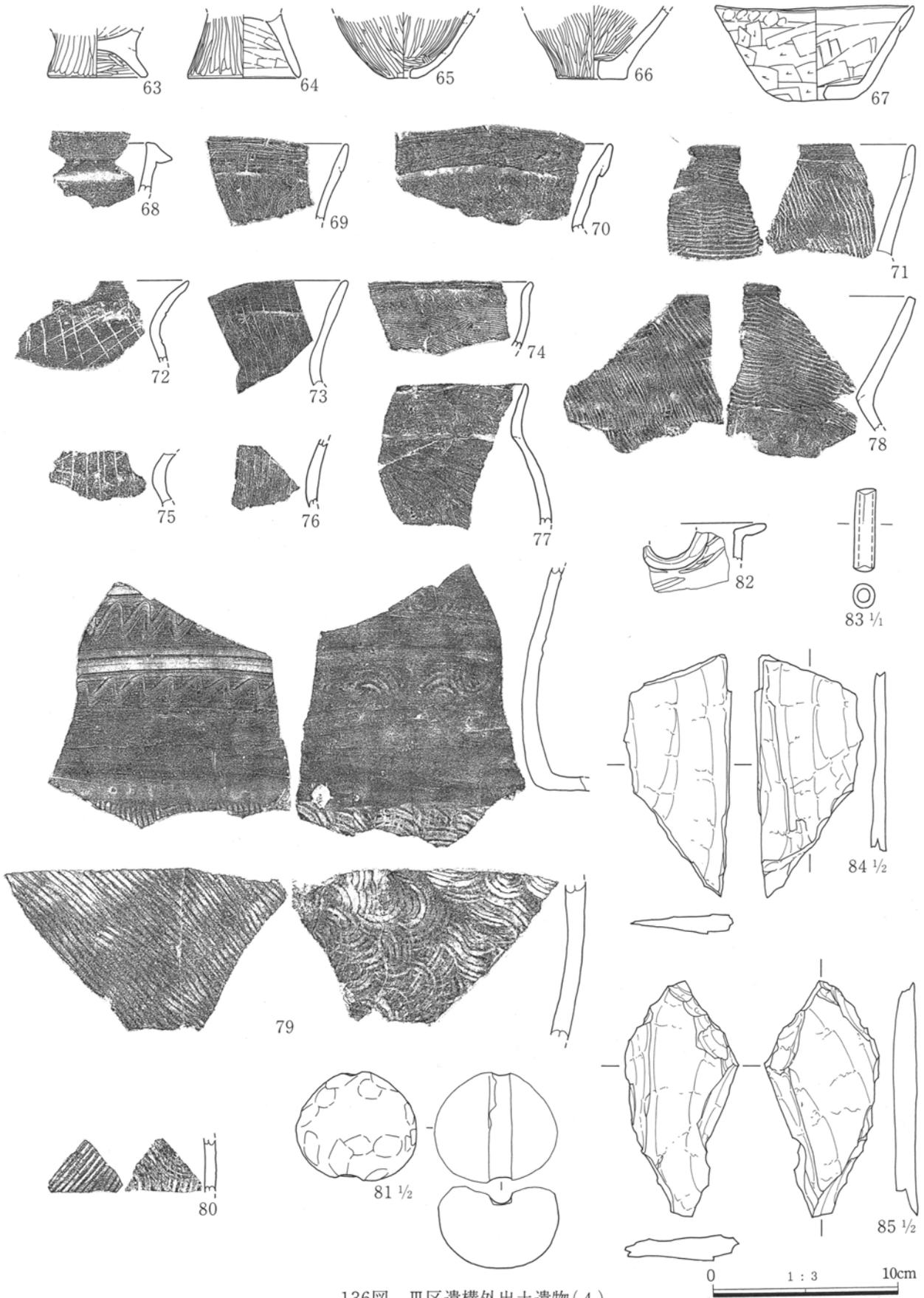


134図 Ⅲ区遺構外出土遺物(2)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



135図 Ⅲ区遺構外出土遺物(3)



136図 Ⅲ区遺構外出土遺物(4)

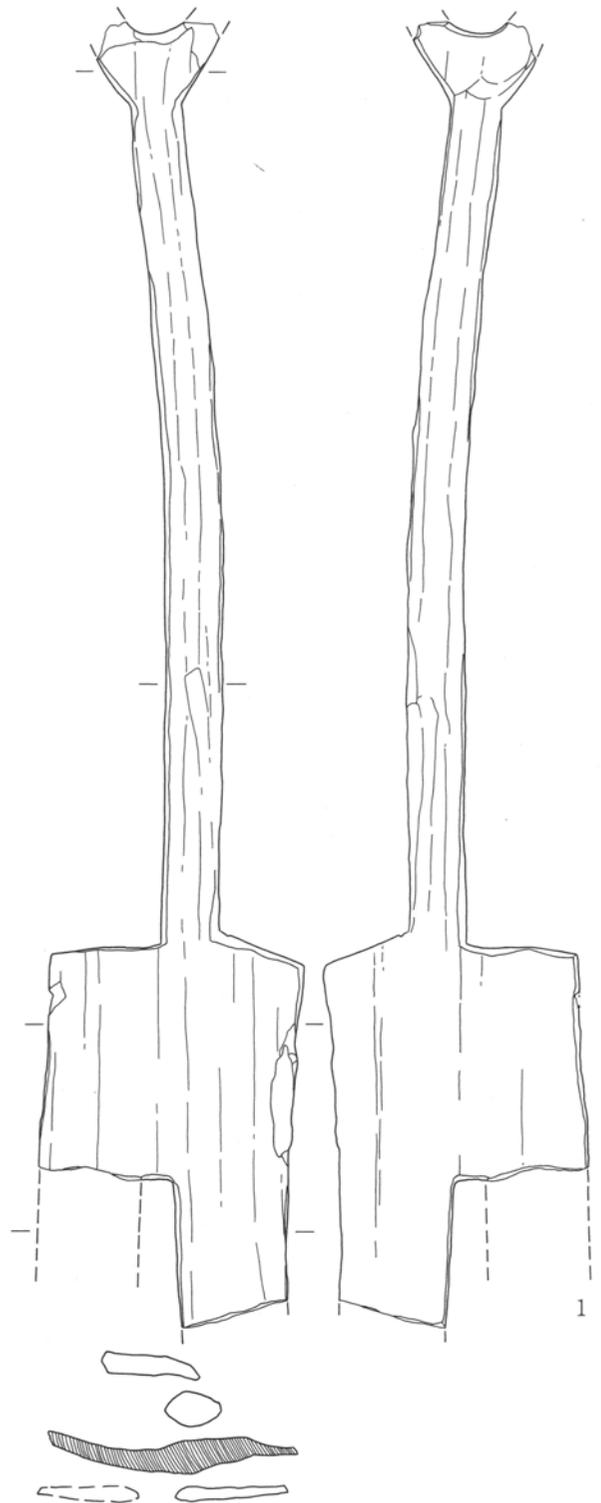
Ⅲ 検出された遺構と遺物

木製品 (図版17)

中郷恵久保遺跡では、I-2区低地部で古墳時代木製品の出土を見た。調査も終盤に差し掛かり、FA下面の調査を終了後、下位面の縄文時代包含層抽出を主目的として、FA下面の黒色粘質土の調査にあたった。この黒色粘質土上層より、自然木や草木類の出土が目立ち初め、特に標高部の低い凹部(GJ~L-64・65)において顕著になった。木製品がそれら自然草木類と混在して出土したのは、暗褐色粘質土にかけてである。上層からは土器等遺物が出土せず、それ故、木製品の出土は予期せぬ事柄だった。木製品は、鋤の一部が大型の板材と伴出した例があるが、全般に板材が多く、杭や梯子等も出土することから、おそらく建築材の一部が集中したものと捉えられた。共伴する土器がまったく見られず、帰属時期の詳細は不明と言わざるを得ない。出土層位からは、FA下の黒色粘質土~暗褐色粘質土の出土であることを考慮すると、弥生時代~古墳時代前葉に相当するものと考えられた。さらに、調査で得られた集落跡は古墳時代前葉であり、谷部分での出土とはいえ、該期の住居・建物建築材等が流入・廃棄されたものと捉えられた。

しかしながら、既に調査終了日は間近に迫り、さらに断続的な湧水のため、調査区壁の崩落も始まりだしたため、安全対策上やむなく、写真記録を主にして、即断的な調査を行うことになった。結果としては、当地域では極めて貴重な木製品を得ながら、十分な調査記録を果たせなかった。大きな反省点である。

整理作業では、発掘調査の不備を補うべく多くの木製品の図化を試みたが、自然木との分別も困難な杭等の存在もあり、加工痕跡のある木製品を優先した。45点を図示したが、その殆どが板材・杭材であること、板材の一部にはほぞ穴が穿たれていること、一部には炭化した例もあること、また、梯子が2点出土しており、農具と特定出来る例が少なく1・2点であることから、住居等の建築材が主体と判断した。

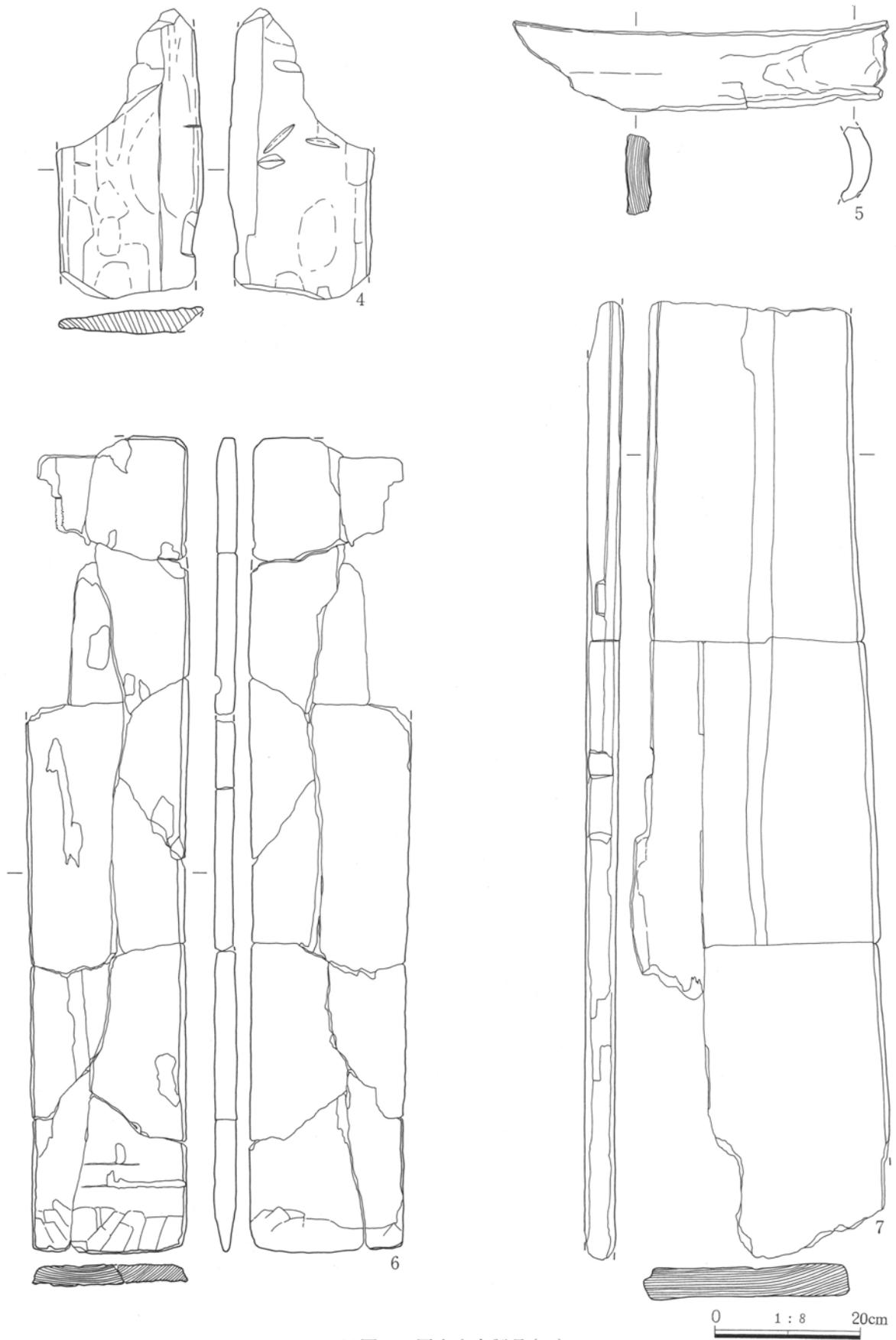


137図 I区出土木製品(1)

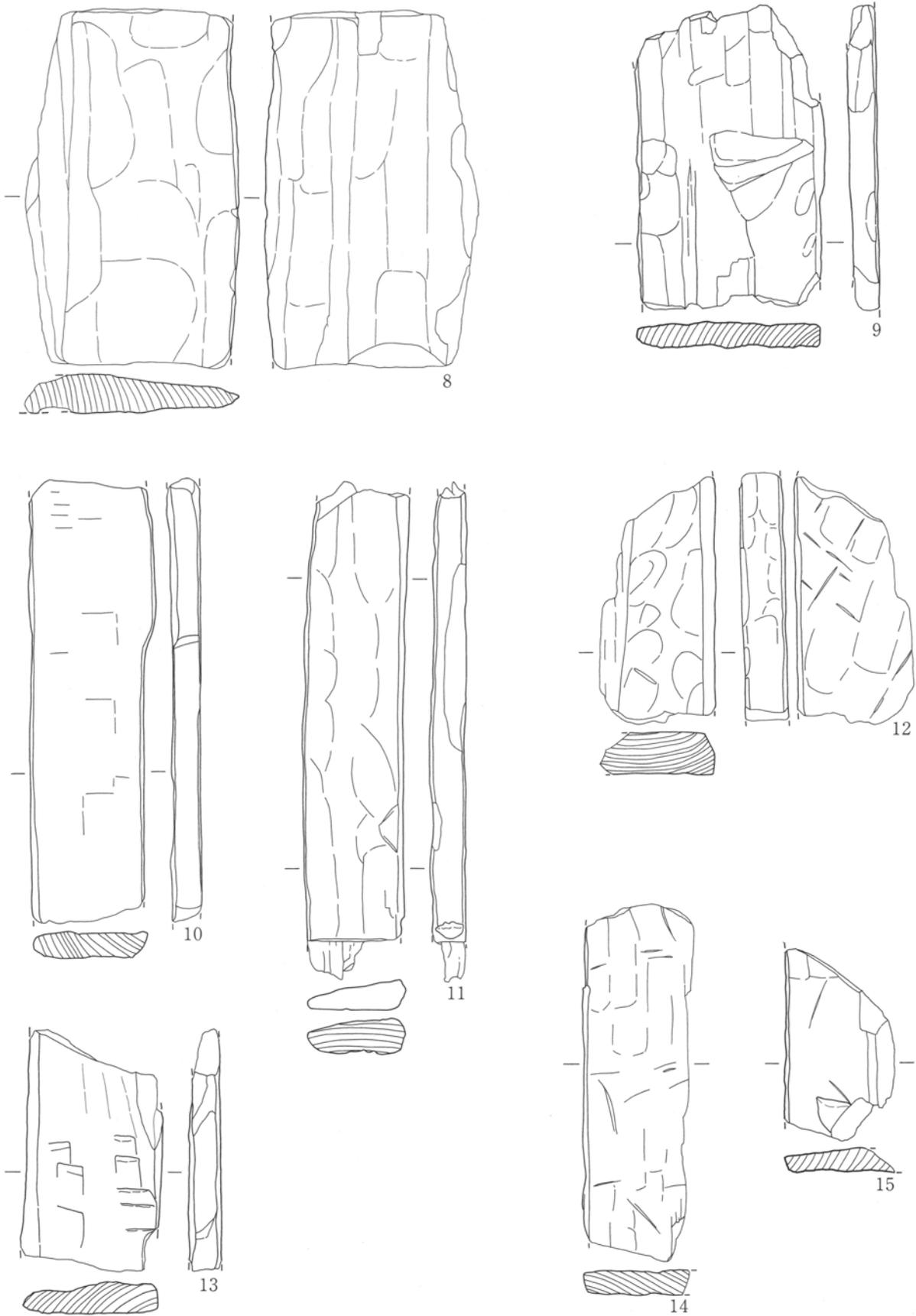


138図 I区出土木製品(2)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



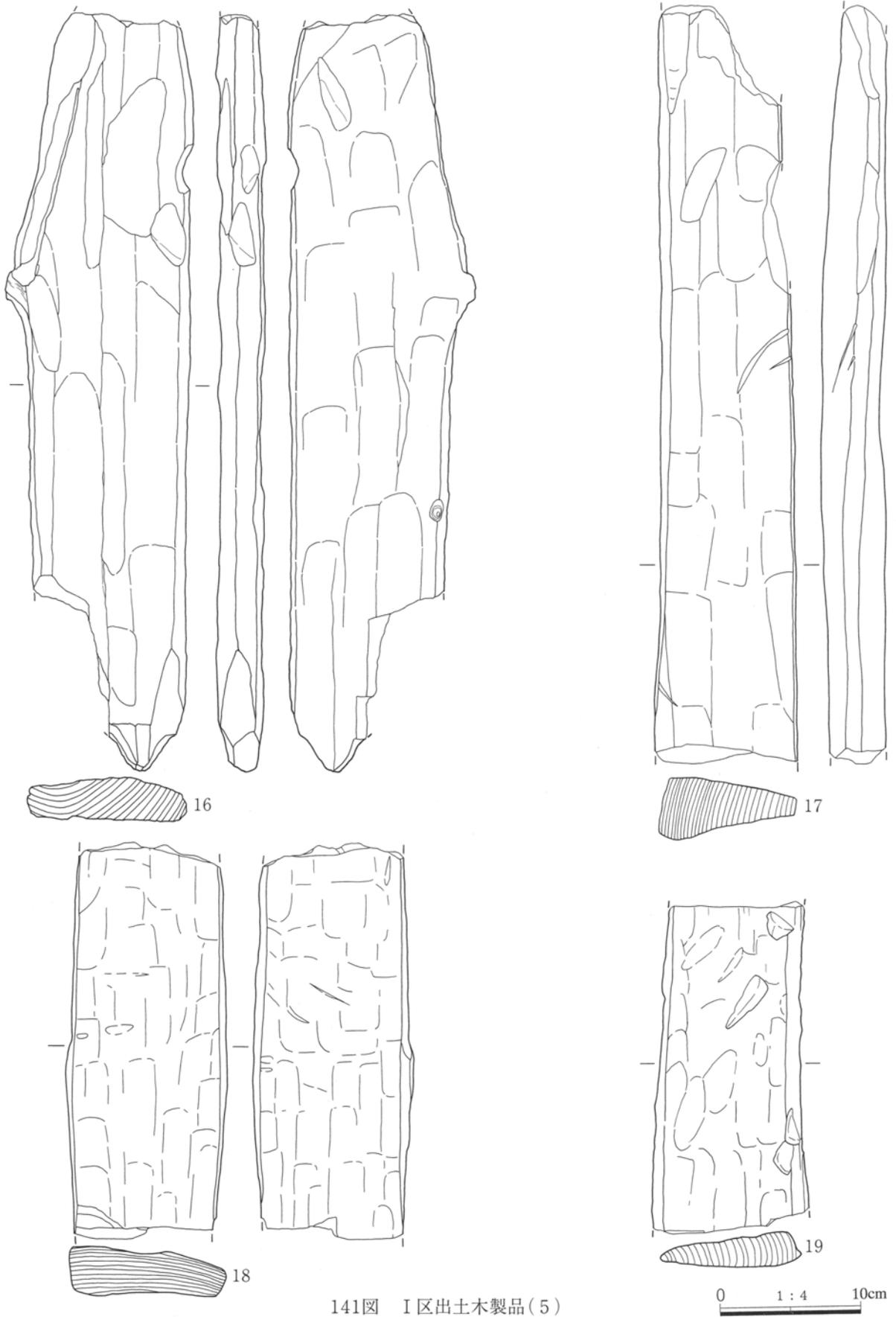
139図 I区出土木製品(3)



140図 I区出土木製品(4)

0 1:4 10cm

Ⅲ 検出された遺構と遺物

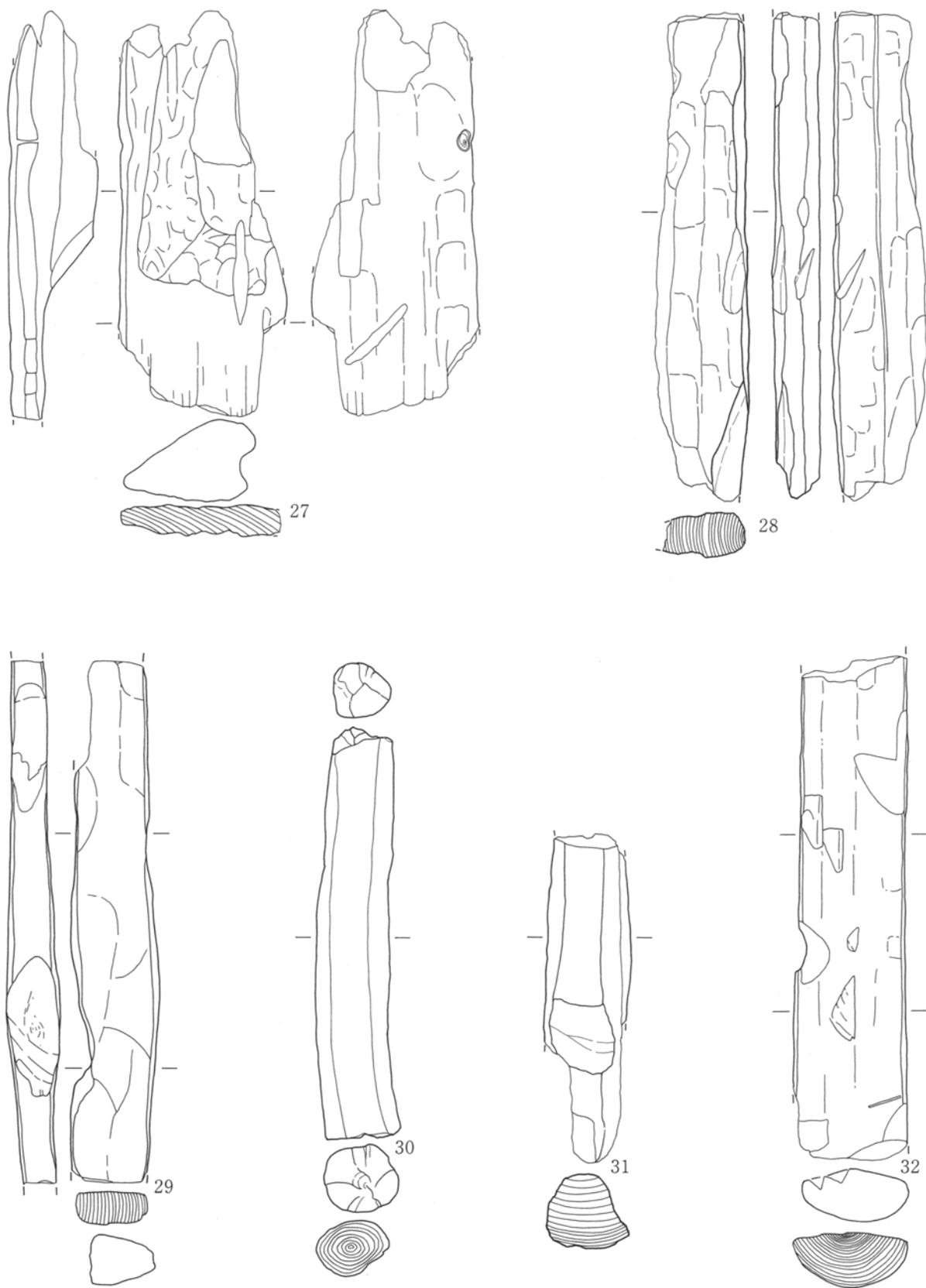


141図 I区出土木製品(5)



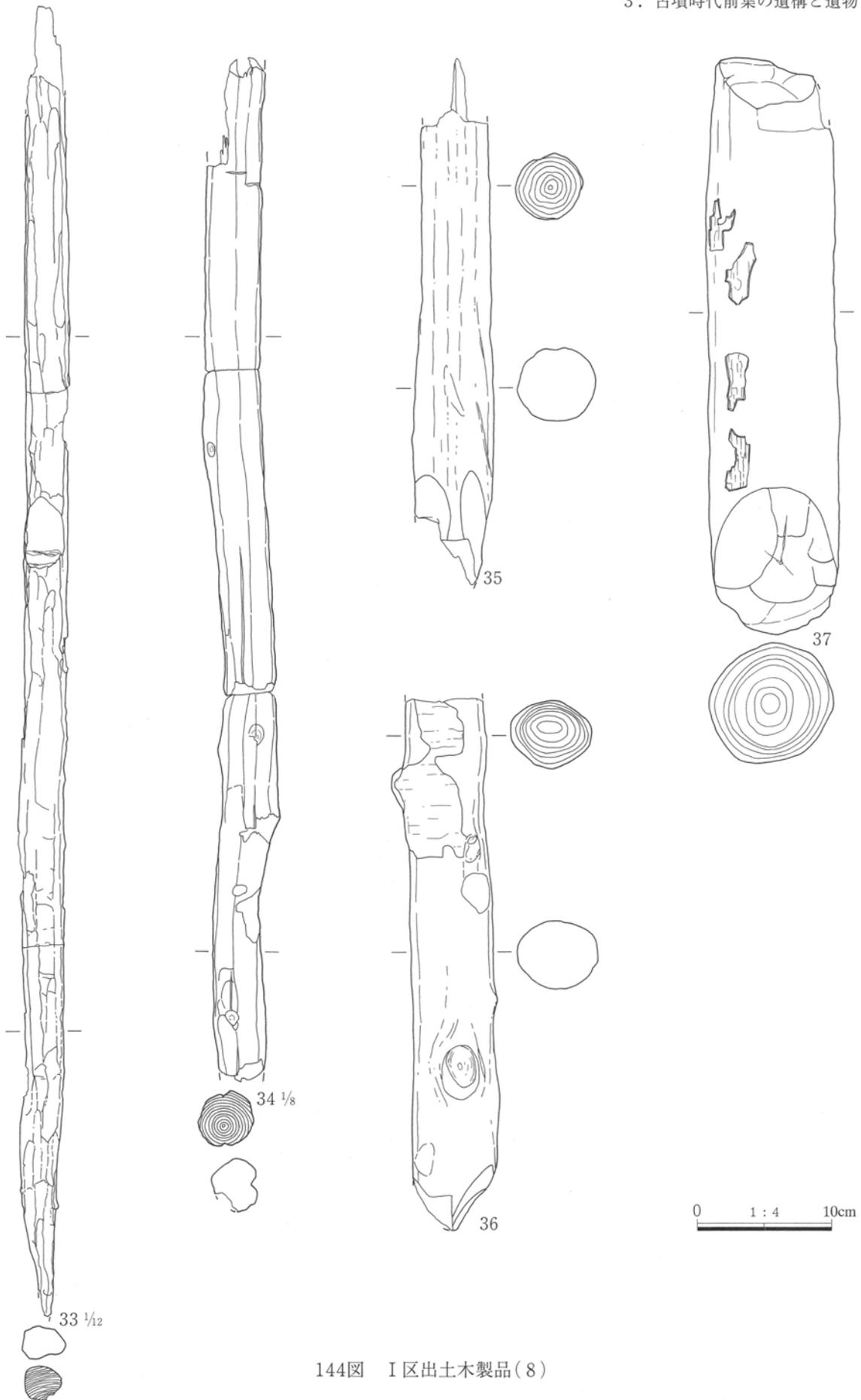
142図 I区出土木製品(6)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



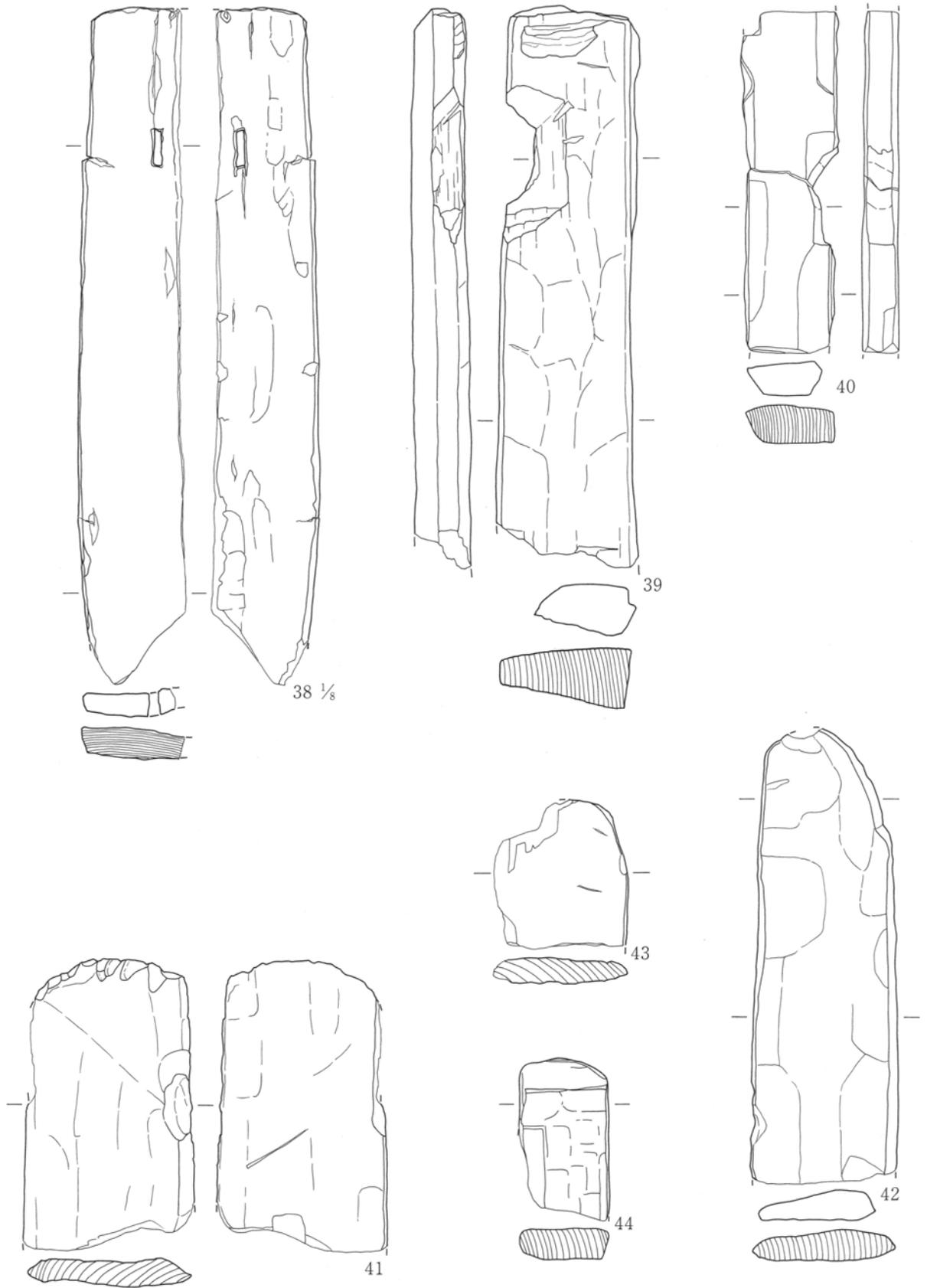
143図 I区出土木製品(7)

0 1:4 10cm



144図 I区出土木製品(8)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



145図 I区出土木製品(9)

0 1:4 10cm

サク状遺構 (図版16)

古墳時代前葉の集落跡の調査確認面は、ローム漸移層～ローム層上層である。調査の主眼は住居跡一
 堅穴遺構の把握において調査を進めたため、住居跡
 や掘立柱建物跡中心の集落跡把握となった。

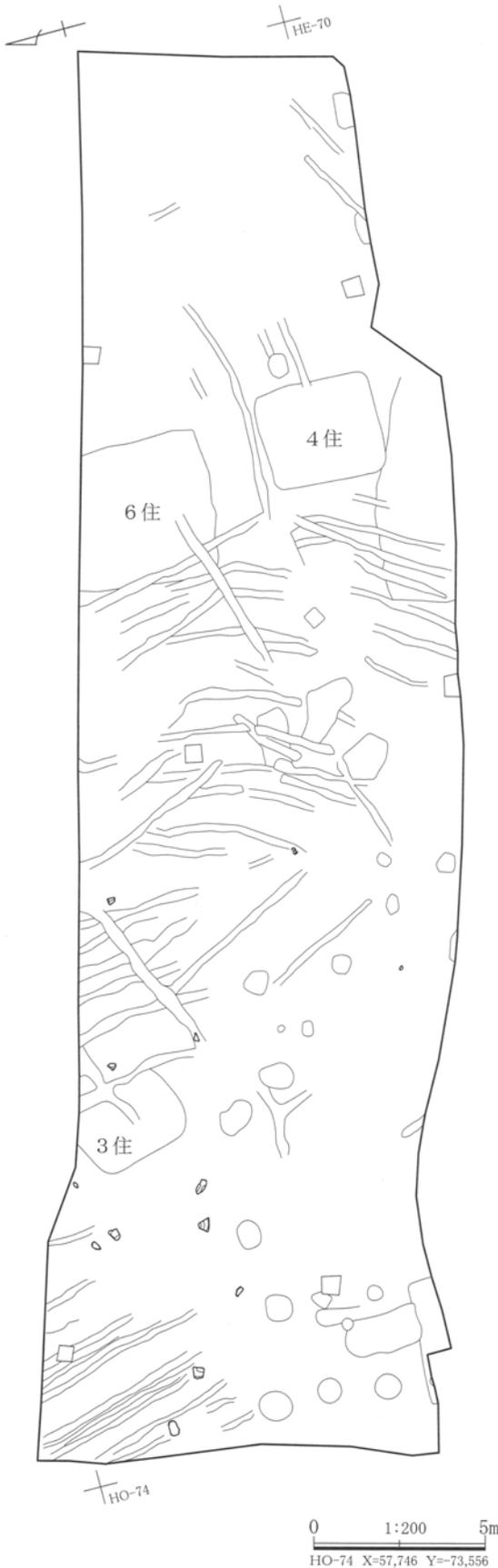
この確認作業の途中で、Ⅱ-2区においては、サ
 ク状遺構を漸移層上位で検出した。80～100cm間隔
 で幅約20cm程の細い溝が平行しており、掘り込みは
 浅く、鈍い褐色土を埋土としていたため、漸移層と
 の区別や住居跡平面形との分別が困難なため、溝の
 平面確認を果たした後に、埋土を除去することなく
 平面記録を主としてとった。その後埋土を除去して
 みたが、土質の近似性から明瞭な耕作痕跡は見出せ
 なかった。また、平面形のための抽出作業にしても、
 サクの途切れる場所もあり、調査区全域では確認で
 きなかった。さらに、調査が3年次に渡ったため、
 サク状遺構を検出できなかったⅢ-1区のような例
 もある。本報告では、明瞭に走向とまとまりが把握
 できたⅡ-2区東部を選び、掲載した。

サク状遺構の走向は、南北方向を基調としており、
 一部は緩やかに東西方向へ湾曲する傾向を見せてい
 た。また、走向をやや異にして重複する例や直交す
 るサク状遺構の幾つかを見ることができた。走向を
 違える一群の存在は、複数回の耕起痕跡が判断でき、
 頻繁な畝耕作行為も想定できた。

残念ながら、サク状遺構相互の新旧が不明なため、
 耕作行程の差やサクの付け替え順序などは不明であ
 る。しかしながら、住居跡との新旧は重複状態から
 は住居跡埋土を切ることから、概ねサク状遺構が新
 しいと判断できよう。ただ、重複しない住居跡とは、
 同時共存する可能性も考慮すべきである。

このことから、住居廃棄後に畝耕作作業が行われ
 る行程が読み取れ、居住域内においても住居→畝と
 いう土地利用の変化が想起された。

通常当地域では、FP下畝跡の耕作痕跡としてF
 A上面でサク状遺構が検出されるが、ローム漸位層
 で古墳時代前葉～中葉の畝サク状遺構が確認される
 のは意義深く、今後注意を要しよう。



146図 Ⅲ-2区ローム上面サク状遺構

Ⅲ 検出された遺構と遺物

4. Hr-FA下で検出された遺構

F A直下面は6世紀初頭の生活面である。榛名山降下火山灰直下面であるが、火砕流を含むため、地表面を焼き尽くした大災害の痕跡でもある。

中郷恵久保遺跡では、10~30cm程のF A堆積が認められた。Ⅰ区東斜面やⅢ区西斜面において、斜面地形が故、堆積が薄い箇所が認められたり、Ⅲ-1区棚田状水田跡で大きく用地を掘削した箇所以外は、調査区全域でその堆積を見ることができた。

調査は、F Aを除去することによって当時の地表面を検出することを目的とした。

その結果、

Ⅰ-1区：遺構無し。斜面地形と僅かな馬蹄痕?が認められた。

Ⅰ-2区：遺構無し。ただしF P下水田による下位面への圧痕が認められた。

Ⅱ-1区：馬蹄痕?が多量に認められた。放牧地跡と考えた。

Ⅱ-2区：馬蹄痕?が多量に認められた。また極めて低位の畦状遺構もあり、放牧地跡と考えた。

Ⅲ-1区：馬蹄痕?が多量に認められた。放牧地跡に相当するが、斜面地にまで馬蹄痕に近似した穴が点在し、その在り方に疑問を持った。

Ⅲ-2区：小区画水田跡を検出した。放牧地跡以外では、本遺跡で唯一のF A下遺構である。

以上のように、人間の生活痕跡を遺構と呼ぶならば、厳密な遺構はⅢ-2区で調査した小区画水田跡のみである。また、馬を介した間接的な生活痕跡として、Ⅱ区からⅢ区にかけて放牧地跡が確認されているが、洪積台地上におけるF A下の黒色土は極めて軟質であり、上層生活面であるF P下面における遺構の影響を大きく受けやすい。前述の水田圧痕も顕著な例であるし、F P下道状遺構など硬化面は下位のF A下面やローム上層にまで及ぶ例がある。馬蹄痕も、F P下からF A下までその圧力をかけており、F A下においても馬蹄痕類似の円形の穴が無数に分布することになる。

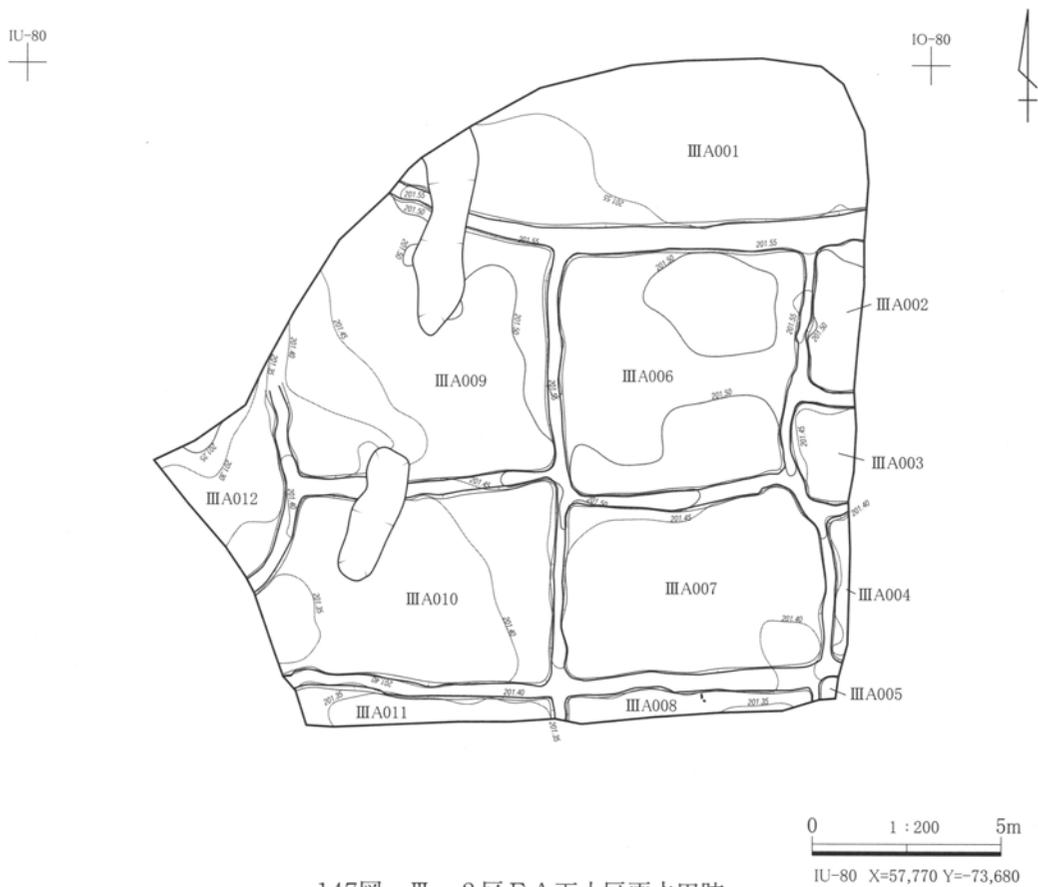
故に、本遺跡の調査ではF A下で検出した馬蹄痕は地形とともに1/40や1/100平面図に全て記録化したが、明瞭な馬蹄痕は少なく、報告書掲載は控えさせていただいた。今後、F A下放牧地跡の調査方法を再考する必要がある、本遺跡で得たF A下面の馬蹄痕をもって、放牧地跡として短絡的な性格付けは避けるべきである。検討を要する。

本報告書で扱うF A下遺構は、Ⅲ-2区で検出した小区画水田跡である。



Ⅱ-1区 F P下道状遺構 下部F A面

ベルト上面がF A上、ベルト下面がF A下にあたる。F P下で検出した道状遺構であるが、F A下面においても、硬化面が検出される。白く点状にしているのが凹みに残存するF A。幾つかは馬蹄痕になるが、確定性に乏しい凹みがあり、馬蹄の把握・抽出に課題を残した。



147図 III-2区F A下水田跡

F A下水田跡 (図版18)

III-2区で検出した小区画水田跡である。III-2区は鯉沢川左岸の沖積地帯にあたる。鯉沢川が形成した沖積地は広く、本遺跡と鯉沢川を挟んで西接する吹屋三角遺跡もこの沖積地に占地する。吹屋三角遺跡でも、F A下水田跡が検出されており、本遺跡で調査されたF A下水田跡を含めて、鯉沢川沖積地帯におけるF A下における水田の展開は定着しているものと捉えられよう。

調査では、12区画が検出された。各畦の高まりは10cm以下で、遺存状態は不良といえよう。規模が判断できた区画はA006とA007の2区画のみであった。方形を基調としているが、東側の畦が湾曲し、不整形な印象を受ける。A002~A004は湾曲畦の影響で、やはり不整形な区画形状であろうか。東西畦もA006・A007と対応せず、やや小型化する傾向を見せる。A009とA010は西側の畦が鯉沢川に向かって湾曲す

るため、方形ながら大型で不整形な区画と捉えられる。A001は南北畦が確認できず大区画と判断した。

また、A006とA001の間の畦がやや幅広で、大畦の可能性を持つが、西に行くに従い徐々に狭くなり確定性に乏しい。

水田耕土はF A下の黒褐色粘質土である。耕土としての特徴は見出せず、下層と色調差も近似するため耕作痕跡も検出されなかった。また、水口は、各区画とも設けられてなかった。

以上のように、本遺跡のF A水田は遺存度も悪く、I章1で述べたように調査の不手際もあり、全体感も把握できなかった。しかしながら、検出し得た各区画を概観すると、不整形区画であり、畦畔が丸みを帯び、水口が見られない。という特徴を見せた。これは、先に報告された『北牧大境遺跡』(群埋文2004)にあるF A下水田跡と共通する要素であり、当地域のF A下水田跡の傾向を示したといえよう。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

5. Hr-FP下で検出された遺構

F P 下面は、国指定史跡黒井峯遺跡の古墳時代生活面と同時期の地表面である。厳密に言えば、軽石による埋没が瞬時であり、当時の位相を具体化する面でもある。この面で得られた遺構・遺物は同時刻の産物であり、集落跡にしても墳墓・生産跡にしても、すべてが密接に相互関連する複合体といえよう。

中郷恵久保遺跡におけるF Pの堆積は遺跡全域に及び、層厚1 m～1.5mの軽石層として、6世紀中葉の地表面を覆っていた。

発掘調査は、この厚いF P層の除去をバックホウで行った。F P直下面の地表面を調査対象とするのだが、例えば当時の立体構造物—住居上屋・立木・垣根などの存在もあるため、除去中も詳細な観察が必要とされている。本遺跡の調査でも、常にバックホウによる除去に担当者が付き添い、掘削されるF Pの観察を行ったが、立木等の存在は見出せなかった。F P最下層は褐色軽石層が堆積する。地点によっては色調が変化するが、上層の白色軽石層と際立った色調差があるため、掘削する軽石層の色調変化によって当時の地表面に近いことが判断できる。

F P直下の地表面の検出作業とは、この褐色軽石層の除去作業である。これまでの事業団調査では、褐色軽石層をジョレンと移植ゴテ、更に刷毛を使って丁寧に除去してきたが、これは馬蹄痕の詳細な観察のために刷毛を使用してきた経緯がある。

一方、村教委の桃色軽石層除去作業は、刷毛を使用せず、ジョレンと移植ゴテを主とした除去作業で一連の軽石下の著名な遺跡を調査してきた。この除去作業では、確かに馬蹄痕の輪郭などを明瞭に検出できない欠点があるが、「当時の地表面を新鮮な面として検出できる」という利点がある。従来の事業団調査の刷毛を使用した除去作業を行うと、当時の地表面を刷毛の擦痕で痛めてしまう傾向がある。

今回の中郷恵久保遺跡の調査では、村教委の調査方法にならない、刷毛を使用しない調査方針を採用した。新鮮な面を検出することによって、当時の「踏

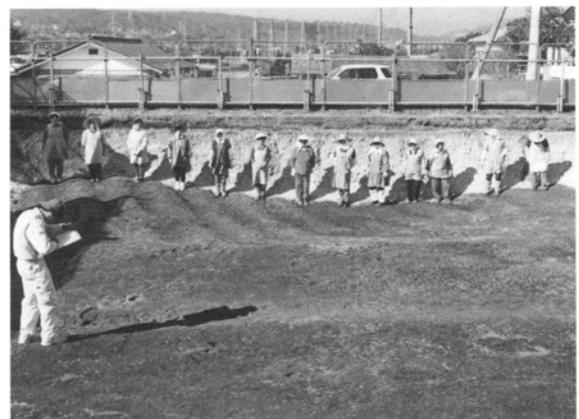
み跡」の確認が果たせた。また、凹地の色調差など、刷毛使用では検出し得ない成果を得ることができた。無論、新鮮な面を検出する際には、調査担当者が、軽石除去後即写真記録と地表面のメモ記録をとることが必要であり、また作業手順に慣れた作業員が必要となる。広い面積を大人数で調査する、事業団調査—中郷恵久保遺跡の調査ではやや不向きな調査ではあったが、F P直下面の資料化として果たすべき作業方法であり、今後も踏襲すべき調査方法として認識した。

さて、本遺跡のF P直下面では、

- I-1区 放牧地跡（道状遺構・馬蹄痕等）
- I-2区 極小区画水田と短サク状畠跡
- II-1区 放牧地跡（道状遺構・馬蹄痕等）
- II-2区 放牧地跡と長サク状遺構・凹地等
- III-1区 放牧地跡と長・短サク状畠跡、棚田状水田跡

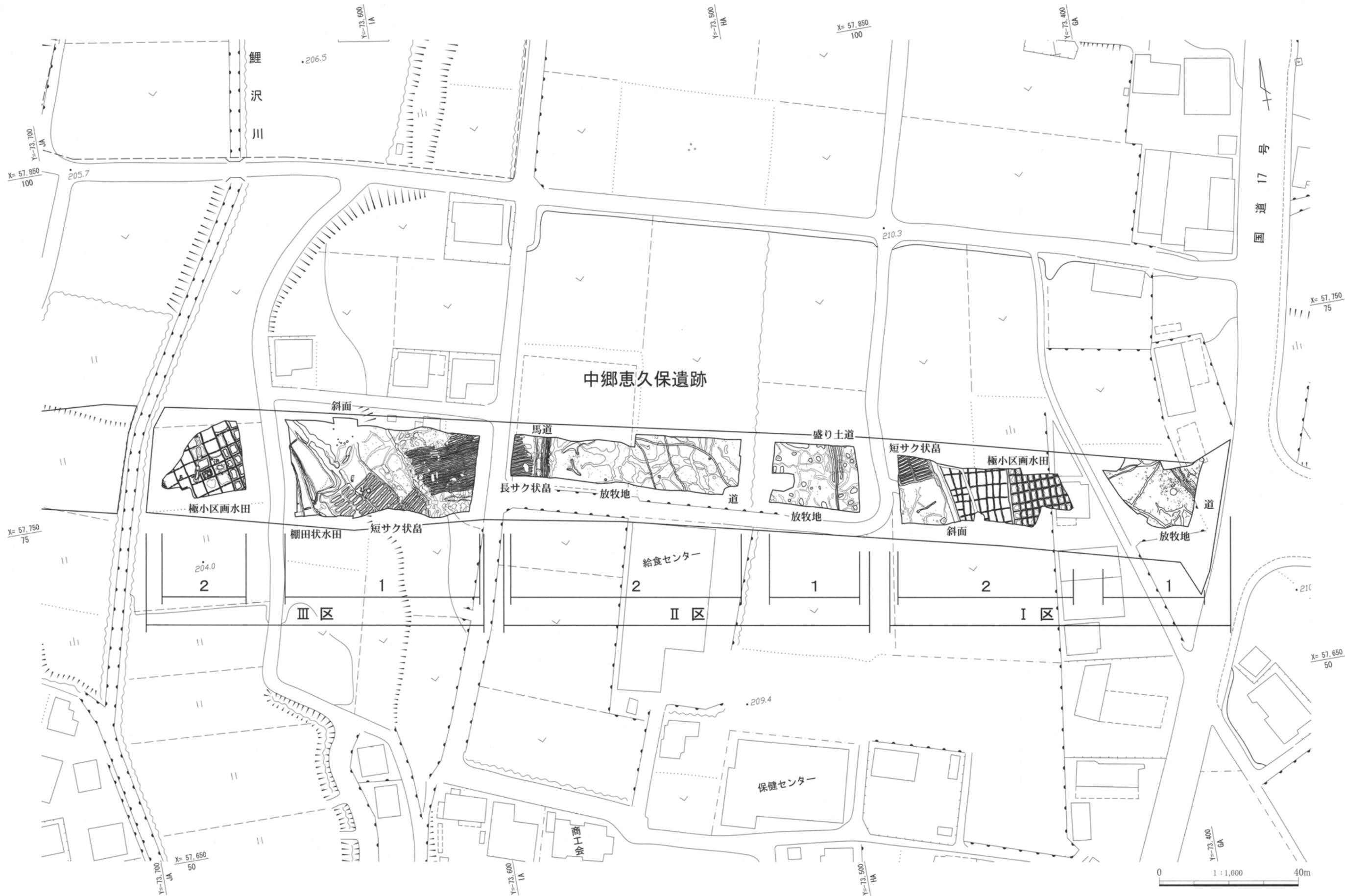
III-2区 極小区画水田跡 等が検出されている。全て生産跡の検出となったが、集落域を外れたためと捉えられる。水田跡や畠跡の存在は、周辺に集落跡の存在が示唆され、隣接地に集落跡が検出される可能性は極めて高い。

本報告書では、これら検出された各遺構毎の類別・個別の説明を避け、各区の様相を述べつつ、各遺構の説明を加えたい。

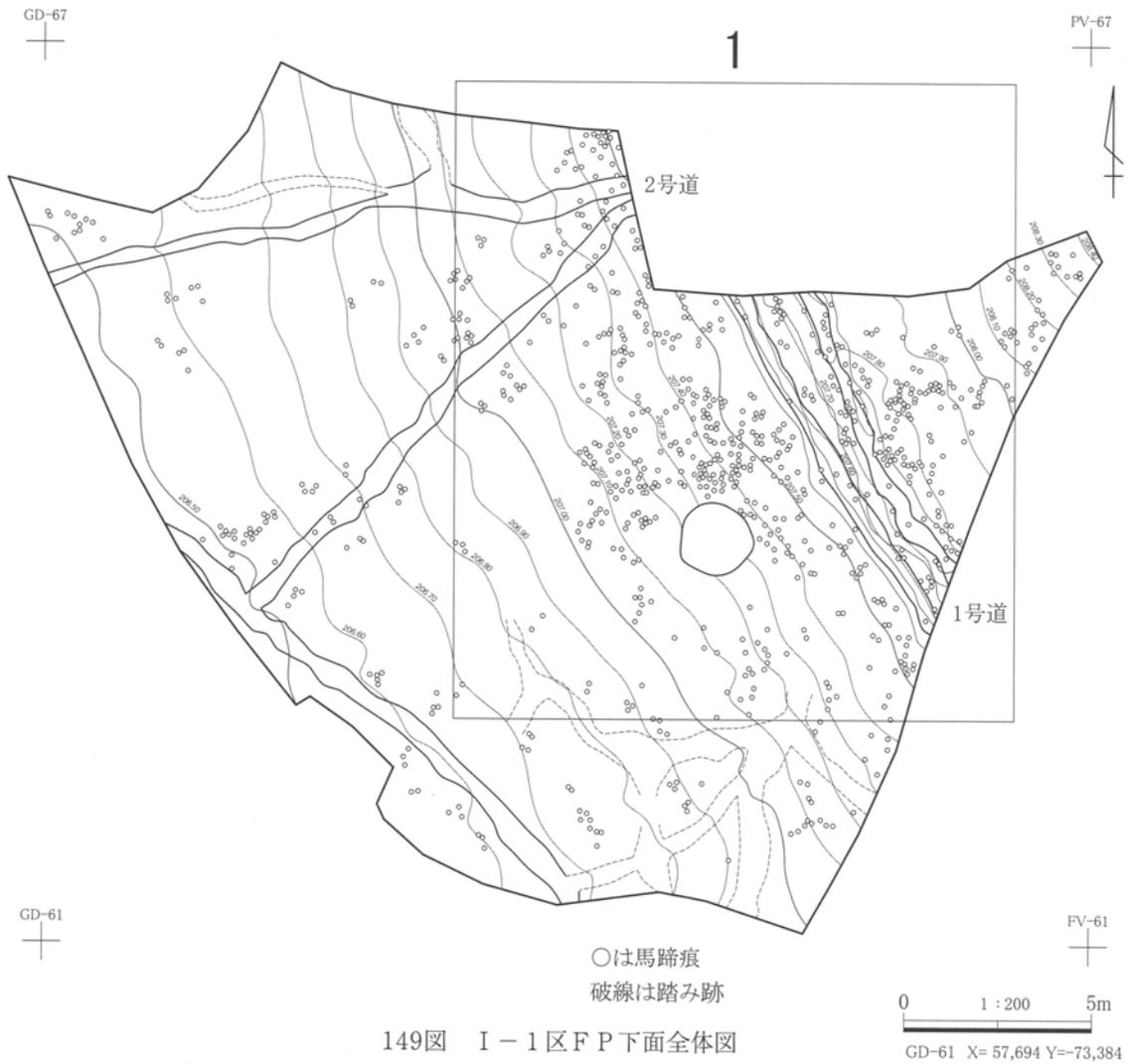


II-2区 F P下長サク状畠跡

凹地に営まれた畠である。手前に5号道状遺構が横切る



148図 F P下面全体図



149図 I-1区FP下面全体図

I-1区の調査 (図版19)

本遺跡最東端の調査区である。国道17号線を挟んで東に吹屋中原遺跡が接する。西にはI-2区があり、沖積地として水田跡が営まれている。吹屋中原遺跡Ⅲ区では、西側への傾斜地に放牧跡が検出されており (群埋文1996)、中郷恵久保遺跡I-1区はこの傾斜の延長として位置付けられた。

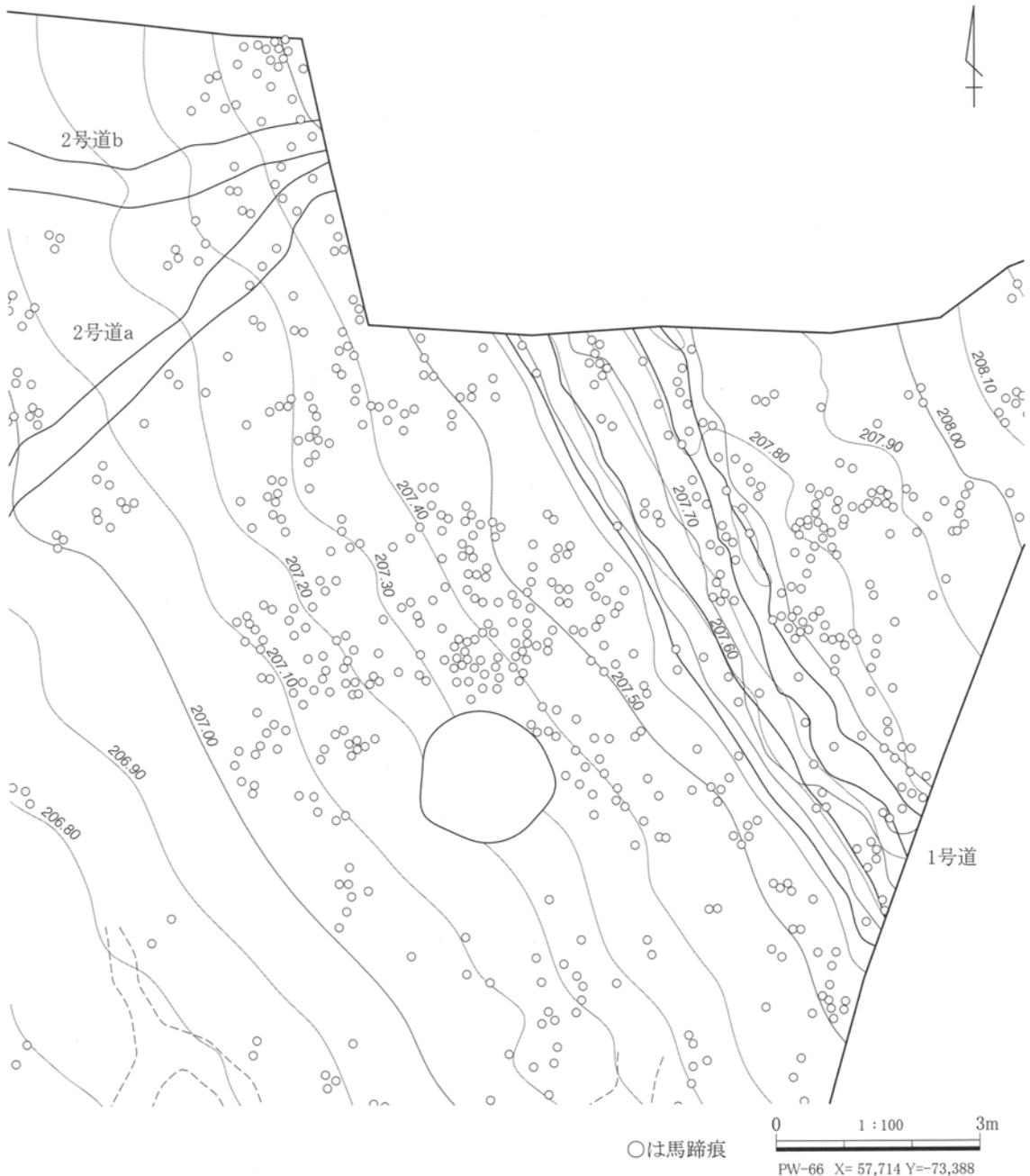
当調査区は平成13年度に調査を着手したが、長雨と台風、さらに湧水に悩まされた調査区だった。8月に表土を掘削したが、通常湧水のある面ではないFP上面で既に湧水が見られ、FP下面に至るバックホウの掘削途中で水量も多くなり、排水作業のため、一時中断を余儀なくされた調査区である。

FP下面の調査は排水作業終了後直ちに着手し、

短時間で終了した。調査の結果、吹屋中原遺跡から継続する西斜面に馬蹄痕及び道状遺構を検出した。

(馬蹄痕) 馬蹄痕は夥しく多量に検出された。多くが東側の斜面上位に集中したが、湧水のため確認が難しかった西側斜面下位の量を割り引いても、明らかに集中度は高かった。特に1号道状遺構の周辺に偏りが見られたが、道状遺構に沿った傾向ではなく、周辺を含めた偏在と捉えられた。新旧の把握には至っていない。

(道状遺構) 1号道状遺構と2号道状遺構がある。1号道状遺構は、調査区東寄り、やや北西に軸を傾けて検出された。深さ10cm未満ではあるが、明瞭な凹みを持ち、幅40cm程の硬化面を連続させていた。また、南西側に僅かではあるが黒色土による高まり



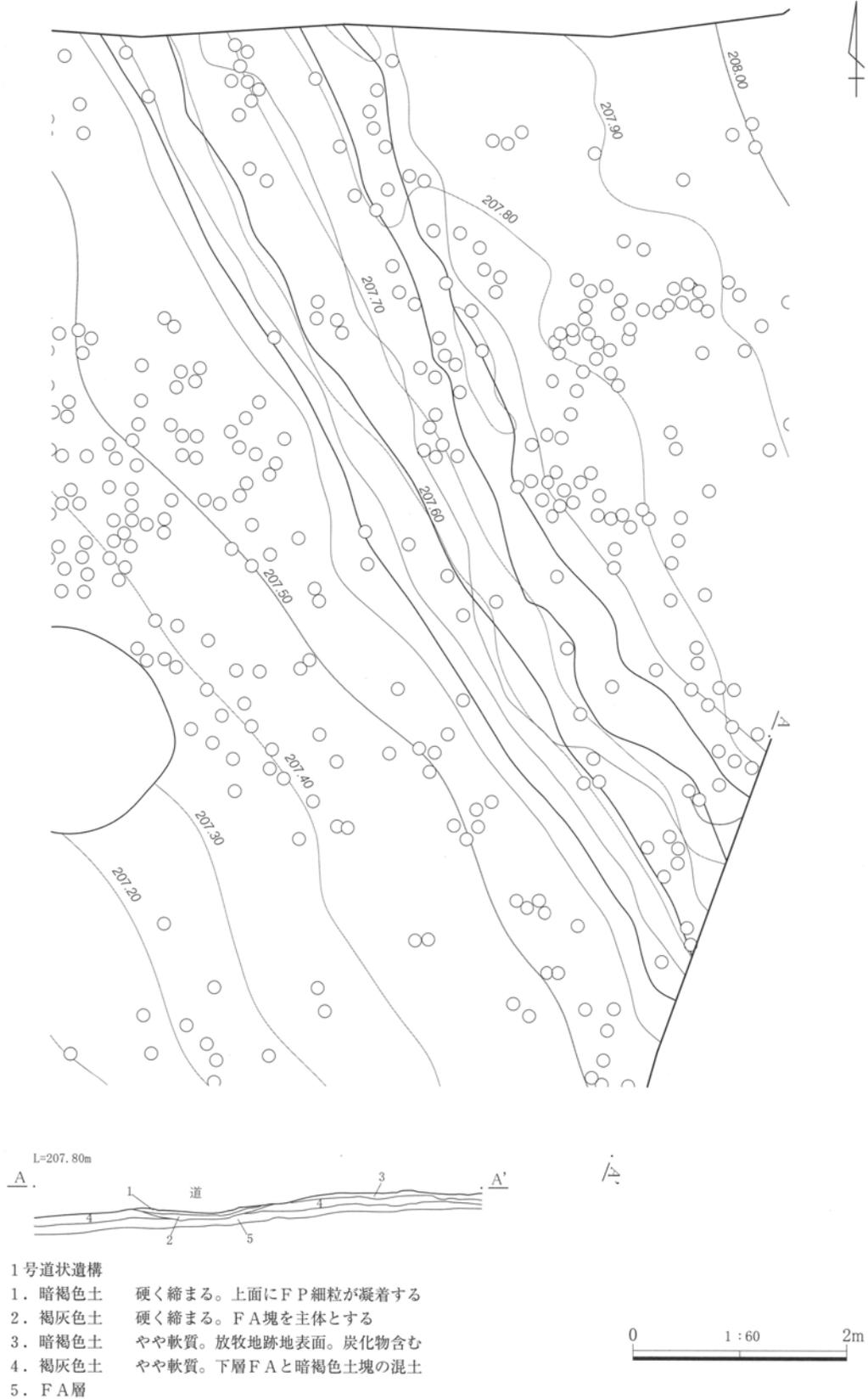
150図 I-1区道状遺構

を平行させていた。土手状のような高まりではなく、緩やかな盛り土といった印象である。道を作成する際のアマリ土による土手状施設の名残であろうか。2号道状遺構は、調査区北側で分岐する形態を見せた。分岐した両者ともに硬化面がやや弱いものの、斜面下位まで観察され、調査区南西で確認した踏み跡と交差する様相を見せた。また、北側の分岐点から北東は調査区域外に延びるが、おそらく1号道状遺構とも接する走行を見せていた。分岐する南側を

2号道a、北側を2号道bとしたが、2号道aが硬化面や走行が明瞭であり、1号道状遺構との関連も強いものと想起された。

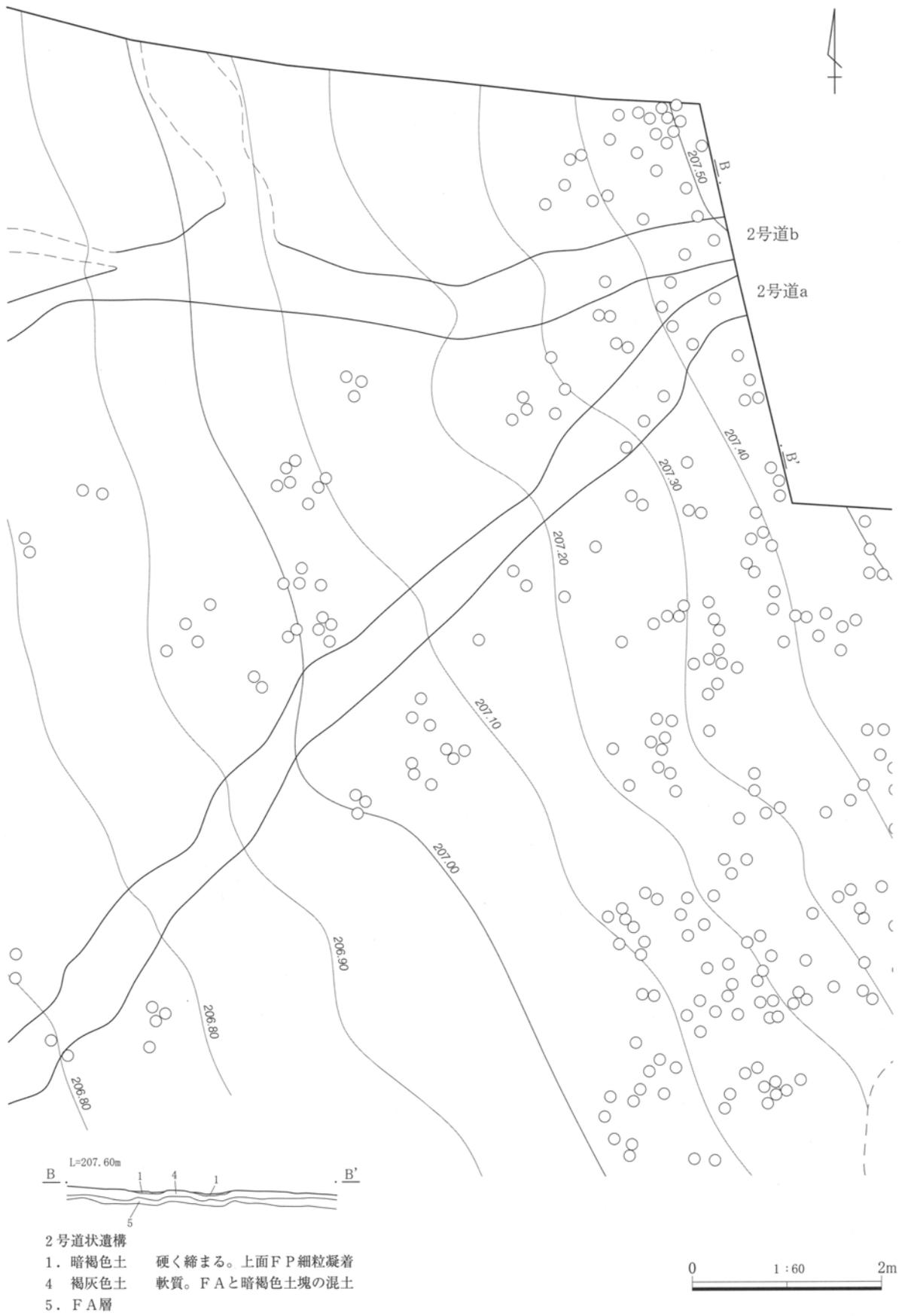
(踏み跡) F P直下面の僅かな光沢差や色調差、あるいは土質の硬軟を見極め、踏み跡を検出した。平面図では破線で表現したが、当調査区では湧水が著しかったため、全容の把握には至らなかった。

(畦状遺構) 吹屋中原遺跡で検出されていた畦状遺構は確認できなかった。



151図 I-1区1号道状遺構

Ⅲ 検出された遺構と遺物



I-2区の調査(図版19~21)

I-2区はI-1区調査の継続で行った。調査着手時には平坦地形であったが、FP上面では調査区中央部から西側にかけて大きく撓む地形を呈しており、表土の厚い堆積が確認された。この撓みを中心にして、I-1区におけるFP下西斜面が低地へ継続し、本調査区の西側台地に至る幅約50mの間に埋没谷を確認できた。おそらく、中央部の撓みは旧河川あるいは流路が下層に存在し得た可能性を示す。

調査着手時から、I-1区と同様に多量に湧水が噴出し、排水作業と併せて検出作業を進めた。

FP下面の調査では、東側の大半を占める低地部分で極小区画水田を検出した。さらに、西側の台地部分では、畝立ての明瞭な短サク状畝と放牧地が確認できた。畝・水田・放牧地が一望にし得た、屈指の調査区であった。

(短サク状畝跡) 西側台地部分の調査区北西隅で検出した。北側と西側の一部を調査区域外に延長するため、全容は把握できない。東側は急斜面を経て極小区画水田跡が広がり、南側は緩やかな東斜面で、少量ながらも馬蹄痕を確認したため放牧地として位置付けた。

畝立てのしっかりした畝跡である。畝幅約40~70cmで、サク間は90~100cmを測る。東西に2分割された、かつては「陸苗代」と想定された形状である。西側の畝長は約400cm程で、東側畝長が約480cmと若干差が見られた。東側と西側畝の間は溝状に深く凹み、底面はやや硬化していた。また、畝南側から西側にかけて、畝を囲堯する形態で畝状の高まりが設けられていた。

馬蹄痕は見られなかった。これは本遺跡の他の畝跡との差であり、畝として機能していた例と捉えられる。囲堯する畝状の高まりに垣を想定し、FP層断面の観察と、FA上の精査を試みたが、垣の痕跡は見出せなかった。また、畝跡も同様に、耕作痕と株根痕の抽出のため、下位層であるFA上で精査を重ねたが、明瞭な例が確認できなかった。

(放牧地跡) 西側台地南側で確認した。緩やかな

東側への傾斜地であり、東端は急斜面となって、小区画水田跡を臨む。北側には短サク状畝跡が接する。少量ながら馬蹄痕を検出したため、放牧地跡と判断した。また西側の現道を挟んだII-1区では放牧地跡が確認されているため、その延長としても妥当性はある。馬蹄痕の中には、調査区南西隅に見るように集中するものがあり、比較的明瞭な痕跡として確認できた。

馬蹄痕の他に性格不明の小溝と小凹みを調査したが、小凹みは立木痕の可能性もある。その他では、踏み跡が不定方向に確認された。平面図では破線で表したが、道状遺構のような硬化面はなく、直下面の光沢と色調変化・土質硬軟で判断した。小凹みより台地縁辺を通り、短サク状遺構東端に至る踏み跡は比較的しっかりとした光沢痕と幅狭の平坦面で把握した。

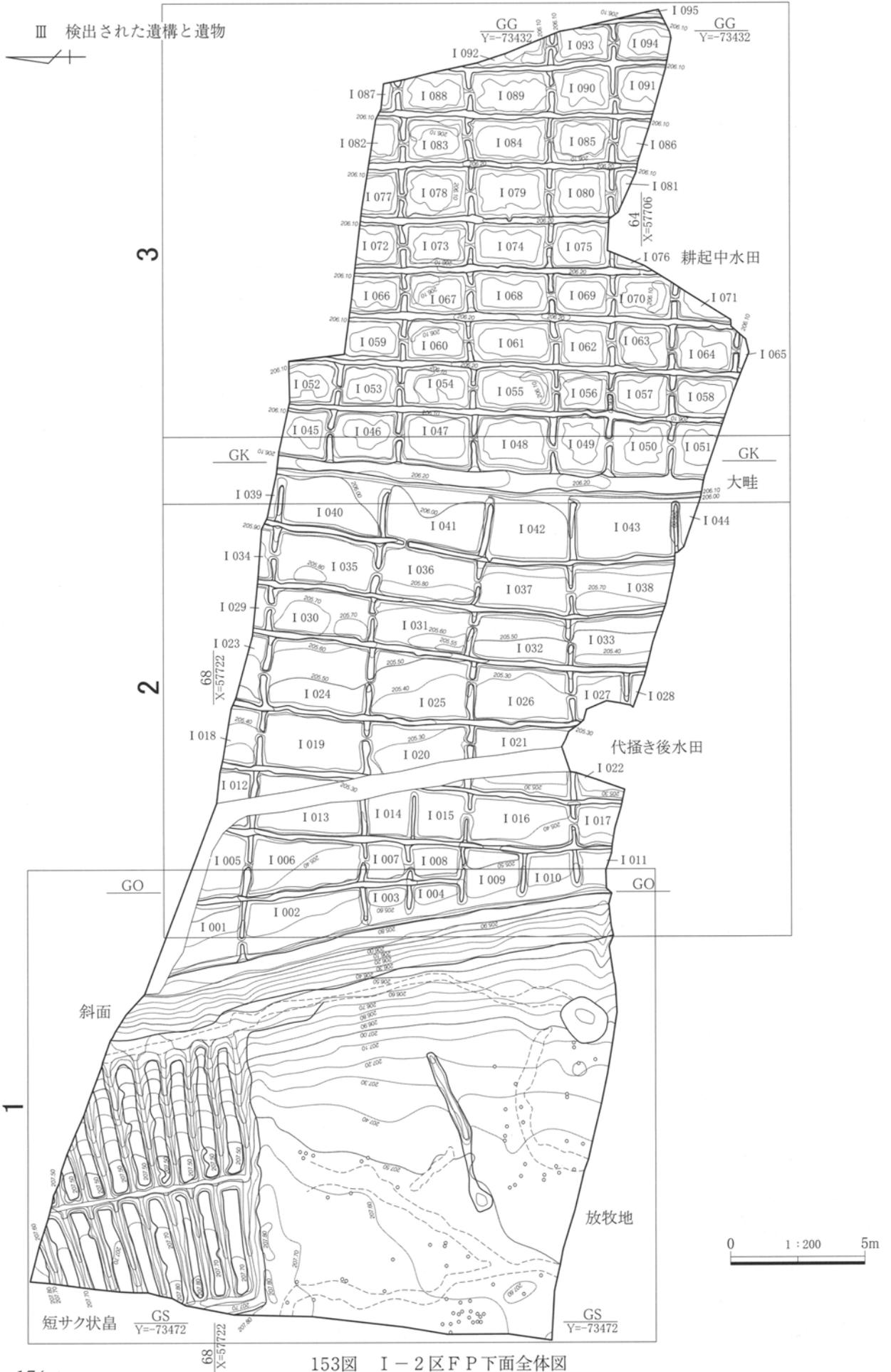
(極小区画水田跡) 調査区の2/3を占める低地部分で調査した。軸長1m前後の極小区画水田跡である。整った方形・長方形区画が連続し、当時の田園風景を想像させる景観だった。

極めて良好な遺存状態の水田跡である。畦畔は10cmを超える明瞭な高まりとして把握でき、水田区画、水口の特定、田面の観察等容易に判断できた。

畦畔は大畦・縦畦・横畦からなる。大畦は調査区中央やや東寄りで南北の走向を持って検出された。幅約120cm・高さ約25cmを測る主幹大畦として相応しい規模を示す。縦畦はこの大畦に平行して、南北の走向でやや小規模な畦である。通常、地形傾斜に沿った設定で本調査区でも、南北の走向が基準となっていた。横畦は、縦畦間を繋ぐ小規模な畦である。縦畦より低く、中間に水口が設けられ、滞水と取排水機能を持つ。本遺跡の横畦は、調査排水溝で壊された箇所以外で全てに水口が設けられていた。

I-2区FP下水田跡の特徴の一つとして、大畦を境にして、代掻き後水田跡と耕起中水田跡が確認されたことである。大畦西側が代掻き後水田跡(I001~I044)で、東側が耕起中水田跡(I045~I095)である。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



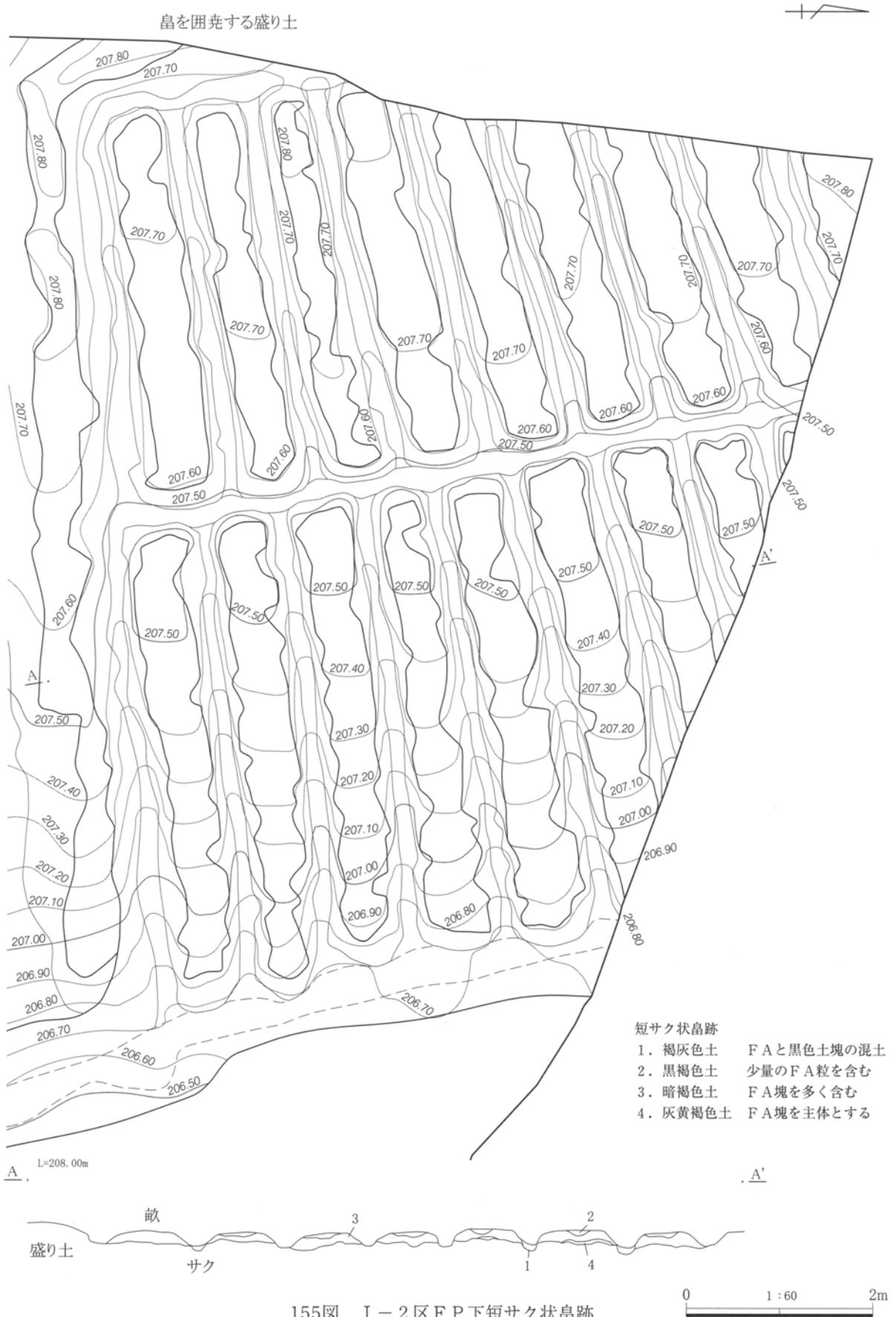
153図 I-2区FP下面全体図

5. Hr-FP下で検出された遺構



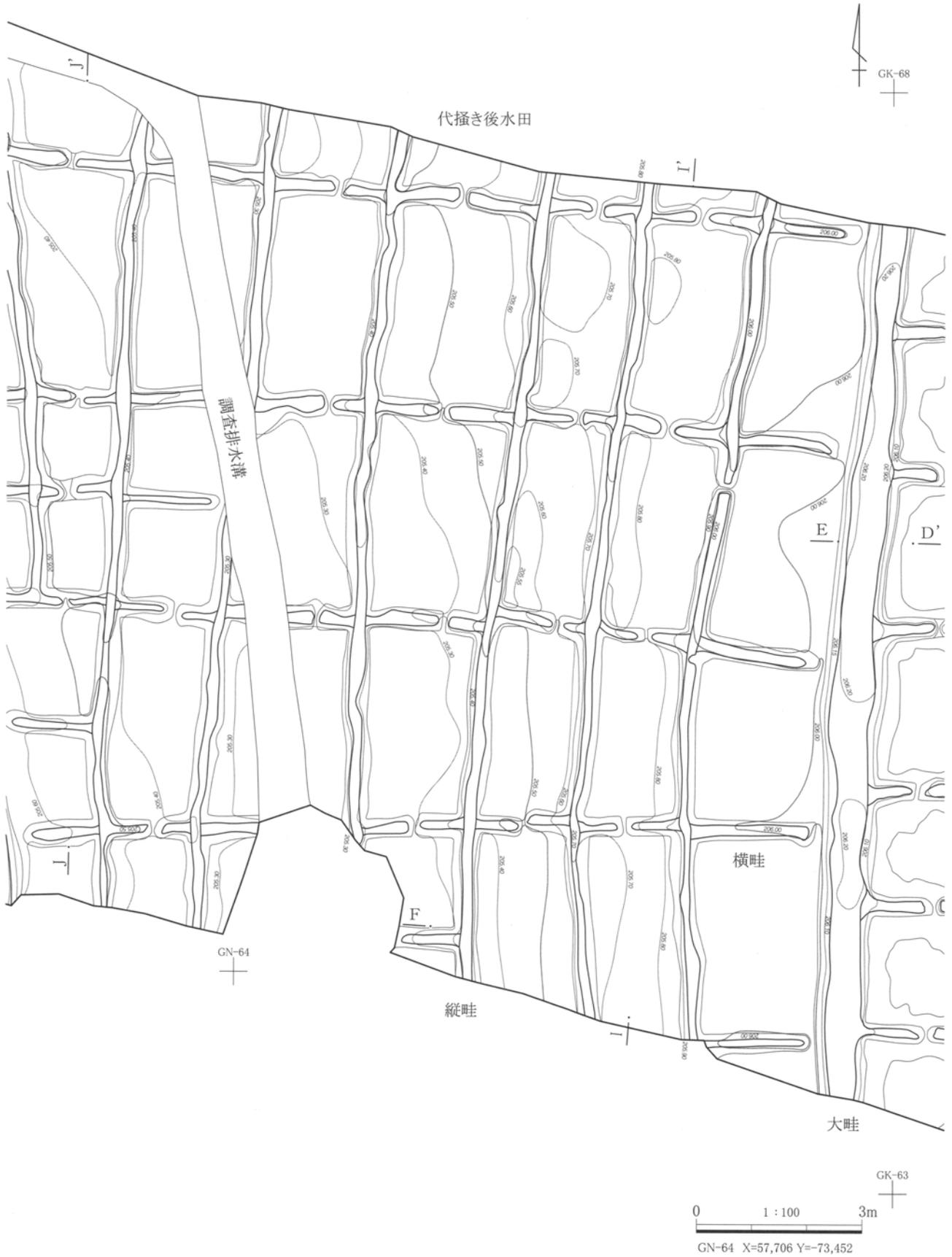
154図 I-2区FP下面台地部

Ⅲ 検出された遺構と遺物



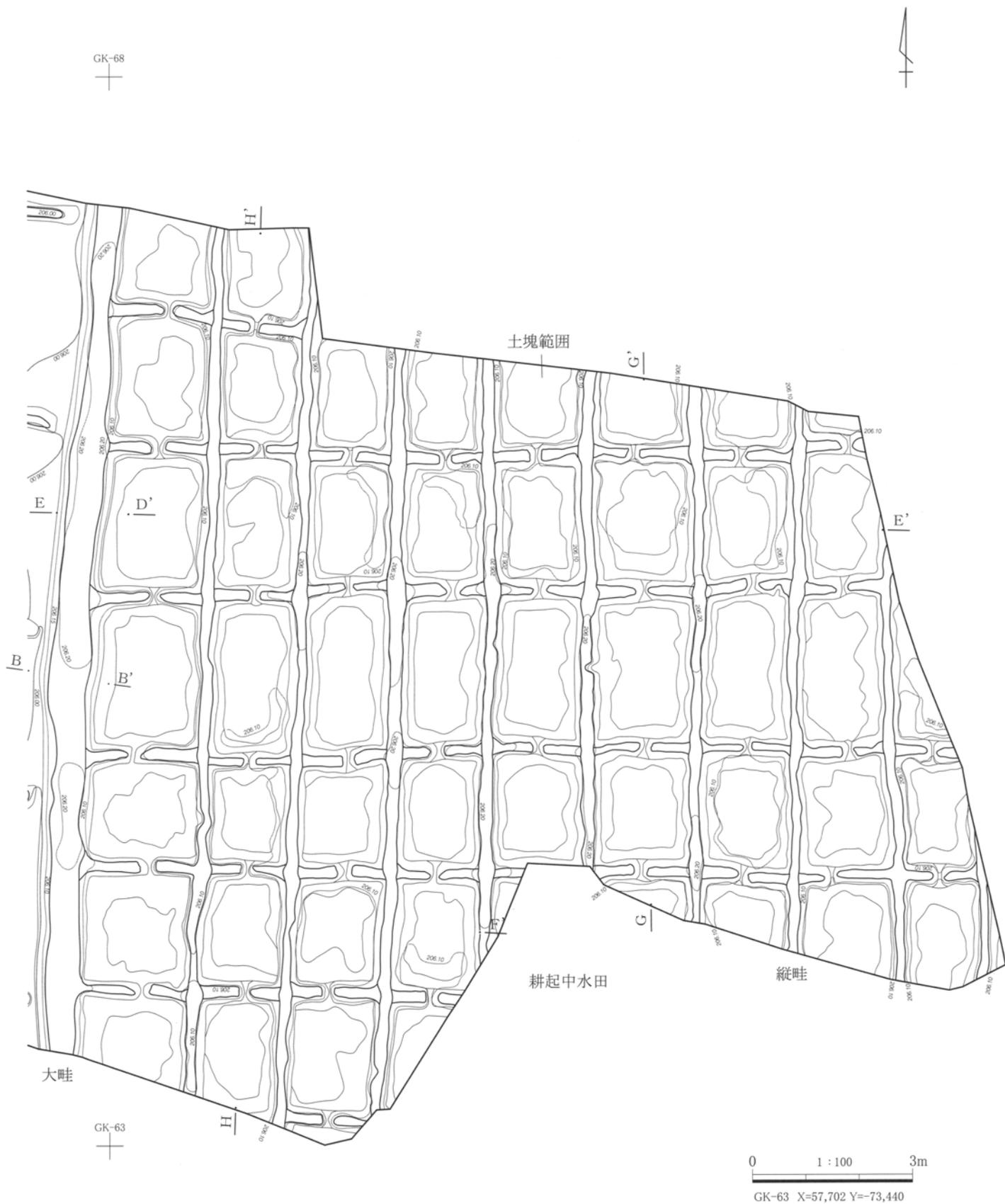
155図 I-2区FP下短サク状畠跡

5. Hr-FP下で検出された遺構



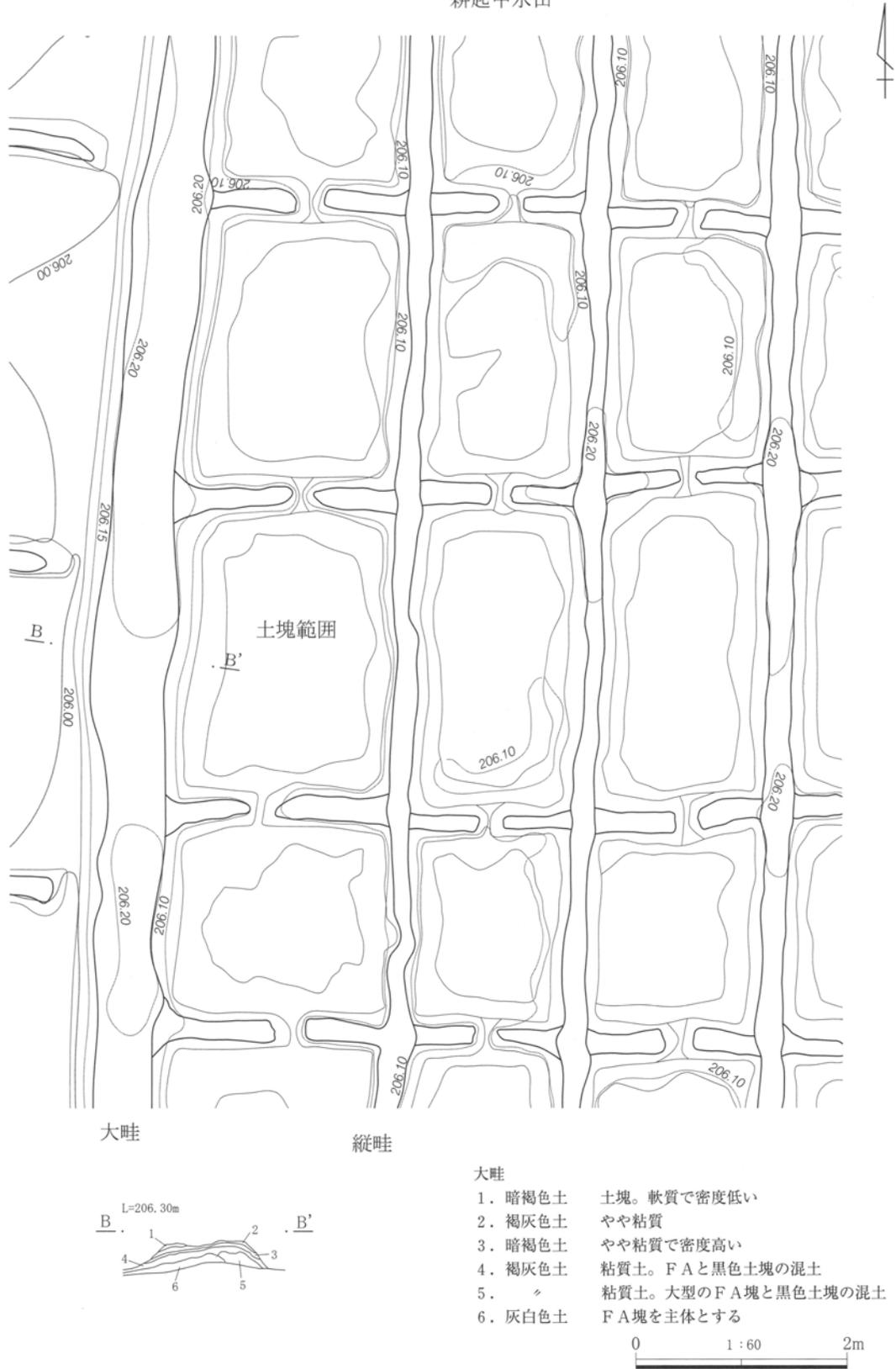
156図 I-2区F P下極小区画水田跡(1)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



157図 I - 2区FP下極小区画水田跡(2)

耕起中水田



大畦

縦畦

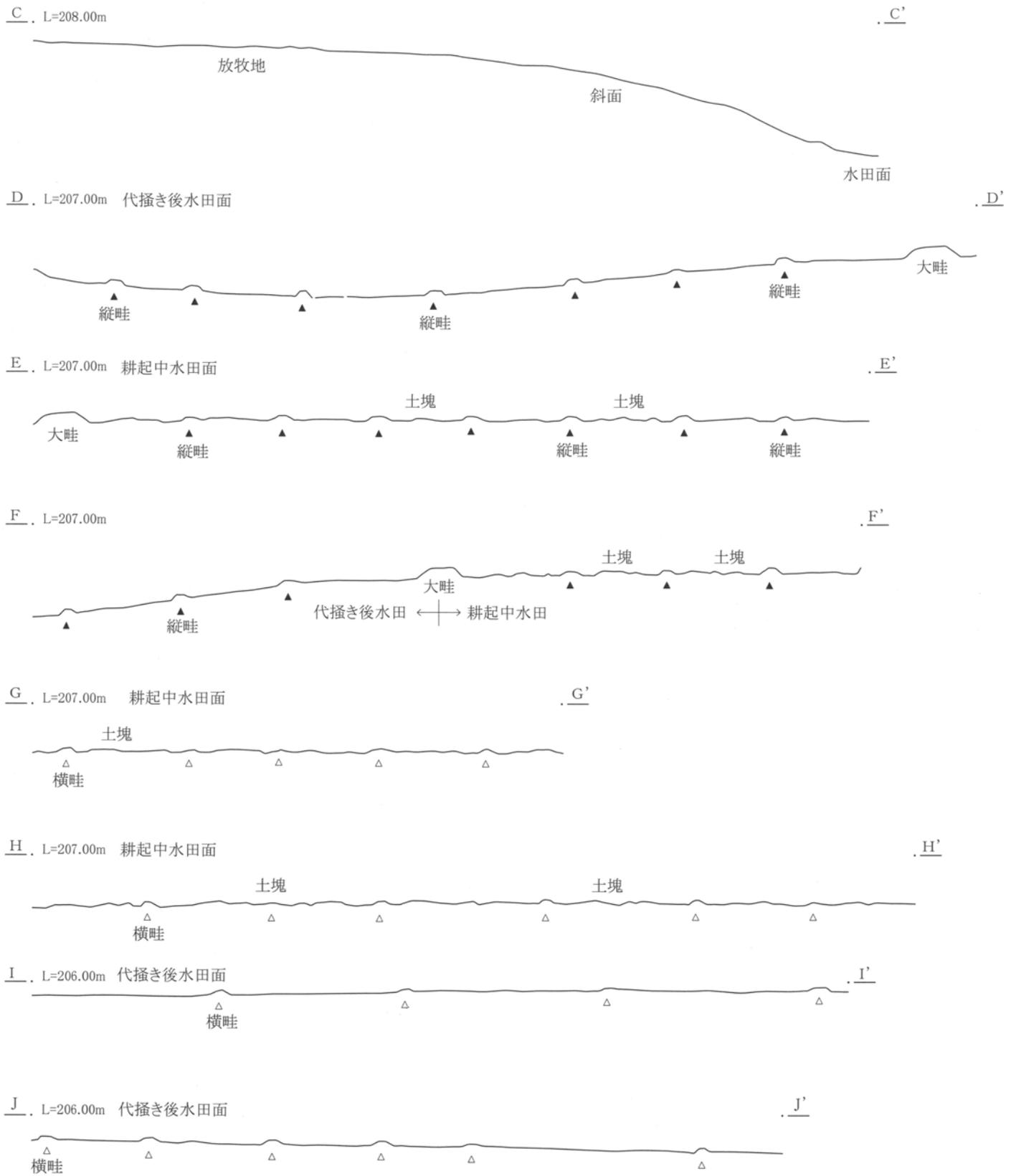
大畦

- | | |
|---------|--------------------|
| 1. 暗褐色土 | 土塊。軟質で密度低い |
| 2. 褐灰色土 | やや粘質 |
| 3. 暗褐色土 | やや粘質で密度高い |
| 4. 褐灰色土 | 粘質土。FAと黒色土塊の混土 |
| 5. / | 粘質土。大型のFA塊と黒色土塊の混土 |
| 6. 灰白色土 | FA塊を主体とする |



158図 I-2区FP下極小区画水田跡(3)

Ⅲ 検出された遺構と遺物



159図 I-2区FP下水田跡断面図

代掻き後水田跡は、大畦西側から台地裾縁辺のまでの間で確認された。前述の下位流路の影響が大きく撓んでおり、水田立地としては極めて不自然である。FP降下後にその重量と下位流路の自然沈下で撓み現象が生じたものと考えられ、原地形は平坦であったと捉えられた。水田面には少量の土塊が残るもののほぼ平坦面が築かれており、水口も丁寧に開けられていた。代掻き時の掛け流しが行われた状態と判断できた。更に、畦畔も丸みを帯びており、畦塗りも既に完了した時点として位置付けられた。

一方の耕起中水田跡は、東側調査区境に延びる。I-1区との境である生活道下に東限があるが、発掘調査では確認できなかった。

耕起中水田跡は、区画中央に土塊を残し、畦下端が凹む様相呈す。畦本体にも土塊が貼り付けられ、畦塗り途中であることを示していた。水口も、横畦中位に設けられてはいるが、上下の高低差に関係なく、開けられており、水口が田面より高い箇所もあった。横畦設定後、区画内で耕土である暗褐色土（FA変質土）を捏ね、区画内縁の土を畦に貼付する作業（畦塗り）の最中と思われる。耕起中水田として位置付けられる。この畦塗り後に水口を整え、水を掛け流し、区画内を平坦面に整えた作業後が、前に述べた代掻き後水田である。

このように、大畦を境にした、水田耕作作業の工程差が看取できる例としては、本遺跡と一連の調査で得られた『北牧大境遺跡』（群埋文2004）や吹屋糺屋遺跡がある。北牧大境遺跡では、遺跡全域でFP下水田を検出したが、耕起中水田跡の土塊が大きく荒々しい印象を受ける。横畦を設けない短冊状の水田もあり、水口も簡便なものが見られることから、あるいは本遺跡耕起中水田跡より若干前の工程例の可能性もある。

さて、代掻き後水田区画と耕起中水田区画を概観すると両者に規模差が見受けられる。これは、極小区画水田跡内部での規模差であり、水田区画規模の多様性を示唆する。大畦を挟むとはいえ、工程差によって生じるものではない。

II区の調査

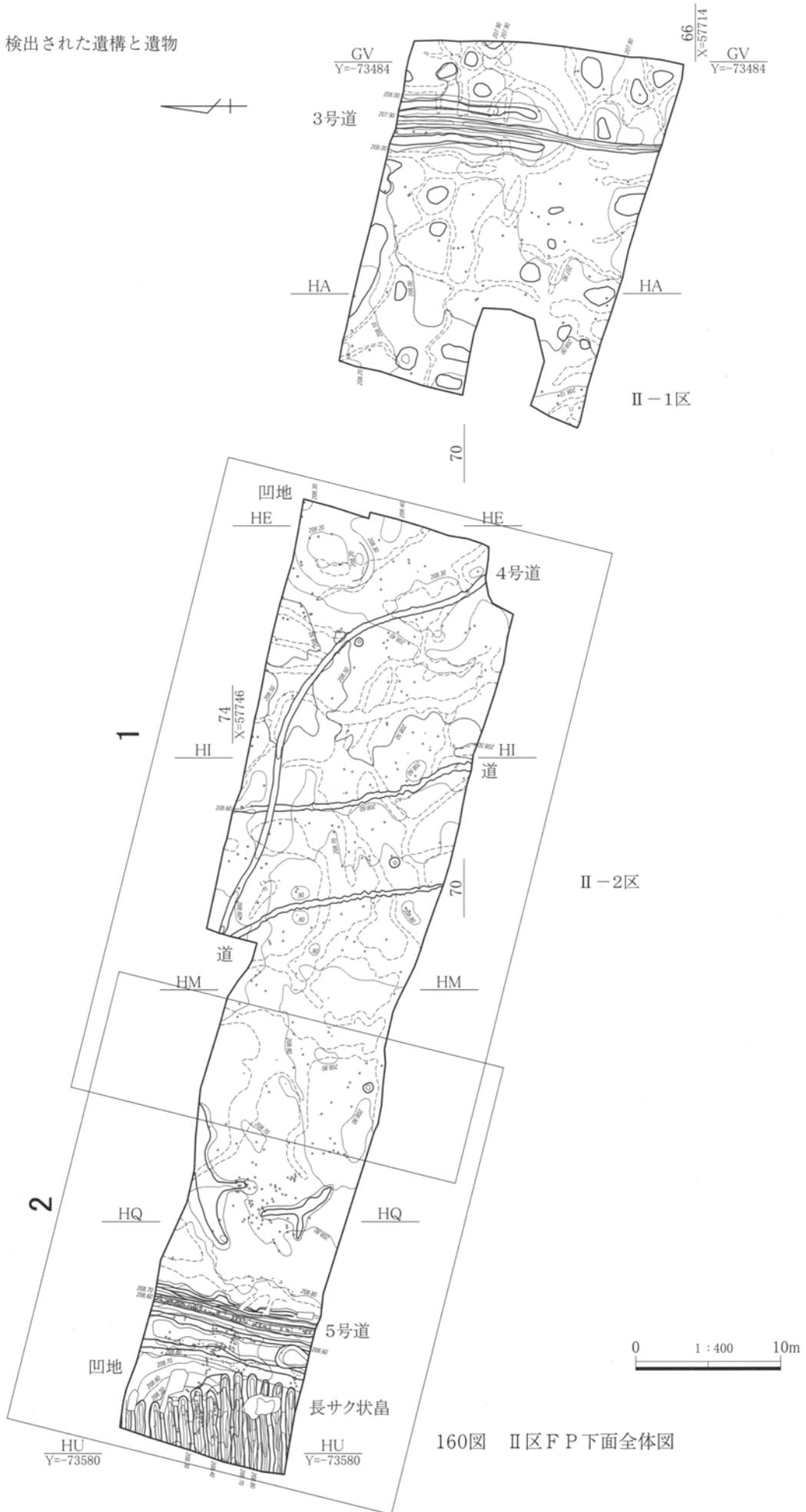
II区は東西を谷と沖積地に挟まれた台地部分にあたる。東は先述した、I区にあたり、埋没谷に営まれた極小区画水田と台地部分で短サク状畠跡が確認されているが、この台地の西延長がII区にあたる。一方II区西側は、現道を挟みIII区が調査されている。III区は西斜面に畠跡と鯉沢川左岸の沖積地に水田跡が調査されている。このようにII区は両側の低地-斜面部分を水田・畠といった生産跡に挟まれたローム台地をその調査区域としている。通常生産域に挟まれた台地は、居住域-集落跡として想定されるが、中郷恵久保遺跡II区のFP下面では、道状遺構・踏み跡、凹地、土塊群、馬蹄痕からなる有益空地-放牧地跡が調査されたのである。

放牧地としての位置付けは、馬蹄痕の存在を持って把握される。その他に畦状遺構や道状遺構、馬蹄痕が乗る畠跡なども放牧地跡に見ることができる。本遺跡II区でも馬蹄痕が全域に広がり、台地全面に馬の存在が予測された。

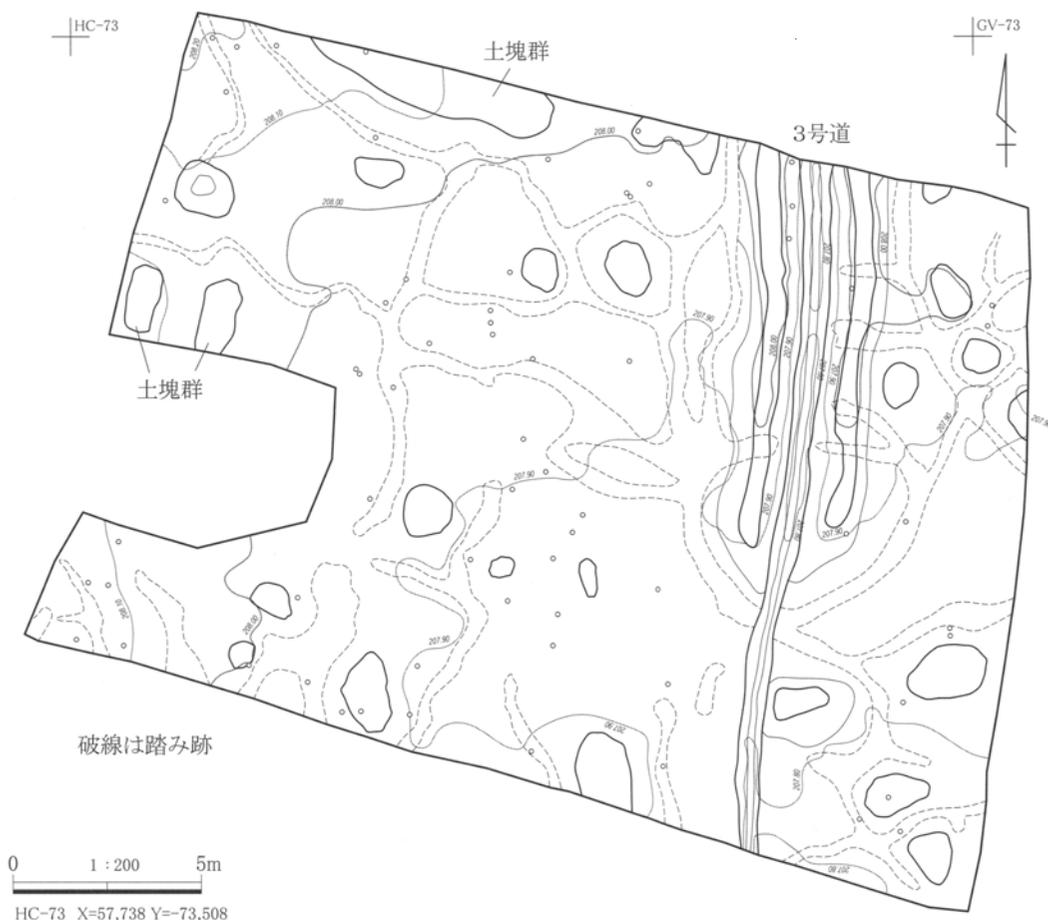
前々節で述べたように、II区ローム上では、古墳時代前葉段階の集落跡が調査されている。1世紀半が経たII区FP下面において、放牧地跡として供された土地利用の変容は、古墳時代前葉から後葉にかけて当地域の生産体制の変化や居住形態の変化が要因と位置付けられよう。無論その間には、Hr-FAの降下という大災害が、当地域の生活環境変化に大きな影響を与えたことは言うまでもない。

子持村内では放牧地跡が数多く調査されている。代表的な例が、白井遺跡群における広大な面積の放牧地跡である。主に事業団が調査を重ねた地域であるが、本遺跡で得られたII区放牧地跡と若干ながら差が見受けられる。例えば、畦状遺構の様相や風倒木跡の量的な差等、本遺跡例がより人間社会に関連する様相を見せる。II区放牧地跡は、生産域とより密接な関連を持つ有益空地-放牧地跡であり、白井遺跡群で得られた広大な独立した放牧地跡とは、その立地条件からも格差を窺うことができよう。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



160図 II区F P下面全体図



161図 II-1区FP下面全体図

II-1区の調査 (図版22)

前述のように、I-2区西側の台地部分の西延長である。現地地形では平坦に見えるが、FP下面では、南西へ緩やかに傾斜しており、特に東側へはI区谷地形への緩傾斜が連続している。反対の西側は、II-2の平坦地形へと繋がる。全体感としては、II-2区と一体化した平坦地形の東端部といえよう。

II-1区のFP下面では3号道状遺構、踏み跡、土塊群、馬蹄痕が検出された。放牧地跡であり、あるいは、I-2区南西部の台地上で確認された放牧地跡の延長として捉えられよう。

(3号道状遺構) II-1区東側で南北の走向を持って検出された。溝状に幅約60~80cmで僅かな凹みを有し、底面は極めて硬く締まっていた。その硬化深度は先に述べたように、FA下・ローム上面にまで及んでおり、当時の主要な動線一道として頻繁な往来が想定された。また、北側には盛り土を付帯す

る特徴を有す。幅約1.5mを測り、底面からの高さは20cmを超える規模である。盛り土の存在は、道整備の所産であり、3号道状遺構が固定的な動線として位置付けられる。傑出した道として評価したい。

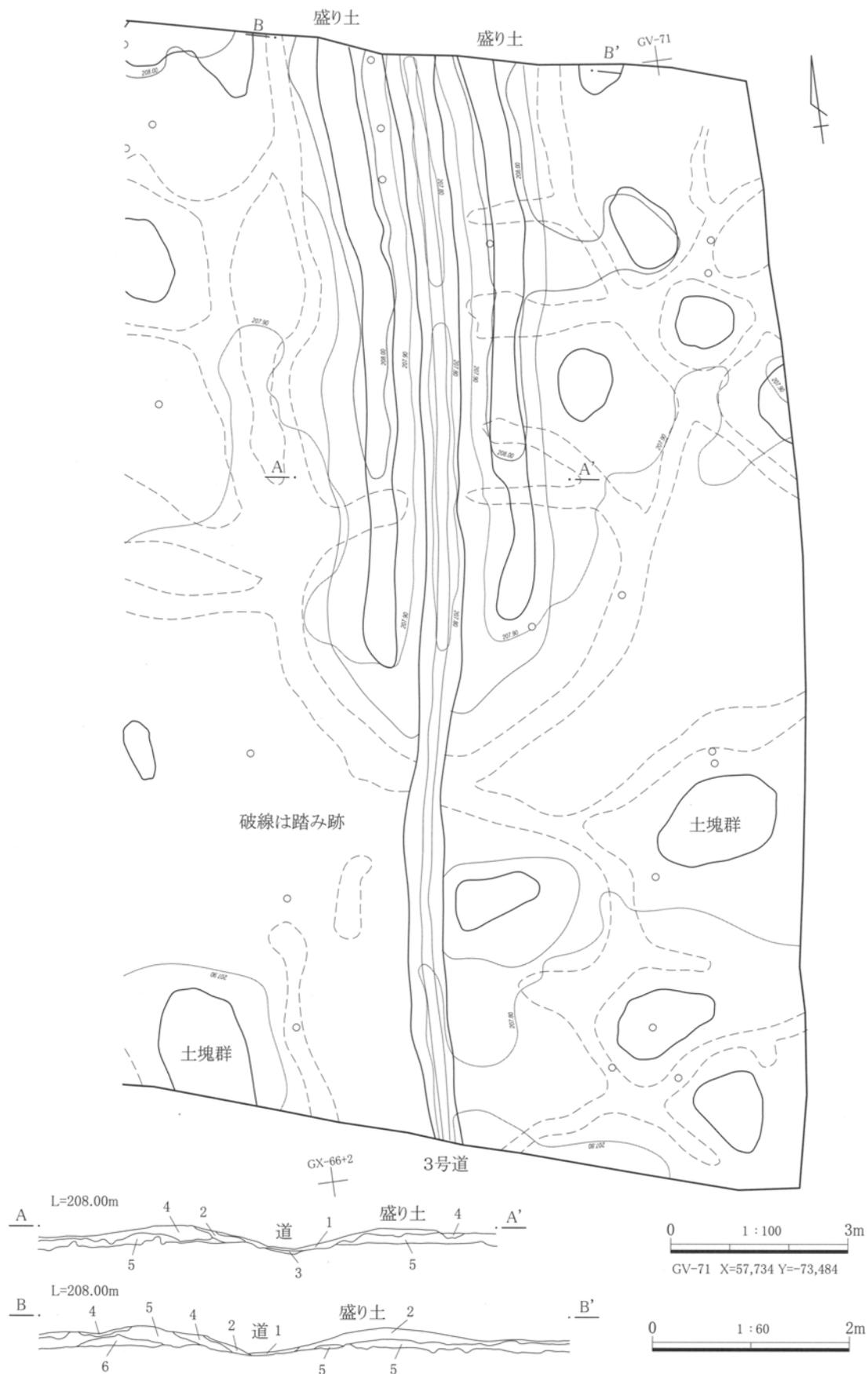
(土塊群と踏み跡) 道状遺構以外に当時の動線の一つとして踏み跡が調査区全面に認められた。不定形な動きであり、道状にはなり得ないが、土塊群を跨ぐように観察された。土塊群は比較的高く明瞭であり、踏み跡が「畦状遺構」を分断した結果、鳥状の土塊群に展開する例とも判断できよう。

(馬蹄痕) 極めて散漫な分布状況を示す。明瞭な集中や歩行を示唆する例もなく、客体的な存在を示唆した。

3号道状遺構 (162図)

- | | |
|---------|--------------------|
| 1. 暗褐色土 | 硬く締まる。上面にFP細粒が凝着する |
| 2. 〃 | やや暗い。軟質で少量の炭化物を含む |
| 3. 灰褐色土 | 硬く締まる。FAを塊状に含む |
| 4. 暗褐色土 | 軟質でFA小塊を含む |
| 5. 褐灰色土 | FA層。上面は不連続 |
| 6. 黒褐色土 | FA塊を混在する。粘性に富む |

Ⅲ 検出された遺構と遺物



土層注記は183頁

162図 II-1区FP下3号道状遺構

II-2区の調査(図版22~24)

本遺跡の発掘調査で最初に着手した調査区であり、試行錯誤を重ねるFP下面調査が始まった調査として、先例調査として位置付けられた。調査着手時は事業団従来の白井遺跡群調査と同様に、馬蹄痕を主体に調査を進めたが、凹地に営まれる畠跡や下層の住居跡の存在等が明らかになり、調査比重を馬蹄痕すべてには置けなくなった。多層調査の場合、上層文化層に時間をかける例は、下層調査の期間を圧迫することになり、本遺跡II区調査の場合、下層の古墳時代前葉集落調査が予想されたため、FP下面の調査も均質に記録保存をとることになった。故に、馬蹄痕の断ち割り調査や入念な耕作痕抽出作業は、地点によっては記録化したが、調査区全域には及ばなかった。

さて、II-2区も放牧地跡である。東側への僅かな傾斜ながらほぼ平坦な地形を呈す。この平坦な地形に、微妙な起伏を持って、凹地や踏み跡、道状遺構さらに畠状遺構が馬蹄痕と共に確認されている。

(道状遺構) 4号道状遺構と5号道状遺構、さらに小規模な道跡2条を検出した。道状遺構は、FP除去時に浅い溝状に硬化面が連続し、かつ色調差も大きいため、容易に確認できる遺構である。中には、II-1区で検出された3号道状遺構のように盛り土を両脇に置く例もあり、道状遺構の多様性も予想されよう。

4号道状遺構は、調査区南東隅より北西へ向かい、北側にやや強い湾曲を持たせて蛇行しながら東西への走向を見せた。幅約40cm、深さ10cm程度の浅い溝状の凹みが延長する。底面は硬化面が連続し、頻繁な往来が想起された。

この4号道状遺構に交差する2条の小規模な道状遺構も同時に検出した。交差することによる新旧関係は不明である。2条とも緩やかな湾曲があるもののほぼ南北の走向を見せている。幅40cm以下で凹みも顕著ではなく、そのため輪郭も不明瞭な箇所があるが、底面の硬化面が連続しており、色調差も歴然としていたため、道状遺構と判断した。

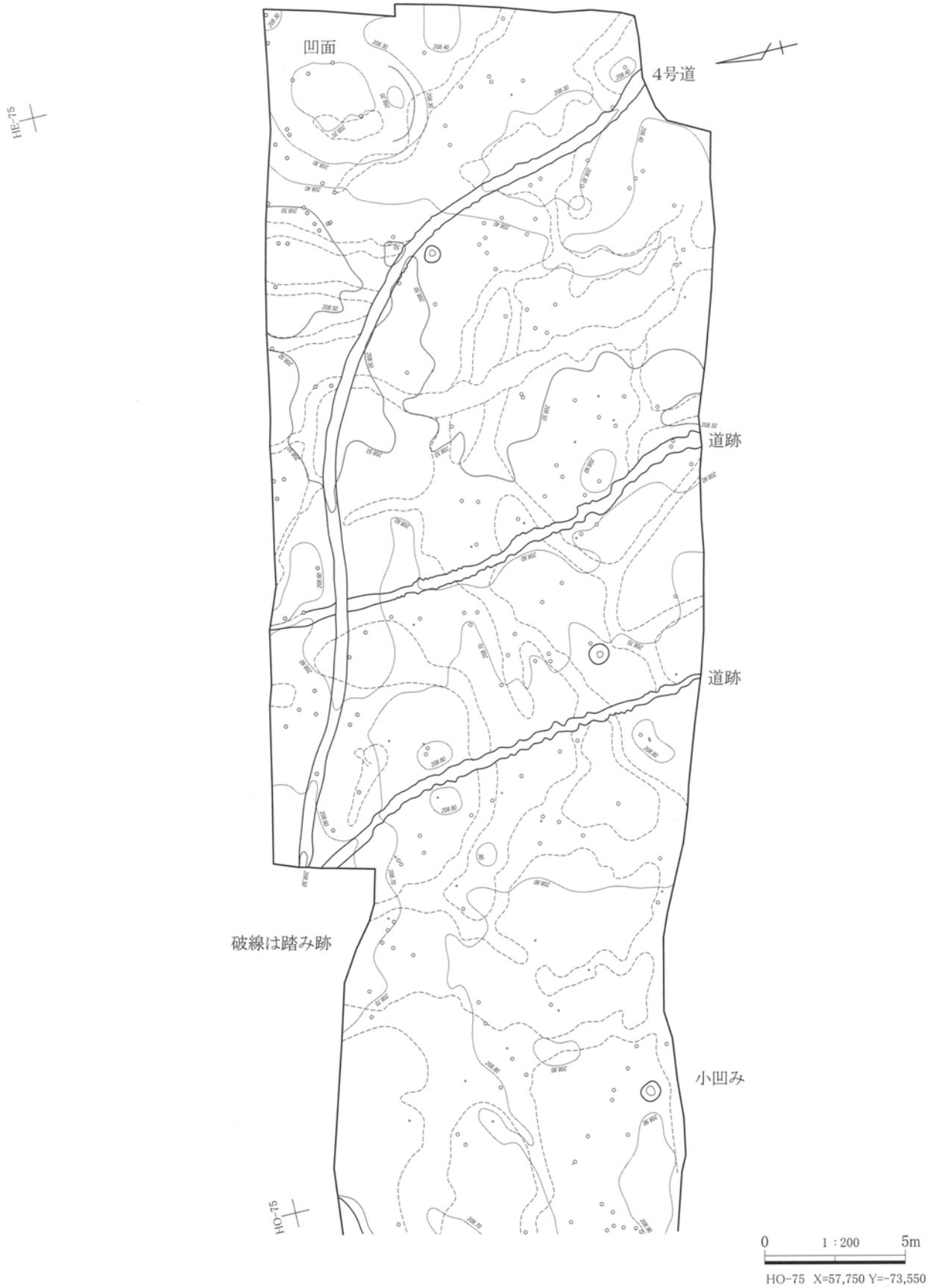
4号道状遺構は恒常的な動線とされていたため、動線に沿った凹みとして把握されたが、2条の小規模道状遺構は、後述する踏み跡が累積した結果として、極めて浅い動線となって具体化したのであろうか。ただ、南北方向の走向は、1号道状遺構や3号・5号道状遺構と同一であり、当地域における南北方向の動線は、当時の生活動線として重要な走向と把握できよう。その意味で、4号道状遺構が途中で東西方向へ蛇行する走向を見せる例は、南北の動線を繋ぐ道として、意義深い動線である。FP下面において、放牧地内の南北の主要道を繋ぐ野道のような景観を想定したい。

5号道状遺構(166図)はII-2区西側で検出された。南北の走向を示す、特徴ある道状遺構である。幅は60cmを超え、深さも20cm以上で溝状にしっかりと凹む。両側にやや高い段を持ち、特に西側の段が約30cm程の安定した幅で平行していた。硬化面も底面に極めて顕著で西側の段上にまで広がりを見せており、道としては段上までが機能していたことが把握できた。また、両側には低位ながら黒色土を主体とする盛り土が設けられ、これも西側で顕著だった。ただ、西側の盛り土は古墳時代前葉の1号住居跡周堤帯が下位に存在し、その高まりも共存した結果、やや高くなるものと理解できた。

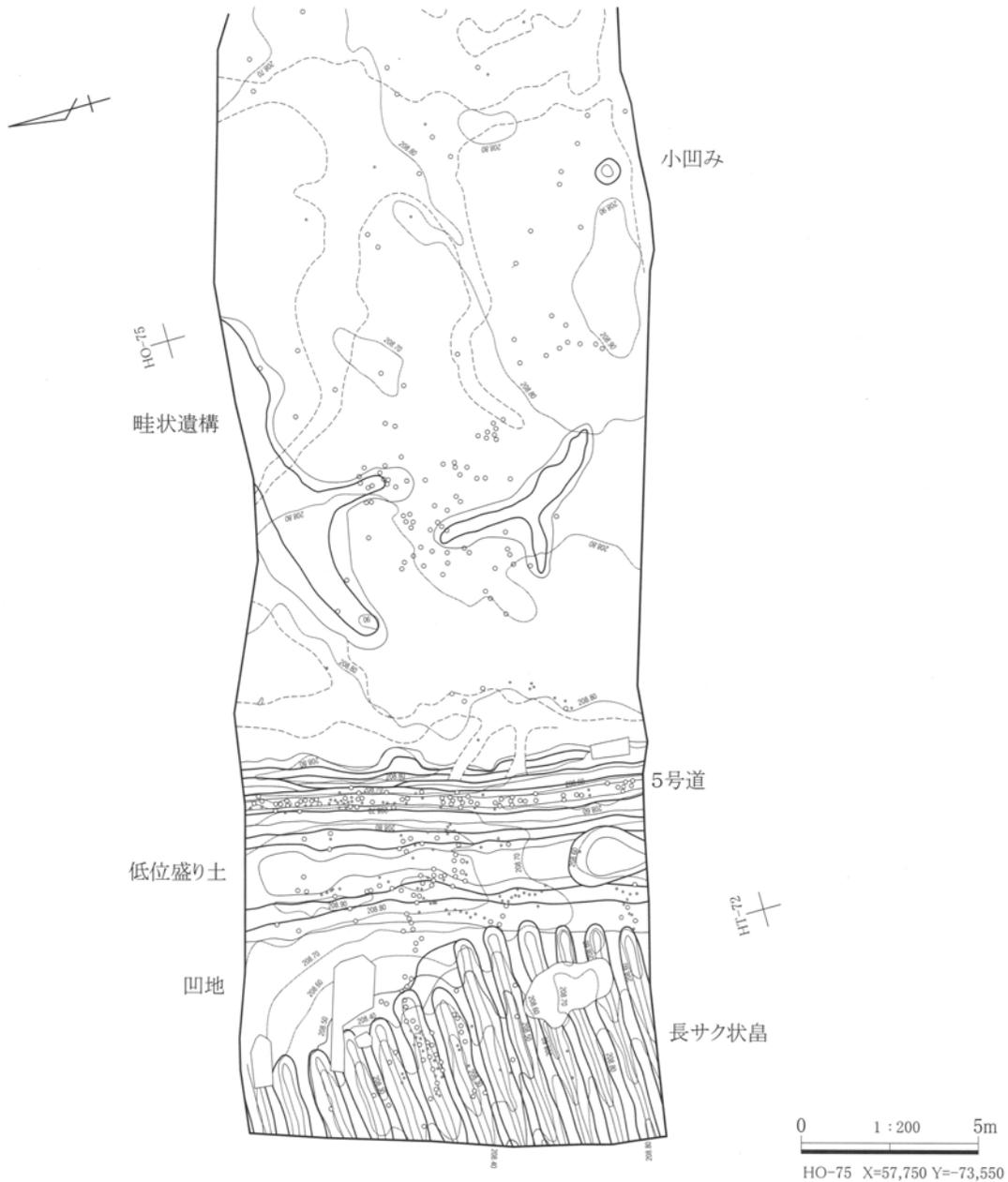
5号道状遺構には夥しい馬蹄痕が検出された。底面及び西側の段に沿って集中することから、馬道として性格を想定したが、人間の動線としても有効であり、特定の馬道ではない。しかしながら、II区全体で馬蹄痕が一定方向の動きを見せる例は、本址意外に極めて少なく、南北の動線の中で、当時の馬が集中する動線として評価を与えたい。

おそらく、低位ながら盛り土を付帯する道状遺構(1号・3号・5号道状遺構)は南北の動線を安定させる放牧地内主幹道として位置付けられるのではないかと考える。その中で、馬蹄痕を集中する5号道状遺構は傑出しており、放牧地内で馬を管理する動線として位置付けが果たせるものと期待したい。また、5号道状遺構はII-2区において、東の放牧

Ⅲ 検出された遺構と遺物



163図 II-2区東F P下面



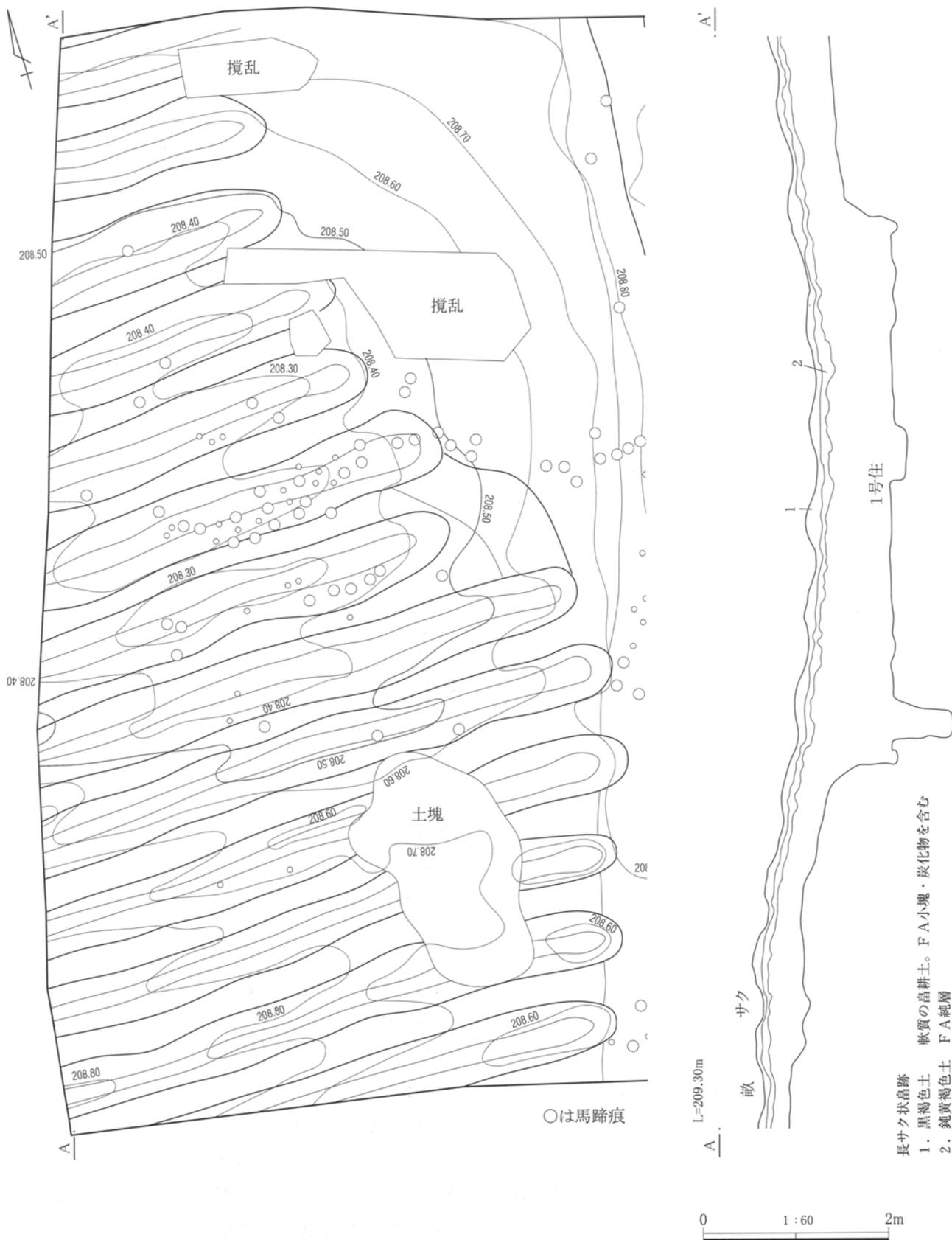
164図 II-2区西FP下面

地跡と西側の長サク状畠跡を画す走向・位置を占める。生産域を画す分割線としても示唆的な遺構としても注意を払わなければならないだろう。しかしながら、周辺で確認された馬蹄痕は、長サク状畠跡まで伸びており、馬を隔絶させる程の強い分割線ではないようだ。

(踏み跡と土塊群) 平面図上破線で示した踏み跡であるが、FP除去時に時間をおかず、土質の微妙な光沢と表面の硬軟で判断を加えた遺構である。II-2区でも、極めて複雑な動線を示唆する踏み跡が

確認された。道状遺構を跨ぐ例や広く面を持つ例などがあり、馬蹄痕とも重なるため、全てが人間の動線と一致する範囲ではないと考えた。また、踏み跡は、II-1区と同様に土塊群を分断する様相を示していた。II-1区と2区は調査年度が違うため、若干ながら、踏み跡や土塊の記録に差がある。II-2区では土塊の範囲を明瞭な実線で表記していないが、踏み跡に挟まれた間は土塊等が存在するものとみて差し支えない。しかしながら、土塊の様相も1区と2区では差があり、2区土塊群はやや低位な印象が

Ⅲ 検出された遺構と遺物



165図 Ⅱ-2区FP下長サク状畠跡

ある。先に土塊群は踏み跡によって分断された畦状遺構の可能性を示唆したが、放牧地の開墾作業として頻繁な耕起が行われた可能性も極めて高い。放牧地は農作業放棄の区域ではなく、有益植物を安定的に保つ農地でもある。そのためには、耕起（除草作業含む）は必要な作業であり、その結果放牧地跡には土塊あるいは畦状遺構が組成に加わる景観となるのだろう。Ⅱ-2区の踏み跡や土塊群を見ると、土塊群が明瞭に把握し得たⅡ-1区土塊群が耕起作業に着手した段階として、その流れを窺うことができよう。Ⅱ-1区からⅡ-2区への放牧地耕起作業工程変移を想定しておきたい。

（畦状遺構）Ⅱ-2区中央やや西寄りで高さ10cm未満の高まりを持って検出した。極めて微少な起伏であり、規則性も看取できないが、馬蹄痕や踏み跡によって、分割された状態と判断でき、白井遺跡群等で見える畦状遺構とは、様相に差がある。

（凹地）Ⅱ-2区では東端と西端に大規模な凹地が検出されている。東側の凹地が23号住、西側が1号住が影響する凹地である。古墳時代前葉の住居跡が埋没を完了せずに、FP下面で凹地として確認された例である。東側の凹地は径6～7m程で、深さ約30cmを測る。南東から延びる踏み跡が凹地を迂回する動きを見せており、存在は認知されていたようだ。馬蹄痕も少量ながら確認でき、馬の往来も認められよう。また、底面は黒褐色に変色しており、泥砂状の土が薄く堆積していた。水溜まりあるいは泥濘状の状態であったと推定できた。西側凹地は調査区域外に西半を隠すが、概ね径は8m以上で深さは50cmを超える大規模なものである。凹地東端より長サク状畠として供されており、馬蹄痕も集中して検出された。凹地に畠を供する例は多くはなく、畠耕作上不合理な感を受けるが、凹地は周辺の栄養分を集積する利点もあり、避けるべき土地形状では無いようだ（村教委 石井克己氏ご教示）。また、馬蹄痕はおそらく東に近接する5号道状遺構周辺の馬蹄痕と一連の動きと思われるが、明らかに凹地に降りる歩行状態も看取され、凹地に水が溜まっていたと

すれば、水飲み場として機能していたことになる。西側凹地では東側凹地に見た黒色砂泥土は確認できなかったが、凹地を水飲み場とした場合、放牧地内の景観に新たな要素を加えることになる。

（長サク状畠跡）Ⅱ-2区西端で5号道状遺構西に近接して調査した。畠跡である。Ⅰ-2区台地部で検出した畠跡に比して、サクが長いので、長サク状畠跡と仮称した。前述のように、凹地に営まれた畠跡である。この凹地に止まらず、西側へさらに延長し、Ⅲ-1区でも同様の畠跡が検出されている。西側への緩斜面地形に営まれた畠跡の東端と位置付けられよう。サク間の距離は90cm程で、Ⅰ-2区で得られた短サク状畠跡よりやや狭い印象を受ける。畠高は10cm前後で、やや低く全体感に丸みを帯びていた。さらに、上面には馬蹄痕が集中しており、土塊がやはり風化した状態で乗ることから、畠としての機能は有さず、休耕中あるいは放棄された畠跡と捉えられた。5号道状遺構によって画されていた放牧地と畠ではあるが、ある段階で放牧地が拡大したものと捉えられよう。尚、FA上面の耕作痕調査ではサクは1条しか検出できず、Ⅲ-1区で検出した畠跡と差が見られた。

（馬蹄痕）Ⅱ区で調査したFP下面の全ての遺構、調査面で馬蹄痕が確認できた。放牧地跡として判断できる一要素である。分布状況から全体感を見るとⅡ-1区に比して、Ⅱ-2区がやや検出量が多く、2区内でも西側に集中する傾向がある。全ての馬蹄痕を把握できた調査ではないので、推測にすぎないが、踏み跡と土塊の項で注目したように、放牧地耕起作業の流れに沿って、東から西へ馬蹄痕が耕起により少量化したのではないかと推測する。あるいは耕起作業が進むに従い、馬が東から西へ移動していった動きも想像できよう。尚、馬蹄痕の中には小型の例も見受けられた。当歳馬が併存しており、そのことからFP降下時期は初夏とする判断は極めて妥当性を帯びる。

Ⅲ-1区の調査(図版25~27)

平成12年度と13年度に調査された。12年度は低地部分で水田跡を、13年度は台地~斜面部で畠跡・放牧地跡を調査した。

Ⅱ-2区からの台地形状が延長し、西斜面を経て鯉沢川左岸沖積地に至る地形である。斜面は急勾配で、鯉沢川左岸段丘を形成し、台地形状を際立たせていた。斜面中位から下位にかけて湧水を見た。

FP下面のⅢ-1区は、放牧地跡と西斜面、棚田状水田跡からなる。

放牧地跡には畦状遺構、凹地、馬蹄痕が見られる。馬蹄痕が乗る遺構としては、長サク状畠跡・短サク状畠跡があり、放牧地前は畑作が行われていた状態を見ることができた。

棚田状水田跡は斜面下端から沖積地にかけて、検出されている。極一部の調査ではあるが、6区画を確認している。

また、道状遺構は確認できなかった。斜面を昇降する動線も重要だが、調査区域外であろうか。

尚、斜面中位に井戸跡2基を検出しているが、近・現代の所産であり、安全対策上詳細な調査は行えなかった。

Ⅲ-1区の放牧地跡はⅡ-2区放牧地跡の延長と見られる。馬蹄痕が群在し、踏み跡と土塊が網羅し、凹地や畦状遺構もある様相である。

(馬蹄痕) Ⅱ-2区西側でやや集中傾向を見せた馬蹄痕はⅢ-1区においても、数多く見ることができた。若干ながら調査区東壁際周辺で少なくなる傾向はあるが、斜面上位から中位にかけて、長サク状畠跡や短サク状畠跡上面に集中して観察された。特に、北側の凹地周辺と、南の短サク状畠跡東上端に集中していた。両者とも斜面変換点であり、馬の動きの一端を窺うことができよう。斜面中位には見られず、また棚田状水田跡周辺にも見られなかった。斜面地形が、水田への馬の進入を妨げたのであろうか。子馬の足跡も、少量ながら確認しているが、平成13年度調査では、親子の分別は行わなかったため、平面記録には反映されていない。

(畦状遺構) 1条が調査区南東で検出されている。走向を東西に向け、途中で途切れる。10cm程の高さで、馬蹄痕が乗り、丸みを帯びていることから、風化を経ていると判断した。走向と位置から長サク状畠を囲堯する畦の可能性もあるが、判然としない。

(凹地) 調査区北側やや東寄りにある。Ⅱ-2区で検出された凹地同様、下層の31号住居跡が影響したお家である。底面より斜面上位までの比高差は30センチを超え、径は6m前後の不整形円形を呈する。底面にはⅡ-2区東に見た凹地と同様に砂泥土が薄く堆積しており、水溜まりの可能性を示唆した。前述のように馬蹄痕が集中する傾向は、水飲み場としての機能も考えておきたい。また、Ⅱ-2区西端の凹地は長サク状畠跡が検出されたが、Ⅲ区FP下面の凹地では畝が南に近接するものの底面にまでは至っていない。凹地を避けた様相であり、Ⅱ-2区西と対称的な印象である。しかしながら、後述するが、FA上面の耕作痕調査では、凹地底面にサクの痕跡が確認され、一段階前の凹地は畠に供されていた例が判明した。また、風化した土塊群も多く見られ、凹地周辺の耕起作業も想起された。



FP下畠跡に見る馬蹄痕

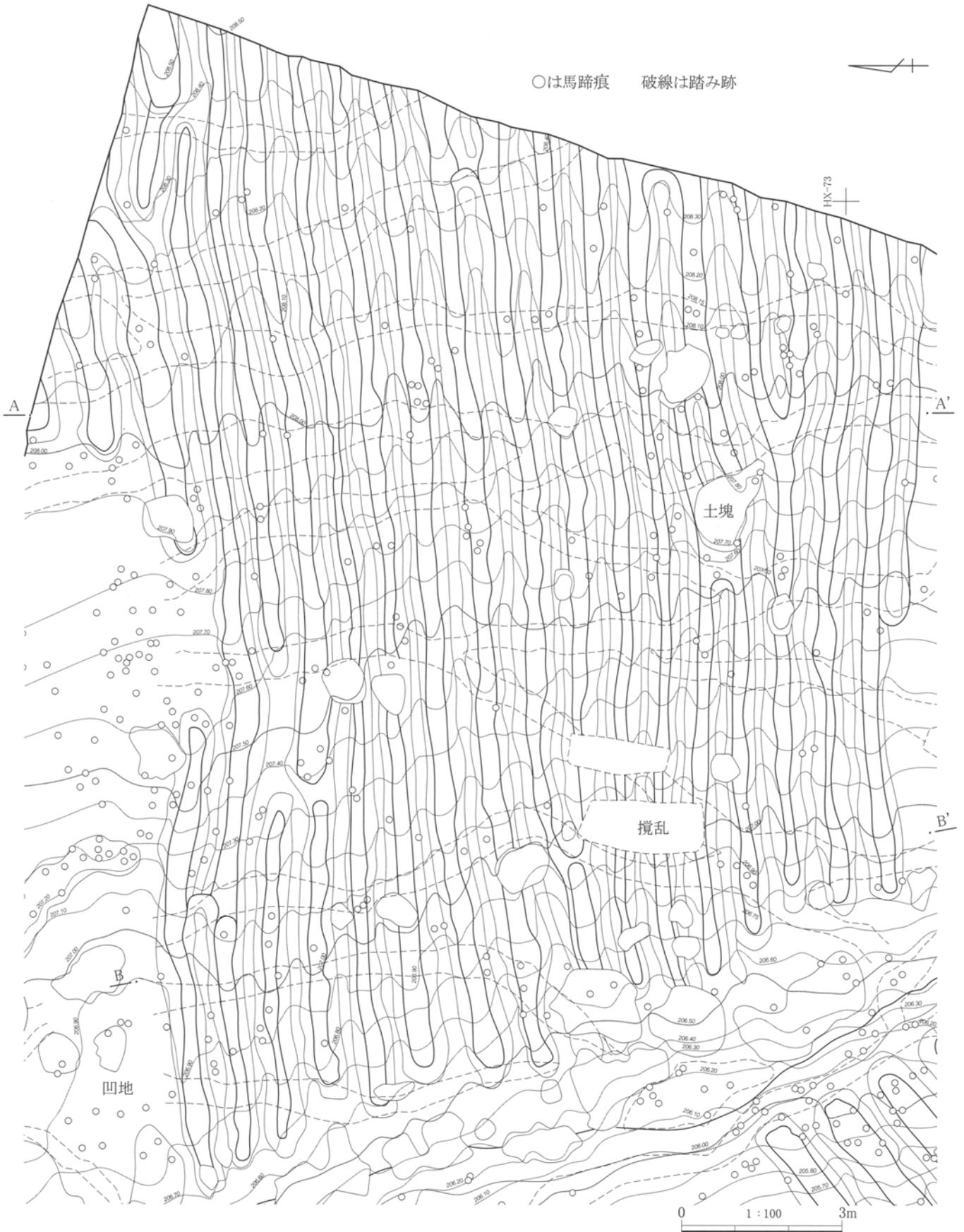
写真はⅡ区長サク状の畠表面に残された馬蹄痕であるが、Ⅲ-1区長サク状畠跡・短サク状畠跡にも同様に馬蹄痕が確認されている。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



167図 Ⅲ-1区FP下面全体図

5. Hr-FP下で検出された遺構



Ⅲ 検出された遺構と遺物

(踏み跡と土塊群) 踏み跡は長サク状畝跡を南北に横断する例を数条確認した。各条は平行するが、各々が連繋し網状の走向を示す。また、北東壁から凹地周辺を経由し、斜面を下る例と等高線に沿って短サク状畝跡へ経由する動きが見られた。

土塊も踏み跡に接続して各所に見られたが、その多くの表面は風化し、畝跡上に乗る、さらに馬蹄痕が重なることから、長サク状畝放棄後の所産と考えた。あるいは長サク状畝における収穫時に排土された土塊かもしれない。踏み跡はその際の作業動線とも捉えられよう。

(長サク状畝跡) Ⅱ-2区西端凹地で検出された畝跡の延長と考える。一体化した畝跡とすれば、長軸長は30mを超える大規模な畝となる。台地西の平坦部から斜面にかけて占地する様相となる。等高線と直交するように、斜面傾斜に沿ったサクが走り、分岐する箇所も見られた。サク間は80~90cmを測りやや狭い印象を受ける。畝表面も風化のためかやや



F P下面調査風景 (Ⅲ-1区)

手前の白いマーキングが馬蹄痕。馬蹄痕は畝跡上にも延長しており、このことから、F P降下直前では、畝が耕作されていない段階として把握できよう。

丸みを帯び、前述のように、踏み跡、土塊、馬蹄痕が乗ることから、放棄あるいは休耕中の畝と把握できた。

さて、F P下面の畝観察では凹地を避けた配置がなされていたが、F A上面の耕作痕調査で凹地底面や北側にまで、サクの広がりが確認された。この長サク状畝以前は、北側へ延びる畝跡と捉えられよう(169図)。

(短サク状畝跡) 調査区南側の西斜面部分に、段々畝かのように検出された。4段の段差上に作られた畝である。段差毎に踏み跡と狭小な平坦面が観察され、これはⅠ-2区で確認した短サク状畝とは大きな差として注意したい。

斜面下位の2段の畝跡は湧水のためか遺存度は悪い。畝形状やサクの走向など不定形である。一方上位2段は詳細が窺えよう。畝の長さは、概ね6.0~6.5m程で、サク間は約1.3mとやや広い。長サク状畝跡とは対称的な規模である。しかしながら長サク状畝



F P下面調査風景 (Ⅱ-2区)

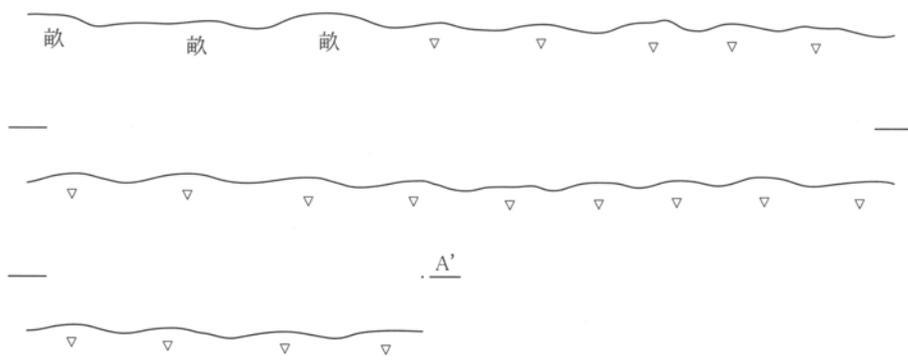
長サク状畝跡検出状況。畝も明瞭に把握されるが、馬蹄痕・土塊も存在しており、畝として機能していない状況が窺われた。放棄・休耕中の工程である。



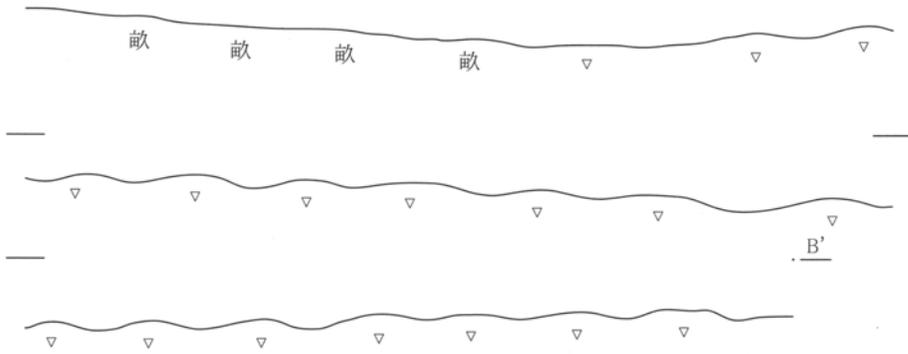
169図 Ⅲ-1区FA上面におけるサク状遺構

Ⅲ 検出された遺構と遺物

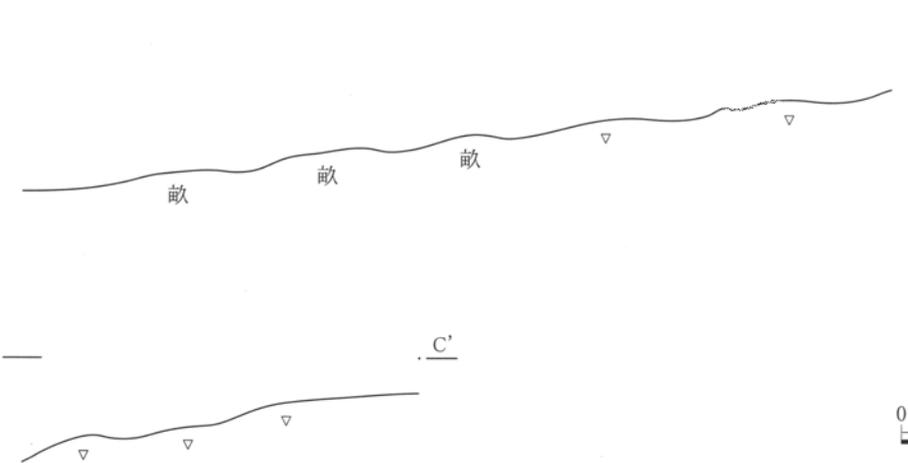
A. L=207.40m



B. L=207.40m



C. L=207.00m

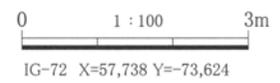


170図 Ⅲ-1区FP下畠跡断面図(1)



○は馬蹄痕
破線は踏み跡

171図 Ⅲ-1区FP下短サク状畠跡(1)



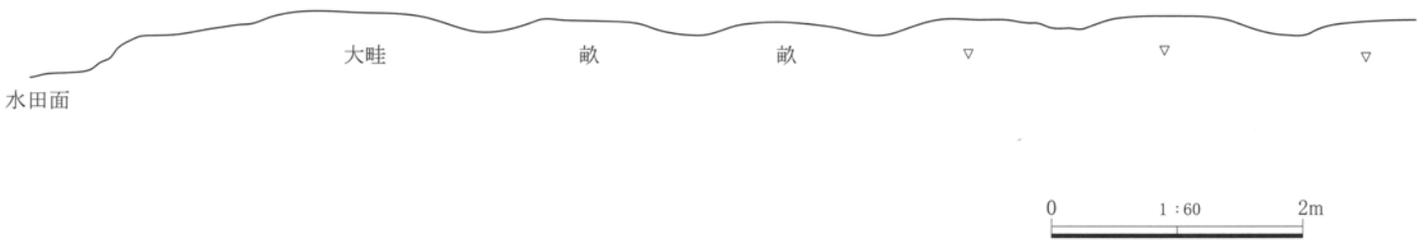
Ⅲ 検出された遺構と遺物



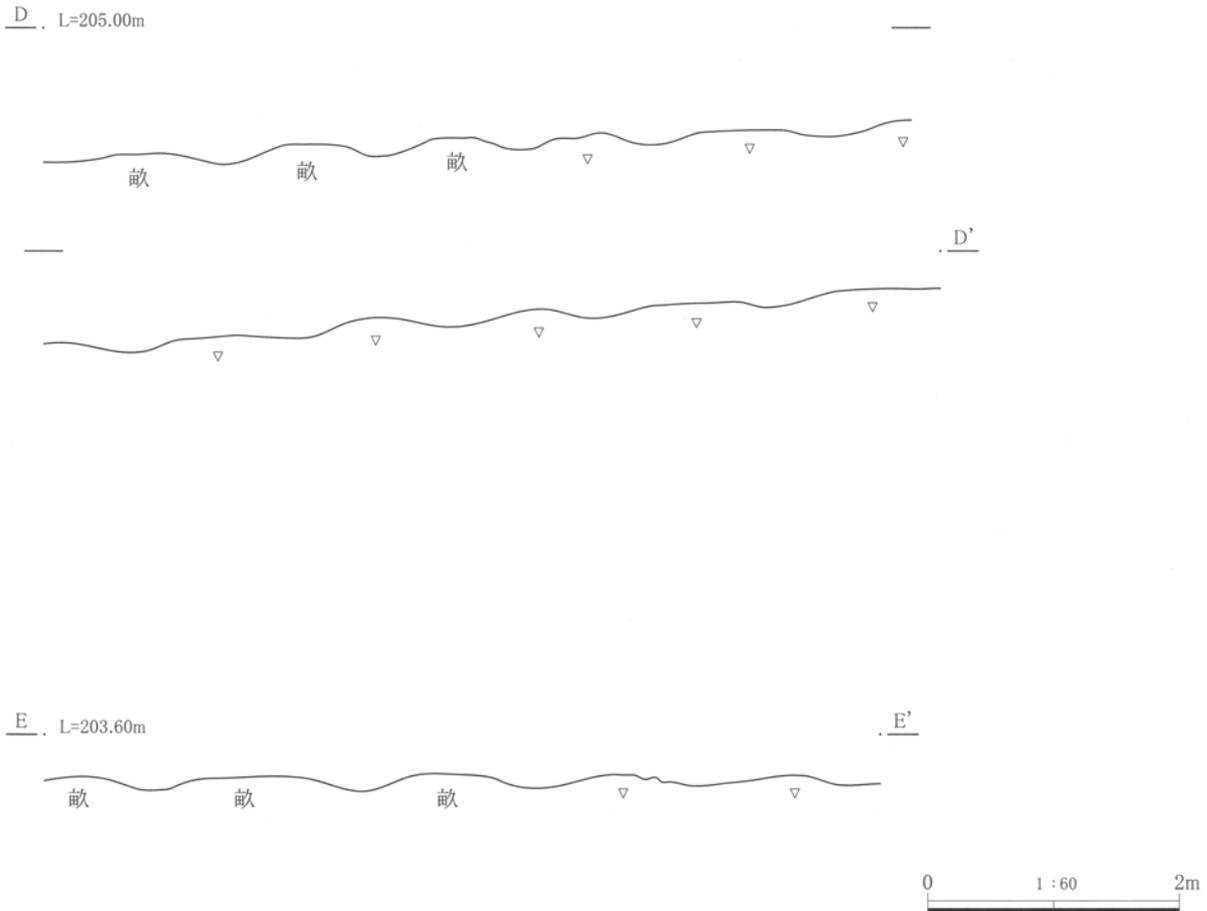
大畦

F L=204.00m

F'



172図 Ⅲ-1区F P下短サク状畠跡(2)



173図 III-1区FP下畝跡断面図(2)

跡と同様に、畝はやや風化し、馬蹄痕が乗ることから、放棄・休耕中の畝として考えた。これも畝立てが想定されたI-2区短サク状畝跡と差がある。また、FA上の耕作痕調査において、サクの広がり方が確認できた。特に上位2段目のサクに顕著で、北側への広がり以外に、東側へも段差を超えて延びる様相が把握された。この現象は下位段の畝跡にも見られ、短サク状畝跡も長サク状畝跡と同様に、数年次に渡る複数回の耕起と作り替えが想定できよう。

このように、III-1区台地～斜面部分では放牧地以前は、長サク状畝跡と短サク状畝跡が併存していたようだ。畝跡形状の差は、栽培種の差かあるいは地形一傾斜に即した差なのか判断は控えるが、「陸苗代」とも考えられてきた例は、I-2区で検出された短サク状畝跡に近く、III-1区で得た短サク状畝跡は、斜面に多段に設けられており、畝立ても見られない放棄・休耕された状態と見る事ができた。

かつて吹屋中原遺跡で得られた短サク状畝跡（陸苗代）も同様に馬蹄痕が乗る放棄・休耕された例であり（群埋文1996）、短サク状畝跡の多様性が窺えよう。

また、耕作痕調査で得られた下層FA上面におけるサクの広がり方は、複数回の畝耕起が把握され、かつFP下面における「畝耕作の縮小傾向」が看取された。

（棚田状水田跡）平成12年度に調査された大規模かつ段差を有して検出された水田跡である。6区画を確認した。III-1区斜面際に営まれた水田跡である。斜面際は若干傾斜が緩やかになり、III-2区の沖積地へと連続するが、斜面際より下位水田面との比高差は1.8mに及び、斜面を開削して水田面を作出した例として注目されよう。近接する遺構としては、前述の短サク状畝跡のうち最下段の単位が南に接して検出されている。また、現道を隔ててIII-2区沖